

---

# 偏屈先輩帰省中

雑草生産者

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

偏屈先輩帰省中

### 【コード】

N2488C

### 【作者名】

雑草生産者

### 【あらすじ】

厄病女神寄生中の正統なる続編です。偏屈先輩は実家に帰ります。ほのぼのの日常ラブコメ。非日常なんて存在しないのです。

## 偏屈先輩は不機嫌である

どーも、諸君。御機嫌如何だろうか？ 上機嫌だろうか？ 不機嫌だろうか？ 普通だろうか？ 俺は諸君が不機嫌であることを望む。何故かといえ、今、俺が不機嫌だからだ。俺が不機嫌な状況の中、他の奴が上機嫌で鼻歌なんぞを歌っておいたら益々気分が悪いではないか。

しかし、その上機嫌で鼻歌歌っている奴が俺の目の前っていつかすぐ隣に居る。

いや、鼻歌っていつか何か猫撫で声というか猫が甘えるときに喉を鳴らすようなそんな声だ。声の主は誰かって誰でもない。

「にやー。先輩ー。えへへー。先輩ー」

小柄で軽く、顔がやたら小さく、瞳は微かに茶色く少し垂れ目、口や鼻は小さめ、ほっぺがぷにぷに<sup>ぷに</sup>にしていて、髪は短めな少女。つまり、元我が部屋に寄生中だった厄病女神こと絹坂衣だ。それ以外に誰がいようか。いないのだ。

そいつは何やらにへらんとふやけた笑みを浮かべて俺に横からべたりとくっついてきている。

どうやら絹坂はとつてもご機嫌らしい。

さもありなん。絹坂はついこの間、長年の願望を成し遂げたのである。その願望とはつまり、俺と男女的恋愛的交際を為すことである。

俺にどのような魅力があるのか全くもって理解不能であるが、何故だか、彼女は俺と出会った2年以上前から俺に執着し、付き纏い<sup>まと</sup>、高校を卒業し、地元を離れた俺を追って、夏休み中俺の部屋に寄生までしたのだ。

俺は俺で、絹坂のことはいつも付き纏ってくるので邪魔臭くはあったが、嫌ってはいなかったし、どちらかといえれば気に入っていた。しかし、俺は諸般の過去の事情により男女交際を忌避していた。つ

まり、俺には絹坂と付き合う気など少しもなかったわけだ。

だが、絹坂はそれで諦めるような奴ではなく、しぶとく俺の周りをうるちよろし、俺の琴線に触れるような可愛らしさをアピールし、時に強引に押し、時に遠慮がちに引きと俺を翻弄し、ついには俺が折れる形で男女交際と相成ったわけだ。

恋は戦争とはたまに言われることだ。その戦争に俺は負けたわけだ。やれやれ。

「えへへー。えへへへへへー」

俺を負かしたことが、とんでもなく嬉しいらしい絹坂は俺の胸に顔をすりすり擦り付け甘えるように上目遣いで俺を見つめる。猫のようだ。

「離れる。暑苦しい」

季節は8月末とはいえ、日本は残暑厳しい国だ。俺はスウェーデンとかデンマークとかそこら辺の北欧に住みたかったよ。夏涼しい国が良い。あ、しかし、冬はめっちゃくちゃ寒そうだ。ううむ。困ったもんだ。

そこへ絹坂に纏わり付かれては暑さ数倍だ。元より悪い機嫌も更に悪くなるというものだ。

「えー？ いいじゃないですかー。だってー、私たちはー、恋人同士ー」

ふやけたような顔で歌うように言う絹坂。すんごく恥ずかしいぞ。

「あー！ もう！ 離れる離れる！ 背中痛いし！ 暑い暑い！」

「うあー！ 叩かないで下さいよー」

絹坂はぶうつと頬を膨らませて言った。やつぱり上目遣い。くっ。可愛い奴め。わざとやってんじやないだろうなあ？ いや、絹坂の方が20cm以上背が低いから見上げるような形になるのは仕方ないとは分かっているのだが、どーも、狙ってやっているような気がしなくもない……。

「先輩ー？ 喉渴きませんかー？ 何かジュースはどうですかー？」  
絹坂が相変わらずの上目遣いで尋ねてくる。

前述したように季節は夏で、さつきから絹坂に纏わり付かれ無意味に体温を上昇させられ、ついでに怒鳴ったりもしたので喉が渴いていないということはなく、かなり乾いていて何か飲み物が欲しい時頃であった。絹坂は妙に気が付く奴なのだ。便利っちゃあ便利だな。

「うむ。確かに渴いたな」

「じゃあ、なつつあん買ってきますー」

なつつあん。それは最近大手飲料メーカーが発売した缶ジュースの商品名だ。オレンジなら<sup>だいたい</sup>オレンジ、リンゴなら赤といったシンプルな色の缶にやたらと凛々しい昭和チックな太い眉、暑苦しい目、富士山みたいな口の顔が書かれた柄の缶ジュースだ。まあ、けっこう美味しいのだが、この缶をデザインした奴のセンスが分かん。

絹坂は自販機のある別の車両へとばたばた走っていった。パシリをしているのに、何だか楽しそうだ。

「ふーふーふー」

「ひーひっひっひー」

「あーらあらあらー」

背後からいくつもの意地悪そうな笑い声が聞こえてくる。鬱陶しいこと極まりない。俺は嫌そうな顔を隠さず、というか見せ付けるように振り返り、連中を睨みつけてやる。

「あらー？ 恐い顔してますよー？ 怒ってますねー」

「あたしらがいるから絹ちゃんといちゃつけないから怒ってるんですねー」

「あたしらのことなんか無視してイチャつけばいいのにー。照れ屋さんなんだからー」

物凄くムカつくぞ。殺してやりたい。

後ろの席に座っているのは5人の若い男女 とうか俺の高校時代の友人どもだ。

「いちゃいちゃいちゃいちゃと恥ずかしいですね」

最も離れた席に1人で座っている鋭い目つきをした黒いシヨート

カットの女は薄村沙希（はくむら さし）という冗談（冗談）みたいな名前の奴だ。何だか無表情だが、しかし、確実に俺を馬鹿にするような目で見て、馬鹿にするような言葉をさつきから浴びせてくる。

「一人身の俺たちやあ嫉妬（あきら）に身を焦がしてしまっよ」

冗談（冗談）みたいだが割りとは本気そうに言ったのは中肉中背で、いまいち、特徴という特徴がない男だ。こいつは草田心平（くさだ しんへい）。俺の中学時代からの腐れ縁で、親友と呼んでもいいかもしれないが、呼んだことないし、呼ぶつもりもない。

「本当本当！ もう殴りたくなってくるよね！」

明るいええ感じの笑顔で物騒なことを言うセミロングの茶色い髪で大きな瞳の女は蓮延鈴子（はすのへすずこ）。こいつはいつも笑っている奴だ。笑顔が標準表情なのだ。いつもしかめ面の俺とは正反対だ。

あと2人の男は、柔和な顔つきで小太りの七飯福男（ななえふくお）。その福福しい容姿と名前から、俺たちは彼のことを七福神と呼ぶことがある。もう一人は、小柄で痩せていて、顔色が悪い不健康そうな町井公彦（まちいきみひこ）だ。

この5人+俺ともう1人の7人が高校時代いつも一緒に行動していた友達グループってやつだ。ついでに言えば高校時代に俺が率いていた組織の幹部たちでもある。ちなみにもう1人つてのは俺の彼女だったのだが、俺たちが2年の冬に死んだ。以上。

「貴様ら煩いぞ。いい加減黙らんと殴るぞ」

俺が不機嫌である理由の一部がこいつらであることは言うまでもない。さつきから、俺と絹坂の様子を伺ってはにやにやと笑い、何処（どこ）ぞの団地の奥様方のように「あらあら」とか「まあまあ」とかごによごによ囁き合っている。腹が立たないわけがない。

しかし、俺の不機嫌の最大の原因はこのムカつく言動を繰り返す悪友どもではないし、電車に乗ってから1時間以上もからべタベタくつついてくる、今はなつつあん（なつつあん）を買いに行っている絹坂でもない。これから行く先にいる俺の両親及び姉妹だ。

**偏屈先輩は不機嫌である（後書き）**

そんなわけで厄病女神シリーズの続編です。

先輩と絹坂がらぶらぶします。先輩の家族が出ます。先輩の名前が分かります。

これからお付き合い願います。

## 偏屈先輩が帰省なさる訳

俺が電車に揺られている事の発端は昨夜に遡る。さかのぼ

昨日の昼間は知人が大勢集まっている衆人環視の中、絹坂と今思い返せば凄まじく低レベルで下らない糞みたいな口喧嘩をした拳句、包丁で刺されそうになったというか、ちょっと刺されて今も脇腹が少し痛むのだが、そんなことは瑣末な問題さまつということにしておく。

まあ、色々あった結果、俺は絹坂と男女交際する羽目になったのだが、そこからが大変だ。

絹坂は夏休み中ずっと俺の部屋に寄生していたわけだが、その間、絹坂の立場は俺の後輩であり、俺から見れば妹かペットみたいなもんだった。

しかしながら、絹坂の告白を俺が受諾した時点でこの関係は大いに变化することは言うまでもない。つまり、俺は絹坂の先輩で彼氏。絹坂は俺の後輩で彼女というわけだ。

絹坂は今までだって俺にべたべたとくっついて甘えていたが、そいつが彼女という大義名分を得ればどーなることが想像に難くない。「先輩ー先輩ー」

と、べたべたくっ付くのは、まあ、前からだから、まだ良いとしても、

「先輩ー？」

「……何だ？」

「ちゅーしてください」

上目遣いにそんなことを10分毎に言われては、大変対応に困る。しかも、絹坂はへらへら笑っているように見えて、目は凄いマジで本気で、全然笑ってないっていうか恐いくらいにキラキラ光って俺を見据えていたのだ。

更には妙に強い力で俺を押し倒そうとまでしてきて、俺は結局絹坂と1時間も無言の押し合い力比べを行ったのだが、絹坂が一瞬バ

ランスを崩したとき、巧く流して、絹坂は頭をテーブルにぶつけて静かになった。一件落着。

とりあえずゆっくり風呂に入ってから、身体をバスタオルで拭いていると電話のけたたましい音が鳴り始め、俺はバスタオルを身体に巻き付けたままで慌てて電話に出た。電話に誰も出んわという状況は避けるべきだ。そこ。ここは笑うところだ。そんな冷たい苦笑をするな。

「もし」

「あつ！ 双葉ふたばっ!?!」

俺が電話での常套句じょうそうぐである「もしもし」を完全に口にする前に受話器から女のでかい声が聞こえてきて俺は耳を電話機から離れた。

「何だ。貴様か」

「あんたねえ。姉さんに向かって貴様って何よ！ 相変わらず失礼な奴ねえ」

受話器から聞こえてきたのは俺の愚姉の声だ。俺の姉は樹いぶきという名で、俺よりも3つ年上で、今は大手新聞社の社員で、記者見習いみたいなことをしているらしい。あんまり興味も無いのでうる覚えだ。

「あのさあ。双葉」

「その名を呼ぶな」

「いや、だって、あんた、双葉じゃん」

その言葉に俺は閉口するしかない。何故なら、俺の名は「双葉」なのだ。何だって、こんな女みたいな名前なのか大変に不満だ。故に友人にも知人にも誰にも彼にもできるだけこの下の名前を教えないうし、言わせないようにしている。呼んだらキレル。

しかしながら、家族である姉が苗字で俺を呼んでは意味不明なので、下の名を呼ぶのは当たり前である。

でも、嫌なのだ。なんだって、こんな名前にしたんだっ!? あの糞親父めっ! ぶっ殺してやりたいっ!

「それでさ。双葉」

「その名を呼ぶなっ！」

「いや、だつて、あんた、双葉つて、これ、繰り返すの?」

繰り返すことに意味はない。意味はないが、双葉と呼ばれるのは嫌だ。

「あんたで良いだろ」

「自分のことあんたつて呼べつて奴なんか初めてよ」

姉の呆れたような声が聞こえてくる。あいつに呆れられるのは業腹だが、ここは我慢する。ここで怒鳴つて電話越しに口喧嘩するのは避けたい。昼間、怒鳴り過ぎて喉が痛いのだ。

「それでさ。あんた。まだ夏休みでしょ?」

小中学校及び高校の夏休みは8月をもつて終結であるが(ちなみに、北海道はもつと早くて8月20日くらいには終了らしい)、大学生の夏休みは無意味に長いのだ。

「まあ、確かにまだ夏休みだが」

てか、どーでもいいが、着替えたい。夏ゆえ寒くはないし、部屋の中ではあるが、いつまでも全裸にバスタオル一枚という格好をしているのは気に入らん。

「じゃあ、あんた、ちよつと里帰りしなさいよ」

「はあ?」

「はあ、じゃないわよ。あんた、もうそつち行ってから一回もこつち帰つてきてないじゃない」

姉が言うとおり、確かに、俺はもう長いこと実家に帰っていない。俺が大学進学によりこつちに来たのは去年の春であるから、もう丸1年と5ヶ月程度、およそ1年半帰っていない。

しかし、俺は母上はともかく父とはあまり関係が宜しくない。というか最悪だ。

そもそも、今の大学に通っているのも父の意向を無視して勝手に決めたことなので勘当同然の状態なのだ。いや、まあ、毎日のように「出てけっ!」だの「死ねっ!」だの言い合うような父子関係だったので、俺が勝手に進学先の大学を決めた時に親父が言った「出

てけっ！」に勘当的な意味合いがあるのかどうかは不明だ。

まあ、ともかく、そんなわけだから、実家には帰り辛いのだ。それに、帰る意味も必要もないしな。

「まあ、確かに帰ってはいないが、帰る必要もあるまい」

「あるまい。じゃないわよ。母さん、心配してるわよ？ 顔くらい見せに来なさい」

姉が言うことも尤もだ。父は論外としても、母上は結構良い人であった。穏やかで優しくのんびりとした人だ。凄くごくたまーに怒るのだが、その時は地味に凄く恐かった。

あとは、姉と妹か。そいつらは別にいいや。祖父さんもいいや。

「ううむ。母上か……」

「そうよ。母さんよ。父さんとはか祖父ちゃんとかは別にいいとしても、母さんは心配させちゃダメよ。母さんは強そうに見えて弱いんだから。弱そうに見えて強いけど」

凄く矛盾している言葉だが、同じ母上の子供としては大いに頷ける言葉だ。あの人は強いんだか弱いんだか全くもって分からん。しかし、少なくとも我が家で一番強いことは確かだ。誰も母上には逆らえないというか敵わんからなあ。

「母上に心配をかけるのは俺の本意ではないし、母上の心労を解消することは各おんがかではないのだが、しかし……」

「しかし？」

「めんどい」

受話器の向こうから呆れたような溜息が聞こえた。嫌な予感を感じて受話器を耳から離す。

「いいから来なさい！ あんたが来なかったら家族でそっちに押しかけるからね！」

受話器から姉の怒鳴り声が聞こえてきた。離して正解だった。離していなかったら鼓膜が損傷していたな。

しかし、押しかけられるのは勘弁願いたい。せつかく、俺の部屋から寄生していた厄病女神が退去するのだから、そこへまた何かが

やってきて居座ることは何としても避けるべきだ。

それに、母上の心労を解消してやりたいというのも本心だ。うちの家族は皆母上に弱いのだ。

「仕方あるまい」

俺が呟いた時だった。

「せせせせせ先輩いつ!？」

いつの間にか目を覚ましていたらしい絹坂が顔を真っ赤にして目をぎらぎら輝かせて俺を見据えている。今、俺は風呂上りの真っ裸にバスタオルで大事な部分を隠しているだけという状態だ。

「何何っ!? ちょっと! 今、女の子の声が聞こえたわよっ!？」

受話器から興奮した姉の声が聞こえてくる。うぎ。俺は黙って受話器を電話に叩きつけた。

「せせせ先輩ー。はあはあ……」

「おい、絹坂。何でそんなに顔が赤いんだ?」

「それは先輩の裸を見て恥ずかしいからですー」

「何でそんなに息が荒いんだ?」

「先輩の裸を見て興奮しているからですー」

「何でそんなにじり寄ってくるんだ?」

「先輩を食べちゃうためですー」

以上、赤頭巾ちゃん風会話。

この後、絹坂と俺の力比べ第2回が起きたのは言うまでもない。

**偏屈先輩が帰省なさる訳（後書き）**

はい。先輩の名前です。双葉ちゃんです。呼んだら殴られます。ついでに先輩の姉上も受話器越しで登場です。

## 偏屈先輩は笑わぬ

「先輩ー。なつつあん買って来ましたー」

絹坂の手には例の厳しい顔つきが描かれた缶ジュースがある。赤いのと緑の。

「りんごと青りんごどっちが良いですかー？」

「青りんご」

缶ジュースの柄はともかく青りんごなつつあんは美味い。

「ねえねえ、先輩ー」

絹坂が俺をじいっと見つめてくる。やっぱり上目遣いで。お前、本当にわざとだろ。俺がそういうの弱いのが分かってるだろ？

「笑ってください」

「何をだ。貴様の無能を嘲り笑えばいいのか？」

絹坂は嫌そうな顔をした。

「それとも貴様の阿呆さ加減か？」

「先輩って付き合ってもそんななんですねー。ちょっとは優しくなるかと期待してたのにー」

絹坂は何だか呆れたような顔で俺を睨むように見る。

「お前、そんな期待してたのか。馬鹿か？俺と知り合って何年だ？」

俺の言葉に彼女は深く溜息を吐く。

「とにかくですね。笑って欲しいんですー」

「おかしいこともないのに、何で笑わないといけないというのだ。何も無いのにやにや笑っていては変態じゃないか」

俺は正論を言っているだろ？間違っではおるまい。しかし、絹坂は不満そうな顔をするのだ。

「そーいうことを言ってるわけじゃないですー。それはー、えーつとー」

絹坂は何かに喩えようとしているらしいが、語彙不足で思い至ら

ないらしい。馬鹿め。慣れないことをするからだ。

「とにかく、そーいうことじゃないんですー！ 微笑んで欲しいんですー！ いい感じの笑顔ですよー！ できるでしょー？ たまにしる凄いいい笑顔ですよー」

「凄いいい笑顔？ 何だ？ それ？」

「え。何でそんな訳分かんないみたいなの顔して首傾げてるんですか？」

「いや、本気で訳分からんのだよ」

絹坂は吃驚した顔をする。

「何何ー？ 何か面白いことー？」

蓮延が絹坂の頭上に頭を乗り出してきて言った。面白そうなこと、楽しそうなことがあるといつでも何処でも頭を突っ込むのがこいつの特性だ。目が輝いている。

「何ですか？ 委員長が微笑む？ そんなこと天地がひっくり返るうともありませんよ」

最も遠い席にいたはずの薄村がいつの間にか俺の横に立っただちよいと失礼なことを言う。何でそこにいるんだ？ てか、聞こえてたのか？

「ないな。ありえない。このヤクトを賭けてもいい！」

蓮延の横。つまり、俺の頭上に頭を乗り出して草田が叫ぶ。そんなもんを賭けることに何の意味があるというのだ。言っておくが、別にヤルトを貶しているわけではないぞ。しかし、お値段がお手輕過ぎるじゃあないか。賭けに適するほどの価格があるものか。もうちょっとなあ。四桁はいくものを賭けるべきだ。

「て、貴様ら、藪から棒に何なのだ」

「委員長が微笑むことなんかありえないってことだよ。少なくとも僕らは想像できないなあ」

俺が不機嫌に問い掛けると後方から七飯が穏やかに答えた。顔は見えないが声で分かる。

この場にいる全員が発言したにも関わらず町井は沈黙したまま。

まあ、元々、そーいう奴だ。

ちなみにさつきから言われている委員長というのは俺が高校時代に率いていた組織での俺の職名だ。この場に居ない1人が副委員長で、蓮延が書記長。草田が主席執行委員で、七飯は広報担当執行委員、町井は総務担当執行委員、薄村は謀報担当執行委員だった。確かな。もう結構前のことだから記憶に薄い。その辺のことは絹坂の方が詳しいかもしれん。絹坂は現役メンバーにして書記長だからな。「委員長が微笑むなんて冗談抜きに本当に想像できないな」。いつもむっつりしかめっ面してるか怒鳴ってるかだしね。または、蔑むような冷笑とか、呆れ果てた顔しかないな。一番機嫌よくても苦笑だね。」

蓮延が絹坂の髪の毛を弄いじくりながら言う。こいつは気に入った娘の髪の毛を弄いじくる習性がある。

「もう何年も双葉が笑ってるのなんか見てながあっ!?!」

俺の頭上で喋っている草田の顎に思いつきり頭突きする。この糞野郎め。迂闊に俺の名を出しおって。何度痛めつけても分かん奴だ。一度じっくりと拷問する必要があるそうだ。頭じゃ分からんよ。うだから身体に教えてやっているとこのに、いつまで経っても覚えん奴だ。

「先輩の名前ってふ」

「シャラップツ!!」

絹坂が余計なことを口に出す前に怒鳴りつけた。貴様は首をへし折らりたいのか?

「とにかく、彼が微笑むなんてことは私たちの想像の範疇はんちゆうにないのです」

薄村が落ち着いた様子で言った。お前、席に座ってるよ。

「えー。でも、微笑んだんですよ。過去2回くらい」

胡散臭そうな顔で絹坂を見る俺の友人たち(悶絶中の1人除く)。

「ほ、本当ですよ! その微笑が凄く良いんです! ものすっこくええんです! あれ見たら胸ずきゅんですよ! 最強ですよ! あ

れで落ちん女はいませんよ！」

興奮気味に熱く語る絹坂。しかし、俺含め誰もそのテンションに付いていけない。ただただ「へー」みたいな顔で見るしかない。たまにあるよな。1人だけ異様にテンション上げてるけど、周りが付いていけないことって。可哀相な奴。

「あぁっ！先輩が微笑んで！？でも、何か違う！その市場に送られる家畜を見るような哀れむような微笑は違いますっ！」

1人空騒ぎする少女と顎を抑えて悶絶する若い男を乗せた電車はようやっとわが故郷の見慣れた懐かしい駅に入った。

偏屈先輩は笑わぬ（後書き）

作者紹介ページで更新状況なんかを載せているので参考にして下さい。

## 偏屈先輩暑さと戦う

列車を降りた俺たち7人はとりあえず駅のゴミ箱に車中で発生したゴミを放り込み、飲料類を飲み干して、ついでにトイレに行つてから、さて、外に出るかと決意した。決意しただけでまだ出てはいない。

「暑そうだ」

「暑そうですな〜」

「暑そうだね」

「暑そうだな〜」

「暑そうですよね」

「暑そうだよね」

「暑そうです」

俺たちは口々に似たようなことを口にした。というか殆ど意味は同じだ。

俺たちはずっと冷房の効いた列車の中にあつた為に、身体は完全に20 以下な気分だ。しかし、駅の外の気温は30 を超えている。

天気よ。君は秋って言葉を知っているかな？ その秋がいつから始まるか分かっているのか？ もう近いぞ。早めに準備して悪いことはないと思うがどうかね？ と、まあ、天気と言つたつてしようがないのは分かっているものの、言いたくなってしまうのは致し方のないことだ。

「じゃあ、行きましようか」

絹坂がそう言って歩き出す。てくてくと歩いて自動ドアの前に立つ。当然自動ドアなので自動に開き、むわつとした熱気と湿気が絹坂を襲う。

「うはー！ すごい暑さですねー。さすが夏ですー。クーラーの涼

しさに慣れた身体には辛いですねー」

絹坂が苦しそうに言った。

しかし、誰も同意しない。

「あれ？ あれ？ あれー！？ えー！？」

叫ぶ絹坂。公共の場所で騒ぐな。

「何で皆一步も動いてないんですかー！？ そこに一人で並んだままなんですかー！？ 私1人だけ騒いで馬鹿みたいじゃないですかー！？」

確かに後ろから見ていて馬鹿みたいだった。

絹坂はぷりぷり怒りながら戻ってきた。ハムスターのようにほっぺを膨らませている。絹坂は怒っているとき頬を膨らませるのが癖なのだ。変な癖。

「もう！ いつまでそこにひるひなんれふふあー！ ほっへひっはらひやいでくらはいー！」

怒って何事が言ってくる絹坂のほっぺを引っ張ったりぷにぷにしたりしてみる。相変わらず気持ちよいなあ。

「ひよっとー！ はたひのはなひきひてるんれふふあー！？」

聞いてない。聞いても意味分からんからな。いや、ちょっとは分かるけどな。

「もう！ はらひてくださいー！」

俺の手をぺいと払い除ける絹坂。何だ。反抗的だな。

「先輩たちはいつまでもそこで意味もなく粘っている気ですかー？ 日が暮れちゃいますよー！ それともここで夜を越す気ですかー？」

そんな気がないことは言うまでもない。それは俺に限らない6人全員の意思だ。

「仕方あるまい」

「しょうがない」

「行きましようか」

「あっちそっただけどねー」

「うん、暑そうだよな」

「死にそうです」

ぶつぶつと何だか意味もなく不機嫌そうに言いながら俺たちはじりじりと出口へと向かっていく。

「くっ。これは難敵だぞ……」

「見えない力があたたしたちの行く手を遮る！」

「ここを抜けていかなーと俺たちに未来はない！」

「見えない敵にも勇猛果敢に挑まなければいけないのです」

俺たちが駅の出口の前でたむろって云々喋っているのを絹坂はじとーっと細目で見ていた。何だ。その呆れたような目は。

「しかし、諸君。無謀な突撃というのは無意味なものだ」

俺の言葉に数人が頷く。

「うんうん。犬死的な玉砕戦法は旧日本軍だけで十分だよな」

蓮延の言葉に数人が同意する。

「やっぱ、ボスに挑む前には準備をしなくちゃな。RPGの基本だ」

草田の言葉にさえ数人が首を縦に振る。

「というわけでアイスでも食って気力を充電してから行ことにしましょうっ」

薄村の言葉に数人が賛同して、我々は駅の待合室でアイスの自販機でアイスを買って求め、ベンチに座ってゆっくりと舐め始めた。

絹坂が少し離れた場所から恨みがましそうな目で俺たちを見ていた。

「何だ？ 貴様もアイスが欲しいのか？ 自分で買え」

「もー！ 先輩のお馬鹿ー！」

そう言っつて絹坂はぼかぼか殴りかかってきた。大して痛くはなかったが、邪魔臭いので、アイスを買って与えたら静かになった。ちよろいもんだ。

「あー、暑い……」

俺は今日最も口にした言葉を再び繰り返した。季節は8月末。気

温は30 台後半。40 だつて夢じゃないさ。と思わせるくらいに暑い。

「委員長。暑いから暑い言つたつてしょーがないよ」  
「知つとる」

蓮延の言葉に俺は素っ気無くイライラと言いつ。俺は普段から常時不機嫌な奴だが、暑いと余計に機嫌が悪くなるのだ。当社比2倍くらい。

「それでも言いたくなつちまうもんだよな」

俺の横で草田がしたり顔で頷く。あー。イライラする。

「うるさい。死ね」

「え？ 何で、そんなことで死ね言われなくちやいかんの？」

草田はぶつぶつと不満げに呟いていたが無視。無視で済んだだけありがたく思え。あと温度か湿度が少しでも高かったら蹴っ飛ばしてたな。

「先輩ー？ 大丈夫ですかー？ 顔色悪いですよー？」

草田とは反対側から絹坂が心配そうに俺の顔色を窺う。

「何が大丈夫か大丈夫じゃないか知らんが、それが機嫌とか体調とかのことを聞いているならば、現状は最悪と言わざるをえない。そもそも、この日本の気候と俺の相性が極めて悪い。俺の祖先はこの日本という国に何百年もいながら何をどう進化してきたというのだ？ 勿論、生物がたつた数百年如きで進化できるとは思ってはいない。いないが、しかし、少しくらい慣れたつてええんじゃないのか？ こんな気温が25 超す度に具合やら機嫌やらが悪くなつたり、内臓系や神経系を痛めていたのでは、今に死んでしまう」

「そんだけ喋れば大丈夫ですねー」

「……………」

絹坂はあつさり言い放ち、俺は沈黙して立ち止まる。そんな俺を放つておいて、絹坂はさつさとことこ歩い行って、前を歩く蓮延と何やら世間話を始めた。

「置いてくれましたね」

いつの間にか後ろを歩いてた薄村が俺に言った。

「あんまり素っ気無かったり無愛想だったり我侷だと、いくら今はあなたにベタ惚れな絹坂さんでも、いつか愛想尽かされちゃうかもしませんよ?」

俺は微妙な気分で薄村を見る。どーいう表情をすればいいのかわからんじゃないか。

「絹坂さんに捨てられたら、あなたもう一生恋できないでしょう? もうちよつと上手く生きた方が良いでしょう。あなたは生きるのが下手糞ですから」

薄村はそう言って、にっと意地悪そうに笑って、すたすたと歩き去ってしまった。俺はどんな顔すればいいのか分からずむっつりと顔をしかめるのであった。

偏屈先輩帰省中

**偏屈先輩暑さと戦う(後書き)**

久方ぶりの更新です。

次回からは、先輩の家族編です。

## 偏屈先輩御自宅へ向かう

駅を出てそのまま北へ真っ直ぐ進むと、その辺りはやや歴史のあ  
るやや寂れた商店街に至る。その一角に七飯の実家である和菓子屋  
兼甘味処「七福」がある。店名がこれだから、俺たちが彼のことを  
時たま七福神と呼ぶのも仕方がないことだ。そうは思わないかね？  
諸君。ていうか、呼ばなかったら絶好のタイミングで振られたボ  
ケにツツコミを入れずにスルーするが如き所業だと俺は思う。

七飯とはそこで別れ、暫し進んでから薄村、町井とも別れた。俺  
の自宅はまだ北であり、彼らは商店街の西にある新興住宅地に自宅  
がある。

うだるような暑さの中を、もう余計なことを喋る気力も体力も失  
つて4人無言で歩き進む。俺の家は駅から歩いて30分という近く  
はないが、別に凄く遠いという程に遠くもない地域にある。しかも、  
自宅からバス停が遠く、歩いて10分以上かかり不便極まりない。  
バス会社は何を考えてバス停を配置しているのか。バスを待ったり  
乗ったりの移動時間その他を合わせると確実に歩いて帰るよりも遅  
くなるというマジック。タクシーを使うのは阿呆らしいので、仕方  
なく俺たちは原始的移動手段に頼るわけだ。

しかし、この暑さの中、しかも、度荷物を抱えての行軍は辛い  
一言に尽きる。そして、再び、俺はこの高温多湿な天気を呪うのだ  
が、そんな頻繁に、殆ど毎日天気を呪っては、ありがたみとい  
うか希少性というか重みというか、そんなものが薄れて、呪いの意  
義が軽くなってしまい、いざ、何かを呪わんというときに、軽過ぎ  
て効かないなんて事態になりかねん。大谷吉継もそんなしょっちゅ  
う色んなものを呪っていたわけではないだろう。普段は呪わないで、  
最後の最期に「小早川秀秋呪う！！」ってやったから小早川を3年  
で呪い殺せたのだろうな。やっぱり、呪いなんてものは、ちよっく  
ら近所のコンビニ行くくらいの手軽さでするもんじゃないな。まあ、

しかし、それでも、暑いのは暑いもんで、頭の中では天気に対する怨嗟えんさの音が鳴り止むことはないのだ。俺は人を呪い殺せないな。

「先輩ー。ぶつぶつぶつぶつ煩いですよー。イライラする」  
絹坂が至極迷惑そうな顔で俺を睨んだ。どーやら俺はいつものまにやら自然と独り言を呟いていたらしい。口を閉じて沈黙に戻る。

ていうか、最近、ちよつと、絹坂の言動が厳しいような…容赦ないような……。しかも、さっき、最後の方が敬語じゃなかったぞ？ いや、まあ、いっつも敬語喋ってる方が変なのだがね。

「あー。着いたー。着いたーよおーつとーりやあーつ！」  
蓮延の家の前に到着した途端に蓮延は叫んだ。やたらと小さい文字が多い叫びだ。

ここの近所に草田の家もあるのだが、暑さに耐え切れなかったらしい草田はさつさと家へと撤退していた。あいつは別れの挨拶もできんらしい。

「まあまあ、いいじゃん。そもそも、君だつて時候の挨拶に含まれる意味はアメリカのミサイルに含まれる正義よりも少ないつて言つてたじゃん」

「そんなこと言つたか？」  
「言つたよー。あははー。忘れてんのー？ 若年性ウンタラカンタラ症候群じゃないのー？」

名前を覚えていない単語を使うな。  
「そんじゃ。今日はこれで解散やねー？ また明日ー。ほな、頼むでー」

何を頼むんだ？ 某大物芸人じゃあるまいし。そして、その似非大阪弁は何だ。確かに貴様は高校時代からこつちに来た転校生だがその前に住んでいたのは北海道ではなかったか？

俺が理論的ツツコミを入れる前に蓮延は屋内に退避した。

「先輩ー」

絹坂が疲れきった顔で俺を見やる。さすがのお気楽娘もこの暑さの前には磐石とはいかんようだ。蓮延はちよつと笑いが薄いだけだ

つたが。町井は死にそうだった。いや、もう死んでいるかもしれん。「さっさと帰りましょう。このままじゃ死にます。確実に。大体、先輩、さっきから言動おかしいですよー。暑さで脳回路がイカれている可能性があります」

「そうか。それはいかな。さっさと帰るとしよう」

絹坂の言葉に頷いて歩き出……………さない。

「ちよつと待て。絹坂。さっきの貴様の台詞には色々と注釈をつけて欲しいところとか訂正させるべき箇所があるのだが？」

「気のせいですよ」

絹坂はウンザリしたような顔で言い、てけてけ歩き出す。

「ちよつと待て！ そのウンザリ顔は何だ！？ こいつ、またメンドクセーこと言い出したよ的な顔は！？ それは聞き捨てーじゃない！ 見捨てたらんぞ！？」

怒鳴ると何だか頭がクラクラした。これはやばい。いつもの調子で怒鳴り散らすと10分で死ぬ自信がある。

仕方がないので普通の声の大きさをで絹坂を尋問する。

「俺の脳回路がイカれているっていう悪辣あくらつな言葉は、俺の寛大な心で、今は置いておくとする」

これを追及すると確実に怒鳴る羽目になるからな。そうなりや暑さで沸騰した血液が血管をぶち破ってしまうかもしれん。洒落にならん。

「あれ？ そこじゃないんですかー？」

絹坂は意外そうに目をぱちくりさせる。

「先輩なら絶対に2倍も3倍も酷い悪口をマシンガンのように返してくると思ったのに」

思っんなら言うなよ。

「とにかくくだ。それは置いておいてだ。その前、貴様、帰りましょうって言ったな？」

「言いましたねー」

「俺の記憶が正しければ、貴様の家は南町だったはずだが？」

南町は名前の通り俺の住んでいる市の南部の地名だ。絹坂の家の住所は南町であつたと俺は記憶している。そして、俺の家は北ヶ丘きたがおかという市の北部である。つまり、方向が全然正反対だ。

「何で貴様、俺と一緒に歩いているんだ？ 貴様は何処に帰る気だ？」

絹坂はそつぽを向いた。わざとらしく口笛まで吹き始めた。

まあ、絹坂が答えなくても答えは自ずと分かる。

今まで、というか、主に高校時代であるが、俺は絹坂に対して住所を完璧に隠匿してきた。奴は学校内において俺のストーカーのような行動をしていたから、住所がバレたら余計に纏わり付かれるのは目に見えたことであつた。

そして、今もそうである。彼氏彼女となつたものの、いや、なつたがゆえに、今こそ暑いので離れているが絹坂は俺にベツタリだ。

迂闊に自宅の場所を明かせば、これから毎日放課後やってくることも予想される。

彼女なんだからいいじゃないと言う奴がいるかもしれない。まあ、確かに、俺も満更ではない。傍から見てムカつく以外には問題はないうように見える。見えるが、実は、隠れた問題があるのだ。その問題とは我が家族である。

## 偏屈先輩の御一族

「た、ぜえぜえ、た、ただ、いま……はあ」

とりあえず絹坂を追い払い、捨て去り、走り去って、暫し近所を追いつ追われつした結果、何とか絹坂を撒いて、我が自宅の場所を秘匿することに成功した。

俺の家は小高い丘の上にあり、その登り口は少し分かり難い場所にある。昔、うちは神社をやっていたからこんな不便な場所に家があるのだろう。坂を上るのが面倒臭くて辛くて大変で参ったもんだ。しかも、ブロック塀で家をぐるりと囲んでおり、その出入り口が何故だか登り口の反対側にある為、わざわざ回り込まなければいけない。誰だ。こんな不便な家にしたのは？ うちの祖父さんと親父だ。馬鹿どもめ。

俺は暑さと無駄な運動による体力気力の減耗により意識を少し朦朧とさせながら渋々と移動する。

我が居宅は外観的には純和風に格好つけている三階建ての建築物だ。

ところで、我が一族は外間を重視するが実用性も重視するという欲張りな性格の間が多い。そんなわけで純和風の家だと格好いいから、外観はそうしているものの、中は結構近代的で、風呂は広いしテレビも備え付けられ温度変更も自由自在。部屋は和室だけではなくフローリングの洋室もあるし、クーラーで夏は涼しく冬は暖かく、乾燥機付き洗濯機に大画面テレビ、自動織機洗浄器に、シアタールームまである。

以上を見て分かるとおり我が家は結構な金持ちである。これは見栄とか自慢とかなしに普通に客観的にみてもそうなのだからしょうがないことだ。

しかし、何でこの家に金があるのかといえば、誰もが羨むサクセスストーリーとか絶えまぬ努力が生んだ財産とか柵から牡丹餅的な

云々とかがあるわけではない。

そもそも我が一族こと冨上家はこの小山とその北に広がる森を敷地とする神社の神主であった。何でもこの小山と北の森には神だか精霊だかが住んでいて、冨上家は代々それに仕える尊き家柄だったんだそう。

貴族が権勢を振るった時代から武士の時代まで長らくそうして生きてきた冨上家であるが、明治の始まり頃の混乱に乗じて北の森を全て高値で大商人やりに売り捌き、それによって得た現金を持って商売に手を伸ばし（あんまり良い商売ではないと聞いている）財を成したそう。

挙句に議会制度が確立すると、それまでに溜め込んだ金を選挙資金として議員に成り上がり、議会上がってからは左派にも右派にも属さずその時々に乗じて上手く立ち回り、策謀を巡らし、政敵を追い落とし、と、まあ、合法非合法問わずあくどいことを為し、戦後も戦争にさして協力も非協力もしなかった為に議員として影響力を保持し、一時期は地域企業から莫大な献金を集め、今もつてこの地域では圧倒的な影響力を誇っている。下手な国会議員なぞ屁でもないくらいだ。

ちなみに、現在はうちの祖父さんが10年間市議会議長を勤め、親父は県議会議員、叔父は市の部長、他にも親戚には大臣の秘書やら高級官僚やら外交官やら有象無象のあくどい者どもがいる。そんなわけでうちは金持ちにして権力者なのだ。元が神に仕えていた家とは全く思えない。

ああ、嫌だ嫌だ。金と権力にしがみつく汚らしい奴らめ。俺は政治屋には絶対ならんと固く決めているのだが、それが親父には大いに不満であるらしい。政治屋に学歴は大事なので今俺が通っているあんまり知名度のない地味めな大学よりもっと名のある首都の大学に行け。なんなら金でも圧力でも権力でも何でも使って裏口入学させるから行け。と、まあ、言われたのだが、俺は梃子でも首を縦に振らず。大論争から殴り合い寸前の大喧嘩に発展し、俺は通算

8回目の「出てけつ！！」という言葉を食べらったのであった。

まあ、あの頑固で自己中心的で我侷な糞親父から離れられるのは望むところだったので、俺は言われるがままさっさと家を出たのだがな。親父の隠していた表には出せないお金を少々くすねたので金銭的な心配は無用であり、後は、もう大学生なのだし何とかなるだろう的な気分で家を出て、そして、現に何とかなった。

このような成り行きゆえ親父とは顔を合わせ辛くというか顔も見たくないため、実家に帰る気なぞ欠片もなかったのだが、前述の通り姉上に説得され、此度、帰参した次第だ。やれやれ、面倒臭い。貴重な休みがー。

そして、せっかく、帰ってきてやったというのに、玄関に誰も来やしねえ。鍵が開いていたから人はいると思うのだがね。これで人がいなかったら無用心極まりない。

まあ、うちに泥棒に入る命知らずもないだろう。うちの一族に警察官僚がいるからな。全国の警察組織を動員して、どんなに金と人員をかけても、草の根分けて犯人を捜し出すことだろう。我が一族は俺と同じく山よりも高く海よりも深い矜持きょうじ（プライドのことだな）を持っていてなのだ。敷地に招かざる者を入れてそいつを怒鳴り散らさないでタダで逃がすことは何としても許せないというわけだ。しかし、本当に誰もおらんのか？　いくら、うちに入るような命知らずの泥棒がいらないとはいえ、最近では北の森の猿がドアを開けて入り込むことだってあるというのに。あの猿どもは何とかせんとならん。きーきー煩いし、暴力的だし、悪戯が過ぎる。10年くらい前に密かに毒餌を撒いて数十匹駆除したはずだが、最近、また増えてきているのだ。

重い荷物を引き摺って1階のリビングに向かう。うちには2階にもリビングがあるので、区別して言わねばならない。

1階のリビングは玄関から真っ直ぐ伸びる廊下の突き当たりであり、両戸を開けるとガラスの引き戸になっていて、裏庭を一望でき、縁側から出入りもできるようになっている。

うちの家の裏には結構広い庭があり、元は純日本庭園であつたらしい。しかし、うちには庭とか園芸とかに興味を持つ者が少なく、また、ケチでもあるので、庭の手入れは十数年に渡って放置されていた。

自由奔放に伸びていく草、枯れゆく花、弱る木を、日々見ながら俺たち一族は「これが自然の厳しさだ」とか言つて、何もせずにした。

ところが、最近になって、その状況に変化が起きている。その変化は俺が高校3年の頃というか、我が妹が高校に入学して園芸部に入部したことが変化の原因だ。

「ああ、何か暫く見ないうちに凄いいことになつてるな……」

俺は1階のリビングから庭を見ながら呟いた。

庭は日本庭園のようでもあり、イギリスのガーデンのようでもあり、アマゾンのジャングルのもあつた。てか、何これ？

偏屈先輩の御一族（後書き）

改行がなく読み辛いこと極まりないですね。

しかも、ストーリーに大して関係ないことですし。

この話いらなかったのでは……？

あ、先輩の苗字が出ました。これでフルネームが分かるよ！  
次話では先輩の妹が出ますよ！

## 偏屈先輩の御令妹

俺がこの家を出て行く前から裏庭は長年に渡って手入れがなされず放置され、弱い植物は死に絶え強い植物は旺盛に茂り何処からともなくやってきた雑草どもが跋扈するような状況であった。というか、生まれてこのかたそのような姿しか見ていない。冨上家の裏庭といえはそんな雑草の森みたいなものを指すのだ。

しかし、俺が家を出る半年ほど前から、庭には少しずつ変化が起きてはいた。いつの間にか木が一本消えていたり、変な花が咲いたり、穴ぼこが開いていたり、草が異様に増えていたり。俺はその変化に気付いてはいたが、さして気には留めていなかった。庭などにはさして興味もなかったからな。

そして、此度、2年ぶりくらいに帰ってきたのだが、前から酷かった庭は更なる進化を遂げていた。

何か色とりどりの薔薇ばらがこれでもかってくらいに群生しているし、立派な松の木には変な苔やら蔦やら宿木なんか寄生しまくっているし、庭の真ん中には池ができていて、汚らしい水草が漂っているし、見たことのない花や草はわんさかとおるし、変な木に変な色の実が生っているし、もう何かこりゃあれだな。題名つけるなら「魔女の小森」だな。

俺が感心とも呆れとも諦めとも思える心情で庭を眺めていると、奥の茂みがかさがさした。おそらく妹であろう。

うちの妹は冨上家の次女であり末子であり、現在高校3年生になる。妹はそーいえば絹坂と同学年であったな。顔くらいは合わせたことがあるかもしれん。

その妹だが、そいつこそがこの庭の管理者にしてこの庭を作り出した張本人である。何でだか知らんが彼女は高校に入学すると園芸部に入部し、やたらと植物の育成を学び、それを我が家の庭で実践

するという行為に興じているのだ。何が楽しいのか全く分からん。いや、まあ、俺の高校活動を思い起こせば、人のことを言えるようなもんでもないのだがね。

奥の茂みを見ていると、ごそごそと妹がけつから出てきた。何処で手に入れたのか緑色の作業着を着ている。まあ、汚れてもいいようにだろうが、普通的女子高生は着ないもんだな。似合ってもいいい。

「どっこらせつと」

妹はスコップを杖代わりにして立ち上がりながら年寄り臭いことを言った。花の女子高生がそんなことを言うな。やめれ。

「ふー。やれやれ」

更に腰をとんとんと叩く。まるで婆だ。

「三津花……」

俺はかなり虚しい気分です。妹の名を呼んだ。

「ん？ ああ、兄様。帰られていたのですね。お久しぶりでございます」

作業着姿で土であちこち汚れ、凶悪な鉄製スコップを手にして我が妹は馬鹿丁寧に挨拶してきた。

絹のように艶やかで漆のように黒い長い美しい髪に、切れ長の深い黒色の瞳、雪のように白い肌のドレスと日傘が似合いそうなお嬢様のような少女。それが我が妹である。雨蛙みみたいな作業着を着ているので全てが台無しだがね。

「貴様、何をしている……」

「何って、庭を造っているのです」

何を言っているんだろうこの人みたいな顔で言い出す。こっちだつて何を言っているんだこいつはな気分だ。

「庭を造ってるだとお？」

俺はイライラと呟きながら庭を見回す。庭というより規模の小さな森だ。しかも、生えている植物の色も姿もてんでバラバラで全く見栄えが宜しくない。

「お前は何を目指しているんだ？ 前衛芸術か？」

はつきり言つて俺はあの手の芸術の価値というか意味が分からん。あれは何をどう表現しているのか皆目分からん。そもそも、作つた本人にしか分からん表現に、どーして社会的な価値が生じるのか。

「芸術なんかじゃありません。普通に園芸を」

「コレの何処が！？ 普通の園芸だっ！？」

「いきなり怒鳴らないで下さい」

俺が怒鳴ると三津花は嫌そうな顔をした。嫌なのはこの庭だ。

「貴様なあ。普通、園芸といえば、もうちつとこつバランスという  
が見栄えがいいもんだろ？ イギリス人を見習え！」

イギリス人はガーデニング好きが多いらしいからな。

「私は私の道を行くのです」

三津花は空を見上げて呟いた。馬鹿じゃ。

「何をかっこよさげなことを言ってるんだ……。しかも、あーあー、  
貴様、手が土まみれに……」

三津花の手を取って見ると、あー、これは酷い。白魚のように細く長い指は土にまみれ、爪の間にも泥が入っている。しかも、肌は荒れているし、葉か何かで切つたのか切り傷もある。

「何ということだ……」

がっくしと膝を突きたい気分だ。絹のような肌が土に汚れて傷ま  
で負つて、よくよく見れば肌も焼けて赤くなつていではないか。

このオゾンホールとやらが破壊されて紫外線が降り注ぐお肌受難時  
代に日傘もなしに外で庭仕事とは何とおぞましいことをするんだ。

「兄様は大袈裟ですねえ」

三津花が呆れたように呟く。

「大袈裟なことあるか！」

「あらら、いきなり大声出さないで下さい」

「貴様なあ！？ 俺たちがどれだけ貴様を大事に育ててきたか分か  
つてるのか！？ 花のように硝子細工のように傷つけず痛めず大事  
に大事に箱どころか金庫に入れて鍵かけてそれを更に金庫に入れて

マトリヨーシカのような状態にして育ててきたというのに！」

マトリヨーシカは分かるだろうか？ あのロシアの人形だ。人形の中に一回り小さな人形があつてその中に更に小さな人形があつてつてそんな感じ。もしかしたら名前を間違えているかもしれんが些細な問題だ。今、問題なのは三津花だ。

「そんな私でマトリヨーシカ遊びをしなくてもいいじゃないですか」「遊びじゃない！ これは我が家の最重要課題であつたのだぞ！？」  
「三津花は何のことだか分からないらしく怪訝な顔で首を傾げている。このニブチンめ！」

我が家に最後に生を受けた三津花は、新生児室にあつて、大概が猿か宇宙人にしか見えぬ赤ん坊の中で、一際愛らしくさながら天使か妖精のようであつたのを俺はよく覚えている。2歳のときのことだが、まあ、よくも記憶力が保全されているものだ。

赤ん坊の頃から可愛らしかった彼女は年を経るごとに更に可愛らしく美しくなつていった。我々家族はその日々の成長を見守りつつもこの愛らしく美しい我らが三津花を大事に大事に守り育てねばならぬと決意したのだ。この点においてのみ俺と親父さえも見解を同じくし、共に協力してきた。

そして、それは今も継続中であり、彼女に悪い虫がつかぬように、怪我をしないように、肌が髪が痛まぬように、馬鹿や阿呆や非常識なマヌケにならぬように、明に陰に彼女を見守り助け教え、とまあ、色々やっているのだ。全ては愛らしく美しい三津花の為也。

まあ、早い話が、両親は三津花に対して親馬鹿だし、姉上は姉馬鹿、俺は兄馬鹿なのだ。

「こんだけお前のことを大事にしてやっているというに貴様は貴様で危なっかしいことはするわ！俺と同じ県立高に行くわ！園芸とか汚れることを始めるわ！貴様は何を考えているんだ！？」

「危なっかしいことなんかしました？」  
首を傾げる三津花。自覚がないらしい。

「した！ 公園の柵の上を歩いたり、隣町まで1人で歩いていたり、夕方に森に入ったり、深夜のコンビニでバイト始めたり！！」  
「最後のは危なくないでしょう」

「何を言っておるか！？ 一番危険だ！ 強盗が来るかもしれないんじゃないか！？ 不埒な糞野郎が来て強姦されるかもしれないん！」

「……でも、まあ、私がバイト始めてから何日もしないうちに閉店したのですよね。不思議ですわ」

それは親父が店の持ち主に圧力と金をかけたからに他ならん。しかし、それは言わない約束だ。

「あと、兄様と同じ高校に行ったことの何がいけないのですか？」

「馬鹿。貴様是我々が言ったとおり私立の女子高に行くべきだったのだ。少なくとも虫ケラどもが寄り辛いからな。そもそも、俺があつこに行つたのは親父に反抗するためであつて、別に何のとりえもない平凡高校だぞ？ 貴様がそこを選んだことの方が俺には不思議だよ」

まあ、親父を怒らせる為に進学先をほいほい変更させた俺も俺だが……。

「ともかく、俺たちは貴様を大事に育ててきたというに、その恩に對してその汚れた手は何だ！？」

「大袈裟ですね。洗えばすぐに落ちますわ」

「ならばすぐに洗えー！ それとどっころせとか婆臭い台詞は禁止だ！」

「あー、はいはい」

「はいは一回だー！ 今まで数多の人々が言ってきたというにまだ貴様らはいいを2回重ねるか！？」

三津花は耳を押さえててけてけ去つて行つた。

やっぱり、あの作業着はダメだ。せめてジャージにしてくれ。と言つたところであいつが聞くとも思えない。

………没収だな。

偏屈先輩帰省中

偏屈先輩の御令妹（後書き）

先輩家族編なのです。  
次は姉上です。

## 偏屈先輩の御令姉

「兄様！？ 私の作業着知りませんか！？」

知ってる。しかし、言わん。

「あれなる趣味悪き雨蛙作業着は1人旅に出た」

俺は緑茶を啜りながら言った。

「訳分らないこと言わないで下さい！ 私が入浴している間に盗りましたわね！？」

「はて？ 何のことだか……。しかし、貴様は実の兄を盗人扱いする気か？ そんな酷い奴だったとは俺は悲しいよ……」

嘘であることは言うまでもない。現に盗んだのだから盗人だしな。  
「むう……」

三津花は険しい顔で突っ立っている。着ているのは清楚な白いワンピース。うむ。うちの妹はこーいうのじゃなきゃいかん。

「白い帽子もあつたら良いな」

「家の中で帽子をかぶるんですか？」

「いや、花畑で」

「わけが分かりません。日本語を話して下さい」

呆れた顔で俺を睨む三津花。ううむ、目が恐い。これは親父の遺伝で、我が家の3子の共通項であるが、これはあまり頂けない。もうちょっと柔らかい目つきの方が宜しかった。やはり、あの親父は害悪ばかりを齎すな。

「ところで、他の連中は何処だ？ 外出中か？」

三津花が風呂に入っている間に、己の部屋に荷物を置き、ついでに家の中を見て回ったのだが、誰もいる気配はなかった。

「ええ。母様は買い物に、姉様は仕事に、父様は」

「あの糞親父の現在地などどーでもいい。地獄以外に奴の居場所は  
ない」

「あ。そですか」

俺と親父の関係は一族の間では既によく知られたことだ。三津花も軽く頷いただけだった。

三津花は俺の据わっているソファの隣に腰を降ろしてテレビをつけた。

テレビではこの夏の高校野球で活躍した実家がお寺の丸坊主の高校生が頭の悪そうな女子アナにインタビューされていた。この高校球児は活躍もさることながら、つるりと禿げ光る頭に、実家がお寺という特異性もあって「坊主王子」と少々語呂の悪いニックネームで呼ばれよくよくテレビに出ている。

「私はこーいう人気者というかテレビに出まくるガキが大嫌いだ。何が坊主王子だ。普通にイジメで呼ばれそうな名ではないか」

「そう思ってるならそんな嫌そうな顔で彼を睨まなくてもいいじゃないですか。マスメディアのパンダになっただけで生暖かい目で見守るのがこういう場合の正しい対処法ですわ」

まあ、それは分かっているのだ。坊主王子本人も「坊主王子って……イジメじゃん……」などと考えているかもしれないのだ。悪いのはマスコミであって、彼ではない。というか彼が一番の被害者とも思える。

「たらみまーんもすー」

俺と三津花がマスメディアの害悪と利益に関して話し込んでいると、玄関方面から馬鹿丸出しの訳分からん言葉が聞こえてきた。一体、何が言いたいのか意味不明だ。

「やっぽー。おーう、双葉ちゃん久し振りー」

1階リビングに入ってきたのは少し茶色い長い髪で、少し目つきの悪い切れ長の瞳で、派手さを抑えてはいるがぱっちり化粧をした背の高い若い女。こいつが冨上家の長子の樹だ。

うちの馬鹿姉はリビングに入ってくるなり、ソファにいる俺に後ろから抱きつこうとしたが、俺は素早くそいつの射程範囲から離脱した。

「その名を呼ぶな!」

ついでに怒鳴っておく。

ソファの後ろから俺に抱き付こうとしていたそいつは俺に逃げられた為か、数歩横に移動して三津花に抱きつこうとして、やっぱり逃げられた。

そして、さめざめと泣く。

「弟妹が冷たい……」

「泣き真似ですね」

「泣き真似だな」

俺と三津花は敢えて冷たい視線で馬鹿姉を睨み、冷たい声音で呟く。

「何よ何よ！ あんたら2人揃ってあたしを馬鹿にしてー！」

ヒステリックに叫ぶ姉上。まあ、これもいつものことだ。てか、いつものことだった。俺は2人と話すのは久々だがな。

「ところで母さんは？」

さっきまで泣いたり怒ったりしていたはずの姉上だが、もうけろつとした顔でソファに踏ん返り返っている。まあ、こいつはこんな奴だ。小学生くらいから。たまにうざい。

「買い物だとさ」

「あー。母さんの買い物長いからなー」

買い物短い派の姉がちょっと苦々しい顔で言い、同じく短い派の俺と三津花も頷く。ガキの頃は長いこと買い物に付き合わされて、うんざりしたものだ。その経験は3人共通だ。

「あ。そーだ。双葉つてさ」

「双葉つて言うな」

姉上がいきなり何事か思いついたのか言い出した。そして、またその名で呼ぶか？ いっぺん何とかして分かせたいものだが、こいつ空手の有段者だからなあ。運動苦手な俺には力では敵うべくもない。

「あんた、もう成人だよな？」

名前で呼ばないとなるとあんならしい。まあ、人のことを貴様と

かお前とか言う俺も人のことを言えたものではないのだが。

「うむ、まあ、もう成人だが、それが何かって、まあ、聞かんでも分かるが」

俺はリビングの隣にあるダイニングキッチンに向かって歩いていく姉上を見ながら言う。

予想通り姉上は冷蔵庫からビールを取り出した。500の2本。てか昼間から酒か。

「あんたと酒を飲むのが夢だったんだよー」

お前は息子を持つ父親か？

偏屈先輩帰省中

偏屈先輩の御令姉（後書き）

ちよつと短いですね。  
次は両親です。

## 偏屈先輩の御母堂

「ところであんたさ。お土産買ってきた？」

ふとビール缶から口を離して姉上が俺を見て言った。買ってなかったら殴ると目が語っている。

俺は正直に答えた。

「……買ってない」

「この役立たずめ！」

姉上は本当に殴ろうと手を振り上げたが、俺は素早く移動して隣に座っていた三津花を盾にした。

「あんた妹を盾にするって卑怯じゃない!？」

「弟を殴る姉に言われたくないな」

「暴力はいけませんわ」

姉上が怒鳴り、俺は冷静に言い返し、三津花が口を挟む。まあ、いつもの穏やかな光景だ。これが荒れると3人が3人とも怒鳴り合ったりすることもあるので、比較的平和的な状況だと言える。

その土産なのだが、糞親父と馬鹿姉の土産はないが、愛する妹と敬うべき母上には土産がある。歴然とした差別である。否定はしない。

暫くの間、俺と姉上は酒を飲みながらテレビで放映されるあらゆる箇所に意地の悪い指摘を口汚く言ったりして、それを聞いた三津花がやんわりと俺たちを窘めたりしていた。

ところで時刻は3時頃であり、まだ仕事終わりにも酒飲みにもだいぶ早い刻限である。三津花は未だ高校生であり、高校の始業式は明日であることを俺は理解しておるので、彼女が俺の隣でオレンジジュースを飲んでいることには何の不自然もない。

しかして、既に社会人たる姉上がここにおいて俺と一緒に酒飲んでいることに自然を感じることはない。今更ながら不自然さを感じた。

「ところで、あんた仕事はどーした？」

「あんたつてあたしのこと？」

「俺は三津花を叱るとき以外はあんたとは呼ばん」

姉上に聞き返されて俺は答えた。お前とか貴様も叱るときにしか使わん。他の奴にはいつ何時でも常用する。差別であることは否定しない。

姉上は不機嫌そうに顔をしかめたが、まあ、そこは長年俺の側にいた奴だ。いつまでもこんな会話をしているは話が進まないと思っただのか溜息を吐いてから答えた。

「遅い遅ーい夏休みを貰ったのよ。貴重な有休も足してね。学生つてタダで大量に休みがあつていいわよねえ」

姉上は何だかちよいと大人ぶった風に言ってみせた。知らん知らん。休みが多いのは学生の特権だ。てか、貴様も何年か前まで学生だっただろ。

休みを満喫する俺と満喫した三津花は姉上の愚痴を聞き流したと言えは聞こえはまだ良いが、言い換えれば無視した。

「そーいえばあつー！」

1時間くらい酒宴を続け、あと2時間しても母上が帰つてこなかったら姉上の金で出前を取ろうということ俺と三津花が相談しているときなり姉上が叫んだ。

うちの姉上はいつも行動が唐突で脈絡がない人であり、こんなふうにいきなり叫び出すのはいつものことなので、俺と三津花は無視した。

「アイダホを食べてみたいとは思いませんか？」

「いいや、それよりは堅実にチーズチーズを頼むべきだ」

「バジルは？」

「それも良いな。じゃあ、チーズチーズとバジルを」

「サラダは？」

「金出してまで生野菜を食いたいとは思わん」

ピザ屋のチラシから顔を上げて頷き合う俺と三津花。うむ。決定したな。

「ちよつと」。あんたら無視すんなやー!!!」

姉上がぶりぶり怒りながら叫んだ。

渋々と姉上に顔を向ける弟妹。面倒な御仁だ。

「あんたさ」

そう言う姉上の視線は俺に向いている。まあ、姉上もあんたという呼称を三津花には使わないのだ。俺も兄馬鹿だが姉上も姉馬鹿だ。「何だ」

「この前、電話口で聞こえた女の子の声って何さね？」

「座敷童だ」

俺の即答に場がしんと静まり返る。何もテレビまで静かになることないじゃないか。まあ、そーいう場面なだけれどもさ。

「ただいまあ」

姉上からの「座敷童ってどんなの？」等の質問をテキストにあしらっているのと玄関から聞き慣れた母上の声が聞こえてきた。

受話器に手を伸ばしかけていた三津花はピザを諦め、チラシを羨ましげに眺めてから、ふつと新聞入れに放る。取っとしてもすぐに新しいのが新聞に挟まってくるからな。ちなみに、うちでは母上が料理大好き人間なので外食・出前を食う機会がとも少なく、我々3姉弟妹は外食・出前に一種憧れめいたものをこの年齢になっても抱いているのだ。まあ、母上の飯が不味いわけでは決してないのだがね。

「あらあらあらあら」

1階リビングにやって来て俺を見つけた母上はやたらと「あら」を繰り返しながら近付いてきた。

抱きついてくるな。俺にはそう分かっていて。うちの母上はそういう人であり、今までもたったの数日離れていただけでも再会の度に抱き締められてきたものだ。

この歳になって母上に抱き締められるという行為は男の俺にとっ

ては大変に恥ずかしく大変避けたい行為である。が、しかし、それを避けるという行為は中々に難しい。避けるとうちの母上は大変悲しそうな顔をしてしょんぼりと台所の隅に座り込み床に延々と「の字を書き続けるという怪奇行動に出るのだ。それは母上を敬愛する親孝行な息子たる俺からして見たくないしやらせたくない行動であり、何よりも母上の心を傷付けるような言動は何としても避けるべきというのがうちの家族の行動指針なのである。

「双葉ちゃん久し振りねー。お母さん寂しかった」

涙ぐんだ上目遣いでそう言われては「双葉ちゃん」呼ばわりされても怒鳴ることができない。俺はむっつりと無愛想にしかめ面を保ち「むー」と唸るのみだ。

「ぎゅー」

そんな台詞を口に出しながら抱きついてくるような奴がいたら即文句の2つ3つを浴びせ、それが男であれば即暴力的手段に出るような俺であるが、それが母上では別である。為す術もなくされるがままになるしかない。

勘違いされては困るといつか甚だ遺憾なのであるが、俺は別にマザコンとかではない。

現に母上とここ2年間以上隔絶されて生活してきたが特に何の問題もなく生きてこられたし、母上と電話連絡することさえ向こうからされなければこちらからは一切しなかった。

それでも母上に逆らえないのは何故なのか。この現象は姉上にも三津花にも見られる現象であるが、この原因はおそらく幼児期からずっと何か悪いことをしたり母上を拒むと泣かれたり拗ねられたりして子供心に大変困惑した経験からきているとの説が有力であるが確たる説には至っていない。今後のより深い研究が望まれる。

まあ、とにかく、俺は母上の気が済むまでハグされ続けたのだ。凄く恥ずかしいのだが、まあ、ここには事情をよく理解した姉妹しかいないのだから我慢できないものではない。

こんな姿を家族以外の人間に見られた日にゃあ俺は首を吊るね。

**偏屈先輩の御母堂（後書き）**

お母さんです。冴上家最強キャラなんです。まあ、おいおい。親父と祖父様はいずれ。

## 偏屈先輩の秘密露見す

「「いったただつきまーすっ！！」」

母上姉上が意味もなく楽しげに食事前の挨拶を叫ぶ。

「「……いただきます」」

いつも楽しそうな年長者2名を疎ましそうに見ながら俺と三津花は大人しくいただきますを済ませる。

本日の夕飯は白飯、きのこの味噌汁、焼き魚（鮭）、長芋の千切り、旨煮という純和風お袋の味的な献立だった。

うちの食事は和食が多い。何故なら、母上が和食しか作れないからである。洋食を作らせると、まあ、仰天するほど不味いか食べられないものができるとかじゃないんだが、母上の作った洋食は普通に不味かったり、極度に和風化されて「これもう和食じゃん」レベルまでいってしまうのだ。まあ、醤油、味噌、砂糖、味醂、酒なんかで作ればどーやったって不味い洋食か和食にしかならないことは自明の理である。まあ、和食が美味しいのだから大人しく和食を食っておくに限るとというのが我が家の基本方針だ。余計なことを言えばまた母上は台所の隅にうずくまって「の」の字を書くのは目に見えるいるしな。

「双葉ちゃん、久し振りのお母さんの御飯、美味しい？」

にこにここと笑いながら聞いてくる母上。世間では反抗期の青少年は母親の飯を「不味い」とか平気でほざくらしい。

しかして、全世界に対して万年反抗中な俺であるが、母上に対しては逆らえないというのはくどいほどに前述したとおり。ゆえに本当に糞不味かったとしても「不味い」などという言葉は吐くことは不可能である。せいぜいが「微妙」だ。これだってみみずのようになったスパゲッティらしき茶色い糸を食ったときの感想であり、その味は確実に「微妙」じゃなくて「糞不味かった」のだが、まあ、

母上を泣かせるわけにはいくまいので、かなり表現を柔らかくしたのだ。

よって、こーいうふうに飯が美味いかと聞かれれば、ほとんど、

「美味しい」

としか答えようがないのである。

「どれくらい美味しい？」

母上にそう返されて俺は答えに窮した。

これはたまに母上が使う用法なのだが、明らかに日本語の使い方を間違えている。美味しさの単位でどれくらいって何さ。しかし、それでも答えなければ後々面倒臭いことになる。というか母上が拗ねる。と面倒臭い。

よって、無理矢理にでも答えねばならない。

「い、1mくらい」

なんてことを咄嗟に答えてみたが、これは褒め言葉だろうか？

てか、何で俺はメートル法で答えたんだ？ ヤード・ポンド法でも困るが……。しかし、1メートルは結構長い、はず、微妙か？

いや、俺のイメージなんぞはどーでもいいのだ。この台詞に対して母上がどう反応するかだ。

「うーん……それって褒め言葉？」

聞かれた。俺が答えられるわけがない。

場を妙な沈黙が支配した。

「……褒め言葉に決まってるだろ」

沈黙が嫌なので何の根拠もなくとりあえず言ってみる。

「あ。そーなんだ。あははー。お母さんちょっとわかんなかったわ

ー

「うん、まあ、兄様のは分かり辛かったですわ」

「うんうん、分かり難かった」

「うーむ、そうか。すまん」

「……あはははー」「……」

とりあえず皆で笑ってみる。これで一件落着だ。今日も我が食卓

は平和である。糞親父もいないしな。

「ところで、双葉ちゃんはさ。向こうで御飯はどーしてるの？」

母上がちょっと真面目な顔で聞いてきた。一応、母親なのだから、息子の健康とか食生活とかが心配なのだろう。

「飯か？ まあ、普通に食っておる。最近は絹」

坂が作ることが多かったな。という台詞を吐く前に俺は即座に口を閉じた。思いつきり舌を噛んで口の中が赤く染まったが、絹坂と同居なぞしていたことを家族連中に知られるよりはマシだ。

「絹？ 絹ごし豆腐？」

母上が不思議そうな顔で首を傾げて言った。ナイス勘違いだ。

「う、うむ、絹ごし豆腐が美味いゆえよく食っている」

「あ、に、兄様？ 口から赤い液体が……」

三津花が俺の口の辺りを指差している。ふと、見るとちょうど持っていた御飯茶碗につがれた白飯がいつの間にか一部赤飯になっている。今日は何のお祝いだ？

「……鮭の血だ」

ちよつと考えてから答える。

「鮭焼けてんじゃん」

そこに入る姉上のツツコミ。鋭い。

「まあ、細かいことを気にするな」

「いや、あんた、いつつも細かいくせに都合良いときだけ大雑把になるなよ」

今日の姉上のツツコミは厳しいな。まあ、この人は勘は鋭いのだ。あと、楽しいこと（それは大抵、俺にとっては面倒臭いこと）を感じる機能にも優れている。

「あ。そーいえば、あんたの後輩に絹何たらって娘がいたよね？

何であんたのことストーリーキングしてた変な娘」

「変な娘言うな」

「昔、あんたが変な奴って言ったんじゃん」

む。確かに言った覚えがある。ていうか、雑談とはいえこいつに

余計なことを話すとは過去の俺は警戒感がないぞ。阿呆め。貴様のせいで、今、俺は大変面倒臭いことになっているぞ。

「そーだそーだ！ あんたんとこに電話したとき女の子の声が聞こえたんだった！」

1度は誤魔化せていた「絹坂の声電話混入の件」を姉上が蒸し返します。まだ忘れていなかったらしい。

「だから、あれは座敷童だと言ったただろうがっ!？」

「嘘こけ！ そんなんで騙されるのは母さんだけよ！」

「えー！ えー！ 双葉ちゃんの部屋に座敷童がいるのっ!？」

案の定、騙されている母上。この人は純だからな。

「双葉ちゃん、座敷童と一緒に住んでるのーっ!？」

「座敷童なんぞいるわけあるまいっ!？」

「兄様、どっちなんですか？」

三津花の言葉にはつと我に返る。うっかり言ってしまった。普段、そーいう存在を否定してばかりいるからな、咄嗟には本音が出るというものが。

「ほらー。いないんじゃないん。あの声の主って何よー？」

意地悪そうにニヤニヤ笑いながら追及してくる姉上。

「そ、その声は幽霊だ。幽霊」

苦しい言い逃れを謀る俺。無駄だつて分かってるけどな。

「ええーっ!？ 双葉ちゃんの部屋にお化けがー!？」

「幽霊なんぞおらん！」

「どっちですか……」

こんなやりとりを数回繰り返した後だ。もう俺は旅疲れと怒鳴り疲れで頭と口の回路がちよつとマズイ感じに繋がってしまったのだろつな。俺はうっかりと、本当にうっかりと叫んでしまった。

「その声は絹坂だっ！」

「絹坂って何もんさ？」

「俺の彼女っ……っっっ!?!?!???」

口を押さえるがもう遅い。1度口から出たものは2度と口の中に

は戻せない。言葉もそうだ。ゲロもそうだ。ゲロは何とかすれば可能だが普通は不可能と考えて良い。

「はーん」

「ほーう」

「へー」

うちの女どもは何だか思わしげな目つきで俺をじろじろと見つめるのであった。

## 偏屈先輩友人たちの来訪を受ける

俺が実家に帰ってきたのは母上に顔を見せる為である。それ以外には何の用事も無い。一切無い。ゆえに、俺はもう帰ってきて母上と顔を合わせて飯まで食ったのだから、その足で現居宅へと帰ってしまっても悪くはないわけである。さつさと帰った所で文句を言われる筋合いはないし、帰ってしまったても何の不都合も問題もないのだ。

しかし、やって来て一泊もせんと帰るのはあれだ。母上に気遣ってとかそーいうことじゃなくて、ここから駅までまた歩くとなるとやっぱりあの地獄の行軍で、それかタクシーで、どちらにせよ今から帰るたって電車はまだあるものの、自室に戻る頃には夜中だろう。それは面倒臭いし、疲れそうだ。

そんなわけで、まあ、帰るのは明日でも明後日もいいか。JRの往復切符が期限切れになる前に帰れば良しだ。

俺の部屋にはクーラーがない。

クーラーといえば車（カー）、カラーテレビと並ぶ3Cの1つであり、温暖化叫ばれる昨今の日本（北海道など一部地域除く）においては貧しい家はいざ知らずほぼ全ての家庭に備え付けられているといっても過言ではないほどに普及している家電製品である。

外面は日本家屋だが中はバリバリ現代風な我が家においても当然の如く備え付けられ、あまり使わない部屋を除くほぼ全ての部屋に完備されている。黒い金がたくさんある家なもんでな。

しかしながら、俺の部屋は長らく人がおらず、クーラーを置いておいても意味がなかった為、クーラーが撤去されている。まあ、当たり前前つちやあ当たり前の措置なのであるが、それじゃ俺が蒸し死（蟲師ではない）してしまう。

それは嫌なので、俺は仕方なく窓を開けて寝ることにした。ここ

は丘の上の恐い家なので泥棒が来ることはまずないし、網戸には防虫剤と殺虫剤をダブルスプレーしておいたし、丘の上なので車の音などもあまり聞こえてこない為、まあまあ我慢はできようものと思いい、寝たところ、まあ、確かに我慢できた。

が、しかし、翌朝のことだ。

「ふったつばつちゃーんっ！！！！」

「どうわあれが双葉ちゃんじゃあーっ！？」

いきなり外から叫ばれ、俺は布団から飛び起きながら反射的に怒鳴り返した。素晴らしい反射行動だ。脊髄偉い。

やはり、窓を開けて網戸状態だと外の音が丸聞こえだな。とか、そんなことはどーでもいい。

「今その名を呼んだのは誰だっ！？」

血走った目で窓から外を睥睨すると、そこにいたのは我が同胞ども。

「よー！」

その中で先頭にいた蓮延が片手を高く上げてや行の最後の文字を口にした。

「よじゃない！俺の名を呼ぶなど言ってるだろーが！」

「だって、い、い、ん、ちよーっじゃ語呂が悪いじゃーん。さ、え、が、みーじゃ君の家族皆だしねー」

蓮延がけたけた笑いながら言った。何がおかしいか。俺は全然おかしくない。

「てかさ。君のそのパジャマは何さー？ 桃色じゃん！」

「うるさい！人の寝巻きに文句を付けるな！これは姉上のなのだ！」

うっかり寝巻きを持ってくるのを忘れてしまったからな。俺はTシャツと下着だけで寝るような破廉恥な行為は断じて行わないのだ。しかし、桃色はないよなあ。

「それで、貴様らは何しに来たのだ？」

着替えてから1階リビングで連中に応対しながら俺は不機嫌に言った。

「おいおい、朝っぱらからそんな面すんなよ」

「貴様の顔を見ていたら尚更不機嫌になるわ」

草田に言い返してやる。

「こいつ酷くね！？ 酷くないか!？」

喚く草田。しかし、全員で無視。我々は仲良しだ。

「で？ 何の用だ？」

部屋の隅でいじいじしている草田を無視して改めて尋ねる。

「せっかく地元に戻ってきたのですから、ちよつくと高校にでも行ってみようじゃあないかという話ですよ」

薄村が相変わらずの無表情で答えた。

「ほら、委員長長つて、あんまり帰ってこないじゃない。だからさ。珍しく帰ってきたんだし、母校に行ってみてもいいんじゃない？」

七飯が人の良い笑みを浮かべて付け足す。まあ、確かに、俺は滅多にこつちには帰ってこんな。理由は散々前述したと思うが、改めて簡略に言つと、つまり、面倒臭いのと、親父が嫌だということだ。それだけ。他に理由があろうものか。

というか、まあ、それは悪くはない。悪くはないが、しかし、問題はある。

「何を言つとるんだ貴様らは。今日は高校始業式だぞ？ そんなとこに勝手に入り込んでみる。この物騒な昨今のことだ。下手すりゃ警察に通報されるぞ」

俺の言葉に連中は一瞬目を少し大きく開いて俺を見つめてから、呆れたような顔で溜息を吐いたり肩を竦めたり。何かム力つく反応だぞ。

「やれやれ、委員長も小物になつちまつたなー」

「失礼な。俺の器には貴様の器が10は余裕で入るぞ」

かなりム力つく台詞を吐きやがった草田へ即座に言い返す。奴の器が小皿で程度ならば俺の器は井以上であることは考えずとも分か

ることだ。

「おいおい、それは言い過」

「まあ、草田はそうだけど」

「そこは委員長の仰るとおりです」

「うん、まあ、そーだよな」

「僕もそう思う」

草田はちよつと傷付いた顔で仲間たちを見やった。まあ、すぐに忘れるだろう。この辺は昔から変わらんなあ。

「しかし、委員長」

薄村が口を開く。こいつは人を言いくるめるのが得意だからな。会話するときは注意しなければならない。分かっていれば心の準備とか色々とできるから、問題はないのだがな。

「昔の委員長ならば、警察だの学校当局だのを恐れることなく、学校に突入しましたでしょうに、しかし、今じゃあ、世間の常識とか秩序とやらに縛られて思い切った行動もせず、大人たちの言い分に唯々諾々と従うような臆病な小物に成り下がってしまったかと思うと私は失望の意を感じざるを得ません」

「よし。いっちょ、母校に行つてやろうではないか。警察と学校如きが恐くて人間やつていられるか」

俺は席を立ち、友人たちも当たり前のように続いた。

今、俺のことを単純な奴だなあ。と、思わなかったか？ 奇遇だな。俺もそう思っているところだ。

## 偏屈先輩母校進入中

今、俺が何をしているか？

今話のタイトルを見て、そして、前話を読んでいればまず分かるだろう。俺は諸君がそれも分からないほどの低脳だとは思っていないし、何故だか今話だけ読んでいような変わった奴がいるとも思っていない。よって、俺が今何をしているかを諸君が判断することは容易であろう。

まあ、つまり、母校に潜入しとるわけだ。

自宅で俺が述べたとおり、昨今は学校に侵入する不審者やら何やらがいたりして問題であるし、しかも、それが元卒業生だったりもするので普通に「いーれて」と言っても「だーめ」と言われるのがオチであることは言うこともない。

ゆえに真正面から馬鹿面下げて校内に押し入ろうなどということは無意味かつ無駄手間であることは目に見えている。先公に捕まっても何時間も無駄に説教を食らわせられるだけだ。

俺はこの説教というのが嫌いだ。食らうと、とにかく不味い。アボガドを生で何もつけずに食うようなものだ。あれは不味い。好きな奴がいたら怒るかもしれんが、とにかく、俺にとってアボガドは不味いの代名詞なのだ。そして、説教は時間の無駄でしかない。いくら長いとはいえそろそろ大学生の夏休みも終わりが近いのだ。先公も俺も愉快的気分には程遠い説教というイベントをやっている時間はいらないのだ。やって、誰が得をするものか。

それでは、進入を諦めるか？ 否。1度、決めたことは実行不能になるか、大変面倒臭いことになるまでは諦めずに行うべきである。

2年位前とはいえ、3年間も通い慣れた母校だ。しかも、俺たちはちよつと他の生徒諸君とは違う活動をやっており、その活動柄、学校から誰にも見られずに脱出したり、逆に進入したりという行為

を幾度となくしたことがある。ゆえに今回、進入することだった。我々にはお茶の子さいさい丸なのだ。

「だからといってこんな草っぱらを移動せんとらんなとはな。20歳過ぎて俺たちは何やってんだ？」

ぶちぶちと文句も出てしまふ。というか、俺はたまにこうやって文句を口に出さなければ堪忍袋に不満が溜まって、ただでさえ切れ易い堪忍袋の緒が切れてしまふ。切れてぎゃーぎゃーと怒鳴られるよりかは、ちよつとぶちぶち文句を呟かれている方が幾分か良いだろう。

それが分かっている我が同胞たちも俺の呟きを無視して草を掻き分けていく。

俺たちが行軍しているのは、母校の裏手にある校庭の更に奥にある小山（通称、裏山）だ。ここは少しばかりの高さがあって、何故だか知らんが高校の敷地内に存在する。

その山も含めて高校の敷地は金網フェンスで囲われているのだが、裏山の更に裏のフェンスには人が1人潜れるほどの穴が開いているのだ。

ただ、その穴は近所のばあ様の家の裏にあるので、通常の人間には分かり辛く、分かっているもばあ様の庭を通り抜けなければいけない。更には、ばあ様は昼間はよく縁側について、ぼーっとしていることが多い為、見咎められずに通行することは不可能に近い。

しかしながら、我々はばあ様を観察した結果、1時間に5分だけ意識を寝ぼけて意識を失うという法則を発見した。その隙に通り返ればばあ様が怒られずに庭を行き来することができるのだ。難しいのはばあ様が意識を失ったと判断することである。このばあ様は寝ているように見えて起きていたり、起きてるように見えて寝ていることも多く、素人にはその判断ができかねるのだ。今まで、多数の阿呆どものがその判断を見誤り、ばあ様によって学校当局に通報されてきた。このばあ様は小憎らしいことに生徒の顔を覚える記憶力だけは頑丈にできているらしいのだ。

その判断なのであるが、これはもう俺たちは幾多となくこのばあ様の顔を見つめてきた為に、ばあ様が寝ているか起きているかの判断にかけては俺の右に出るものはいないと確信を持って言えるほどの自信を持っている。

今回も俺たちは上手くばあ様が意識を失ったときを見計らってバテずに庭を通過し、フェンスの穴を潜り抜けることができた。少々、七飯が窮屈そうであったが、許容範囲内だ。和菓子を作って味見ばかりしていれば脂肪も腹に巻きつこうというものだ。

無事フェンスを潜り抜けた俺たちを待ち受けるのは、膨大な量の草どもだ。そこを俺たちは掻き分け掻き分け、裏山を迂回して移動していく。

「この糞雑草どもめ。死ね死ね。枯れ葉剤を散布してやろうか？それとも焼畑農業でもしてやろうか」

暑さと雑草の邪魔臭さに俺のイライラはかなりのものだ。

「枯葉剤は止めた方が良いでしょう……」

俺の後ろで町井が呟く。そんなことは分かっている。ベトナムで米軍の撒いた枯れ葉剤が原因と思われる云々があることは周知の事実だ。俺も存じている。

「んなこと……」

知つとるわ！ と振り返って怒鳴ろうとしたが、俺は出そうとしていた言葉を飲み込む。

「お前、大丈夫か？ 死ぬんじゃないか？」

町井の顔色は凄まじく悪く、不気味なほどだ。更に汗もたらだらと異常なほどに流れ出ている、あと10分くらいこのままにしていたら死ぬなということが小学生にだって分かりそうな状況だ。

「……これが大丈夫に見えますか？」

「いや、見えん。あと少しで校舎に着く。それまで死ぬな」

俺の言葉に彼は弱弱しく頷いた。心配だ。

「てーかさ。この裏山の草むらって夏休み中に生徒が登校して草刈りすんじゃないか？」

「ああ、そんな行事もあったね」

草田がぶちぶちと呟き、蓮延が同意する。

そういえば、そうだったな。そんな体力的に厳しく、精神的にダ  
ルイ行事もあったな。何故、夏休み中にわざわざ登校して草刈りな  
んぞをやるのかは甚だ疑問であるが、我が母校の伝統であるらしく、  
もう数十年も同じことを繰り返しているそうだ。何でも続けられ  
いというものでもあるまい。馬鹿馬鹿しい。伝統や歴史には何でも  
価値があると思ひ込んでいる阿呆が世間には多いからな。悪しき伝  
統や悪しき歴史もあり、それを革新する必要だってあるというに。

しかし、草刈りをサボるのは宜しくない。何故なら、今、俺たち  
が行軍するのに苦労しているからだ。

「生徒どもめサボりおったな。自堕落な奴らめ」

「うんうん、ちよっとしか刈られてない。山の上に至っちゃあ、多  
分、ぼうぼうのまんまだよ」

「まったく、だらしのねえ奴らだな。草刈りくらいしっかりやれよ」

「草刈りだって内申に響くでしょうに。困ったものです」

「本当だよ。お陰で僕ら苦労してるし」

「死ぬ……」

俺たちは口々に現生徒どもの自堕落さと昨今の若者のだらしなさ  
を非難しあった。そーいえば、絹坂は夏休み中俺の部屋にずっと寄  
生していたわけだから、奴も草刈りをサボった一味だということだ  
な。まったくけしからん。

「ん。あれ？ でも、僕、その草刈りに参加した記憶がないな」

七飯が呟く。

何だ。貴様もサボりだったのか。そう非難しようとして、開けか  
けた口を苦い顔で閉じる。虫が口に入ったからではない。

「……遺憾ながら俺にもないな」

「……俺もねえ」

「あたしも」

「私にあるはずがありません」

「死ぬ……」

誰も黙った。黙々と草を掻き分け掻き分け突き進む。雑草め。お前が生えるから悪いんだ。

「まあ、面倒臭いしね」

「それもそうだよな。こんなん、わざわざ参加する方がおかしいって」

「糞真面目にそんなことをする奴は若者ではないな。じじいかばばあだけだ」

「そもそも、このような炎天下に草刈りなんていう非人道的な行事がおかしいのです」

「うんうん、そのとおりだよ」

「死ぬ……」

俺たちは気分一新。このわけ分からん行事を仕組んでいる学校当局を口々に非難した。やれやれ、これだから、最近の学校はいかんだ。

「あ。町井君が死んでるよー」

「七飯。ちよつと担いでやれ。そのまま、放置してたら完璧に死ぬ」

我々は草っぱらを突き進む。高校校舎は近い。

偏屈先輩母校進入中（後書き）

ほとんどばあ様と草刈りの話ですね。  
次話くらいで久々に絹坂が出る予定です。

## 偏屈先輩とヒゲ鬼ハゲ鬼

我が母校にはハゲ鬼とヒゲ鬼がいる。

勿論、肌が赤とか青とかという何か肌の奇病にでもかかっているような色で、大阪のおばちゃん顔負けのど派手な虎のパンツを穿いて、明らかに鑄造が不可能そうな棍棒を持っていて、日本昔話で散々虐められ、時には虐殺されている仮想上の動物とも人間とも言い難い存在ではない。まあ、ここまで詳しく言わんでも分かるとは思っけどな。

我が母校におけるハゲ鬼とヒゲ鬼は鬼のように厳しい先公の生徒間での呼び名である。

呼び名通り、この2人の先公は生徒指導を担当していて、しかも、厳しく、生徒たちからは鬼と呼ばれるほどに恐れ嫌われている存在だ。まあ、悪いことをしない生徒から見ればただの国語と社会の教諭なのだがね。

ただ、学校当局未公認組織活動を行っていた我々から見れば明確な敵どころか、それよりも悪い。まさに天敵以外の何ものでもない。我が組織の構成員たちは幾度となくこのハゲ鬼とヒゲ鬼に捕らえられ、怖気だつような厳しい懲罰を科されてきた。

そして、それは俺たちも例外ではなく、俺などは日本国憲法を口から吐き出しそうになるくらいまで書き写しをやらされたのだ。そこまでやっても日本国憲法の前文すら暗記していない俺の精神は大したものだ。

俺たちは在学中の殆どの期間で、このハゲ鬼、ヒゲ鬼との闘争劇（というよりも俺たちから見れば逃走劇。彼らから見れば追走劇）を繰り返した。

だが、その彼らとの戦いも今となってはよき思い出……

にしていたのが、いけなかった。

「お前らは卒業しても、全然変わらねーな」  
ぶすつとした顔で椅子に座る俺の目の前でヒゲ鬼が呆れ顔で言った。

ヒゲ鬼は名の通り口ヒゲを蓄えた中年教諭で、確か担当教科は政治・経済だったはずだ。

こいつは、本当にお前教諭かって程に不真面目でいい加減な男だ。以前、授業中にこいつが意味もなく煙草の話が始めたのだが、何でもヒゲ鬼は禁煙しようかと考えたらしいのだ。まあ、極めてどーでもええ話なので、我々生徒たちはぼんやりと聞いていた。

そこで、そいつは言いやがったのだ。

「二（禁煙補助剤の商品名）ツトってあるじゃん？ あのガムみたいなやつな？ あれ噛んでたわけよ」

へー。

「それ噛みながら煙草吸うと、こんれが美味いんだわあ！」

貴様、何の為に禁煙補助剤噛んでるんだっ！？ と、俺含め生徒たちは思いつきりツッコミを入れた。

そんな奴。どんな奴だよっていう感じだが、まあ、こんな奴なんだ。

こないいい加減な男がどーして我々の天敵になりえたのかというと、それは、こやつ先公らからぬ勘と何かしらの経験から、尽く我々の行動を読み取り、先回り、先手を打ってくるのだ。たぶん、こいつは学生時代にかんりの悪ガキだったに違いない。その経験が今生かされているのだろう。忌々しい。

「双葉。そう恐い目で見るとなよ」

「その名で呼ぶな！」

「おいおい、まだ、名前に拘ってんのか？ やっぱ変わんねーな」  
ヒゲ鬼は楽しげにげらげらと笑った。おのれ。首を絞めてやろうか。

さて、ところで、何故、俺がこのヒゲ鬼とムカつく会話をしてい

るかといえ、まあ、諸君の大概は分かるであろう。つまり、うちの母校に侵入する作戦において、草っぱらを抜けた後、ふらふらと校庭を移動していると、校内を巡回中だったヒゲ鬼ハゲ鬼にあっさり見咎められてしまったのだ。長らく、こんなことをしていなかったから俺たち全員揃いも揃って勘が鈍ったのかもしれない。嫌だ嫌だ。歳はとりたくないものだ。

さすがに、見つかった後は、過去の記憶が戻った俺たちは素早く散開したものの、運動能力の低い俺と七飯、死に掛けていた町井はうっかり捕まってしまったのだ。

今いるのはかなり見慣れた生徒指導室で、ハゲ鬼は逃げ出した草田と蓮延と薄村を追走している。やれやれ、暑い中、御苦労なことだ。

俺と共に捕まった七飯と町井は熱中症だか熱射病だか知らんが保健室で寝込んでいる。

「おい、ヒゲ。久し振りに帰ってきた元教え子に麦茶の1つも出せんのか？」

「相変わらず無駄に偉そうな奴だな」。腕組んでるし、足組んでるし。お前、何様のつもりだよ」

ヒゲ鬼が呆れ顔で言った。

俺はふんと鼻息荒く不機嫌にヒゲ鬼から顔を背ける。こいつ、いつかぎやふんと言わせねば気に入らん。

「お前もなあ、普通に頭良いんだし、家柄も良いんだし、常識だつてあんだから、もうちょっと上手く生きようとか思わんのか？」

ヒゲ鬼は何故だか恥ずかしいことを言い出した。まあ、当然、それは真実であり、こいつの言うとおり普通に頭も良いし、家柄も良いし、常識もあるがね。だが、こいつが言うような上手い生活をする気はない。

「だって、そんなことをしてもつまらんじゃないか」

俺がけるつとした顔で答えると、ヒゲ鬼はちよつと怒った顔で言った。

「……お前、人生舐めてるだろ」  
「」名答。

このヒゲ鬼は何でか俺がお気に入りに入りらしく、在学中はよくよく俺に生活態度を改めるだのきちんと勉強しろだの授業サボるなと口煩く言ってきたものだ。こいつ自身はいい加減なくせに。まあ、こいつはよく「俺を反面教師にしろ」と言っていたからな。本当にそのまんまの意味で、反面教師であるな。

「ところで、お前、彼女できたらしいな」  
「ヴェツ！？」

いきなりヒゲ鬼が口にした言葉に、俺の喉から思わずとてつもなく変な声が飛び出した。

「な、何を言ってるんだ？」

「お前が何を言ってるんだだよ。さっきの声は何だよ」

「ヒゲ。そこは気にするな。それよりもだ。その前の彼女云々つてのは何だ」

俺は険しい顔で追求する。新しくできた彼女というのは、まあ、一応、絹坂以外にはないのであり、絹坂をそう彼女と表現してやっても問題はないというか、まあ、世間的に見ればそうかもしれないな。という感じであつて。ああ、くそ、頭が混乱しているぞ！？

「絹坂が言ってたんだ。お前の彼女になれたつて」

そーいえば、ヒゲは今、絹坂のクラスの担任だそうだ。2人に接点があつて当然である。で、あるが、

「何故に、あいつは担任の先公にそんな男女交際のことを報告するんじゃない？ 頭おかしいんじゃないかっ！？」

思わず椅子から立ち上がって怒鳴る俺にヒゲ鬼が追い討ちを食らわせるかの如くに言った。

「いや、クラス中というかもう学校中に言ってたな。朝から浮かれっ放しよ。ちつとは一人身の俺のことも考えてくれよ」

ヒゲは独身である。まあ、以前は結婚していたらしいが、離婚したらしい。先公でも家庭が上手くいかんこともある。しかし、そん

なことはどーでもいい。少なくとも今はすんごくどーでもいい。

「あの糞阿呆野郎めっ！ 殴らんと気が済まんっ！」

「おい、双葉、落ち着け」

「双葉言うな！！」

ヒゲに怒鳴ってから、俺は生徒指導室を飛び出した。油断していたらしいヒゲ鬼は出遅れた。

「こら！ ちつと待て！」

ヒゲが背後で怒鳴りながら追ってくるが、しかし、怒りと恥ずかしさに体中を熱く赤くした俺の敵ではない。俺は自分でも驚くぐらいの速さで廊下を駆け抜けたのだった。

偏屈先輩帰省中

偏屈先輩とヒゲ鬼ハゲ鬼（後書き）

明日も更新する予定です。  
更新できる予定です。

## 偏屈先輩始業式に乱入す

「絹坂あーっつっ!!!」

講堂のドアを蹴り上げるようにして開けると、無数の視線が一斉に俺に集中した。

そりゃそうだ。大人しく眠たく始業式をだらだらやっていたら、いきなり、ドアがぶち開けられて怒声が響けば、注目だってするだろう。

「君！何をやっているんだ!？」

「うちの生徒じゃないぞ！不審者か!？」

「あなた、冴上君じゃない!？」

「卒業生がここで何やってるんだ!？」

わらわらと先公どもが走り寄ってくる。

「総員！先公どもを足止めろ!！」

暫し呆然としていた生徒たちの一割ほどがはっと身体を震わせる。「現執行委員は指揮を執れ！講堂を占拠せよ!！」

続けて怒鳴り付けると、幾人もの生徒諸士が、今まで綺麗に整列していた列から飛び出し、先公どもの行動を妨害し、押さえつける。彼らは身元が判明しないようにイスラム過激派の戦士のように布切れを顔に巻き付けたり、マスクをしたり、サングラスを掛けたり、中には何処から取り出したのかモップやらトイレ掃除用のゴム手袋（これが地味にかなりの威力を発揮するのだ）なんかを装備している者もいる。まるで、強盗団だ。

「うわっ！お前たち、何のつもりだ!？」

「こら、止めんか！縄跳びの縄で縛るな！何で亀甲縛りができるんだっ!？」

「そ、そのトイレ掃除用のバケツをどうするつもりだ!？ぎゃー!！」

先公どもは我が組織の忠実なる構成員たちによりほぼ全員が拘束

され、一部残虐な仕打ち（亀甲縛りされたり、トイレ掃除用バケツを頭にかぶせられたり、理科室のアンモニアの匂いを嗅がされたり）を受けているが、まあ、その辺は現執行委員会の指揮に任せよう。

「おいおい！　こら！　双葉！」

「双葉言っつなっ！」

咄嗟に怒鳴り返す。無礼にも俺の名を呼び捨てやがったのはしごとく追いやってきたヒゲであった。

「誰か！　トイレブラシで奴のヒゲを整えてやれ！」

「イエッサー！」

「うわあっ！　寄るな寄るな！」

しかしながら、我が組織の勇猛なる同志諸君がいる中じゃあ、ヒゲ鬼とはいえ敵には値せん。ヒゲのことは同志諸君に任せる。

俺はそんなことにかまけている暇はないのだ。

「おい、絹坂は何処だ！？」

とりあえず、近場にいた構成員に尋ねる。

「絹：書記長ですか？　書記長なら、あっちに」

そーいえば、奴は現書記長だったな。

「ところで、この人誰だ？　反射的に命令に従っちまったけど」

「さあ？　OBじゃねえか？」

「お前ら！　あの人を知らねーのか！？」

「あ、先輩は知ってるんですか？」

「ああ、先代の執行委員長だ。うちの組織を2倍の大きさに拡大させ、生徒会を傀儡に仕立て、校則に大幅に改訂しと様々な行動をして、うちの学校を誰からも分からんように大変革させた人だぞ！」

俺の背後で何やら会話がなされているが、俺はそんな大層なことをしたかなあ？　まあ、やったかもな。うむうむ、俺は確実にこの高校の歴史に名を刻んでいるようだな。

いや、そんな感慨深くうんうん頷いている場合ではないのだ。絹坂を探さねばならぬ。そして、殴り飛ばさんとならぬ。

「どーも、久し振りです」

俺に話しかけたのは背が高く長い髪の眼鏡の女生徒だ。俺が後任の執行委員長に推薦した奴だ。確か、彼女は絹坂の親友であったはずだ。

「コロと付き合うことにしたらいいですね」

そして、やっぱりこいつも知っていやがる。この学校で絹坂に最も近い人物なのだから、ヒゲが知っているのならば、彼女が知っているのは当然であろう。ちなみに、コロとは、絹坂の友人たちの間での絹坂のあだ名だ。「衣」から「も」を取ったのだな。

「その糞阿呆な噂を撒き散らしている絹坂を知らんか？」

「あー、その辺にいます、思いますけどー」

「うわーい！　せーんーぱーいー！！」

と、俺たちが話していると、探している主ののん気な声が聞こえてきた。腹が立つほどにのん気な声だ。

「ぐふうっ」

声のする方に顔を向けると同時に、絹坂が俺に衝突してきた。肋骨らほねにがつつと絹坂の頭蓋骨がぶつかってきた。しかも、頭をぐりぐりしてくる。そこには、少し前に絹坂に包丁で刺されてしまった傷もあるのだ。痛い痛い。

「先輩先輩ー。どーしたんですかー？　何で、ここにー？　はっ！　？　まさか、私に会いに来てくれたんですかー？　もうっ！　先輩から来なくても、こっちから行きますよー！　学校終わるまで待てなかつたんですかー？　もうもうっ！　先輩ったらあ！　ちゅーしちやいますー！」

俺に抱きついてわけのわからんことをほざきまくる絹坂。お前は、そうやって突撃してきて、俺を交通事故に遭わせたのを忘れたわけじゃああるまいな？　あと、少し、お前に気付くのが遅れていたら俺は体育館のワックス塗られた床を滑るように吹き飛ぶところだったよ。

「絹坂ー？」

俺は肋骨と脇腹辺りの痛みで顔をしかめながら呼びかける。

「何ですかー？」

のんきに応じる絹坂の顔を見つめながら、俺は怒鳴った。

「こおんの糞馬鹿めーっ！！」

「うぎやーっ!?!」

怒鳴ると同時に思いっきり絹坂の腹を蹴っ飛ばす。

「ドメスティックバイオレンスだー！」

体育館の中の誰かが叫んだ。

## 偏屈先輩と厄病女神の関係

ところで、俺という人間は思考が古風であり、外来のものが苦手なせいかな、カタカナ語なんかを言われると、その解説に少々時間を有する。

だから、ドメスティックバイオレンスと言われてもピンとこなかった。少し首を傾げていると思いついた。ニュースでやってた。確か家庭内暴力とかがって訳されていたはずだ。配偶者を攻撃したりするやつだ。ん？ ということは、つまり、絹坂は俺の配偶者もしくはそれに近い存在？

「なにがドメスティックバイオレンスかー!? こいつは俺の嫁さんかっ!？」

俺が声のした方に怒鳴ると、そこら辺の生徒全員が「ひいっ!」とビクついた。臆病者どもめ。

「うふ。私、DV受けちゃってますー」

床に寝そべりながら絹坂が気持ち悪い笑みを浮かべて呟いた。そのヤバイ感じの笑みと台詞は止める。

「あら、騒がしい人がいらっしやると思ったら、兄様じゃありませんか」

「誰が騒がしい人だ。誰が」

「兄様が」

俺を指差す三津花。ああ、そーいえば、こいつもこの高校の現役生徒であつたな。あと、指差すな。

「あれ? 先輩、お知り合いですか?」

床に寝転がったまま絹坂が尋ねる。こいつは俺の妹が同学年にしていることを知っていないらしい。同じ苗字なんだから、普通気付くだろう。

俺が呆れ顔で見ていると、絹坂はじとつとした目で俺を睨んだ。てか、ええ加減、立ったらどうだろうか?

「まさか、浮気相手ですか？」

「ええ、そのまさかですわ」

俺が答える前に三津花がしれっと答えた。吃驚した顔をする絹坂。

「そ、そんなぁ……………」

頂垂れる絹坂。

「んなわけあるかつ！ 貴様は何を言っておるんだ!？」

「いや、面白いかなと思ひまして」

俺が怒鳴っても三津花は平然とした顔で答える。

「全然面白くない。全く面白くない」

「そんな2回も言わなくても」

俺と三津花が真顔で話し合っている間に、絹坂はゆらりと立ち上がった。

「くぅ…………先輩が浮気を……………」

「だから違う言つとるだろうがあつ!」

しかし、絹坂は耳を貸さない。1人で勝手にどんどん変な方向へと走っていく。

「私が少し目を離れた途端、浮気なんて…………。先輩ただけ女好きなんですかつ!？」

「無礼なことをほざくなつ!？ 舌引っこ抜くぞ!？」

「先輩はもう私に飽きてしまつたんですね…………。よよよ……………」

絹坂は再び床に座り込んで、制服の袖を目に当てて泣き真似をする。真似に決まっていよう。よよよなんていう泣き声を出す奴が実際にいたら見てみたいもんだ。

「よよよじゃねえつ！ とんでもないことを言つなつ！ 周りの連中が引いてるではないかつ！ 貴様らもそんな浮気して女泣かせる鬼畜みたいな目で俺を見るなつ!」

いつの間にやら辺りの生徒たちは俺を非難するような目で見ていた。遺憾だ。大いに遺憾だ。

「先輩は私の何が不満なんですか!。今まで、ずっと何をされてもくっついてきたのに!。何を言われても従ってきたのに!」

「嘘をこけっ！ 貴様、いい加減にしろ！ お前がいつ俺に従順だったというのだ！？ とにかく、立て！」

とりあえず座り込んでいる絹坂を怒鳴り続けるのも外聞が悪いかと思ひ、腕を掴んで立たせることにした。

「きやあ。何する気ですかー」

絹坂は怯えたような表情で言った。分かった。これ演技だ。しかし、演技だと分かってても、というか、演技だと分かったら余計に俺の頭には血が昇るのであった。俺は短気な人なのだ。もう知ってる？ だらうな。

「きやあじゃねえっ！ 何もせんわっ！ この糞馬鹿めっ！」

「ぎやあ！ 叩かないで下さい！ ぶたないでー！」

「待て！ この阿呆め！ 10発くらい殴らせろ！」

その後、俺と絹坂は講堂の中で追いかけてこを始めた。生徒たちは啞然とした、何割かは呆れた顔で見ている、俺はただひたすらに不機嫌かつ恥ずかしい上にムカついでしょうがなく、絹坂は何だかとても楽しそうだった。それが余計に俺を腹立たしくさせ、更に呆れての視線が増え、余計に俺は不機嫌になり、ちよろちよると逃げ回る絹坂を捕まえようと躍起になり、しかし、何だか絹坂は楽しげに逃げ回り、余計に俺の気分は劣悪になりと、悪循環極まりない行為を10分くらい続けた。結果、俺と絹坂の体力及び俺の精神的エネルギーを大いに磨り減らすこととなった。何とも不毛なことだ。

「この馬鹿！ 貴様のせいだとんだ恥をかいた！」

「ぎやわわー！ 頭を握り潰さないでー！」

絹坂は悲鳴を上げるが、無視。

「きーさーまーはー、極めて余計なことを学校中に広めた上に、今度は人を浮気者の鬼畜扱いしおってー！ 許さん！ 許さんぞー！ 腹立たしさと羞恥の気持ち、絹坂の頭を掴む指に更なる力を込めさせる。」

「うぎやー！ ず、頭蓋骨がー！ て、浮気者じゃないんですかー？」

「違う言うとするだろうが！ こいつは妹だ！ 名字一緒だろ！？」

俺が怒鳴ると、彼女はきよとんとした顔で三津花を見つめる。

「い、もつと、なんですか？」

「ええ」

聞かれて三津花は頷く。

「知らなかったのか？ 冴上なんぞ珍しい名字なんだから名字見れば分かるだろ」

俺が知る限り、我が一族以外に冴上なんていう変てこな名字の奴は知らん。見たことも聞いたこともない。まあ、神社とか貴族とかの関係の家系の名字つてのは変わったもんが多いからな。

「うーん、だって、私、彼女の名字知りませんでしたもん」

絹坂は真顔で答える。

「は？ だって、お前ら、同学年だろ？」

「それどころか去年同じクラスでしたわ？」

「こいつは元クラスメイトの名字も知らんのか？」

「私、クラスメイトの8割の名前は知りませんよ？」

絹坂が真顔で言い放った。

「こいつ、クラスの人間関係どうしてんだ？ いじめられてるのか？」

「何だか、心配になってしまっ」

「コ口はクラスのこととかには何の興味も持たないんですよ。彼女が興味持ってるのは、例の秘密組織活動と先輩のことだけみたいなんですよ」

現委員長が俺の横で言った。そんなことで複雑で繊細な高校生活を生きていけるのか？ いじめられたりしないのか？

「せーんぱーい。そんな心配そんな顔しなくても大丈夫ですよーん」  
むっつり黙り込んでいると、絹坂がべたつと抱きついてきた。

「こら！ 離れる！ こんな衆人環視の中で何をやってるか！？」  
怒鳴っても絹坂はにっこにっこ嬉しげに笑って更にくっついてくる。

「私は先輩と一緒にいれれば他はなーんにもいらんですよー？」

そんな当たり前なこと今更知ったんですかー？」

「ぐ……」

俺は言葉に詰まった。そんなことを言われては恥ずかしくて何も言えんじゃないか。

「このバカツプル」

三津花がぼそりと小声で呟いた。聞こえているぞ。

「うん、愛は美しいね。元委員長と現書記長の愛に拍手ー」

現委員長がせんでもいいのに拍手を始めた。我が組織においては、幹部が行動すれば、構成員は右に倣えなまとなっている。よって、うちの組織の連中がせんでもいい拍手を始めた。それに釣られて他の生徒どもも拍手し始めた。何だか、どいつもこいつもええ感じの笑みを浮かべている。まるで俺たちを祝福するかのよう。だが、何故か馬鹿にされているようにも感じる。恥ずかしいこと極まりない。顔が熱い。穴があつたら飛び込みたい。

「いやー、どーもどーも」

絹坂はへらへら笑いながら手を振っている。そして、何だか幸せそうな顔で言った。

「何だか、結婚式みたいですね？」

「くっ………この馬鹿あつ！」

俺はそう叫ぶしかなかった。何だか恥ずかしさで泣きそうだ。

**偏屈先輩と厄病女神の関係（後書き）**

だいぶ久し振りの更新です。  
相変わらず話の流れは遅いです。

## 偏屈先輩とハゲ鬼ヒゲ鬼

「おやおや、あなたたちは一体何をしているんですか？ 犬も食わない痴話喧嘩ですか？」

「誰が痴話喧嘩してるバカップルかつ！？」

「いや、そこまで言ってますから」

薄村は手を振りながら言った。

彼女を見て、俺は黙り込む。いや、俺だけじゃない。講堂にいる全ての者、特に、我が組織の連中が沈黙する。

「……………お前、よくそんな格好で喋れるな」

「慣れてますから」

薄村は悟ったような顔で言った。

その彼女は、小脇に抱えられていた。反対にはぐつたりした蓮延。2人がそれぞれ両脇に抱えられている。

我らが同胞2名を両脇に抱えているのは、我らが組織最大にして最強の敵、いや、不倶戴天の天敵だ。2m近い身長に太い腕、胴、足。大きな鼻に、つぶらな瞳、赤ら顔で禿げ上がった頭。こいつこそ、我らが最大の敵、ハゲ鬼だ。巨神兵、弁慶、日本最強の国語教師などなど様々な名前で恐れられる人物だ。

まあ、実際は、ただの現代文教諭にして生徒指導担当なのだが、恐るべきは、その身体能力だ。機動性には欠けるものの、1度狙った獲物は例え1時間でも2時間でも走って追跡し続ける持久力を持ち、また、その巨大な身体に相応しく、並みの生徒では10人が1度にかかっても倒せないほどの丈夫さを兼ね備え、更には、男子生徒3人を軽々と担ぎ上げる力まで持っている。

ヒゲ鬼が我々の行動を読み、ハゲ鬼が出勤して我らを駆逐する。

この黄金コンビによって我々の計画は大いに阻害された。この2人のうちどちらか片方でも欠けていれば、今頃は、この高校の生徒の半数は例の組織の構成員になっていただろうに。

いや、今は、過去のことを悔やんでいる場合ではない。奴が来てしまったのだ。奴が。ハゲ鬼の野郎が。

「さーえーがーみー」

ハゲ鬼は低い声で唸るように呼びかけながら、ずんと足を踏み出す。その1歩だけで俺、絹坂、現執行委員長含め組織の者全員が後ずさる。

「お前は、まーた、なんちゆうことを……」

ハゲ鬼の目が怒りにめらめらと燃えている。いつも赤味がかっている顔が更に真っ赤になっている。血管が今にもはちきれそうだ。

ん。というか、薄村と蓮延はそこにいるが、もう1人はどうしたのか？

「おい、草田はどーした？」

「草田はプールに沈んでいる」

ハゲ鬼が平然と答えた。それは大丈夫なのか？ 下手すりゃ溺死するんじゃない？ でも、まあ、草田だし、大丈夫か。

「さーて、次はお前の番だ」

ハゲ鬼はにやりと気味悪く笑いながらこちらににじり寄る。俺の番って？ つまり、草田と仲良くプールにどぼんか？ それは断固拒否する。

しかしながら、こいつを武力で排除することは至難どころか不可能に近い。ならば、説得である。人間の口は話し合う為だけじゃないけど、一応、口が存在理由の1つではある。

「待て。話し合おうではないか。ハゲ。俺はここにプールしに来たわけではない」

俺は5・15事件で暗殺された犬養元首相のような心持で語りかけた。

「お前、本気で話し合う気あんのか？ 話し合う相手をハゲって言うておいて穏便な話し合いができると思ってるのか？」

「あつ……。すまん、つい」

「つい、だあ？」

説得失敗。ハゲ鬼は額の青筋をびくびくさせながら更に近付いて来る。それと同時にじりじりと後退していく俺たち。

「誰か？ 奴を止められる者はいないか？ 志願者は2階級特進とする」

俺の呼びかけに応じる者はいない。ちなみに、2階級特進というのは、殉職に伴う昇進と考えて間違いないではない。

とにかく、我々は万事休す事態と相成った。ここは偉大なる戦術家孫子に倣うべきである。つまり、三十六計逃げるに如かず。

「総員っ！ 退却っっ！」

「待たんかあっ！」

我々は蜘蛛の子を散らすように逃亡したのであった。背後から聞こえるハゲの声からなるたけ遠くへ遠くへと。

「ここまで逃げれば大丈夫であろう」

「そーですねー。しかし、ハゲ鬼は恐いですねー」

「うむ、相変わらずだ。昔から全く変わらん。40代とは思えん」

「ですよー。絶対年齢詐称してますよー」

「いや、それはないだろ。アイドルじゃねーんだから」

「ここまで普通に会話してから絹坂を見る。」

「てか、お前、付いてきたのか？」

「ええ、付いてきましたー。先輩のいる所ならば、例えチャレンジヤー海溝でも、チヨモランマでも付いて参りますよー」

俺がそんな所に至ることは絶対ないだろう。てか、こいつはストーカーみたいな奴だな。まあ、そんなことには前々から気付いている。いつ実家が奴にバレるかビクビクだ。

「しかし、先輩も妙な所に隠れますねえ」

「ここは素晴らしい隠れ家なのだ。少々臭うのがかなり傷だが」

「ええ、かなり臭いますね」

絹坂はやらなきやいいのに、すんすんと鼻を動かして、

「うえー。くさっ」

と、何かを吐きそうな顔で言う。

「おいおい、吐くなよ!? こんな狭い所で吐いたら地獄だぞ!」

こんな狭い空間で吐かれてはただでさえ酷い汗の臭いにゲロに臭いがミックスされ、絶対に俺はもらってしまっただろう。もらってのは、当然、プレゼントとかではないことは言うまでもない。

「分かってますよ。それに、今吐いたら先輩の服が滅茶苦茶に……」

「こんだけ密着してるんだから、お前も同じ目に遭うな」

狭い空間ゆえ致し方なく俺と絹坂はかなり密着している。俺の胸に絹坂が抱きつくような形だ。かなり不本意であるが、いつの間にやらくっ付いていたのだから、致し方ない。てか、何で、俺は絹坂がこんなに堂々とくっ付いていて気付けていなかったんだ? それほど、絹坂の存在が俺にとって自然な存在となっているということか。何ということだ……。

「……………ふぎゅ」

「む。何だ。いきなり」

絹坂はいきなり俺の胸に顔をくっつけた。

「おい」

「むふふ。先輩の臭いが……」

「止めんか! 変態!」

「むがうつ!」

絹坂の変態的な行為を止めるべく絹坂のほっぺを両手で掴んで顔を引っぺがす。

「まったく……」

「ああー」

「……………」

ふにふに。

「むやあー」

ぶにぶに。

「にあうー」

やっぱり絹坂のほっぺをぶにぶにするのは気持ちよいなあ。

「先輩ー？」

「何だー？」

「甘えてええっすかー？」

薄暗いながらも僅かに明かりが差し込んでおり、絹坂の顔を見ることはできる。きらきらした感じの目で俺を見つめる。言葉だけでなく目でも甘えたいと言っている。

「むー。まあ、悪くはない」

「えへへー。じゃあ、ちゅーして下さい」

絹坂はそんなことを言っつて、顎を上げ、目を瞑りながら顔を寄せてくる。

「むー。んな恥ずかしいこと……」

「誰も見てないんですから、大丈夫でしょう？」

「……キスだけだぞ？」

「大人なやつで」

「……致し方あるまい」

しょうがないので、俺は絹坂に大人なキスをしてやる。そんな描写は必要なかろう。ないっつたらないんだ！ あるわけがねえ！ てか、そんな描写なんぞできるかつ！ 俺一人称では絶対に無理だ！ 三人称でも勘弁だがな！

と、そんな馬鹿な真似をしていると、ドアが開く音がした。

「ん。誰か来たみたいですよ？」

絹坂は唇を離して囁く。その顔には不満の色がありありと見受けられる。

「しかし、ここはバレまい。何といつても俺自慢の隠れ家だ。ここに隠れるようになってから2年の間、見つからなかった。考えてもみる。まさか、教員更衣室のヒゲのロッカーの中に隠れる奴がいよつとは思っまい」

「ですよー。先生から逃げる奴が先生のロッカーの中に逃げ込むなんて思いませんよー」

俺と絹坂はにやにやと悪い笑みを浮かべながら囁き合う。

「だーかーらー。ね？」

絹坂は催促するように再び顔を寄せる。まったく、仕方のない奴だ。

再び唇を合わせた時、ふと、俺は思い出した。

そーいや、ここに隠れるようになってから2年間見つからなかったが、2年と3日くらいの日に見つかったんだ。いやー、うっかり、忘れてたなー。

「で、お前らはバツイチ独身の寂しいー人身の俺のロッカーで何をやってんだろーなー？ んー？ 俺はお前らを殺せばいいのーかー？」  
「いやー。バツイチ独身ー人身40代男の僻<sup>ひが</sup>みは恐ろしいねー。」

## 偏屈先輩とハゲ鬼ヒゲ鬼（後書き）

先輩はツンデレな感じで書いているのですが、今までかなりツンツンしていたので、

ちよつとデレを出してみました。というか、勝手に出てきました。恥ずかしい奴らですね！ 忌々しいっ！

## 偏屈先輩の彼女ははずけずけと

結果。俺たちのうち一割くらいが教師どもに拘束され、散々に暴力的制裁を受けた上、校庭100周ランニングの刑に処された。逃げようと思えば逃げれる。しかし、そうすると、財布と携帯がトイシに流される運命にある。ああ、忌々しい。忌々しい。

「あー。先輩ー。私、もうダメですー」

「奇遇だな。俺もだ」

「あーら、私もです」

「私も無理ー」

「俺も無理ー」

「僕も」

「オイラも」

その後も続々と賛同者が現れ、全員もう無理という点で一致した。「てなわけで、我々はもう死んでしまふ。これ以上、炎天下の中を走らせてみる。俺は熱射病になって死ぬ」

俺は代表してヒゲとハゲに言上した。

「死ぬって……死なねーよ」

「いや。死ぬ。死んでやる。死んで貴様を末代まで呪ってやる。例え貴様が何度輪廻転生しようともその度に貴様の前に現れて呪い尽くしてやる。呪う呪う呪う呪う」

「大袈裟な奴だな……。てか、お前は男に棄てられた女の悪霊かよ。しかも、お前、結構元気だろ？」

俺の色んなものを込めた言葉に、ヒゲは呆れ果てたといった感じの顔でそう応じた。俺の死をも覚悟した本気の言葉に対する返答がこれか？ 何という無礼。何という仕打ち。これで、俺が1人もんだったならば、もはや非行か自殺しか道は残されていないが、生憎と俺には仲間というよりも配下の者どもがいた。

「死んでやるー」「死んでやるー」「呪ってやるー」「呪うー」「

天国で大谷義継に弟子入りするー」「呪い殺すー」「てか、死ぬ」  
「死んでくれ」

口々に俺に同調する我が配下たち。うむ、宜しい。  
「だあーっ！ うるせえっ！」

ヒゲが怒鳴った。こいつは結構短気だからなあ。人にものを教える仕事に向いているとは思えんな。

とりあえず、ヒゲの怒声に全員が黙り込む。さあ、ヒゲよ。次はどうする？ まだ校庭周遊奇行を俺たちに満喫させる気だというならば、我々は玉砕覚悟でためーに向かつてやるぞ。ハゲにぼっこほこにやられながらも、貴様のヒゲを産毛の一本に至るまで抜き去ってくれるわ。

「ったく、しゃーねえな。校庭ランニングはこれまで」  
助かった。あと62周しないで済んだらしい。やれやれだ。

我々はぐつたりとその場に座り込む。ここでまたやっぱランニングと言われたら俺たちは暴徒と化すこと間違いない。その怒りの前にはいかにハゲ鬼でも敵うまい。機動隊一個中隊は呼ばねーと失礼つてもんだぜ。

しかし、ただで帰してくれるほど連中も甘つちよろくはない。校庭ランニングの代償として我々は反省文100枚の提出という殆どもうこれ不可能の域じゃね？ ていうか、紙資源の無駄遣い以外のなにもんでもねーだろ。な懲罰を課せられることになった。ま、そんなのは関係ないわな。先公どもは耄碌もろくしているのか、俺たちが既に卒業していることをうつかり忘れていらしい。馬鹿め。

「ていうかさ。俺たち、何で校庭走らされたり、反省文100枚提出したりしないといけなくなったんだっけ？」

「そりゃ、始業式を占拠して、あれだけ先公に乱暴狼藉を働いたらこんくらの罰あるだろ。誰も退学・停学にならなかったのが奇跡だ」

確かに奇跡だ。まあ、扇動者たる俺は既に卒業しているから停学も退学も関係ないのだがね。ザマミロ。

「じゃあさ。俺たち、何の為に始業式占拠して、先公たちに乱暴狼藉を働いたんだ？」

「そりゃ先代委員長が命令したから……」

いくつかの視線が俺に突き刺さる。うーん。困ったな！

「じゃ、俺は帰る」

俺はそれだけ言っただッシュでその場を離れた。すまんな。後輩ども。大人っていうのは汚いもんなんだよ。

「あー。暑い」

「うん、暑い」

「てか、お前は、また普通にさりげなく俺の隣にいるんだな」

「言っただじゃないですかー？ 私は先輩のいる所の側に常にいるのですよー？」

平然とストーカー発言をする絹坂。俺はこいつをこのまま放置しておいていいのだろうか？ ストーカー行為が激化する前に警察とかに言わんでも良いのだろうか？

そんなことをちよつと本気で考えながら歩いていると、

ぷつぷつと音がした。車のクラクション音だ。俺はこの音が嫌いだ。特に、俺自身に当って鳴らされると車を蹴っ飛ばして傷をつけ、フロントガラスに石をぶつけて蜘蛛の巣模様を作ってやりたくなる。イラついて振り向くと、ちよつと見慣れた赤い軽がゆっくりと近付いてきた。

隣について運転席側の窓が開く、

「よっほー」

「何処の無礼者かと思えば、姉上か」

姉上は運転席から阿呆極まりない挨拶をかましてきた。かっこつけてグラサンなんぞをしておる。

「今、帰り？ 学校どうだった？」

「最悪じゃ。あのヒゲとハゲのせいで俺の今日の幸せポイントは50は下がった」

「幸せポイントって何さ？ てか、何、平然と乗り込んできてんのよ？」

俺は助手席に収まって、きちんとシートベルトを締める。シートベルト締めなかったなんていう下らん理由で死んでは堪らんからな。「うるさい。さつさと車を出せ」

「あんだ凄い偉そうねー。勝手にクーラー全開にしてるし」  
姉上はなんだか不満そうに口を尖らせながらも車を出した。

「で？ これから3人でドライブでもする？」

「いや、いい。さつさと帰る。家に直行せよ」

彼女の問いに俺は即答する。もう俺の幸せポイントは残り少ないのだ。家に帰ってアイス食ってごろごろしないと死んじゃう。まあ、当然、死にはせんが。まあ、とにかく、さつさと帰りたいのだ。

「ええー。つまんなーい」

「つまなくて結構」

姉上は尚も不満そうであったが、渋々と車を自宅へと走らせた。

「あー、今、戻った」

「ただいまー。双葉と彼女連れてきたー」

「お邪魔しますー」

俺の後ろで姉上ともう1人が言った。

「双葉言うな。てかっ、いつの間に絹坂があっ!?!?」

何でかそこには当たり前前みたいな顔で制服姿の絹坂が突っ立っていた。

「えー？ 最初ッからいましたよん？」

「おい！ お前、何、ずけずけと家の中に入ってきてるんだっ!?!? 出てけ！ 帰れ！」

「……先輩。それ、彼女に言う台詞じゃないですよね？」

絹坂はちよつと呆れた感じに俺を見ながら言う。

「どーでもいいから帰っ」

「あらあらあらあらあらあらあらー！」

「れぎやうつ!?」

俺が怒鳴っているところ、いきなり、壁に押し付けられた。

「まあまあまあまあ、あなたが双葉ちゃんの彼女さん!?」  
やってきたのは我が家最強人物である母上だ。

「双葉言っな!」

このツッコミは欠かさない。

しかし、恋とか愛とかが大好きな母上には蚊のゲップほどの音にしか聞こえなかったことだろう。

「初めまして。先輩の彼女を拝命しています。絹坂衣と申します。不束者ですが何卒よろしくお願いいたします」

絹坂は90度くらいの角度で礼をし、馬鹿丁寧な口上を述べた。

こいつは猫かぶるのが大得意だからな。

「あらあら、まあまあ、ご丁寧にとーも。さあさあ、上がって頂戴」  
母上はなんだか当たり前みたいに絹坂に我が家の敷居を跨がせようとする。

「こらー! 上げるなー!」

「お邪魔します」

「お前も何ずけずけと上がりこんでるんだっ!?」

「あんた煩い」

仕方がないので実力行使に出よとする前に姉上が俺を後ろから羽交い絞めにした。相手は年上とはいえ女だ。しかしながら、姉上は結構体格の良い方であり、スポーツもしている方だった。学生時代はバスケをしていた。そして、俺は御存知の通り運動嫌いの力無しだ。情けないことに姉上の束縛から俺は逃れることができないのだ。

「ほら、絹ちゃん。こっちよー」

「はい、お母様」

「何、普通にお母様とか言っとなるかーっ!?」

「あー煩い煩い」

その間に、母上と絹坂は居間へと進み、俺は怒鳴るしかなかったのだった。

「あれ？ 絹坂は？」

「グラウンドランニングから帰ってきてませーん」

「あいつ、帰りやがった！」

高校の教室で、そんな会話がなされていたと俺が知ったのはいくらか経った後のことだった。

## 偏屈先輩説教す

俺はひたすら不機嫌な面で紫色の液体（何のことはない葡萄ジュース）を啜りながら、その光景を眺めているのであった。

「あら、じゃあ、お絹ちゃんは高校時代から双」

「俺の名前を言うな」

「…うちの子のことが好きだったのねー？」

「ええ、そうなのですー。殆ど一目惚れなのですー」

殆どって何だ。

「ねえねえ」

姉上が身を乗り出す。

「それから2年以上ずっと双」

「その名を言うなって」

「葉のことを慕ってるのー？」

普通に双葉って言いやがった。姉上には何を言っても無駄なのだ。

「はい、勿論」

姉上の問いに絹坂はきっぱりと言い切った。そして、言わんでもいいことを続けて言い出す。

「そもそも、私は先輩以外の人を好きになったことなんてありません」

堂々と胸を張って言う絹坂。そして、俺を見てにこっと笑うのだ。そんな絹坂に対して俺はどんな顔をすればいいのか分からずしかめ面で何となく庭に視線をやった。

庭では三津花が工事現場で使われているような大型スコップで地面をざつくざつくと掘り返している。きちんと腰から力を入れてるのが嫌だ。

学校規定ジャージに麦わら帽子を被り、首に近所の土建屋のタオルをかけている。格好は農作業中のおっさんやら工事現場のおっさんと全く同じだ。

ちゃんとしとりやあ可愛いのに、勿体ない。あの娘には綺麗なドレスとか清楚なワンピースとかそんなにがに似合うというに……。ん。何か違和感が……。

「つてか、貴様っ！ 何で、ここにいるっ!？」

俺はサツシを開け放って叫ぶ。三津花はよっこらせつと呟きながら、背を真つ直ぐにし、腰をトントンと叩く。そんな年寄り臭い真似をせんでくれ。妹を愛する兄として泣きたくなる。

三津花は首をこきこきさせながら、不思議そうな目で俺を見やる。「何でここにいてるって、ここは私の家なのですから、私がここにいたって不思議ではないでしょう。それとも、何ですか？ 私はいつの間にか勘当されてたんですか？ それは、兄様だけじゃあなかつたんですか？」

「違う違う。そーいうことじゃない!」

俺が勘当されているのは間違ってはいないが、俺が言いたいこととは全く違う。

「今は授業中だろうが!」

「あれ？ 冴上は？」

「いつの間にかいませーん」

「あいつ、帰りやがった！ てか、あいつの彼女といい妹といい。思いつきり悪影響受けてやがる!」

高校の教室で、そんな会話がなされていたと俺が知ったのはいくらか経った後のことだった。

「ああ、サボっちゃいました」

「サボっちゃいましたじゃねー!!!」

あつけらかなと言っ三津花を前に俺は絶叫する。ああー。大事な大事な妹の内申が。

「私もサボっちゃいましたー」

俺の後ろで絹坂が自己主張する。

「お前の内申は既に悲惨な状況であろうから今更騒いだところでど  
ーにもなるまい」

「む……………ぷっ」

絹坂は不満そうに頬を膨らませたが、姉上に左右から潰され、口  
風船は間抜けな音と一緒に呆気なく割れた。

「わっ！ 何コレ！ この子のほっぺ何か凄い気持ち良いんだけど  
！？」

「あら、本当？ 片方貸して頂戴。あら、本当！ ぷにぷにしてる  
わー」

「あうー。ああううー」

絹坂は母上姉上の玩具にされている。煩いのを3人いつぺんに遠  
ざけることができ、これは便利だ。

いや、そんなことはどーでもいい。今、重要なのは、三津花だ。

「とにかく！ サボりなんていうことは許されんことだっ！」

「そんなこと言って兄様かなりサボってたじゃないですか」

確かに、俺は学校の授業・行事をかなり不正に欠席した。俺の欠  
席率は軽く一割を超えているだろう。しかし、あんまり酷くはない  
はずだ。きちんと進級できて卒業できたからな。

「しかし、お前は俺の真似をせんでいい！ てか、するな！」

俺は自分のことを堂々と棚に上げておいて、三津花に言い放った。  
「わたしはせんひゃいのまねひまふ」

後ろで絹坂がほっぺをぶにぶにされながら主張した。それは無視。  
「とにかく！ これからはサボりはいかんぞ！ 絶対にするな！

ついでに、俺が高校時代にしていたことは何一つ真似せんでいい！

てか、俺と正反対のことをしている！」

三津花は胡乱げな目で俺を見る。

「兄様、自分が間違えてるってこと分かってたんですね」

「当たり前だろ。俺は常識人だぞ？」

全員が視線で問い掛けてくる。聞きたいことは一緒だろう。

「じゃあ、何で、お前、そんな常識はずれな間違ったことばっかや

つてたんだよ？」

その理由はとも一言じゃあ言えんことであり、俺は後悔していない。しかし、それは人に薦められることでは全くない。特に愛して止まない三津花には絶対に真似させてはいかん。

「とにかく！ お前はきちんとした清く正しき高校生活を行うのだぞ！？ 分かったな？」

三津花は不満げではあったが渋々と頷いた。うむ、それで良い。時には妹を説教するのも兄の仕事だ。

「先輩先輩ー。私はー？」

絹坂が俺の背中に引っ付きながら聞いてきた。

俺は醒めた顔で答える。

「お前はもう手遅れだ」

「ふえ？ え？ 手遅れ？」

「ああ、自信を持って言おう。間違いなく、今、お前は高校の要注意生徒の筆頭だろう」

これにはかなりの自信があるな。何せ絹坂は一年の頃から俺にずつとくっ付いていたから、俺が委員長に就任していた時期の後半に行った活動のほぼ全てに従事したわけだ。そして、その活動のほぼ全てがろくでもないことは言うまでもない。

俺にそう言われて絹坂はちよつと考え込んだ。

それから俺を見上げて尋ねる。

「先輩も在学中は要注意生徒の筆頭だったんでしょね？」

「うむ、間違いなく」

今回の講堂占拠事件で要注意生徒名簿に復活したかもしれん。

絹坂はまた何か考えている。どーせろくでもないことを考えているのだろう。

「じゃあ、私と先輩はそこでもお揃いですねー」

彼女は嬉しそうにこつと笑った。

何だつて、こいつはそんな下らんことでそんなに嬉しそうに笑えるのか俺には皆目不明だな。まったく、ほとほと不可解な奴だ。

偏屈先輩帰省中

偏屈先輩説教す（後書き）

次辺り、もう少し妹を出そうかと思えます。  
次の次くらいから大騒ぎすると思われませう。

## 偏屈先輩の思ひ出アルバム

「とにかくだ」

俺は言い含めるように、三津花の目を見て、殊更ことさらゆっくりと言つてやる。

「もう2度とサボりなんぞという俗悪めいたことをするな」

俺が言つと、三津花はじと目で俺を見つめ返した。何か文句言いたげな顔だ。

「何だ？」

「兄様つて、よくご自分のことを棚に上げますよね」

「う」

三津花の言葉に俺はあ行3番目の字しか出ない。

「まるで世界の保安官を自認している思い上がった大国みたい」

「何という例えを……」

俺が大のアメリカ嫌いと知つての言葉か！？

「ダメですよー。三津花さん」

横から絹坂がたしなめるように口を挟んだ。さすが絹坂。俺の嫌がることくらい分かつているのだな。口が悪く言い方が直接的過ぎるので角が立ち易い俺の代わりに絹坂が注意してくれば問題なからう。

「そんなこと言つてたらFBIに消されちゃいますよ！」

と、思つていたらトンチンカンなことを言い出した。

「そんなこと言つたくらいでFBIは動かん！ ってか、どっちかといえ、海外はCIAの担当だ！」

「CIAつて？」

「アメリカ中央情報局Central Intelligence Agencyだつ！」

まったく、怒鳴り過ぎて喉が痛くなつてきやがったぞ。

「口煩い人ですわ」

三津花が呆れた様子で言ったが、ここは無視だ。これ以上怒鳴っていては俺の喉から血が噴き出てしまう。何処かで区切りを付けねばならんのだ。ともなれば、年上である俺が我慢するのが道理というものだ。頭の血管が切れそうにびくびくしているが我慢だ。我慢。

「お絹ちゃん。お絹ちゃん」

母上が隣の部屋から絹坂に呼びかけた。

いつの間にか居間を抜け出して何処ぞへと行ってたらしい。母上にしては珍しく大人しいと思っていたら、いなかったのか。

「お母様、何ですかー？」

絹坂は呼ばれるままにてけてけと母上の方へ歩いていく。

「だから、お母様って呼び方はやめろ」

一応、文句を言ってみたが誰も聞いちゃいない。なんだなんだと母上の下へ参集する。俺はただ一人不機嫌な面でソファにぽっつーんと残される。

いや、いいんだ。こんなことは慣れっこだ。家は親父も祖父さんも普段からいないか、いたって俺とは至極仲が悪い為、女の中に男（俺）一人という状況はよくあることで、当然ながら、女と男の興味の対象とか話題とかが合わないこともあり、そんな時、俺は一人むっつり孤立していたわけだ。ゆえに一人つきりにされるのは慣れたことだ。

言っておくが！ これは、寂しいのを屁理屈で誤魔化しているわけでは決していないぞ！ 本当だからな！？ その辺、勘違いされては極めて遺憾だ！ 素直じゃない奴ーとか思いながらにやにや笑う奴がいたら蹴っ飛ばしてやるっ！

暫くの間、俺は新聞でも読みながらのんびりしていた。紙面を賑わせるのはテロに紛争に殺人事件に汚職にスキャンダルにと、今日も世界は物騒この上ない。まあ、世界が物騒でなかったことなんかないからな。いつも通りの腐った世の中よ。

なんて、満足気に考えてみたりなんかしていると、ふと思い付いた。

女連中は何をやっているのだろうか？

耳を澄ませばくすくすという控え目な笑い声や絹坂の「はー」とか「ほー」とかいう間抜けな声が聞こえてくる。よくよく聴覚を研ぎ澄ませると、絹坂は集中しているような気がする。声のニュアンス的にそんな感じがするのだ。まあ、あくまで気がするだけだが。そして、ついでに嫌な予感もした。

絹坂という奴は基本的にのんびりぐうたらした奴で、あんまり集中力のある人間とは言い難い。まあ、見た目からして集中が似合いそうにない。

それでも、彼女だって、たまには例外的に集中することがある。それは何故だか俺絡みのことが多い。

例えば、例の弁当の件（厄病女神寄生中及び寄生前参照）もそうだ。奴は手作り弁当を正直に不味いと評した俺を見返す為だけになりの料理技術を習得し、結果、今ではそんじょそこらの一般主婦よりもずっと美味しい飯を作れる域に達している。

また、俺が高校生の時は平気で授業をサボっていたし、宿題は未提出のまま放つたらかしにしていたくせに。今じゃあ、俺と同じ大学に入学するべくやたらと一生懸命に勉強している。それに、俺の言動に対する一々の反応もいつもの数倍敏感で鋭い。

その集中力をもっと別の有用な分野に活かせば良いと思うのだがな。

つまり、今、絹坂が集中しているとすれば、それはかなりの高確率で俺絡みの何かであると思われる。

そして、俺絡みの何かを俺抜きでやっていることに、気付いてしまえば、俺はそのままのんびりと新聞を読んでいるわけにもいかない。俺はそれほど鷹揚おつようで心の広い人間ではない。というか、自分のことに関しては、俺はかなり気になってしまう性質なのだ。

気になるならば確認すればいい。それ以外に何をするというのか？

というわけで、長々と頭の中で色々考えた末に、俺はそろそろと連中のいる部屋へと移動する。そろそろ移動したのは、俺絡みの何かを咄嗟に隠匿されるのを防ぐ為だ。

我が家の女連中＋1人は居間の隣にある和室で4人集まって何だか大変大人しく、ごちゃごちゃしている。

女3人集まれば姦かしましいとはよく申すが、4人集まると静かになるものか？ いや、ならん。俺の経験則からすれば、女は集まれば集まるだけ比例して姦しさは増すものだ。よって、現状は大変おかしなものだ。

彼女らは一緒になって何かを見ているようであった。

何だか嫌な予感がする。

俺は音もなく連中の背後に忍び寄り、後ろからそれを覗き込み、

そして、思わず悲鳴を上げた。

「ぎゃーっ！！！」

「……うわあっ!?!」「……」

いきなり背後で大声を出されて4人は飛び上がらんほどに驚いた。しかし、驚いたのは俺も一緒だ。こんな予想だにしないことが突如として目前に現れれば、それはそれは大混乱して然るべき状況である。

「な！ な！ な！ 何故にそれがそこにあるのだあっ!?!」

その時の俺の脳内は非常に混乱していた。このような事態は俺の高度にして精密なる判断処理能力の容量を大幅に上回るものであった。

彼女らがそこで広げていたのは俺の過去を折々にちまちまと収められた写真が集められたアルバムである。

連中は俺のアルバムを広げて見ていたらしいのだ。いかにも絹坂が喜びそうなことだ。

母上はそーいったことに関しては非常にまめな御仁であり、我が兄弟ごとにアルバムが作って、時たまそれを眺めてにこにこしてい

るおかしな人なのである。

俺の20余年に渡る人生の折々の写真が収められた俺アルバムが家族に見られることは、まあ、恥ずかしいことではあるが、気に掛けることではない。それを絹坂に見られることは大変業腹であり、怒鳴ってアルバムを取り上げる事態であるが、脳内大混乱させるほどではない。

しかしながら、そこにある幾枚かの写真は俺に突然悲鳴を上げさせ、見苦しいほどに狼狽し、大混乱させるに足るものであった。

俺は混乱しながらも、どーにかこーにか、その問題の品を押さえようと、絹坂に後ろからのしかかって、それを手中に収めようとした。

「うわあー。先輩ー、重いですよー」

絹坂が悲鳴を上げるが無視。俺は必死にアルバムに手を伸ばすが、それは一瞬早く姉上の手に落ちた。

「これは双葉には渡せないわ」

姉上は俺から離れ、絹坂の上でじたばたしている俺を見下ろす。

「おのれ！ それは禁忌だっ！ とつとと寄越せっ！」

「寄越したらどーするの？」

「破いて焼いて川に撒く！」

「やっぱり渡せないわね」

そう言っつてそいつはアルバムを開いて、目を細める。

「これは人類の宝よ」

「んな糞のようなものはさっさと捨てる！ 俺の一生の不覚にして恥辱だ！」

俺は怒鳴りながら、姉上の手中にある件のブツを破棄すべく行動しようとした。が、俺の行動はかなり初期の段階で阻まれた。何故だか、絹坂が俺の腰に抱きついていて自由に動けないのだ。

「貴様！ 離れる！」

「嫌ですー。えへへー。先輩に密着ー」

絹坂は何だか満足気にくっ付いていて離れようとしな。蹴って

も叩いても離れる気配はない。

「てか！ 何故、それを母上が所有しているのだ！？ そして、何故、アルバムに収められておるのだ！？」

そう。これは大いなる疑問である。この写真が母上の手に渡るのはおかしいのだ。あれは、俺が高校時代の、高校内での出来事であり、姉上が一枚どころか数枚噛んではいたが、母上は関係なく知り得ないことであつた。だというのに、何故、母上がその時の写真を手にしているというのか？

「これは沙希ちゃんくれたのよ」

母上はにこにこ笑いながら答えた。

沙希ちゃんって誰だ？

ああ、薄紫の下の名前だ。そうだった。てか、あいつが裏切り者であつたか！

その写真はかつて諸々の事情があつて俺が女装をなした時のものであつたのだ。あれは、我が一生の不覚にして恥辱であり、我が脳はその記憶を蓄積することを拒否し、大脳から半ば抹消しかけていた出来事である。

その記憶どころか写真という画像記録がうちのアルバムに収められているとは！ 許し難いことだ！

「母上！ それは捨てるべきだ！」

俺は絹坂に引つ付かれ、畳の上ではたばたしながら怒鳴る。

「ええー。いいじゃない。可愛いもの」

「いや、可愛いというよりも、綺麗ですわ」

「うんうん、全くよね。あんた、男止めて女の子やつた方が良いかも」

対して、うちの女どもはアルバムを見ながら口々に余計かつ勝手なことをぬかしやがるのだ。何という悲劇！ 何という馬鹿らしきことか！

「いい加減、離れる！ この阿呆！」

「にやはー。先輩ー。一生このまんまでいませよー」

俺と絹坂はこんな馬鹿な格好で馬鹿なやりとりを夕飯時まで延々と続けたのであった。

しかし、ああ、あの写真が、こんなところにも……。泣いてもいいだろうか……。

**偏屈先輩の思ひ出アルバム（後書き）**

かなり久方ぶりの更新です。  
一ヶ月ぶりくらいでしょうか……。

## 偏屈先輩ぶりぶり怒り

このタイトルは何だあっ!?

確かに、俺は怒っている。怒るべき事由は売るほどあるからな。件の写真くだんのこともそうだし、絹坂が結局夕飯時まで腰に絡み付いて離れず、仕舞いには鼻血を出して俺のシャツを赤く染色し始めたこともそうだし、その様を家族連中に見られて散々からかわれたのもそうだ。

怒り過ぎて頭の血管が割れそうだ。

だからといって、俺のこの怒りにぶりぶりという擬音を付けんで頂きたい! ぶりぶり怒っているっていう表現は気に食わんぞ!

「まあまあ、先輩!。落ち着いて!」

絹坂は相変わらずずうつと俺の腰にくっついたままなので、俺たちは立ち上がることもできず、馬鹿みたいに畳の上で絡み合っているのであった。てか、お前、制服のまんまだろ。皺になるぞ。

「そんなに怒っていると身体に悪いですよ!」

「貴様が怒らせておるんだろが! 貴様のせいで俺は怒り過ぎて死にそうだ! 脳卒中とかでな!」

俺が本気で怒鳴り散らす様をじっと見つめながら絹坂は何を思ったかトンチンカンなことを言い出す。

「先輩!。ちゅーしてもいいですか!」

俺は痛み出した頭を抑えながら尋ねる。

「貴様は、さつき、俺が何を言っていたか聞いていたか?」

「ええ、勿論です!。先輩の声を聞くために、この耳はあるのですよ!」

先輩のお言葉を聞き逃すわけがありません!」  
「じゃあ、何で、俺の怒声を聞いた後、あの台詞に繋がるのか? 俺の疑問に彼女はにこやかに笑いながら答えるのだ。」

「先輩は怒ってる姿も素敵ですから!」

俺は舐められてるのか? てか、怒り過ぎて慣れてしまったのか

？ 俺は更に疑問を深める。

「いいですかー？ 先輩ー？」

絹坂は説教する坊主のような様子で話し出す。

「先輩はツンデレキャラですから、怒っている姿も萌えの範疇に入っているですよー？ その怒りも含めて萌えなんですから、どーして先輩に怒られて怯えねばならないのですかー？」

何だか、わけのわからんことを言い出した。

「は？」

「んー。分からないなら、良いですー。とにかく、ちゅーして良いですかー？ てか、します」

言うが早いか、というか、もう言う前から絹坂は俺の頭の後ろを両手で掴んでいて、無駄のない動きで唇を近付けた。が、そう簡単にやられるほど俺はマヌケではない。首に力を入れ、首の筋肉をつりそうになりながらも何とか絹坂の唇に近づくのを防ぐ。

「何ですかー。先輩。そんなに、私とちゅーするのが嫌なんですかー？」

「嫌も何も、ここには、うちの家族がいるんだぞ？ 今は、夕飯の準備の為に、この部屋にはおらんが、いつ見られてもおかしくない状態だ。そんな場面でキスなどできるかっ」

俺は家族に悟られないように小声で説得する。

「別に問題はないと思いますけどねー」

一回、こいつの脳内にある常識つてもんを全部書き換える必要があるような気がする。

「さあ、キスを」

「だから、止めろっての！ 大体、何で、いきなりキスなんかせんとならんのだ！？」

「恋人が接吻するのに理由などいるのですか？」

「ぐ」

その言葉に俺は言葉を詰まらせる。確かに、恋人がする接吻に理由などあるつか？ 答えは明確。ずばり、ない。

「そもそも、キスたるや、それは何であるか？　ただ、唇を重ねるだけの行為に何の意味があるのか？　生殖行為でもない。子孫を残す役割もない。何かを生産するわけでもない。一見すれば、全く意味のない行為。しかし、無意味ではない。キスたるや、それは恋人同士が精神的に互いの愛を確かめる行為に他ならぬ。瞼を開ければ相手しか視界に入らないほど近くまでに顔を近付け、身体の中でも敏感な口という部位を互いに合わせ、音にならぬ愛を語り合う。これこそ、恋人同士に許された甘美なる愛の行為！」

何故だか絹坂はそんなことを熱く語り出した。語り終えた絹坂は硬くしていた表情をふにやっと崩して俺を見上げる。

「先輩の真似です！。先輩、たまに、こんな感じで詭弁を振るいますよねー？」

「こいつ生意気なことを……。」

「隙有りー！」

いきなり、絹坂は顔を近付け、キスを謀った。

しかし、まあ、やったことがある人間は分かるとは思いますが、そんなに、思いつきり勢い良く真正面から顔を近づければそりや当然、

「……いつたあー！！！」

前歯とか額とか鼻とか色んなところがぶつかりあって痛いのだ。

「こんの馬鹿が！　前歯が折れたらどーする！？」

「キスに失敗して前歯損失って格好悪いですよねー」

「格好悪いどころの話ではない。そんなにことになつたら俺は腹掻っ捌いて死ぬぞ」

「先輩はいつつも大袈裟ですよねー」

割と本気で言ったのだが……。

何だか疲れた気分で目を閉じると、不意に唇に柔らかい感触があった。

目を開けると、視界一杯に絹坂の面がある。彼女の目が嬉しそうに笑った。やれやれだな。

奴は唇を合わせるだけには飽き足らないらしく、口の中に舌を潜り込ませ、ぐいぐいと胸を当て、足を絡ませてくる。密着した絹坂の身体が熱い。ささやかながら確実にある乳の感触が生々しい。その上、スカートが捲かれて太腿が見えとる。ああ、力が抜けて、離れるに離れられぬ。やはり、男は女に勝てんのか。

暫くの間、大人しく絹坂のキスに付き合っただけだと、

「むあうっ!?!」

部屋の襖の陰に人を発見した。

母上に見られても、姉上に見られても、大変面倒臭いことになるのは明確であるが、それよりも何よりも、こいつに見られるのが一番辛いかもしれん。

「みふふあっ!?!」

思わず叫んだのが、これでは意味が分からん。いや、母上でも姉上でもないとなれば、分からなくはないだろうが、一応、はつきりと言っておこうか。三津花だ。我が愛しの妹君である。こんな場面を見られたくはなかった……。

「んあ? 先輩ー? どーしましたー? あう? あ、三津花さん  
三津花は何とも言い難い表情でこっちを見ていた。そりゃそうだ。兄貴と同学年生しかも前クラスメイトがキスし合っているのを見ちまえば何とも言い難い表情にもなるうというものだ。俺だって、もし、三津花が草田とキスでもしてたら……激怒するな。とりあえず、後で草田は殴っておこう。」

「……え、ええつとー、御飯ですよ?」

「……うむ」

「絹さんもどうぞって」

「私も御馳走になって良いんですかー?」

「ええ、母様が是非にと」

「わあー。ありがとうございますー」

「それじゃ、早く来てくださいね」

三津花は最後にじと目で俺を見てから去って行った。何が言いた

い？

「先輩ー。御飯ですってー」

絹坂はのんきに笑っている。

「……お前さ」

「何ですかー？」

「あーいう、さつきみたいな場面を同じ学校で同じ学年で、しかも元クラスメイトに見られても何とも思わんのか？」

俺の問い掛けに絹坂は首を傾げた。

「何を思っんですか？」

俺は何とも言い難い気まずい上に不機嫌な気分ですべて食っていた隣にいた絹坂はとつても楽しげに飯を食らっている。その斜めに横に母上があり、俺と絹坂の正面に姉上と三津花が座っている。

本日の夕飯の献立は鯛やら鮪やら鮭やらの刺身、牛肉の醤油煮、旨煮、蛸とワカメの酢和え、薩摩汁、白飯。いつも通りの和風献立だ。母上は和食以外は作れないからな。作っても何故だか無理矢理和風になって出てくる。それならば、最初から和食であった方がよい。ゆえに我が家で和食以外のものを食いたいなどという願望はとつくの昔に打ち捨てられている。まあ、外食すれば良いだけの話だ。

「お母様、この牛肉美味しいですー」

「あらー、本当？ 嬉しいわ」

「これは醤油ベースのタレで煮てるんですねー。生姜も入ってますねー。生姜は肉の臭み取りにー？」

「ええ、そうよー」

母上と絹坂は楽しげに料理談義に花を咲かせている。うちの子供は3人とも料理には熱心ではないので料理好き（但し、和食限定）な母上には料理の話ができて嬉しいのであろう。

しかし、奴は、あんな気まずい面倒臭いところを三津花に見られたというに平然とした顔をしていやがる。全く何の気にもしていない

らしい。それが余計に俺の機嫌を悪くさせる。

「ん？ 三津花？ どしたの？ 何か機嫌悪い？」

俺の向かいで姉上がせんでもいい気遣いを三津花にする。

三津花はじと目で黙って俺を睨む。

「何？ 双葉がどーかしたの？」

三津花の視線を読んだ姉上が言う。

「破廉恥ですわ……」

三津花はぼそりと不機嫌そうに呟いた。俺は彼女の視線を避けるように俯いてひたすら飯を食う。

てか、今回のサブタイトルのぷりぷり怒っているのは俺じゃあなくて、三津花じゃあないか？ タイトルに偽りありだ。

「今度、料理教えて下さいー」

「良いわよー。一緒に料理しましょうー」

絹坂と母上は相変わらず楽しそうに料理話をしていやがる。おのれ。俺がこんな針の筵むしろに座っているような気分を味わっているというのに、こいつはこんな能天気な気分ではいられるとは何故だ。ムカムカイラついてくるぞ。

ここは何かしら怒鳴ってやらんと気分が収まりそうにないな。と思っていると、絹坂俺を見た。

「新しい料理を覚えたら先輩に作ってあげますね？」

そして、にぱつと笑って言った。

ぬう……。まあ、今は飯時だしな。怒鳴るのは勘弁してやろうではないか。

偏屈先輩ぶりぶり怒り（後書き）

先輩と絹坂の絡みを何処までやっついていいのかわかりません……。

## 偏屈先輩最大の敵

皆さん、こんばんは。

いきなり、挨拶をぶちかました私は当然先輩ではありません。じやあ、誰だよって話ですが、この厄病女神シリーズを最初から長々と読んで下さっている気の長い方々ならばすぐに分かると思います。そうです。私です。ヒロイン絹坂衣です。えっへん。威張ることもないですか？ そーですか。

さて、その私は何をしているのかといえば、その詳細は概ね先輩が述べたかと思えます。

それでも、ここで大まかに述べることに致しましょう。先輩は偏見に満ちた人ですからね。私からの視点も必要だと思つのです。あと、先の話と間が一ヶ月近く開いていますからね。ストーリーを忘れていらっしやる方もいるかもしれせん。

夏休みのほぼ全てを先輩の部屋に住み着いて過ごし、最後の最後で私は先輩の心を篡奪<sup>さんだつ</sup>することに成功したのでした。ここまでが前作のあらすじ。

この間、私はかなり強引な手も卑怯な手も使つて、恋にトラウマを抱える先輩を無理矢理私と交際させることにしたのです。恋とは戦争とはよく言われることです。卑怯も糞もありません。私は戦争に勝ったのです。

交際が決定した翌日くらいから、私と先輩は一緒に地元へと舞い戻り、私は何だかんだと先輩に付いて回り、最終的に、先輩の実家に潜り込み、先輩の御家族と面会することに成功したのでした。いええーい！

そして、今はのんきにお母様と料理談義をしながら夕飯を一緒にしているのです。

何故だか先輩だけが微妙に不満そうな顔をしておりますが、肅々と平穩に夕食は進みます。まあ、先輩が不機嫌なのはほぼデフォルメですからね。今更、気にすることでもありません。

それに、不機嫌そうとはいえ怒鳴らずに済む程度です。先輩はあまり我慢をしない人なので、その短気な御仁が今もって怒鳴りも文句を言いもせず大人しく席について夕飯を召し上がっているという事は、さしたる不満ではないということなのです。

むっつりとした顔をしておりますが、先輩がむっつりとした顔をしているのも、やはり、日常茶飯事であり、日常風景の1つみたいなものです。つまり、全く平穩な愉快で楽しい夕食だったわけなのです。ここまでは。

不意に玄関のドアが開く音がして、お母様とお姉様と三津花さんは勢い良く顔を上げ、玄関方面と先輩の顔に素早く視線を走らせました。動揺するお三方とは、逆に先輩はとも落ち着いていました。一瞬だけぴくりと顔筋を動かしましたが、それだけです。普通に食事が続けています。

この家族の少しだけ変な様子に、私は何だか居心地の悪さを感じました。

私が不思議そうな顔をしていたのでしよう。ふと先輩がとても静かな口調で呟くように言いました。

「当然のことだが、チャイムも鳴らさずに鍵を開けて家の中に入るのは、その家の住人かピッキング盗しかいない。後者ならば、事は簡単だ。とっ捕まえて警察に丸投げすれば良い。しかし、前者だとこれは非常に面倒臭い上に不愉快ことになる」

今、皆さんのうち一部は「ん？ 逆じゃね？」とか思ったかもしれませんが、私もそう思いました。または「雑草の奴、また間違えやがったのか？ 本当に誤字誤植の多いでしょうもねえ奴だな」などと思っただけかもしれません。確かに誤字誤植は多いのですが、今は誤りではありません。先輩は確かにそう言ったのです。

前者、つまり、何故、家の住人だと非常に面倒臭いことになるの

でしょうか？

私は少し考えて思い当たりました。

家の住人というのは、大抵が家族です。家族以外の誰かが恒常的に家の住人となっているような家はちよつと問題です。そして、先輩の家はそこまで問題な家ではなさそうです。

ということとは、今、家に入ってきて、こつちに刻一刻と向かってくる方は先輩の家族ということです。

話に聞くに先輩の家族は大抵の家族と同じような構成になっているようです。ちよいと違うのは昨今の少子化社会にしては子供の数が少し多めなくらいでしょう。あと、お祖父様が一緒に住んでいると仰っていました。今現在東京に出張中だということ。先輩は「どーせ中央の政治屋どもから次の選挙もよろしくとか言われて天狗のように鼻を高くしてやがるだろう」と不機嫌そうに仰っていました。

そのお祖父様は置いておいて、他、家族の構成員といえば、先輩、お母様、お姉様、妹の三津花さん。あと、足りないのは？ とまで言えばどんなに馬鹿でもすぐ分かることでしょう。そうです。お父様です。

「帰った…ぞ」

背後から聞こえた低い声。言葉の途中で一瞬沈黙があったが飲み込んだようです。

その方は、先輩の線を太くして、男らしくして、渋くしたような人でした。しつかりとした眉に、大きく高い鼻は先輩にはあまり似ていません。子供には伝播していないようです。しかし、鋭く険しい目は先輩のそれそのもので、他の2人の娘さんにも遺伝しているように見えます。不機嫌そうにへの字にされた口も先輩とよく似ています。背丈は先輩と同じくらい高く、体つきは先輩よりはがっしりとして肩幅も広いです。なるほど、この人が先輩のお父様かと思いました。

先輩のお父様のことは少し知っているようで、あまり知りません。

「どーも先輩とお父様は酷く仲が悪いらしく、先輩はお父様のことを話すことが殆どないのです。私が先輩のお父様について知っていることといえば、県議会議員をやっていることくらいです。漏れ聞く情報によれば、性格は何となく先輩と似ているようです。」

「ただ、先輩と仲が悪いことだけは散々聞いています。何かある度に大喧嘩をしているらしく、先輩の最大の敵なのだそうです。」

「あら、あなた、おかえりなさい。今日は早かったのねー」

お母様がのんびりと言い、席を立ててせかせかと食事の仕度を始めました。

ここで殆ど動いているのはお母様と先輩だけでした。先輩はむっつりした顔で食事を続けています。お父様はダイニングの入り口に立ったまま静止。お姉様も三津花さんも動きません。

ぴりぴりとした張り詰めた緊張がダイニングを覆っているのです。緊張に満ちた沈黙を最初に破つたのはお父様でした。

「あー。今日の飯は何だ？」

無視しました。先輩を無視しました。

「お刺身ですよー。双葉が好きですからねー」

ところが空気を読まないお母様が平然と先輩の名を出します。

「双葉って言うな」

「そいつの名を出すな」

先輩とお父様がほぼ同時に言い、一瞬、お互いを物凄い目つきで睨みました。しかし、すぐに視線を外します。てか、何ですか。さっきの目は？ 滅茶苦茶恐かったですよ！ もし、あんな目で見られたら、私、ショックで死にますよ。そーですねー。例えるとすれば、家族全員細切れにされた末に、自分も陵辱された気の強いお姫様が憎き敵を睨むような目ですかねー。父子でそんな目で睨み合うつてどんな父子関係してるんですか。

お父様は先輩によく似た不機嫌むっつり顔で席に着きました。お母様がせつせと食事を用意し、お父様はむっつり顔のまま食事を始めました。

偏屈先輩帰省中

再び沈黙が場を支配します。  
ああ、気まずい。気まずいですよー。

**偏屈先輩最大の敵（後書き）**

物凄い久し振りの更新ですよー。  
すいません。ごめんなさい。

## 偏屈先輩父子の激昂

「ところで、君は誰だ？」

ぴりぴりとした緊張の中で、お父様は私を見て言いました。普通に不審そうな顔です。そりゃそうですね。ある日、帰宅したら我が家の食卓に見ず知らずの少女が普通に座って飯を食っていれば誰だつて不審に思います。

「えーつとー」

私は間延びした声を出して時間を稼ぎます。というのも先輩とお父様はとても仲が悪いそうですし、実際、雰囲気から見ても全く宜しくありません。そーいえば、先輩は勘当同然で家を出たとも言っていました。父子仲はかなり最悪の部類といえましょう。そんな父子が久々に再会して、やつぱり嫌ーな雰囲気の中、私は何と言えば良いのでしょうか？

「息子さんとお付き合ひさせてもらっている者ですー」

なんぞと阿呆面で言えば良いのでしょうか？ そんなことを言うてはこの嫌な雰囲気が余計に悪くなると思われれます。いくら樂觀的に見てもその発言が+に働くことはないでしょう。

そんなわけで、私は密かに周囲を見回し、助け舟を期待しました。しかし、お母様はのんびりお刺身を食べていて喋る気配はありませんし、お姉様と三津花さんは張り詰めた空気の中で不用意に発言するのを避けたいのかせつせつせつせつと一生懸命に御飯を食べています。先輩は不機嫌そのもので、口を開きそうもありません。舟ないよ！

「えつとー、私はー、せんぱ、こほん。ふ、ふた」

「その名を言うな」

先輩のお父様に対して先輩のことを先輩と言い表すのはどーかと思ひ、双葉さんと言ひ直そうとしたところ、先輩にぶすつと釘を刺されました。

「……えつと、お付き合ひさせてもらっている絹坂衣と申します」

仕方ないので先輩のことを言い表すのは止めました。まあ、誰と付き合っているかなんてことは言わなくても分かるでしょう。お姉様が三津花さんが百合な人だったら別ですけどね。いや、お二人の趣味は知りませんが、世間一般的には女の子が付き合っている相手は男の子だと思います。

まあ、こんな御託を並べなくても普通に通じたようです。

「お付き合いっていうのは、つまり、あー、男女交際ということか？」

お父様はなんだか話し辛そうな様子です。まあ、自分の息子を見ながら息子の彼女と会話すること自体が無理な話だともいえます。

「ええ、そうです。男女交際です」

お父様は何とも言い難い顔をしていました。

「男女交際……あいつが……」

あんまり信じられないらしいです。てか、すぐ側にいる相手をおいつつて表現するのはどーなんでしょう。

お父様はちらつと先輩を睨みました。先輩は無視しました。態度と雰囲気では話を拒絶しています。

でも、先輩って高校時代もお付き合いしていたはずですがー。

「俺が男女交際しようが何しようが関係なからう」

先輩がぼそつと言いました。視線は御飯茶碗の縁にくつついた米粒に向いているのですが、当然ながら、米粒にそんなこと言っても意味はありません。先の発言がお父様に対する言葉であるうことは言うまでもないことです。

「関係ないわけなからう。貴様は冨上家の長男だぞ」

お父様は眼光鋭く先輩を睨みながら言いました。てか、この人、自分の息子を貴様つて言いましたよ。さすが先輩の父親です。この親にしてこの子あり。

それよりも何よりも、これは地味に私と先輩の仲がピンチではありませんか？ こ、こんなところに、私と先輩との仲を妨害する強

敵が現れるとは……。

「後々、冨上家を継ぐ者の嫁はそれ相応の者でなければならん」

密かに動揺する私を追い詰めるかのようにお父様は言葉を続けま  
す。それ相応というのは、つまり、本人の性質とかお家の格とかで  
しょうか。私自身の性質はどんなもんか分かりませんが、後者は確  
実にダメですね。

「大体だ。貴様は冨上家の長男としての自覚が足りん」

「けっ！」

説教モードに入り始めたお父様の言葉を遮るように先輩が吐き捨  
てるように行4つ目の文字を口にし、相変わらず米粒を親の敵の  
ように睨みながら呟くようにぶつぶつと言いました。

「うちがどーたらこーたらなんぞ関係あるか。何だその旧時代の遺  
物みたいな思考は。貴様みたいなのは先の大戦で死に絶えればよか  
ったんだ。米軍が中途半端に生かしやがるから面倒臭いゴミどもが  
残りおった」

先輩の台詞を要約すれば「家のことなんか知るか。貴様みたいな  
ゴミは死んでしまえ！」ということだと思われます。親が子を貴様  
と呼べば子も親を貴様と呼ぶなんて、どーいう家庭でしょうか。

額の青筋をびくびくさせるお父様。その激怒寸前のお父様を平然  
と挑発的に見下げるように睨み返す先輩。

お父様は青筋をびくびくさせながら言いました。

「しかし、そのゴミから生まれた青臭い洩垂れのガキどもは、上辺  
と口ばかり達人になって、したり顔で年上を短絡的な言葉で非難  
するものだな。そいつらが言ってることなんか先人の言葉の出廻ら  
しなのに、独創性溢れる思想だとか勘違いしてやがる奴が多くて困  
るな」

お父様の台詞を要約すると「貴様がゴミって言ってる俺から生ま  
れたお前の言ってる短絡的な台詞なんか俺がかつて言った言葉の真  
似に過ぎん」みたいなところでしょうか。話がどこ変な方へ流  
れているような気がしますが、まあ、いつも先輩の話もどこ変

な方向へ流れていくので、私にとっては慣れっこです。遺伝なんですな。

「ほうほう。たまにいるなあ、そーやって、人の発明やら思想を、俺が先にやってたんだぜ的なことを後から言い出すウザイ奴。あーというのは俺はかなり嫌いだな。糞だな！ 死ね！」

先輩はお父様を饒舌に貶しまくります。最後の方では怒鳴りだしてます。先輩お得意の口撃です。今まで、幾多の人々がこの口撃の前に涙を流してきました。先生を泣かせたこともあります。全然自慢になりませんけど。

しかし、剣呑な父子ですねー。この父子には世間で見られる理想の父子的なことなど何一つないのかもしれないかもしれません。河川敷でキャッチボールなんていう今時安いホームドラマにも出ないような行為は絶対じゃないでしょう。

「……最近、学校どうだ？」

「……別に……」

みたいな世間一般的にありふれた気まずい会話すらなさそうに思えます。きつと、先輩とお父様は、

「俺の反対を押し切って無理矢理入った公立の貧乏高校はどうだ？ 周りの阿呆どもに影響された貴様の脳味噌が腐っておらず、まだ日本語による会話が可能ならば、はした金を出してやっている者として感想の1つも聞きたいところだな」

「まあ、親の金を積んで入り込んだ脳味噌の代わりに糞が詰まっている連中がうようよいるような阿呆学校やら学校で暗記することが至上だと勘違いしてる狂ったポケどもがいる糞学校よりはずっとマシだな。で、こんな感想で結構かな？」

みたいな会話をしていたに違いありません。酷い会話内容ですね。しかし、そんな会話の様子を脳内にありありと浮かんでしまいます。突然、ガタンッ！ と大きな衝撃音がして、私はびくりと震えましました。

私が脳内妄想にうつつを抜かしている間に先輩とお父様の剣呑に

してねちねちとしたお互いに不愉快な会話は進み、ついに両者が激昂したようです。

両者は両手をテーブルに突いて立ち上がり、お互いを憤怒の表情で睨みます。そして、私は2人の間に挟まれています。

お姉様と三津花さんは2人が激昂する一瞬前に御飯を女性らしくらぬ素早さで掻き込み、すたこらさつさとダイニングを脱出していききました。面倒臭いことには巻き込まれたくないのでしょうか。

お母様はのんびり御飯を食べています。きっと慣れているのでしょう。私もこうならねばいけません。目指すはお母様です。

「この糞ガキめ！ 誰のお陰でそこまで育つたと思つとるんだ！？ 雑草みてーに1人で勝手に育つたみたいな顔しおつて、何様のつもりだっ！？」

「うるせえっ！ テメーが作ったガキなんだからテメーが育てるのは当たり前だ！ 育てねー奴は育児放棄で逮捕されんだぞ！ 政治屋のくせにそんなことも分からんのか！？」

私の両側で先輩父子が怒鳴りあいの舌戦を繰り広げます。唾がかかってます。唾が。先輩のは別にいいですけど、お父様のはな！。

偏屈先輩父子の激昂（後書き）

かなり聞き苦しい表現が出ております。申し訳ございません。しかし、これが先輩父子の会話なんです。ご了承下さいませ。

## 偏屈先輩父子息切れす

「貴様！ 生んでもらった親に向かって、何て言い方だ！！ 貴様がここで俺にベラベラ小賢しい罵詈雑言を吐いてるのも生んでもらってこそなのだぞっ！」

「だから、どーした！ そんなもん関係あるか！ 子供生んだら偉いのか！？ 子供育てたら偉いのか！？ そもそも、貴様は子育てなんざほとんどしらんだろうが！ いくら昔のことを思い出しても貴様がガキの俺にかまつたことなんかねーぞ！ 母上に子育て丸投げしてたくせに偉そうなことほざくなッ！」

「こんの糞ガキめっ！ べらべらべらべらと偉そうに態度で減らず口を叩きおつて！ 何様のつもりだっ！？ 少しは年上を敬う気持ちつてのはないのか！？ そんなくらい人間として常識だぞっ！？」

「馬鹿言つな！ 俺は貴様以外の年上には一定の敬意を払つとるわッ！ 俺が敬語を使わない年上の人間は貴様だけだっ！ 俺は貴様が年上だから貶してるんじゃないのだ！ 貴様の存在自体が気に食わんだ！」

私の両側で相変わらず先輩とお父様は言い争いを続けていました。不毛で無意味な戦いは延々と続き、既に時計の長針が一回り以上してしまっています。

既に私もお母様も食事を終えてしまい、お母様は食器を片付けて食器洗いをしています。ここは私も手伝うべきかとも思っていますが、両側で先輩とお父様が喧嘩していらっしやるので、なんだか立ち去り辛いのです。

それに、放っておいたらとんでもないことになりそうです。例えば、今、2人の近くに刃物があったならば、既に誰かが刺されていることでしょう。これでは放っておけません。

しかし、今日が和食で良かったのです。もしも、洋食ならばナイフやフォーク、或いはスプーンすら武器になる可能性があります。

スプーンの武器としての使い道としては、例えば、目玉をぐりっ（以下略）。

しかし、和食でも絶対的な安心はできませんでした。先ほど、先輩が「箸目に刺すぞ！」と怒鳴っていましたからね。なるほど、お箸は木製ですが、先は鋭く武器にもなりそうです。そーいえば、北朝鮮の秘密工作員はお箸（朝鮮の箸は金属製ですが）さえも武器にすると聞いたことがあります。

そんなわけで、私はテーブル中のお箸を握っているのです。流血沙汰はいけません。いけませんとも。

「ええい！ 面倒臭い！ いい加減、黙れ！ いつまでこの不毛な言い争いを続ける気だ！？ これだから器はちっせえくせにプライドだけは一丁前に高い最近のガキは困る。少し本当のことを言っただけで馬鹿みたいに怒り出すからな」

「そりやお前もだろうが！ 自分のこと棚上げにして偉そうなことぬかすな！ そもそも、俺みたいな若造に本気でキレて怒鳴り散らす貴様の方が器が小さいだろうが。そんなんでよく政治屋が務まるな。議員つてのは随分と簡単な仕事らしい」

先輩とお父様の口調が幾分か収まってきました。言葉尻に「つ」とか「！」が付かなくなりましたから。

2人はそれでも少しの間、ねちねちとした言い合いを続けていましたが、やがて、疲れ果てたのか、その口からはぜえぜえという荒い息しか出なくなりました。

時計の長針は二周していました。

「そもそも、私は何の話をしていたんだっけか？」

ふとお父様が呟き、首を傾げました。

「物覚えの悪い奴だ。まあ、政治屋は記憶力が悪いから当然だとも言えよう」

ボソリと先輩が呟きましたが、そこはお父様が我慢しました。青筋はぴくりと動きましたが。

「ああ、そうだった。彼女のことだ」

先輩の挑発を受け流したお父様が見て言いました。どうやら先の論争の発端は私だったようです。まあ、私がいてもいなくても同じことになってたと思いますけどね。

「いいか。さつきも言ったが、冨上家の嫡男たる者は……」

「そんな古臭い腐った言葉なぞ聞いてられるか」

お父様の保守的説教に先輩は耳を貸す様子もありません。素直に耳を貸されては私が困ってしまいますから、今回は先輩の親不孝ぶりに感謝です。

「まったく、強情な奴だ……。そもそも、彼女は高校生だろうが、大学生と高校生が男女交際など許されるのか」

お父様の言葉に先輩は呆れ果てたような顔をしました。たぶん、わざと作った表情です。

「貴様は阿呆か？ 女は16歳から結婚が許されているのに、その結婚の前提となる恋愛が許されぬものか。それに、俺と絹坂は2つしか離れてないぞ」

先輩の言葉にお父様は少し驚いた顔をして私を見ました。まあ、確かに、私は小柄で童顔ですから年下に見られることは多いのです。たぶん、私のことを高校一年生とでも思っていたのでしょう。

「……つまり、君は、高校三年生か？」

「ええ、来年の春には卒業します。そーいえば、自己紹介がまだでしたね。絹坂衣です。宜しくお願ひします」

とりあえず、私は丁寧に挨拶して頭を下げようと思いましたが、ガツと先輩に額を掴まれ、無理矢理上げさせられました。

「こんな奴に頭を下げるな」

いや、挨拶のときのお辞儀ぐらいいいでしょうに。

「そもそも、何で、2人は付き合うことになっているんだ？ いつからだ？ きっかけは？」

「何でそんなことを貴様に言わんとならんだ」

「親として知る権利がある」

「都合の良いときだけ親としての権利を主張しおって。親としての

義務も満足に果たしておらんくせに」

先輩はそんなにもお父様を怒らせたのでしょうか？

それは置いといて、たぶん、お父様が私と先輩との仲を知りたいのは、やはり、親としての愛情とかそーいうものゆえでしょう。口ではかなりぼろ糞に言ってますけど、お父様だって先輩のことが息子として大事なのだと思います。先輩はお父様のことを文句なしに超絶嫌っているようですが、愛とは一方通行なものです。

「私と先輩は高校時代からの知り合いで、付き合いだしたのはええつとー、この間、ってというかほんの数日前からですー。付き合いつきっかけは私が告白してですけどー」

私はとりあえず正直に答えました。

とりたてて嘘を吐かなければいけない必要性も感じませんでしたし、もしも、お父様が2人の男女交際を認めなかったとしても、何も問題はないと思われたからです。先輩はお父様の言うことに従う人ではありませんし、反対されれば磁石のように反発して、余計に私へ接近してくれるだろうとも思われます。これは私にとっては都合の良いことです。結婚だって、先輩は既に成人ですから、両親の許可がなくてもできるのです。私は先輩と一緒にいたいわけですから、もしも、先輩が冴上家から断絶されても私的には大きな問題ではないのです。

「それじゃあ、付き合いってから全く時間が経ってないではないか」

「恋は時間じゃありませんー」

「いや、そんな奇麗事はいいい」

私のせつかくの良い台詞はあつさりと流されました。残念。

「そもそも、私はもう2年も前から先輩に求愛していたのですが、拒否されていたのですー」

「じゃあ、何で、今更になって付き合いだしたんだ？　そもそも、こいつがそんな色恋に関心があるとは思わなかった。この歳になるまでそーいったこともなかったわけだし」

お父様は心底不思議そうに言います。

先輩は喉が痛いのか、辛そうな顔で麦茶を飲み干して喉を癒している最中です。

「先輩が今になって私と付き合ってくれるようになったのは、イマイチ存じ上げませんがー」

私はそう言ってから、ついつい口を滑らせてしまいました。

「先輩は高校時代にお付き合いしている人いましたよー？」

## 偏屈先輩はトラウマを抉られる

「先輩は高校時代にお付き合いしている人いましたよー？」

後になつて思えば、これが何とも余計な発言でした。する必要がありませんでしたし、この後の大混乱へと繋がってしまった原因なのですから。

何故、私がこの発言をしてしまったのか、自分なりに考えますとやはり、先輩に超嫌われて遠ざけられているお父様に同情したからだと思います。私も散々邪険にされてきましたからね。同じ嫌われ者同士（私は元嫌われ者ですけどね）として同情してしまい、少しでも先輩のことを教えてあげようと思つてしまったのです。

「は？ 何？」

お父様はきよつとーんとした顔をしています。

「なんだつて！？」

「それ本当なの！？」

「マジで！？」

「本当ですか！？」

私の言葉に、今まで大人しく食後のお茶を楽しんでいたお母様や何処かへ消え去つていた姉様や三津花さんも参集してきました。何と素早い行動でしょうか。

「お絹ちゃん！ その話、詳しく聞かせてちょうだい！」

姉様が先輩を押し退けて私に迫ります。目が恐いです。まあ、目つきが悪いのは先輩兄弟に共通したことですけどね。

「え、えーっと、私も聞いた話で、あんまり分らないんですけど……」

「それでいいから、聞かせて頂戴」

お母様もノリノリです。

「えっとですねー。確か、檜っていう名前の人でー」

そこまで言つて、私ははっと思ひ出しました。

先輩はこの檜さんのことがトラウマになつてゐるはずです。私のとを好きだと認識していたのに、あえて私を遠ざけ、更にははつきりきっぱりくつきりとこつ酷くフルくらいにです。

もしかすると、先輩は未だに彼女のことが好きなのかもしれせん。可能性はあります。

今現在、今付き合っている私とかつて付き合っていた檜さんのおつちが好きか聞いてみたいような気がします。しかし、恐くて絶対聞けませんし、聞いたなら絶対に先輩は気を損ねてしまいそうです。

とにかく、先輩の前でこの高校時代の彼女の話題は禁句なのです。かつてというか、少し前、私はこの話題に触れて大いに失敗し、後悔したのです。

よって、  
「まあ、とにかく、一時期、付き合っていた人らしいです。あとは知りません」

私は強引にこの話題の幕引きを図りました。

しかし、そうは問屋が卸しませんでした。具体的に言うならば、先輩のご家族の皆さんが聞き捨てませんでしたし、流してもくれませんでした。

「もうちよつとその情報を詳細に教えて欲しいですわ」

「どんな子だったの？ 可愛かった？」

「付き合ってる当時はどんな感じだったの!？」

先輩のご家族、特に、女性3人がかなり積極的に質問をしてくるのです。

むう、困りました。これ以上、この話を拡大させるわけにはいきません。さつきから不気味な沈黙をしている先輩も気になりますし……。

「私は他人から聞いただけなのであまり分からないのです。実際に会ったことがないし。ですから、残念ながら皆さんの質問には答えられません」

これでOKなはずです。

先輩のご家族は途端に残念そうな顔をしました。

「んー。絹ちゃんが分からんないんじゃないしょーがない」

うん、これで大丈夫。

「双葉に直接聞こう」

ああっ！ これはマズイですよ！

先輩に先輩のトラウマ関連のことを聞いてしまうなんて、怪我している人の傷をぐりぐり虐めるみたいなことです。残酷で非道な行為です。

「ねえ、双葉双葉」

「その名を言うなっつとるだろうが……」

先輩は低く小さな声で呻くように言いました。ああ、先輩の機嫌は超絶悪いようです。この人はブチギレル寸前に少しの間、静かになるんです。台風が来る前の静けさみたいなもんですね。

しかし、先輩の機嫌の悪さに気付いていないのか？ それとも、気付いていながらも、先輩が期限悪いのはいつものことと楽観視しているのか？ 先輩のご家族は容赦をしません。

「いや、そのネタはもういいから。で、その高校時代に付き合ってたって話本当なの！？」

「是非とも詳しく聞きたいところねー。あ、絹ちゃんとの馴れ初めももつと聞きたいかも」

「そもそも、兄様が女性と付き合ってたのが未だに信じられませんわ。想像も出来ない」

特に女性3人。やっぱり女性は恋愛話が好きなのでしょうね。私は、まあ、他人の恋愛なんかには大して興味ないんですけどね。ラブカップルとか糞甘い映画とかドラマ見ると「けっ」って気分になりますね。あ、でも、今は私と先輩が「けっ」って思われているかもしれない。まあ、他人がやるのと自分がやるのじゃ話も次元も別つてもんですよな。うんうん。

そんなことを話している場合ではありません。ええ、ありませんとも。

先輩を見れば、先輩はなんだか額の筋と口端をぴくぴくさせているじゃありませんか。これは危険な兆候です。大地震の前に起こる初期微動みたいなもんですよ。

それでも先輩は怒鳴りだしませんでした。

全ての質問に「知らん」と「言わん」という黙秘権を行使しました。そして、私を睨みつけるのです。

「余計なことを言いおつて、この阿呆が」

と、目が語っています。ええ、目だけで言わんとすることが分かりますとも。目と目だけで言いたいことが分かるのは、残念なことに、おそらく愛ゆえではありません。

お父様も興味があるらしく、先輩に尋ねます。

「それで、どーして別れたんだ？」

そして、とんでもない質問をしてしまったのです。これこそが先輩のトラウマの最たる原因であり、最も触れてはいけないことなのです。

あー！ もう！ 見ていられません！ 聞いていられません！

私が原因で先輩のトラウマをざつくざつく傷付けることになってしまったのですから、その結果、先輩が激怒したり、傷付いたりするのを見たくも聞きたくもないのです。もう目を閉じ、耳を塞ぎ、台所にある室（食品などを長期保存しておく半地下室みたいなのです。床に戸があるんです。先輩の家の台所にはその室があったんです）の中に潜り込んでしまいたいくらいです！

しかし、そうはいきません。いきなり私が奇声を上げながら室の中に押し入ろうとすれば、私は即病院送りでしょうし、そもそも、室の中には予備の米とか醤油、味噌、砂糖、塩なんかの調味料の予備、あとは夏に残った乾麺（大抵が素麺）とか冬に残った餅が入っていたりして新たに私を受け入れる隙間などないでしょう。

また、ここで私がそんなことをしては、これからこの話をどー進めればいいのかというのでしょうか？ ただ、暗闇と静寂を描写すればいいのでしょうか？ そんなのは私も作者も勘弁なのです。

何はともあれさておいて、私と作者はしっかりと今の現状とこれからを描写せねばいけないのです。

恐る恐る先輩を見てみました。

「貴様らは、人の言いたくない、ことを根掘り葉掘り無理矢理聞き出そうとしおって……」

先輩は俯きながら静かに低い声で呟くように喋りだします。

「ああ、確かに、高校時代に、彼女はいた。いた。檜は俺に勿体ないほどに、よくできた奴で、剣道が得意で、ポニーテールがよく似合っておった。何故だか知らんが、俺のことを好きだと言った酔狂な奴だ。以上だ」

先輩は結構落ち着いた調子で言いました。

「おや？ これは結構大丈夫かな？ と私が楽観的なことをちらりと考えたとき、先輩がゆらりと立ち上がりました。

「それでだな。そいつは、高2の冬に死んだ。俺の、目の前でな！俺の、もう、すぐ側で！ 血反吐吐きながらな！ まるで安いドラマとか小説とかみたいにな！ 世の中じゃあんなのが持て囃されてるが、本当に死んだ奴とか死なれた奴にとつちやあ全く感動でも何でもないわっ！」

先輩は眉を吊り上げ、目を真っ赤にして怒鳴ります。

「お陰でこちらトラウマだっ！ カップルと、剣道と、ポニーテールと、病院と、同じくらいの歳の女と、そして、血を見る度に思い出すのだっ！ 何度も夢に出てくるし！ 今でもだっ！ 今でもだぞっ！？ もう3年近く前なのにだっ！ その上、わざわざ俺にそのことを話させるかっ！？ 見るからに話したがってないだろっ！？ 何でそんな奴に無理矢理話させたがるんだあっ！？」

「せ、先輩！ 落ち着いてください！ 文章がおかしくなってます！」

慌てて先輩を押し止めようと声を掛けましたが、これは逆効果でした。

「そもそも！ 貴様の迂闊な発言のせいでこんなことになってんだ

ろうが！」

「あ、あわわ、そーでした！ すいません！」

慌てて謝ります。この件に関しては先輩があんまりにも可哀相なので触れないようにするか、触れてしまった場合は謝るしかありません。

「大体、貴様のやることは一々いつつも俺の不利に繋がつとるんじゃ！ わざとか！？ わざとか！？ 実は、貴様、俺のこと嫌いなんじゃないのか！？」

「そんな！ 滅相ありません！」

先輩は暫くの間、私を口撃しました。その間、私はひたすら頭を下げ、許しを乞うしかありません。何てたつて、私は以前、この件で先輩を傷つけているのです。2回も同じことをしては謝るしかありません。南無南無。

**偏屈先輩はトラウマを扱われる（後書き）**

先輩のトラウマ詳細については「最期のキスは血の味」参照です。

## 偏屈先輩家族の狂騒

「ぜえぜえ……」

一通り叫び終えて先輩は荒い呼吸をします。

そして、血走った目で周囲を睨みます。慌てて視線を逸らす私たち。

「更に言えば、そもそも、貴様が余計なことを聞くからだ！」

少しして先輩の怒りの矛先はお父様に向きました。

「お、俺のせいなのか？」

「そうじゃ！ 貴様が絹坂の失言を誘発したのだ！」

先輩は八つ当たり気味に叫びます。なんか夫に浮気されてヒステリー起こす奥さんみたいです。

さすがにお父様も罪悪感があるのかむうつと唸ったまま沈黙しました。

しかし、先輩の叱責は止まりません。こんな序の口。序の口ジョナサンなのです。序の口ジョナサンというのは、今、私が思っていた言葉で深い意味どころか浅い意味すらありません。

とにかく、先輩の怒りは収まらないのです。

ひたすら怒鳴り散らし、悪態を吐きます。終わる気配すら見えません。もしかすると、先輩は怒ることによって色々と隠しているのかもしれない。前も先輩は泣きたいとき、それを隠すためにやたら怒鳴っていたことがあります。

しかし、いつまでも怒鳴っていてはいけません。先輩が喉を痛めてしまいますし、私たちは鼓膜を痛めてしまいます。そして、何よりも話が進まず作者が困ります。延々と先輩の悪態を書き続けてもいいのですが、そんなことを書くことに意味があるのか分かりませんからね。

「まあまあ、先輩。落ち着いてください」

「俺は落ち着いているっ！！」

私の言葉に先輩が怒鳴ります。いいえ、先輩。あなたは落ち着いていません。落ち着いている人は語尾に「っ」や「！」を付けないものです。

「とにかく、いつまでも怒鳴っていてもしょうがないじゃないですかー」

「じゃかあしやああっ！」

先輩は唾を飛ばしながら怒鳴ります。

「こんなくらいでは俺の怒りは消え失せないのだった！」

先輩の怒りはいくら怒鳴ろうとも無くならないらしいのです。では？ そのやり場のない怒りを彼はどーするつもりなのでしょう？ まさか、このまま延久に不毛な怒声を上げ続けるのでしょうか？ もしも、この状況が永遠に続くならば、私は先輩を殴ってでも止めなければいけません。

「だあー！ 貴様！ いい加減にしろ！ いくらトラウマを傷つけられたからって、そんなうだうだ長いこと怒鳴り続けるんじゃない！ 貴様は壊れた目覚まし時計か！？」

我慢の限界にきたのかお父様が怒鳴り返しました。

しかし、先輩はそのことで更に逆上して声を荒げるかと思いきや、何だか少し余裕のある顔でお父様を睨みました。何かする又は何か言う気だと私は思いました。

「ほーう。貴様は俺にそんな口を利いていいのか？」

「何だとお？」

お父様は額の青筋をぴくぴくさせました。

「これは貴様の心身に大きな影響を与える危険性があつたゆえ言わないでおつただがなあ」

先輩は意地の悪そうな笑みを浮かべます。喉が疲れたのか、今度は怒鳴る代わりにネチネチと攻撃をするようです。先輩は機嫌が悪いと口調は違えど、人を攻撃せずにはいられない人のようです。言葉責め？ 先輩、Sなのかな？ 私、そんなにMじゃないんですけど。大丈夫でしょうか？

いや、こんなことを考えている場合ではありませんでした。何故ならば、先輩がとんでもない暴露をしたからです。

「な、何を言うというのだ？ 俺には弱みなど何も……」

「貴様、愛人がおるであろう。パツ金のカナダ人の。キャサリンだったか？」

「はあああつっ！？ な、ななな、な、何故それをおおつっ！？」

あーあーあー。吃驚したのは分かりますけど、その台詞を言ったら自分で自分に止め刺すようなもんですよ。

「あなた？」

静かで大人しい言葉が聞こえました。お父様はびくうつと体を震わせました。ぎぎぎっという擬音が聞こえそうな感じにゆっくりとぎこちなく首を回し、恐る恐る首をそちらに向けました。

声の主、お母様は冷たい人形のような薄い笑みを顔に張り付けていました。口端はやや上を向き、目は緩やかに端の下がった線になっていますのに、全然笑っているように見えません。確かに笑顔なんです。笑顔なのに、笑っているように見えないんです。

「あなた？ どーいうこと？ ねえ、私を見てください？ 何で真っ直ぐ見ないんですか？ ねえ」

お母様の背後から湯気のように静かな怒りがむらむらと沸き上がっているのが見えます。勿論、怒りとは感情であり、感情とは心の中にあるものであり、心の中にある感情たるものは目に見えるものではありません。しかし、見えるのです。ええ、見えますとも。私がおかしいわけじゃありません。私だけでなく、先輩にもお父様にもお姉様にも三津花さんにも見えているようでした。

「お、おのれ、貴様……、何故、それを……」

お父様は恨みがましい目で先輩を睨みますが、先輩は涼しい顔で受け流しました。

「キャサリンってなんですか……。キャサリンって……。ねえ、どーいうことですか？」

お母様はぶつぶつと呟きながらお父様を見つめます。

「い、いや……、ええつとだな……」

お父様はしどろもどろで弁解しようと思いますが、その口調と態度を見る限り、弁解は無意味にしか思えません。

「浮気だなんて……。そんなに、そんなに、パツ金がいいんですか！？ アメリカ人がいいんですか！？」

「アメリカ人じゃない。カナダ人」

お母様の悲鳴なのか怒声なのかイマイチ判別としない言葉にお父様がしなくてもいい注釈を加えます。既に否定することは諦めたようです。

「どつちでも一緒でしょ！ 住んでるところ殆ど一緒なんですから！ 見た目だつて殆ど変わらないでしょう！」

「いや、キャサリンはケベックに住んでるフランス系で……」

お父様。そんなことは本当にどーでもいいと思います。例え、愛人がカナダ人でもアメリカ人でもイギリス人でもフランス人でもインド人でも中国人でも関係なのです。日本人だったとしても大して関係ないと思います。重要なのは愛人の存在なのです。愛人の人種とかは二次的な意味でしかないのです。

「フランス！ だから、あなたは3回もフランス旅行に行ったんですね！？ 私はスイスに行きたかったのに！」

しかも、言わんでもいいことを言つて墓穴を掘つたみたいです。

「いやいや！ それは違う！ フランスに行ったのは良いワインを収集する為だ！」

後に聞いた話によりますと、先輩のお父様の趣味は世界中のかなり美味しく高いお酒を収拾して地下室（なんと先輩のお家には地下室まであるのです。このブルジョワめ！）に貯蔵することなのだそうです。先輩に言わせれば「集めるだけで飲むわけじゃあないのだから、金持ちの自己満足でしかない非生産的で無価値な趣味だ」そうです。ちなみに先輩の趣味は読書だそうですけど、本当の趣味は人を精神的に虐めることなんてではないかと私は思います。趣味悪いですね。

「まあ、その秘蔵のコレクションも半分近くが消費されているのだがな……」

先輩がぼそりと呟きました。

「馬鹿っ！」

「……………は？」

先輩の小さいながらも皆に聞こえた言葉にお姉様は叫び、お父様は呆然とします。

「ど、どーいうことだ？」

「わー！ わーわー！ 言うな！」

「樹！ 黙れ！」

お父様が一喝し、お姉様沈黙。

「どーいうことだ？」

との言葉に、先輩は珍しくも素直に答えます。

「どーいうこともこーいうこともない。姉上は貴様自慢のコレクションを密かに飲み、代わりに中身には安い酒を入れておき、バレんよう巧妙に栓をし直しているわけだ」

先輩の言葉に、お父様はぶるぶると震えながら憤怒の表情で姉上を睨みます。

「あ、いや、えっと、ほら、だ、だつてさー。お酒って飲むためのものじゃない？ しかも、高くて美味いって酒なんだし、飲まなきゃ損損つてなわけだー」

お姉様はへれへれ笑いながら言います。

「貴様ー！ そこを動かすな！ 今、刀を持ってくる！」

「刀持ってきてきて何する気よ！？ てか、侍じゃないんだから！ それに、うちの先祖つて神主じゃなかった！？」

「その神社に奉納されていた宝刀がある！」

「そんな大事なものを血で汚していいの！？」

「刀は人を斬る為にある！」

「じゃあ、酒は飲む為にある！」

「屁理屈を言うなっ！」

「あなた！ 話題を逸らさないで下さい！ キャサリンって何なんです！？」

「待て！ 何故、包丁を握っているんだ！？ 待て！ 樹！ 逃げるな！」

「うわー！ お母さん！ 無闇に包丁を振り回さないで！ 私ちよつと掠った！」

冴上家のダイニングは狂騒状態に陥りました。

そこを先輩と私と三津花さんは密かに脱出したのでした。

## 偏屈先輩家族の狂騒（後書き）

何でも評価システムが変わったそうぞ。

これを機に1つ感想でも書いて頂けると嬉しいぞ。

どんな人が私の雑文を読んでいるのか気になるぞ。

## 偏屈先輩の御令妹の秘密

「じゃあ、私は部屋に引き籠もります」

三津花さんは自室の前で言い、先輩が応じます。

「うむ、それがよかるう。部屋には鍵をしておくのだぞ？ 姉上が逃げ込んできて騒動に巻き込まれるかもしれないし、混乱した母上が一家丸ごと無理心中を図るかもしれないからな」

「え？ お母様ってそんなに危険な人なんですかー？」

私は思わず聞いてしまいました。確かに、さっきは何故だか包丁を握り締めていましたけど、基本的に温和で穏やかな人だと思うのですがー。

「あの人は地味にかなり危険な人なのだ。我々は母上のせいで何度も危ない目にあつた。富士樹海で迷子になったり、車ごと崖から落ちそうになったり、気が付いたらイラクに不法侵入してたりしたからな」

それは何でそんな状況に陥ったのかかなり気になりますが、そのことには触れず、先輩は三津花さんにおやすみを言つてすたすた歩き出しました。私は置いてかれないように付けて付けていききます。「そーいえば、どーして三津花さんには攻撃しなかつたんですかー？ 弱味とか握つてないんですかー？」

「俺の知人で弱味を持つていない人間は殆どいない」

ちよつと気になつたので聞いてみると先輩は少し自慢げに言いました。自慢にならないと思います。

「じゃあ、ちよつとはいるんですかー？」

「いる。お前」

指差されました。小さい頃、人を指差しちゃいけませんってお母さんに言われませんでしたか？ じゃあ、何で、人差し指つていうんでしょうね？ 不思議不思議。

「私、弱味ないですかー？」

「ない。あつたらもう使ってる」  
使ってるんですか。もしも、あつたとしたらどこで使われたんだらう？

私がちよつと疑問に思っていると先輩がじつと私を見ていました。「何ですか？　ちゅーしたくなりました？　いつでもどこでもご自由にごうぞ」

「違う！　いつでもどこでもやらん！」

先輩は怒鳴ります。そんなに怒らなくてもいいのにー。本当に怒りっぽい人だなあ。

「じゃあ、何で私をじつと見てたんですかー？　私、そんなに可愛いんですかー？」

「やかましい」

先輩はぴしゃりと言い放つてから、難しい顔をしました。

「よくよく考えてみれば俺は貴様のことをあんまり知らんような気がする。そうだ。貴様の家も、家族も、出身の中学も、趣味も、特技も、好きな食い物も、将来の夢も知らんな」

先輩は不思議そうな顔で私を見つめます。

「これだけ一緒にいて全然知らんというのは、つまり、隠されているということだろうな」

んー。相変わらず、先輩は鋭いです。

「趣味も特技も特にないんですよ。強いて言えば、先輩の側にいることが趣味ですね。好きな食べ物も特にはないですしー。将来の夢はばつちり決まってますよー？　先輩のお嫁さんです」

小さな女の子の将来の夢の定番の1つがお嫁さんですね。その後、女の子の夢は花屋さんとかスチュウワースとか保母さんとかモデルとか声優とか紆余曲折した末に、結局、誰かのお嫁さんになるものですよね。原点回帰です。まあ、最近はお嫁さんにならない女性もいるみたいですけどね。あ、付け足しますけど、別にお嫁さんにならないことが悪いことだとは思ってませんよ？

「そんなことはどーでもいい」

先輩が聞いたくせにどーでもいいって何ですか。そもそも、自分の彼女の趣味とか特技とか好きなものとかをどーでもいいって言う彼氏って何ですか。あなたは本当に私の彼氏ですか？

「例えば貴様の家とか家族とかはどーなのだ？　ここまで貴様は俺の家と家族に浸透したのだから俺にだって貴様の家のことを知る権利があるっ」

「んー？　私のことはどーでもいいんじゃないかなかったですかー？　やっぱり、先輩も私のことが気になるんですねー？」

「馬鹿を言え！　誰が貴様のことなんぞ！」

私がぐふぐふ笑いながら茶化すと先輩は顔を赤く染めて怒り出しました。今の先輩は平時よりも幾分か堪忍袋の緒の耐久力が低いようです。

「そうだ。ところで、三津花さんの弱味って何なんですかー？」

「ん？　あれだ」

先輩は窓からお庭を指差しました。荒れ放題なお庭にも整備された森にも見えるお庭です。生えている植物はきちんとした草木なのか雑草なのかイマイチ判別としません。何でも園芸部に属する三津花さんが趣味で勝手に改造しているそうです。

「弱味なんですか？　公然と晒しているように見えますけど？」

「あの赤い花を咲かせている草が分かるか？」

「ええ。綺麗な花ですね」

「あれの実は麻薬の原材料となる」

「は？　え？」

麻薬？　麻薬の原料となる実をつける草って栽培していいんですか？　いいわけないですよ。

更に先輩は別の植物を指差して言います。

「あつちの灰色っぽい色の草は南洋の植物なのだが、絶滅危惧種に指定されていて、持ち出し禁止になっているやつだ」

「じゃあ、何で、ここにあるんですか？」

「さあな？　三津花が誰かに頼んだかネットか何かで手に入れたの

だろう。まあ、どちらにせよ犯罪ものだ。母上も姉上も気付いていないようだがな。分かったら即座に証拠隠滅の為に燃やされることだろう」

それが三津花さんの弱味だそうです。まあ、確かに、バレたら超ヤバイですよ。法的には、愛人作ってるとかお酒こっそり飲んでるとかよりも重大な問題です。

「三津花さんは何でそんな危ない草を育ててるんでしょう？」

私が首を傾げると、先輩が答えます。

「あの植物は両者とも黒魔術に使われるらしいのだ」

「黒魔術？ 三津花さんは黒魔術にも？」

「うむ。似合うだろう？」

私の言葉に先輩は頷きました。黒衣を身に纏い、蠟燭の火に照らされた薄暗い部屋で魔方陣を描き、謎の呪文を唱える三津花さん。うん。確かに似合いそうです。

「まあ、あれくらいの年頃の娘には神秘主義とか黒魔術とか心の病とか不治の病とかにかぶれる奴が多いものだ」

「そーなんですかー？ 私はあんまり興味ないですけどー」

「全員がそうだといってるわけじゃない。割合的に結構多いってだけだ」

先輩はすたすた歩き出しました。私も付いていきます。

「で、それを何で言わなかったんですか？ お父様とお姉様の致命的な秘密を暴露し、お母様に精神的な傷を与えるという無差別テロまがいの攻撃をしたのに」

私の問いに先輩ははつきりと答えました。

「三津花はかわいいからだ」

やっぱり兄馬鹿です。

「あの美しく可愛らしく愛らしい三津花の大事な大事な秘密を暴露するなど許されるものではない。この危険な秘密は俺が隠匿し通す。あ、さっき言った三津花の秘密だが、絶対に言うなよ？ 喋ったら承知せんからな」

先輩は怖い顔で念を押しします。なら、言つなよつて気もしますが、それだけ私が信頼されているつてことかもしれませぬ。それはそれで喜ばしいことです。

「しかし、先輩は三津花さんが好きですねー。シスコン？」

「シスコン言つな。妹を愛するのは兄として当然のことだろう。変な風に考えるな」

先輩はそんなことを言うのですが、それにしたつて三津花さんを大事にし過ぎだと思ひます。ズルイです。私もそれくらい大事にして欲しいです。いや、それ以上に大事に、愛してもらわなければ満足出来ませぬ。ええ、満足できませんとも。

「うわ！ 何だ！ 貴様、いきなり抱きつくな！ 転びそうになつただろうが！」

私は先輩にびつたりくつついたまま廊下を進みました。ちよつと歩き辛いですけど、愛の前では些細な問題です。

「ちよつ、歩き辛つ！ ぎゃあ！」

「うわあ！」

私と先輩は足が絡まつて仲良くコケました。

## 偏屈先輩の寝所へ

さて、前話においての私と先輩の会話を読む限り、読者の皆さんは思うことでしょう。「絹坂が上手く自分の家の話を誤魔化した」と。いえいえ、それではありません。そんなことはどーでもいいのです。私の家のことなんて知りたい人も別にいないことでしょうしね。でも、読者サービスってことで特別に少しだけ説明しちゃいます。私の家は、まあ、一言で言いますと、愛憎まみれた昼ドラチックなお家うちってところでしょうか。

そうそう。そんなことは別にいいのです。皆さんは思ったかもしれませんが。「何か先輩、トラウマ抉られたくせに元気じゃね？」と。甘いのです。そう考えるのは甘いです。そこでそう思ってしまった貴方は先輩検定2級には合格できません。先輩検定特1級の私には分かるのです。私は、先輩の言葉の調子、表情、目の動き、歩き方、姿勢、それらから彼の今の調子や心持を推測できるのです。

確かに先の会話においては私たちにおいては比較的普通の会話をしていたようにみえます。勿論、その会話の間、先輩は泣いていたわけでも涙で目が潤んでいたわけでも、しょんぼりと俯いたり、歩みが遅かったりしていたわけでもありません。いつものように鋭い目で真っ直ぐ前を睨み、背筋をすっと伸ばして胸を張り、大またで堂々と少し早い歩調で歩きます。これが先輩の歩行スタイルです。よく子供に怖がられ、犬に吠えられ、猫に睨まれます。

ただ、先輩検定特1級を持つ私から見れば、端々にいつもとは違う点を見つけることが出来るのです。

例えば、先の会話においても先輩は少し怒りっぽく、そして、ちよつと口数が多かったように思えます。先輩は人を攻撃するときと怒るときは滅茶苦茶喋りますけど、普段はあまり饒舌な人ではないのです。話しかければ応じてくれますし、喋りたいことは喋りまくるけど（例えば第一次世界大戦で活躍したガリエニ將軍の魅力につ

いてとか、毒ガスの恐ろしさとか、クリスマス休戦についてとか)。しかし、さっきの会話は喋りたいことではなかったようです。余計なこと（三津花さんの違法植物の件）を喋ってしまったと自分で後悔したりもしていましたからね。少し無理をしてたくさん喋ったのか少し頭がぼんやりしていたのかは分かりませんが、とにかく、先輩にしては珍しいことだったので。口数が多かったことも、口を滑らせてしまったことも。

その他にも、行動で言うならば、例えば、歩き方です。いつもはきつちり細い橋の上を歩くように真っ直ぐ進むのですが、今日の歩みは乱れています。先輩の進んだ後に線を引けばゆったりと右へ左へふらふらと揺れているのが分かるでしょう。最も右に寄った地点と左に寄った地点の間の幅は1mはあると思われれます。普通の人ならいざ知らず普段の先輩ならばその幅は30cm以内であるはずなのです。

他にも、いつもよりも少し落ち着かない目の動きとか（瞬きの回数がいつもの1.5倍くらいあります）、少し狭い歩幅とか、所在なさげに動く手とかですね。これらの点を見ますと、今、先輩は落ち着かない様子であると思われれます。やはり、トラウマが影響しているのでしょうか。

トラウマとは、つまり、先輩の過去の彼女（檜さんという人らしいですが）についてのことです。何でも、先輩は超愛していた彼女を病気で亡くしてしまっただんだそうです。

どこかの映画とかドラマとか漫画みたいですけど、まあ、世の中には若いのに病気になるって死んでしまう人もいますからね。こーいう悲劇も毎日のように世界の何処かでは起きていることではあるのでしょうか。しかし、起こった本人とかその関係者にとってはとんでもないことです。感動もへったくれもないと思います。ただ、理不尽な死に対する憤りと大切な人を失った悲しみが残るでしょう。

先輩は凶たく頑丈にみえて、実は結構繊細な人です。先輩の心にも大きな影響を与えていようということは想像に難くありません。

トラウマを抉られた先輩は意気消沈し、沈痛な気持ちでいることでしょう。

「ゆえにこれはもう私が夜通し一緒にいて心を慰めてあげねばいけません」

「なーにが、ゆえに、だ……」

先輩は真つ赤な顔で食いしばった歯の間から呻くように言いました。

「んー？ さっき言ったとおりの理由ですけどー？」

「つまり、俺が、傷付いている、から、慰めてやる、と……？」

先輩はふるふる震えながら言います。

「イエス」

「ふざけるなっ！」

先輩が怒鳴った瞬間、私は押し入りました。先輩が怒鳴る瞬間が隙の生まれるチャンスなのです。

何処に？ 先輩の寝所にです。

「ぎゃふっ！」

先輩は悲鳴を上げました。

見ると、ドアが額に当たったらしく、額を押さえて屈みこんでいます。というのも、今まで、私と先輩は1つのドアを挟んで押し合いをしていたのです。何故、そんなことをしていたのかといえますと、別に遊びでやっていたわけではありません。たまた遊びでドアの押し合いとかをしている子供がいますが、あれは結構危険です。指挟んで干切れたり、頭ぶついたりしますから。こーいうドアの押し合いは緊急時しかやってはいけません。例えば、火事とか犯人確保とか借金取立てとかそーいうときだけです。

「そして、今は緊急時だったんですー」

額が痛い。何すんじゃ阿呆と怒鳴る先輩に私は言いました。

「緊急時だど！？ どこがだ！？ 俺の部屋は火事じゃないぞ！？」

俺は確保されるべき犯人でもない！ そして、俺はお前に借金はしていない！」

先輩は薄っすらと赤い額を撫でながら叫びます。

「貴様が俺の部屋に入り込む理由とは何か!？」

「そんなに怒らなくてもいいじゃないですかー。そもそも、彼女が彼氏の部屋に入るのに理由などいるのですかー？」

「貴様、さつき、緊急だと申したではないか。理由なき緊急とは如何なることだ」

細かい人ですねー。

「まあまあ、そう怒らないで下さいよー」

私は先輩を宥めるように言いながら部屋に入り込みました。

先輩の部屋はとても綺麗でござっぱりとしていました。まあ、長らく空けていた部屋ですからね。今、先輩は大学のある所に住んでいますから。

あるのはベッドと机と本棚だけでした。本棚には本がぎっしり詰まっています。むつかしそうなから、子供向けの絵本まで雑多に詰め込まれています。

「それは、俺が今まで読んできた本だな。幼少の頃より捨てずに取って置いているのだ。ここにあるやつ以外に押入れにも入っておる」先輩は私を追い出すのを諦めたのかベッドに腰掛け、言いました。

「物持ちいいですねー」

「本は捨てれない性質でな」

私は結構どーでもいい会話をしつつ先輩の隣に腰掛けます。

「そーいえば、貴様は本を読むのか？ 前、ラノベを読んでいたような気はするが」

「ええ、ラノベは好きですよー。ハルとかキとかとドラとか狼 香辛料とかー」

「待て！ 具体的に書名を挙げるなっ！ 電×文庫に怒られたらどーするんだ!？ それに作者の読書傾向が暴露されるではないか!」

「大丈夫ですよー。あー、あと、漫画も読みますよ？ も しもんとかジオ リーダーズとかよっ ととか絶望先 とかー」

「だから、止めろって言ってるだろーが！ 読書傾向がバレル！」  
「でも、群雲関ヶ原とかインングランド海軍 歴史とか女王陛下  
影法師とか八月 砲声とかトマス・キツ シリーズとかも読んでま  
すよ？」  
「それは貴様がか？ それとも作者がか？」

**偏屈先輩の寝所へ（後書き）**

この物語はフィクションです。  
作者の読書傾向はノンフィクションです。

偏屈先輩に初めて（比喻表現）をあげる

さて、何故、私がこんなどーでもいい会話をしているのかといいますと、これには深遠な思惑があります。

別に、作者の読書傾向を晒したいわけでもありません。そんな奴どーでもいいんです。話す価値もありません。そもそも、作者の暴露なんかして笑いを取るような卑怯臭い真似をすること自体に問題があります。ちゃんとネタで勝負すべきなんです。

私にはある遂行なる目的があるのです。

その目的をいつもの笑顔の下にひた隠し、先輩にじりじりとじり寄ります。密かに、バレないように、少しずつ音もなく、先輩の方に近寄っていきます。数cmずつ、いえ、数mmずつ。さり気無く他愛ない会話をしながら少しずつ少しずつ。

「お前、ちよつと近くないか？ 暑いから離れる」

夜とはいえ、9月とはいえ、未だ残暑厳しく、また、この部屋にはクーラーも扇風機も扇子も団扇もなく、暑さは中々に耐え難いものがあります。特に先輩は暑さには弱い人ですから、温度の上昇には過敏なところがあります。

「まだ夏だからしょうがありませんよ。例え、私が数百m離れても暑いに決まっていますよ。だから、離れても意味ありませんよ」

「そうか？ そうか？ お前、嘘言ってないか？ 何か企んでないか？ ほら、その顔、企んでる顔だ」

先輩は私の説得には殆ど耳を貸さず疑い深い目で私を睨みます。

何で、この人はこー鋭いんでしょうか。面倒臭いな！  
「きつと、それは部屋が暗いからですよ」

秋分まではまだ日がある為、夜の時間になってもまだ結構明るい季節ではありますが、既に夜も更けておりますから、さすがに照明を付けねば暗いのです。今宵は何とも綺麗な真ん丸満月ではありませんが、窓から黄金の上品な光が仄かに差し込んでいます。

ね。

「なるほど。その可能性は無きにしも非ずだな」

そう言って先輩は立ち上がるうとしました。おそらく、照明をつける為に。

しかし、それは私にとって些ちかか都合の悪いことでした。いや、まあ、明るくてもいいんですけど、やっぱり、ちよっぴり恥ずかしいじゃないですか。

よって、ここは先輩の動きを止める必要があります。

「先輩！ 電気なんかつけなくてもいいじゃないですかー！」

「電気じゃなくて照明だろ。てか、何故にそんなことを言い出すのだ。やはり、何ぞ企んでないか？」

先輩は疑い深い目で私を睨みます。なんだって、先輩はそう人を疑わないではいられないのでしょうか？ そりゃ宗教とかがいうみたいにも何でもかんでも信じてたらあつという間に無一文になつてしまつような世の中ではありませんが、ときには人を信じることだつて大事なんですよ？ 大体、年がら年中365日24時間人を疑つてばかりいたら心が磨耗してしまいそうです。いや、案外、先輩は既に心が磨耗しきっているのかもしれない。だから、あんなにも人の心を抉るようなことを平気で言つたりできるんでしょう。

ん？ だとしたら、その心が磨耗しきつてすっかりなくなつてしまつた心無い人に恋した私は何なんでしょう？ やっぱ、外見で好きになつたのでしょうか？ それも、まあ、確かに理由の1つではあります。一番好きなのは性格だと思います。やたらと悪い性格ですけど、それがいいのです。

「何だ。いきなり、黙り込んで。照明つけるぞ？」

「……………先輩。やっぱ、私って物好きなんですかねー？ 珍味とかも好きですし」

「それは俺が珍味だつて言いたいのか？」

先輩は嫌そうな顔で私を睨みます。

「たぶん、先輩は、見た目は美味しそうだけど、なんか凄い臭いを

発してて人を寄せ付けけない上に食べてみたらうぎゃーってなりそうな味の珍味ですよー」

「貴様、喧嘩売ってんのか？」

先輩は一見すると苦笑いしているような表情でしたが、目と声の調子は確実に怒ってます。まあ、怒って当然かもしれませんが。心磨耗してますから尚更です。

「まあまあ、そう怒らないで下さいよー」

「怒らせておいて言う台詞じゃあるまい」

先輩はぶつぶつと不機嫌そうに呟きます。怒鳴らなかったのは、たぶん、今日はもう怒鳴り過ぎて喉が痛いからでしょう。

「ん。そーいえば」

ふと何かに気付いたらしい先輩が呟きます。

「貴様、帰らなくていいのか？ もうかなり夜も遅いが……」

ちつ。気付きやがりましたか。

確かに、既に日は沈み、夜は更け、良い子はお布団へ入る時間です。そのような刻限に女子高生が彼氏の部屋にいるというのは、世間的にいつてけしからん状況です。まったく最近の若者は！と何処ぞの爺様が言いそうな感じ。

しかし、私は帰るわけにはいきません。私には夢が、じゃない。目的があるのです。キング牧師の崇高なドリームとは比べ物にならないような低俗な目的ではありますが、私にとっては一大事なのです。

「先輩」

「何だ」

「愛しています」

「藪から棒にわけのわからんことを言うな」

私の愛の告白に先輩は顔をしかめます。

「先輩は私を愛していますか？」

「何でそんなことを聞かれなきゃいかんのだ」

私の愛の質問に先輩は顔を更にしかめます。

「理由がいるんですか？ 恋人が恋人に愛しているって聞いて何が悪いんですか？ ねえねえ？ そもそも、先輩は私の恋人としての自覚が足りなくありませんか？」

「き、貴様、おい、こら、近づいてくるな」

私は畳み掛けるように言いながらすいすいと先輩に迫ります。先輩は困惑した顔で後退りします。しかし、この部屋はまあ狭い部屋ではありませんが、無限に空間が広がっているわけではありません。ばたばたと逃げ回れるほど広いわけでもありません。

先輩はすぐに部屋の片隅に追い詰められました。いや、この言い方は変ですね。言い換えます。

すぐに私は先輩を部屋の片隅に追い詰めました。

「先輩。私は覚悟を決めました」

「何の覚悟だというのだ？」

先輩は渋い顔で尋ねます。おそらく、彼は気付いているはずですよ。だって、こんな状況なんですよ？ 彼氏の部屋に彼女がいて、時刻は夜で、家族は下の階で混乱中でこちらに来る可能性は低く、つまりは2人きりに限りなく近い現状ですよ？ そりゃやることは決まっています。男と女が2人いてやることなんて原始の時代から決まっています。

「先輩に、私の、比喻で言えば初めて、もうちょっと直接的に言う」と純潔もしくは貞操、まあ、ぶっちゃければ、処女またはバージンをあげる覚悟です」

「貴様！ 処女とかバージンとか言うな！ この小説を18禁に移動させる気がっ！？」

私の言葉で先輩は顔を真っ赤にして怒鳴りだしました。あんなに怒鳴っていて、まだ怒鳴れるんですね。先輩の体の中で最も丈夫な箇所は声帯に違いありません。声の仕事に付けば良いんじゃないでしょうか？

「あら、先輩。何を言っているんですかー？」

「いや、それはこっちの台詞だ！ 貴様こそ何を言ってるんだっ！

？」

先輩の怒声に私は反論します。

「処女とかバージンとか言うのがいけないんですかー？ そんなことを言っただけで18禁になってしまっんですかー？ それはおかしなことですねー」

「おかしいのは貴様の脳味噌じゃ！」

「いえいえ、そんなことはありません。だって、よく考えて下さいよー。ほら、作家さんが初めて書いた作品のことを何て言います？ 船が初めてする航海のことを何て言います？」

先輩はぎゅつと眉根を寄せ、苦々しい顔をしました。私が黙っているので、彼は洪々と答えました。

「処女作と処女航海だが……」

「花嫁さんがお父ちゃんと歩く道を何て言います？」

「お父ちゃんて……」

先輩はちよつと変な顔をして呟きましたが、すぐに答えました。

「バージンロードだが……」

「まあ、バージンロードを歩く花嫁の99%は、てか、殆ど100%バージンじゃないですし、できちゃった結婚でバージンロードとか何言っつてんじゃこのアマみたいなこと思いますが、こんな誰もが考えることなんて言う必要はありませんね。うん」

「なら、言うなよ」

先輩が不機嫌そうにぼそつと呟きました。ご尤もです。

「とにかくです。処女もバージンも普通にそこら辺で言っても差し障りない単語のほうです。だって、もし、この言葉がすべからく18禁にされてしまったら、新人作家の紹介とかタイタニックの特集とか結婚式の司会とか全部18禁にしくちゃいけませんよー。でしよ？」

「また、屁理屈を……」

イライラとした様子で言われましたが、さすがに私も年がら年中屁理屈を唱えている人には言われたくないです。屁理屈大魔王のく

せにー。

「てなわけで、処女とかバージンとかいう単語をいくら書こうとも叫ぼうとも、それだけでは18禁として隔離されることはないのです！」

「まあ……、まあ、確かに、そうではあるな」

先輩は釈然としない顔で呟きます。

「そして、私は先輩の恋人であり、ここは先輩の部屋、つまり、私にとっては彼氏の部屋であり、時刻は夜であり、私たちは2人きりです。ゆえに、私がこの要求をするのは当然のことなのです」

私は正当なる権利のもとに要求しました。

「先輩！ 私の初めてを、言い換えれば純潔或いは貞操、ずばり言えば処女、英語で言えばバージンを、貰ってください！」

「どうあからつ！ 単語そのものは18禁ではなくとも、その後を続けると途端にヤバくなるだろうがっ！ そして、その行為をやっちゃうと完全に18禁突入じゃろうがっ！？」

いつまでもこんな論争を繰り広げてはいけません。先輩と話をするのは好きなのですが、いつまでも話しているのも考えものです。それに、夏の夜は短いのです。

私は顔を真っ赤にして怒鳴る先輩に私は飛びつき、一気に唇を奪いました。前歯がちつと当たってかなり痛かったです。そんなことは些細なことです。すかさず両手両足を回して先輩にしがみつき、そのまま先輩諸共倒れこみます。先輩は後頭部やら背中やらをぶつけたようでしたが、これも些細なことです。そんなことよりももっと大事なことがあるんです。映画でもドラマでも小説でも漫画でも言っています。

この世で重要なのは、いつだって愛なんです。

## 偏屈先輩の彼女の友人

「ぬふふ……」

「何、コロ。気持ち悪いよ」

私が思わず漏らした笑みに友人は嫌そうな顔で言いました。

背が高く長い髪の眼鏡の娘です。彼女は私の数少ない友人で、例の秘密組織の現委員長をしています。彼女は須々木<sup>すすぎ</sup>っていう名字で、私はススって呼んでいます。「キ」取っただけですけどね。

「キモイ」

彼女は本当に嫌そうな顔で私を汚物でも見るような目で言います。おーっと、これはちよつと傷付いちゃいますよー。心が弱くて追い詰められている人なら自殺しちゃいますよー。絶　先生が絶望しちゃうですよーって、また、二次ネタですか。

「友達にキモイって言わないで下さい。そんなこと言うなんて、それでも友達ですかー？　それとも、これはイジメですかー？　先生ー。私、虐められてますー」

私は教卓の辺りでクラスメイトと雑談していた（今は昼休み中なんです）先生に訴えかけます。

「あん？　ああ、気のせいだ」

私の訴えに私のクラス担任の先生（通称、ヒゲ）はぞんざいに言い捨てました。これこそが昨今話題の公務員の怠慢なんでしょうか？　これは何処に文句言えはいいんですか？　教育委員会ですか？　それともテレビ局とか雑誌社にネタを売ればいいんですか？　まあ、どっちも面倒臭いからしませんけどね。

「で、そのキモイ笑いは何なのさ？　また冴上先輩関係？」

ススは私の弁当箱の中を箸で何やら弄くりながら言います。人の弁当箱で何してるんですか？

「ん。そですー。てか、私のブロッコリーをバラバラにしないで下

「さい」

「早く食べないあんたが悪い」

「いや、何で、早く食べないとブロッコリーバラバラにされるんですかー？ 早く食べることにブロッコリーバラバラにすることの関連が分かりません」

私が弁当箱を取り上げ、彼女の箸が届かない安全圏へ移動させると、ススはちよつと残念そうな顔をした後、何事もなかったかのようにならぬお弁当に向き直りました。たまに、この子の行動が私には分からなくなります。

「それで、冨上先輩との間で何か良いことあったの？」

ススは醤油をかけたメンチカツをバラバラにしながら、さして興味なさそうな口調で尋ねました。

その質問に思わず私の頬は緩んでしまいます。だって、何てたって、私は、ねえ？

「えーへーへーへー」

「何だ。気持ち悪いな」

彼女は嫌そうな目で私を見ます。

「わっ！ やめて下さい！ 箸の先につけた醤油を飛ばさないで下さい！ シャツに醤油染みができてしまいます！」

「何々！？ 何を騒いでるのー！？ あ！ まさか、恋の話！？」

恋！？ 恋！？ 愛！？ L・O・V・E、LOVE!？」

私たち、というか、醤油を跳ね飛ばされた私が騒いでいると、何か柔らかいものがぶつかってきました。

その柔らかいものは白くて、っていうか、まあ、シャツの色で、その柔らかいもの本体はきつと桃色がかった肌色なのです。で、結局、これは何かといいますと、はつきりと申し上げますと、おっぱいです。ええ、男の子が大好きなおっぱいです。それも、かなり大型の。

「ミッチ。すぐ抱きつくの止めて下さいー。暑苦しいですー」  
ん？ はて？ 同じようなことを私も誰かに言われたような気が

しますけど、まあ、気のせいでしょう。

「何さー！　ちょーつとくらい抱きついてもいいじゃない！　私とコロの仲でしょー！」

「乳を押し付けしないで下さい。暑苦しいです」

私はちよつとイライラした気分でおっぱいを押し退けます。生憎と私は男の子ではないので、おっぱいはそんな好きなわけではないのです。ぶつちやけ嫌いです。

私に乳を押し付けたのは、私の数少ないもう1人の友人（といいますが、私にとって友人と呼べる人は以上に述べた2人つきりなのです）で、私たちはミツチと呼んでいます。

微妙に赤っぱい（夏休み前は茶色っぱかったような気がしますけど）巻き毛で、大きな胡桃形の目の、最近、流行っぱい顔立ちの子です。身長は平均レベルで、体型も全体的に普通なのですが、ただ一点、大きな特徴があります。それは、ずばり、さつきから申している通り、おっぱいです。乳です。胸です。その大きさをや平均的な女子高生のレベルを遥かに凌駕しています。テレビや雑誌、写真集、DVDで媚びるような笑みを浮かべているグラビアアイドル並みです。EなのかFなのか或いはGなのかは分かりません。想像もできません。とにかくでかいのです。そこでかきたるや蜜柑、桃、林檎では間にあいません。まさにメロン並みです。冗談抜きで小型のメロンほどの大きさを誇っているのです。そして、柔らかいのです。まるでマシユマロです。メロンぐらいの大きさのマシユマロですよ。食べたらずきそうな大きさのマシユマロですよ。そこで、もにゅんもにゅんと柔らかいのです。走るとばいんばいん揺れるんです。それを見る男どもの顔も揺れるのです。阿呆どもめっ！

は？　私の乳の大きさはどうかって？　何カップかって？　うっせえっ！　んなこと知るかつ！　巨乳は死ねっ！

「ひどーい！　コロが冷たいー！　ススー！　コロが冷たいよー！」

「あー。はいはい」

「ススも冷たい！？」

ちなみにススの乳は普通です。並です。だから！ 私の乳の大きさはどーでもいいんだっつーのっ！

2人から冷たくされたミツチは少しの間、殊勝なことに、悲しそうな顔でしょんぼりと大人しくしていました。何かを思い出したかのように、はっとすると、すぐに馬鹿みたいに明るい表情を取り戻しました。

「そうそうー！」

曹操？ 三国志時代の英雄の？

「そうそうー！」

もう曹操はいいですってば。彼女は話が回りくどいというか、話の主題に入るまでが無駄に長いんです。話していると、結構イライラしてくるので、私とススは彼女が主題に入るまでは殆ど聞き流すようにしています。

「そうそう！ って、あれ？ 私、何言おうとしてたんだっけー！？ ーんと、えーっとー、あ、そうそうー！」

曹操はもういいってば。だからって劉備とか孫権とか言われても困りますけど。えっと、私の言っていること分かりますか？ 分かりますよね？ 結構、有名です。ほら、三国志のね。

「そう！ コロの話よ！ ねえ！ それってば、恋の話なの！？ 恋！？ 愛！？ ラブ！？」

興奮するミツチを前にして私は少し考えます。まあ、確かに、恋とか愛の話ではあると思います。でも、それよりかはー。

「んー。まあ、そうですね。まあ、恋とか愛とかいうよりかは性「くおらあつー！」

私が昨夜のことを具体的に話そうかと思ってた矢先に、私は思いつき後頭部を叩かれました。べちつといい音がしましたよ。

「きつさま！ 何を喋ろうとしておった！？」

振り返るとそこで怒鳴っていたのは誰あろう彼あろう（たまに先輩が使っている語法なのですが、これが何なのかはイマイチ分かりません）私の愛しの先輩その人でありました。

偏屈先輩歸省中

偏屈先輩の彼女の友人（後書き）

2008年最初の更新です。

2007年最後の更新で、処女だなんだと言って、

2008年最初の更新で、乳だなんだと言つとは、  
情けないというか恥ずかしいというか……。

兎にも角にも、そのような作品ですが、何卒、本年も宜しくお願い  
します。

## 偏屈先輩は校内を走り回る

「貴様はまーった余計なことをべらべらと喋ろうとおったな！  
？ 貴様はいつつもいつつも余計なことをべらべら喋り腐  
りやがって！ 少しは口にチャックしろ！ その軽い口に錘おもりを付け  
ろ！ この阿呆め！」

先輩はいきなりマシガンのように口撃を加えてきます。出会い  
頭だからといって容赦なしです。私もススもミツチもヒゲ鬼もクラ  
スメイトも啞然としていても何ら容赦しません。人を攻撃するとき  
の先輩の口の早さときたら尋常ではありません。

「大体だな。貴様には恥ずかしいとかそーい感情が足りないの  
はないか？ 日本人はもつと控え目であらねばいかん。そーでない  
と、白人連中みたいにいいい年になっても腹丸出しの服やらビキニの  
水着やらを着て外を出歩くような恥知らずな行為に及びかねんから  
な！」

先輩は一人で怒鳴り散らしたり、説教みたいなことを言ったりし  
ました。その間、私は大人しくじつと先輩の話聞き、ススは欠伸  
しながら私の弁当箱の中のブロッコリーをバラバラにし、ミツチを  
含めたその他の皆はまだ啞然としていました。

「おっと、そうだ。こんなことを言っている場合ではなかった。貴  
様にかまっている暇なぞなかった」

先輩はぶちぶちと呟くと「じゃあ」も「後でね」も「愛してるよ」  
も言わずに、さっさとつけてけ歩いて行ってしまいました。

「あ？ あ！ あいつ、何、普通に、校内に入ってたんだ！？」

先輩が教室から出て行った後になって、ヒゲは叫び、どたばたと  
教室を走り出ていきました。

「あ、あれ！ あれ、冴上先輩よね！？ コロの彼氏の！」

「ええ、そです」

ミツチが手を激しくばたばたと振りながら叫ぶので、私はテキト

「に答えました。「そです」っていうのは、別に「楚です」って言ったわけではなくて、「そうです」を簡略化させて言っただけです。あ、楚っていうのは中国の春秋・戦国時代から漢の時代くらいまで中国南部に大きな勢力を誇った国です。四面楚歌の「楚」はこの「楚」のことです。曹操よりは有名じゃあないと思いますが、知っている人は知っていると思います。知らなくても大丈夫です。殆ど漢文の授業でしか出ませんしね。

「何しに来たのかしら？」

「無論！ 私に会いにですよー！」

「え！ そーなの！？ きゃー！ 素敵ー！」

ススの呟きに、私は箸を握り締めて叫びます。私の言葉にみつちも興奮しました。この娘は愛だの恋だのラブだのの話となると見境なく興奮する娘なんです。私は密かに恋愛狂暴走娘と呼んだりすることもあります。

力の入った私と興奮するみつちをちらっと見てススは醒めた様子で言いました。

「さっさと何処かに行っちゃったけど？」

そう言われると反論できませんねー。私は黙って弁当消化を再開するしかありません。

「あ、あれ？」

急に静かに昼食を食べ始める私たちを見てみつちは平素から丸い目を更に丸くさせておろおろします。場の雰囲気之急に変わると、彼女はついて来れないのです。まあ、いつものことなので、私とススは無視します。昼休みは無限ではないのです。ちまちま飯を食べていてはあつという間に昼休みは終わってしまいます。

「あんたも、さっさと飯食わないと昼休み終わっちゃうよ」

「あ、う、うん」

ススに言われ、みつちは椅子を引き摺ってきて、私たちの側に座り、買ってきたメロンパンを食べ始めました。しかし、メロンパンを3つも買ってきて、この子は残りも全部食うつもりなんでしょう

か？ 1個で足りないのなら、別のパンを買ってくればいいのに。  
どんだけメロンパン好きかってこってすよ。どんだけメロンパンナ  
ちゃんが好きかって話ですよ。

「あ、でさー！ でさでさー！」

だから、さつさと早く本題に入れてば。

「結局、コロの話はなんだったの！？ 愛の話！？ 恋の話！？」

「ああ、そーね。何で、あんなキモ笑いしてたのさ？」

そーでした。結局、言っていないでしたっけ。言ってしまいたい  
です。言って、惚気のろけたいです。しかし、先輩に余計なこと言っ  
て叩かれたしな。でも、先輩、どっか行っちゃったからな。今、  
言っても分かりませんよね。

「えっとですな。まあ、愛とか恋関連の話です。スス。本当にい  
い加減、ブロッコリーをばらばらにするの止めて下さい。もう粉々  
じゃないですかー」

ブロッコリーの残骸が弁当箱中に散乱しています。まるで弁当に  
何かパセリみたいな青いものをばら撒いたような有様です。ブロッ  
コリー自体は、何と云いますか、あの細かい粒々が全て分離させら  
れ、禿げた枯れ木のように芯こ（と云っていいのかどうかも分かりま  
せんけど）だけが残され転がっています。

「もうこんなにしてー。この後、どーすんですかー？」

「知らない。私、ブロッコリー嫌いだし」

無責任な……。

「てか、あなたはブロッコリー憎しの一念でバラバラにしていたの  
ですかー？ そんなん自分の弁当箱でやって下さいよー」

「私の弁当には入ってないし」

「嫌いだから、自分の弁当箱にはブロッコリーないんですかー。だ  
から、私のでって、意味分かりません。そもそも、ブロッコリーを  
バラバラにする意味が……」

「2人とも、いつまでブロッコリーについて話す気なの？」

みっちが珍しくまともなことを言い、私はそれもそうだと頷きま

した。確かにいつまでもブロッコリーのことを話していてもしょうがない。放っておけば、私たちはいつまでもブロッコリーの呪縛から逃れることができず、延々とブロッコリー話に続けるに決まっています。

てか、何の話でしたっけ？ ああ、そうだ。私と先輩のことについてです。

「ぐふ」

「うわ！ 何！？ その変な笑い声みたいなの！」

「こいつ、さつきから、こんな含み笑いしてんのよ」

昨夜のことを思い出してしまい、思わず洩らした笑みに、2人の友人は気味悪そうに身体を引きまします。

そんな2人を見て、暫く考えてから、私は決めました。

「あー。やっぱり。これは内緒にしておきましょう。話すと幸せが逃げそうです」

「散々引つ張っておいてそれかよ」

「ケチー！ 意地悪！ 根性悪！」

「あー。確かに、コロって表面上は良い子っぽいけど根っこの方は凄い性格悪いよね」

「うんうん！ そうそう！ だから、友達少ないんだよ！」

「あなたのこと嫌いな連中は、きつと、キモいとかうざいとか思っ  
てんのよ」

何か散々ボロ糞言われてますけど気にしません。私には先輩さえいれば万事OKなんですからー。

私は高校生です。学生です。学生の本分は何かと言われれば学業としか答えようがありません。

故に、私は学校に通い、こうして、授業を受けているのです。しかし、英語は眠くなります。先生の唱える英語は何だか眠りの呪文の如き効果を持っているようで、私たち生徒を次々と木製枕（机のことです）に撃沈させていきます。先生ってば、わざと眠くなるよ

うにやっってるんじゃないかかって疑ってしまいなくなるほどです。不眠症の人の所へ行ってきたらいいと思います。

私は大きく欠伸をしてから、眠気を覚ますべく、顔をぶるぶると犬のように振ってから、顔を手でごしごし擦り、ほっぺをぎゅーっと引つ張ってみます。それでも欠伸が出ます。うーん。効果ないんですかねー。少なくとも、眠気を覚ます十分な力を持っているとは思えません。私は断続的に押し寄せる欠伸の衝動に耐えながら、首を動かしてこきこきいわせたり、軽く頬を叩いたりしてから、ちよつと風に当たろうと考えました。ちよつどよいことに私の席は窓際で、うちの高校の教室にはクーラーなんて上等なものがないので、窓を開けることによつて冷気を取り入れることになっています。その窓の開け閉めは窓際に席を構えた人々の自由裁量に任されているのです。よつて、私がちよつくら窓を開けて風に当たろうとも文句を言われることはないのです。

「あー。風が涼しいですねー」

窓をがたがたいわせながら開けると爽やかな風が入ってきました。まだ9月初旬で、残暑は残っていますが、今日の風は結構マシです。ここが3階だからつて理由も大いにありますけどね。

「ん？」

先生に怒られない程度に窓からちよつとだけ顔を出していると、何やら怒声らしき声が聞こえ、動くものが見えました。

もう少しだけ、顔を出して見渡すと、校庭の隅を走っている数人の人々が見えました。

かなり遠くで、顔を見分けるのはとても難しいことでしたが、私には分かりました。ええ、分かりますとも。私の視力はある一定の条件ではアフリカの狩猟民族並みになるんです。勿論、その条件とは、先輩絡みのことに決まっています。ということ、自ずと、走っているうちの1人が誰かつてことは皆さんにも分かるでしょう。そう。先輩です。どうやら、先輩とその友人の方々がハゲ鬼（頭が光つているので分かりました）に追われているようなのです。

そーいえば、昼休みにクラスメイトが先輩たちと先生たちが校内で鬼ごっこをやっているって話していましたねえ。先輩つてそんなに暇なんでしょうか？ てか、卒業生とはいえ、学校関係者じゃない人を長いこと校内を自由に走り回らせておいていいんでしょうか？

「えーっとー。絹坂さん。そんなに窓から体を乗り出していたら落ちてしまいますよ？」

ふと気付くと、私は先輩の姿を追いかけて、窓から上半身を乗り出していました。おっとっと、危ない危ない。危うく転落死するところでした。

「注意して頂きありがとうございますー」

「いえいえ。で、絹坂さん。ちょっと廊下で立ってて下さいね」

「はいー」

私はクラスメイトのくすくす笑いを背に浴びながら廊下に出てぼーっと立ち呆けました。

「くおらー！ お前ら、いい加減にしろー！」

暫く、立っていると、廊下の先から怒声が聞こえてきました。と、同時にはたばたと廊下を駆ける音も。

「あら！ 絹ちゃん、立つてるのー？」

「おーおー。何で、立つてんのさー？」

先輩の友人の蓮延先輩と草田先輩が走り寄りながら言いました。

「先輩たちを窓から見えていたら立つことにー」

「そりゃご愁傷様ー」

「今、その愛しの先輩も来るぞー？ かなりバテてるけどなー」

そう言いながら2人は廊下を駆け去っていきました。

続いて、先輩も走ってきました。その後ろには私たち生徒最大の天敵であるハゲ鬼が憤怒の形相で追いかけてきます。ハゲ鬼は走る速度はそれほど速くないんですけど、持久力が常人の比ではないのです。ホーミングミサイルのように延々と地の果てまで追いかけて

くるのです。

「先輩。先輩。何で、また、学校に来てるんですかー？」

「お前、何で、さりげなく併走しとるんじゃない？ ガキは教室でお勉強してろ！」

私が一緒に走るとすかさず先輩が怒鳴ります。少しバテ気味のようです。まだ怒鳴れるだけ元気なようです。

「廊下に立たされてたところなんですよー」

「廊下に立たされている間、廊下を走ってもいいなんてことはなからうが！ 黙って立ってる！」

「まあまあ、てか、何で、先輩、走ってるんですかー？」

「……貴様には関係ないことだ」

私が尋ねると先輩は難しい顔をして走り去って行ってしまいました。何ですか。その思わせぶりな間は？

「おい！ こら！ 絹坂！ 何で、お前まで廊下に出とるか！」

とりあえず、今は校内を走り回る先輩を助けるべくハゲ鬼を惹きつける囿になってあげましょう。

## 偏屈先輩に優しくされる

「先輩」

私はぶんぶん大きく手を振りながら走りました。全力疾走です。「まるで犬だな」

後ろでススが何か言ったのが聞こえました。私は目も耳も鼻もいんですよ。でも、文句は言いません。抗議もしません。今はこのまま走って先輩に体当たり、じゃない、抱きつくのが最優先事項です。

「おい！ 貴様！ ストップ！ 止まれ！」

走る先にいる先輩が怒鳴りました。

「いいえ！ もう止まれません！ 私の心のエンジンはもう恋のエネルギー満タンで止まることなどできないのですー！」

「何をわけ分からんことをほざいてるんだっ!？」

ちょっと上手いこと言えたと思ったんですけどねー。心のエンジンは恋のエネルギーで満タン……。やっぱ、いい感じの言い回しだと思っんですけど。

「貴様、数年前にここで俺を殺しかけたのを忘れたわけではあるまい！」

そうです。思い出しました。私が1年の時。先輩が3年の時。忘れもしません。先輩の卒業式後、ここで私は先輩に告白しようとして突撃し、勢い余って先輩を突き飛ばしてしまい、先輩は軽トラに轢かれて腕を骨折したんです。あの二の舞を再び演じるわけにはいきません。

私は慌てて足を止めました。アスファルトの上を靴底のゴムが擦ります。子供向けの漫画とかだどこかでゴムが磨り減ってこげたり火花が散ったりするんですけど、現実、そんなことはありません。せいぜいがアスファルト上に薄く積もった砂（おそらく校庭の砂が風に巻き上げられて飛んでくるのでしょーね）が舞い上がって砂埃

を立てるくらいです。

と、その砂の粒が少々大きかったのか私の靴底がずりりと滑って、すってんころりんと私はその場で転んでしまいました。こう右足が上滑りして、お尻から地面に。咄嗟に突いた手が、特に手首が痛いんです。

「あー！ もう！ 俺が怪我しなかったらお前が怪我するんか!？」

先輩がイライラした様子で駆け寄ってきました。

「大丈夫か？ 立てるか？ 痛いところは？」

「はい。たぶん。手首」

先輩が立て続けに質問してきて、私は忠実に答えました。それから、よいせと立とうとしました。いつまでも下校する生徒の群れの中で尻餅ついているのも、さすがに恥ずかしいですからね。

「こら。立つな」

ところが、先輩に両肩を& a m p ; # 2 5 6 8 1 ; まれ、無理矢理尻餅続行をさせられました。は、まさか、周知プレイを!？」

「しゅうちの字が違う。まあ、確かに、お前が尻餅しているのを周知させてはいるが。勿論、羞恥プレイでもない」

先輩は私の前にしゃがみこむと私の両手を掴みました。いつもみたいにぎゅっと強く掴むんじゃなくて優しく硝子細工を持つように持ってくれるんです。こんな繊細な扱いされたのたぶん初めてですよ！ あ、それだけで、興奮して、鼻血出そうです。

「手を突いたのか。阿呆め。手首が折れてはどうする。馬鹿者。ちよつとした事故でぼきつといつてしまうこともあるのだぞ？ このボケ。まあ、幸い大事はなさそうだがな。まったく、愚か者」

「合間合間に返さないで下さいよー」

阿呆とか馬鹿とかがなければもっと良い感じだったのにー。何で、こう台無しにしてしまうんでしょうか？

阿呆とか馬鹿とかがなければもっと良い感じだったのにー。何で、こう台無しにしてしまうんでしょうか？

「煩い。貴様が阿呆で馬鹿でボケな愚か者だから悪いのだ。あー、

ほら、手の皮が少し剥けているではないか。血は出ていないようだがな」

先輩は私の手を取って、砂を払ってください。

「ケツは？ 痛くないか？」

「ケツって言わないで下さいー。お尻と言って下さいー」

「ケツも尻も一緒だろ」

「一緒じゃありませんよー。感じが違うでしょー」

「どっちも一緒だ。少なくとも、俺には同じにしか思えん」

「どっちでもいいならお尻って言って下さいー」

「そもそも、何故に尻はよくてケツはいかんのか？」

「何かケツっていうと汚い感じがするんですー」

「じゃあ、汗臭い男の尻って言ったら、汗臭い男のケツよりもマシだっというのか？」

「それはどっちも汚い感じがしますけどー」

「人の往来の真ん中でケツだ尻だ言い合うなよ。処女、乳の次は尻か」

いつの間にか背後に来ていたススが呆れ顔で言いました。仰るとおりです。

「貴様のせいで須々木に注意されたではないか」

「先輩のせいですよ」

「どっちでもいいから、さっさと立ち上がったらどう？」

ススはすっかり呆れ果てたようです。まあ、さっきの台詞のときから呆れていたようですがね。

「ほら、立てるか？」

先輩は私の両手を持って、優しくゆっくりと引き上げてくれました。

「大丈夫か？ 足とか挫いてないか？」

表情はいつも通りむっつりと不機嫌そうな顔をしています。その言動は何故だかいつもの先輩ではありえないほどに優しいです。

いや、まあ、彼女がコケたら「大丈夫？ 怪我不い？」とか聞い

て優しく立たせてやるのが彼氏としては普通なんでしょうけど。先輩にそんな普通の優しさを求めるなんてことは無意味なことですし、そもそも、間違いです。そんな優しさを期待する人は先輩の彼女になれません。友達にもなれないでしょう。

そんな彼氏としてというか人間としてどうかというほどに優しさを持ち合わせていないはずの先輩がこんなに普通に（まあ、かなり馬鹿にされましたけど）優しく接してくれるなんてことは異例であり、驚くべきことなのです。

そんなわけです。私は口を滑らせてしまいました。

「……何だか、今日の先輩。やたらと優しいですね。ちょっと気持ち悪い」

「何だと!? 貴様! いつも優しくしろ優しくしろ言ってるくせに、いざ、優しくしてやると気持ち悪いだと!? 馬鹿も休み休み言え!」

ああ、せっかく、さっきまで優しい先輩だったのに、あつという間にいつもの人を怒鳴ることが趣味みたいな怒りっぽい先輩に逆戻りしてしまいました。豚も煽おたてれば木に登るというのだから、先輩も「先輩ってこーいうときは優しいんですね。そーいうとこ好きです。テヘ」とか言つて煽おたててもつと優しくなってくれるように仕向けるべきでした。失敗失敗。

「はあ、まあ、いい。ほら、大丈夫か?」

先輩は呆れ顔で言いました。何だか、凄くあつさりと引き下がってくれました。これもまた珍しいです。先輩は人のことをねちねちねちねち虐めるのが大好きなんです。それが、こんなにあつさりと「まあ、いい」で済ましてくれるとは。

それから、私のお尻をぺんぺん叩きました。

「あ! セクハラですかー?」

「ちやう! 砂埃を払ってやってるだけだろ!」

「分かってますよー。ノリで言つてみただけですー」

「ノリでそーいうことを抜かすな! ボケ!」

先輩はまたぷりぷりと怒りましたが、すぐに溜息とともに「まあ、いい」で済ませてしまいました。これは何とも不思議なことです。何故に、先輩がこんなに心優しい（普通の人に比べればさしたる優しさでもありませんけど、先輩にしては大層な優しさなんです）のか不思議でしょうがありません。

「先輩ー。何で、今日はこんなに優しいんですかー？」

「……俺が貴様に優しくしてはいかんのか？」

「いや、いかんことは何もないし、これからもそーしてくれろと私としては嬉しいのですがー。あ、勿論、私は先輩に他の人と同じような優しさなんて求めてませんよー？ 普通の優しさが欲しければ、先輩となんか付き合いませんからねー。でも、やっぱり、先輩はちよっと意地悪が過ぎるっていうか、もうちよっと優しくてもいいかなーって、少なくとも人間として真っ当な程度の優しさは持っていて欲しいなーって思うわけですよー」

「貴様は俺を馬鹿にしているのか？ それじゃ、俺がまるで血も涙もない鬼畜のようではないか」

そんなつもりはないんですけどねー。

## 偏屈先輩が優しくするには理由がある

「あれ？ そーいえば、草田さんと蓮延さんは？ さっき、一緒に廊下走ってましたよね？」

周りを見回しても一緒に走り回っていたはずの草田さんと蓮延さんの姿が見えません。見えるのは私と先輩を遠巻きして眺めていたり、こそこそと囁き合ったりしている下校中の生徒の皆さんだけです。何を話しているんでしょうか？ 私と先輩が大騒ぎした先の始業式のことかでしょうかね？

「連中は帰った」

「え。帰ったんですか？」

「帰った」

思わず聞き返すと先輩は再び同じ言葉を繰り返します。

何だか不思議というほどのことではありませんが、何だか違和感があります。草田さんと蓮延さんは先輩とも私とも仲が良く、大抵一緒に行動していたものです。途中で帰るとは少し不思議です。

「途中で帰ったんですかー。何か用事あったんですかー？」

「帰した」

再び尋ねると、先輩の答えがちよっと変わって返ってきました。

「帰したんですか？」

「帰した」

帰ったが帰したになりました。っがしに変化しましたよ。

「何ですか？」

「教えない」

意地悪ですねー。ツンデレですか？ あ、でも、先輩にデレなんかあるんですかねー？

はっ！ まさか、さっきの優しさがデレだったのかもしれない。と、ゆーことは、私は先輩の貴重なデレに対して、戸惑いから失礼

な反応をしてしまったのではないのでしょうか？ 今更、後悔しても遅いかもしれません。もう先輩は2度と優しくしてくれないかもしれません！ ツンデレがツンツンになつてしまふかもしれません！先輩にさして優しさを求めていないとはいえ、先輩に優してもらうのが嫌いなわけではないのです！ 私は迂闊にも貴重な先輩の優しさを浪費してしまつたのです！ 後悔してもしきれません！ 後悔先に立たずとはこのことですよ！ ちょっと前に立つてて下さいよ！ そつたら、誰も困らないのに！

「むー。出てこないな……」

私が後悔に苛まれてはわはわしているのと先輩がぼそりと呟きました。見ると、先輩は何やら視線をあちこちに飛ばしています。何かを探しているようにも見えますが、しかし、あからさまに顔をあちらこちらに向けているわけではありません。あくまで目だけを動かして辺りを見回しています。何を探しているのでしょうか？ そして、何が出ないのでしょつか？

「何が出ないのでしょつか？」

「貴様には関係な……くもないことだが、言わん」

なんか、それ、凄い気になる言い方なんですけど。それなら、関係ないってスツパリ言ってくれた方がまだいいような気がします。

先輩の視線を見ますと、さつきから下校中の生徒たちに向けられているように思われます。私も先輩に倣つて下校中の生徒たちを眺めました。

私たちの周りには下校途中の生徒がたくさんがいました。いくらかは私たちの様子を興味深げに、或いは楽しげに見ていたり、ちら見だけして帰る人もいます。まあ、普通の人の普通の反応です。

その中で、ふと1人の女生徒が目に付きました。どこかで見たことがあるような少女です。

艶やかで長い黒髪、少し切れ長で、鋭い瞳、すらつとした長身。

何か、全体的に先輩の好みっぽい感じですか。特に、強そうな目元が。先輩はちよつと強い感じの目が好きなんです。至極残念なことに私

の目はふにゃふにゃらしいですけど。く。目力が欲しい。

辺りに生徒はたくさんいるのに、どうしてその少女が特に目に付いたのかといえば、彼女の表情です。まるで親の敵でも見るような憎悪と嫌悪に満ちた顔をしています。そして、彼女の視線はどーやらこちらに向いているのです。何がそんなにも気に食わないのでしょうか。

「むう。来ないな……」

先輩がふと呟き、私は視線を先輩に戻します。見ず知らずの少女の怖い顔を見ている暇があったら先輩を見つめている方が有意義です。

「もー。何探してるんですかー？ 来ないってことは、誰かを探してるんですかー？」

「まあ、そーだな。ちよつと会いたい奴がいるのだが、おそろく、そいつは俺が出向いても会ってくれないだろう。故に、ちよつくら校内で騒ぎを起こして、俺がいるってことを知らしめて、その上でちよつとそいつを怒らせて誘き寄せようと思ったのだ」

先輩は渋い顔で説明しました。なるほど。だから、先輩は無意味に校内を走りまわっていたりしてたんですね。私はてつきり暇潰しをしているのかと思ってましたよー。ん？ 怒らせて誘き寄せようとした？

「んー。それはー、つまりー？ 何が、相手を怒らせる予定だったんですか？」

「俺がさつきやっていた言動だ」

私の問いに先輩はぶつきらばうに答えました。さつきやっていた言動ってのは、つまり、あの妙に優しくかった言動ですかね？ そーですね。て、ことは、先輩が私に優しくしてくれてたのは、きちんと目的があつてのことだったんですね。まあ、どーせ、そんなことたるうとは心の片隅で思っていましたよ。先輩が無償の優しさをくれるなんていうキリスト教的優しさに目覚めることなんてないのは分かってたんですから。先輩、キリスト嫌いですし。神様はもっと嫌

いですし。

てか、先輩が私に優しい言動を取ると怒るってのは、つまり、どーいった人かってことを考えてみますと、その答えは自ずと限られてくるものです。赤の他人は、偏屈で酷い性格で有名なOBがその彼女に優しい言動をしているのを見ても「あの冷血人間が珍しいことしてる」とか「あの人もやっぱ彼女には優しいのか」とか「ノロケやがって……」。バカツプルは家の中で盛ってる！」とか思うだけでしょう。怒るとしたら、その当人のことを好いている人とかでしようか？ つまり、先輩が私のことを好いている人ならば嫉妬などの理由により怒るかもしれません。

しかし、先輩のことを好いている人だとしたら先輩に会いたがらないという理由が分かりません。普通、好きな人にはできる限り会いたいと思うものでしょう。私なんかは会うだけじゃ我慢できなくて、ずうっと付きまとってましたけどね。実は、下校中の先輩の後ろを付けたりもしてたくらいです。まあ、いつつも途中でバレてたんですけどね。あと、先輩の持ち物や口をつけたペットボトルとかを密かに持ち帰ったり……他諸々。あ。そのあなた、引かないで下さい。これはれっきとした純愛なんです。ディーラブです。まあ、ストーリーとして訴えられても文句言えませんが。

次に、私のことを好いている人がいるとしますが、これだと先輩が会いたがっている理由が分かりません。決闘とかすんですかねー？先輩が私のことを「こいつは俺のものだ」とか言ってくれたらそりゃもう嬉しいんですけどねえ。まあ、実際はありえないでしょうし、想像もできませんけど。

色々考えてみましたけど、いくら考えても結論は出ません。分からないことはさっさと聞くのが一番です。

「その人って、一体、何者なんですかー？ どーして、その人に会いたいんですかー？」

「むう」

質問しても先輩は唸るだけで明確な答えを出してくれませんでし

た。

暫く、沈黙した後、不意に私を見つめました。何ですか？ そんな見つめられたら ちゃいます。一応、伏字にしときます。ご自由にお好きな2文字を入れて下さい。

「やはり、もうちつと挑発せんと出てこんようだ」

「そーなんですかー」

「そーなのだ。故に、止むを得ん」

先輩はするつと私の顎を優しく押して上げさせ、体を屈め、私の唇に自分の唇を当てました。

辺りで「きゃー！！！」とか「おー！！！」とかいう黄色い喚声やら何やらが聞こえてきますけど、私にとつちやあ他人の目なんかは関係ありません。ただ、先輩とのキスに集中します。五感のうち聴覚と味覚はシャットダウン！ 触覚は先輩の唇を味わうことに集中し、視覚は至近距離に迫った先輩の顔を見つめることに集中し、嗅覚は先輩の臭いを感じることに集中します。

先輩は唇を微かに合わせるだけの軽い軽いキスだけをするつもりのようにでした。どこぞにいる誰かを何故だか怒らせて自分の目の前に呼び出す為らしいです。

しかし、そんなこと私には関係ありませんよ。素早く両腕を先輩の頭の後ろに回して逃げられないように固定し、脚を絡ませ、先輩の唇を舌で舐め、隙あらば口内に侵入しようと思論みます。

「あなたはっ！！！」

そのときです。少し近くから少女の甲高い怒声が上がったのは。

先輩は素早く視線を向けて、相手を確認すると、私の頭を両手で掴んで無理矢理押し退けました。酷い。

私は渋々キスを諦めます。続きは家で。

「久方ぶりだな」

先輩は目を細め、相手を見つめ、呟きました。

その相手とは、つまり、少し前に、私が発見した何故か恐い顔をしていた少女でした。この娘が先輩が会いたがっていた相手のよう

です。

「檜」

ぼそりと先輩が呟き、私は少し驚いて、先輩を見ました。先輩はひどく悲しげな、物憂げな表情をしていました。

檜。それは、先輩の元彼女の名前。

**偏屈先輩が優しくするには理由がある（後書き）**

大層更新の間が空いてしまいました。その上、何だか、コメディイラ  
しからぬ雰囲気になってきております。申し訳ありません。

## 偏屈先輩と檜の亡霊

檜。それは、ヒノキ科ヒノキ属の針葉樹です。まあ、それは関係ないですけど。

先輩は私たちの前に現れた少女を見つめて「檜」と、そう言いました。この場面で、先輩が意味もなくヒノキ科ヒノキ属の針葉樹のことを口にする必要などあるはずがありません。

先輩が言った「檜」という言葉は、おそらく人の名前に違いありません。それ以外に先輩がその言葉を口にするなど考えられません。そして、私はその「檜」という名前の人に心当たりがあるのです。

ひのきりの檜利乃、という人のことを私は聞いたことがあります。先輩は勿論、誰も彼もあまり喋りたがらないので、よくは知らないのですが、その檜さんという方は先輩の元彼女だったのですが、どーやら先輩と死に別れた人らしいです。

その檜さんとの死別は先輩に結構なトラウマを植え付け、長らく私が先輩にアタックし続けていた間、それに対し満更でもなかった先輩が私と付き合うことを頑なに拒んできたのはその死別した檜さんが原因であるらしいのです。未だもって、先輩はそのトラウマを克服しておらず、時折、心痛に悩んでおられるらしいです。

その檜さんの名前がこの場面に出るとはどーいうことでしょうか。はっ！ まさか、この目の前の少女が「檜」なのでしょう！？ 死んだってというのは嘘だったとか！？ 或いは、死んだってのは何かの比喻だったとか！？ だとしたら、最強のライバル出現っていう展開ですかー！？

と、1人で興奮・混乱している場合ではありません。

「私のことは覚えているんですね」

目の前の少女は、怒りと憎悪に満ちた目で先輩を睨みながら刺々しい口調で言います。

「お姉ちゃんのごことは忘れたくせに」

この言葉で、少しピンとききました。つまり、彼女は、先輩の元彼女である檜さんの妹ということでしょうか？　しかし、また1つ疑問が浮かびます。「忘れたくせに」というのは如何なることでしょうか？

「いや、忘れていない」

先輩はとても静かに答えます。いつもの短気で怒りっばい先輩っぽくありません。

「嘘っ！！」

檜さん（勿論、元彼女である檜さんの妹である檜さんのことです）が、先輩の言葉を聞くなり、即座に怒鳴ります。

「あなたはお姉ちゃんに全然会いに来ないじゃない！」「死んだ人にどーやって会うっていうんですか？

「ああ、確かに、俺は墓にも仏壇にも行っってない」

ああ、お墓参りとか仏壇参りとかのことですか。先輩が参らないのも、私には理解納得できません。というのも、先輩は神様嫌い宗教嫌いを公言するだけあって、天国も地獄も死後の世界も幽霊さえも信じていないのです。先輩に言わせれば、人というか生物は「死んだらそれで、はい、おしまい」であり、その後はもう何も無いそうです。だから、死んだら、その人は、お墓にも仏壇にも、天国にも地獄にもいなくて、会うことはもう2度とできないんだそうです。

大変、冷たく感じられる思想です。しかし、考えてみると、これは先輩が苦悩の末に導き出したものではないかと私は思います。

そう。人が死んでも、何処か（例えば、天国とか）に存在すると思います。すると、先輩は死んでしまった檜さんに絶対に会えない、わけではないことになります。何処かには存在するのですから、その何処かに行ければ会えるということです。その何処かに行くにはどーすればいいかといえば、相手は死人なものですから、死んだ人が行く場所にいるに決まっていますから、会いに行くにはこっちも死ななければいけません。と、なれば、先輩は自殺しなければいけな

い。という論法になります。これは、さしておかしの思考ではないはず。

そもそも、神や死後の世界という概念は、元を辿れば、死んだ人にもう一度会いたい。或いは、死んだ人が、死んでも安寧にあつて欲しいという遺された人々の想いから生まれたものに他なりません。そして、死んだ人をお世話するために、その人の妻や召使、奴隷などが一緒に殺されたり、殉死したりしたのは、死んだ人に会うには自身も死ななければいけないという論法そのものです。と、これは殆ど、ある書物の受け売りです。先輩の蔵書の1つです。これを先輩が読み、私が推理したように思考したことは十分に考えられます。

まとめましょう。つまり、死後の世界があるとすれば、死んでしまった檜さんは、そこにいるということになります。その檜さんに会いたくて会いたくてしょうがない先輩は、彼女に会う為には死ななければいけない。しかし、安易に死ぬわけにはいきません。もし、死後の世界がなければ、死に損ですし、檜さんだつて、先輩に死んでまで来て欲しいと思うはずがありません。どころか、自分のせいで、愛する相手も死んだとなれば、自分が相手を道連れにしたという事になってしまいます。それは哀しく、辛いに決まっています。さて、ここまで考えた先輩は、どーすればいいのか。

結果、先輩は、檜さんはもうこの世にもあの世にもどの世にもいない。もう2度と、何をして、絶対に会えないということに、決めたのです。そーすれば、先輩は、自分の檜さんに対する恋慕と後を追いたい衝動を胸の内に抑えておけるというわけです。

全ては、私の推理ですが、きっと遠からず同じことを先輩も考えただけです。とっても強引で屁理屈で偏屈な論法は先輩の好みです。さて、そんなわけで、死後の世界など信じない先輩が、お墓という石の塊と、仏壇という木の塊に、何の価値を見出すというのでしょうか。ただ、檜さんの名前があつたり、写真が飾つてあつたりするだけです。

「確かに、行っていない。しかし、檜のことは忘れていない」

先輩ははつきりと言いました。そんな所にわざわざ行かなくとも、先輩は、きつとずっとその檜さんのことを想っていたに違いありません。ちよつと、いえ、かなり妬げちゃいます。

「じゃあ、その隣の女はなんなの!？」

女とか言われましたよ。誰かっついていえば、当然、私に他なりません。

「お姉ちゃんのことを忘れて、のうのうと他の女とよろしくやっているんでしょー!」

「そのことをお前に説明せんとならん」

怒る檜さん（妹）に対し、先輩は落ち着いた声で話しかけます。

「俺は、檜と…お前の姉さんと別れた後」

が死んだ後、と言わないのは、やはり、檜さんの死を少しでも意識したくないのかな。と私は思ったり思わなかったり。

「もう2度と恋とかそーいうのはせんと思っていた」

そう。そうなのです。その先輩の心中自分ルールみたいな誓いのせいで、私は大層苦労する羽目になったんです。そんな自分ルールしないでくれれば、私も無意味に傷付いたりせんでよかったのに。

まったく、なんなんですかねー？ この人は。妙なところで、妙なことに拘る人ですからね。思えば、今の状況もそうです。きつと先輩は、もう2度と恋しないっていう自分ルールを自分で破ってしまったことに何か罪悪感みたいなのを抱いていて、それを謝るか何かしたいのでしょうか。

そこで、彼は考えた。自分で自分に謝罪など阿呆らしい。心など籠もるはずがないし、自分1人でやっていては馬鹿みたいだ。じゃあ、誰か、他の人に叱ってもらえばいい。でも、誰が叱る？ 私と先輩がどれだけ乳繰り合おうが他人にとっては関係ないこと。ただ、「このバカツプルうぜー」とか思うだけです。それだけでは不足も不足です。

そこで白羽の矢が立ったのが、檜さん。例の自分ルールは先輩の中では先輩の先輩に対する誓いであつたと共に、死んでしまった檜

さんへの誓いでもあったのでしよう。それを破ったからには、檜さんにも謝罪するか何かしなければならぬ。しかし、檜さんは死んでる。じゃあ、他に誰がいる？

「じゃあ、今のその女はなんですか！？ あなたたちの関係は！？ 恋人でしょう！？」

ほら、目の前にいる。この何故だかお姉さんの元彼に大層な敵意を抱いている彼女です。

何か、全部、種明かしすると、馬鹿馬鹿しく思えてきますねー。これって、結局、先輩の自己満足なんですよ。先輩ってば、心が強いのか弱いのか分からない人ですねー。

あれ。何か、今日、私、思考が黒い？ いやいや、そんなことはないんですよ。私は天真爛漫にして無邪気で幼稚な天然少女なんです。きゃぴ とか言ってみます。虚<sup>むな</sup>しい。

と、こんなふうになが、虚しくも頭の悪い思考を1人繰り広げているのは、何といても暇だからです。先輩と檜さんは何か熱くなくて言い合っていますけど。私にとってはどーでもいいことです。先輩にとっては罪悪感を減らすための自己満足。檜さんにとっては、なんですよ。姉を失ったことを元彼のせいにして、悲しみを怒りに還元して、ぶつけているんですよかね。

私はこっそりと欠伸をしながら、空を見ました。ああ、いい天気。今日は小春日和です。

偏屈先輩と檜の亡霊（後書き）

やたら絹が黒いです。

たぶん、作者の黒さが出ているのでしょう。

## 偏屈先輩は冷静になり

「あなたは最低ですっ！ 言っていることなんて口先だけで、お姉ちゃんのこともなんか、全然考えてないんですっ！」

「俺が最低であることは少しばかり否定し難いが、檜のことを考えていないわけではない」

「嘘っ！ もう忘れているんでしょう！」

「忘れていたら、わざわざ、お前を誘い出して、こんな言い合いをしたりしないだろうが！」

「こんな方法で呼び出すこと自体が非常識で失礼ですっ！」

先輩と檜さん（妹）は相変わらず延々と同じような話題をぐるぐるループさせています。そんなこととして楽しいんですかねー？

てか、先輩、本気で謝る気あるんですかねー？ こんなことしている暇があつたら、私は先輩と一緒にテレビでも眺めながらアイスでも食っていたいですよ。9月とはいえ、まだまだ暑いですから。

てか、この小説、実際の季節とかと全然ズレてますねー。ぶっちゃけこんなに寒いのに暑い描写なんて無理やねん。

私はそんなことを考えつつ、欠伸を噛み締め（堂々と欠伸なんてできる雰囲気じゃないですからね）、空飛ぶトンボと木で鳴くセミなんかを見比べていました。

「もうあなたなんかと話していても意味はありません」

今まで激昂していた檜さん（妹てか、これ省略していいですか？）は、ふっと表情を消し、静かな声で言いました。

この意見には私も同意です。

先輩は頭はいいんですけど、考えすぎなのがいけませんね。考えすぎて思考がループしながらどんどんドツボにはまっていくことがあるんですよねー。

「いや、待て。まだ話すべきことが」

しかも、先輩って話長いんですよねー。年取ったら迷惑なおっさ

んになりそうですねー。

「もうこれ以上、今、ここで話し合っても意味がありません」  
檜さんは先輩に言い聞かせるようにもう一度言った。

「また日と場所を改めて話し合いましょう。周りの目も、ありませんね」

「それもそうだな」

一転、先輩と檜さんは冷静に話し合います。更には、いつに、どこで、何時ごろ、落ち合うかということまで手早く打ち合わせしていきます。なんなんですか。この人たち、真つ赤な顔して怒鳴りあつてたと思つたら、あつさりとした冷静な態度に移っています。この2人、意外と似たもの同士なんじゃあないでしょうか？ そう考えると、なんか嫉妬しちゃいます。ので、先輩に抱きつくことにしました。暇だつたつてもありますけど。

「ぎゅ！」

「やめ！」

「あふ！」

腕にぎゅつと抱きつくとき瞬時にぺちつと顔を叩かれてしまいました。こんな機械的に邪険にされると結構悲しいです。

結局、私は蚊帳の外で、2人は冷静に打ち合わせを済ませ、あつさりとは別れました。

檜さんは群がっていた生徒の群れを真つ直ぐ突つ切つて去っていききました。まるでモーセのように人波が割れた……ってほど、人がいたわけでもないですけどね。

この周りにいた人たちつてのは、下校途中に、私と先輩のバカップル行為（先輩にとっては檜さん呼び寄せするための挑発行為。まあ、餌だつたわけですけど）、突如、発生した先輩と檜さんの怒鳴りあい興味深そうに、或いは啞然と見つめていた人たちです。暇なんですかねえ？ 一応、私の親友であるはずのススはいつの間にかさつさと帰ってしまったています。「私帰るね」程度は声かけていってくれればいいのに……。あの人つてばしつかりしてる風に見える

て、実は凄いマイペースで自分の気分でもやったりやらなかったりしますからねー。

まあ、それは置いて。

「さて、先輩。用は済んだのでしょうか？ とりあえず、帰りましよう」

私は懲りずに先輩の腕をぎゅっと抱きしめながら上目遣いに言います。先輩は上目遣いに弱いんです。こーいう高慢ちきな男の人は下から見上げるといふ従順で媚びる風な上目遣いに弱いんです。へっへっへ。あれ？ 私、最近、悪い女になってませんか？

「む。まあ、そうだな」

先輩は渋い顔で頷きます。

「これからどーしますー？」

私は尋ねます。せっかく、彼氏と彼女が2人放課後暇しているのですから、何もせずに、それぞれの自宅に帰って「また明日ー」なんてことは勿体無いこと極まりありません。勿体無いお化けが出てしまいますよ。

「あ。そーだ」

先輩に尋ねておいて、先輩の答えが来る前に私は妙案を思いつきました。

「先輩先輩。私の部屋来ませんかー？」

「何故、俺が貴様の部屋に行かねばいかなのか。俺はさっさと家に帰ってアイスでも食いたいのだ。こー暑くては堪らん」

先輩は面倒臭そうに言います。でも、私はめげません。こんなんでめげてたら先輩の彼女は元より友人さえも務まりませんよ。

「だってだって、先輩の家にはお母様もお姉様も三津花さんもいるじゃあないですかー」

もしかするとお父様もいるかもしれませんが、そっちは敢えて口にしません。わざわざ自分から先輩の気分を損ねるようなことをしなければいけないのでしょうか？ する必要はありませんとも。人間、危ない橋は渡らず避けるべきなのです。それが賢い人間という

ものですよ。

「母上や姉上や三津花がいることに何か問題があるのか？ いや、いようがいまいが、勿論、貴様が我が家に来るということは許容しがたいことではあるが。昨日の貴様の訪問は俺の許可を得て行われたことではないからして」

「いやいや、そんなことはどーでもいいんです。先輩の長い話に付き合っていては、話が進みません」

先輩は苦い顔をして黙り込みました。先輩も少しくらい静かにしているべきなのです。勿論、べらべら喋っている先輩が嫌いなわけではありませんが、今言っただように、話を沈滞させてしまうのは宜しくありませんし、いつまでも話させていると上手く言い包められてしまいますからね。それに、静かに真面目な顔で本など読んでいる先輩の横顔などはレアなだけあって、私にとっては垂涎ものでもありますからして、おっと、話が逸れましたね。

「いいですか？ だってねえ。やっぱり、やりづらいじゃありませんか。一緒の部屋ではないにしても、同じ屋根の下、同じ家の中に家族がいる状態で、そんなことってのもねえ。いや、まあ、私は人がいるところでもいいんですけどー」

「おい、待て。お前はさつきから何を言っているんだ？」

私が先輩の腕を抱きしめつつもじもじしながら言っていると、先輩が口を挟んできました。

「その、やりづらいとか、そんなこととか、何を言っている？」

「え？ それはもちろん、セ」

「待て！」

私が答える前に先輩が怒鳴りました。

「何で、貴様はそーやって危険な放送禁止用語を放漫に口にしようとするのだ！？ せめてもうちつとオブラートに包んだ物言いをする！」

オブラートに包んだら、言っている意味がよく分からないじゃないですかー。それにかわゆい女の子がえっちなこと言ったら男の人

は興奮するもんじゃないんですかねー。何で、先輩が怒るのか理解できませんね。

「んー。じゃあ、秘め事？」

「それもイマイチ包み切れていないというか包んでいるオブラートが薄すぎる気がするが、まあ、いい」

先輩は渋々といった感じです。

「それが、何故、さも当然に、やるということが前提になって話が進んでいるんだ？」

「不満ですか？」

「不満か不満でないかと二択で問われれば、不満だ」

そんな釣れないこと言われると、ほっぺが膨らんでしまいます。

「ほっぺを膨らませるな」

「ぶっ」

膨らませたほっぺを潰されて、変な音が出ちゃいました。唾もちよつと出ちゃった。

先輩はそのまま私のほっぺをぶにぶにしています。私のほっぺは気持ちいいらしいですからねー。私も先輩にほっぺをぶにぶにされていると幸せな気分です。

「こらー！ お前らー！」

暫く、バカッブル（少なくとも端からはそう見えただしょう）でぼやぼやしていると、校舎の方から聞き慣れた怒声が聞こえてきました。見ると、おお、なんとということでしょう。ヒゲ鬼&ハゲ鬼の生徒の天敵コンビが走ってきました。おそらく、先輩を怒りに来たのでしょう。先輩は元在校生とはいえ、今は卒業生。学校当局の許可なく高校の敷地内にはいけないのです。今の先輩は追われる身なのです。

「うげ。奴らがきおった。しつこい連中だ」

「ここは、とりあえず、逃げましょう。捕まったら、まーた拳骨と校庭周回の刑ですよー」

「うむ、そのとおりだ。この暑い中、走るのは億劫だが、いたし方

あるまい」

先輩と私はさっさと逃げ出しました。愛する2人の逃避行っばく  
て私はいい気分なのです。

**偏屈先輩は冷静になり（後書き）**

久しぶりの更新です。

遅れてしまい申し訳ありません。

てか、後書きこんなばっかだなー。

## 偏屈先輩が好きな訳

「ああ、疲れた。もう嫌だ。もう走りたくない。俺は今日はもう走らねーぞ。百万やるから走れって言われても走らん。走らなきゃ殺すって言われても走らん。そんなに欲しけりゃこの命くれてやるわ」

先輩は疲れた表情ながらも、目だけを爛々と禍々しく光らせ、ぶちぶちと文句を言いながら、ずんずんと歩いていきます。疲労のせい、か、歩みはそれほど速くなく、たまにふらつとしますが、雑草を蹴散らしたい踏み潰したりしながらしつかりと歩いていきます。先輩は不機嫌さをエネルギーにできるんです。てか、そんなに雑草を蹴散らさないでもいいじゃないですか。雑草だって生きていますよ？

あと、先輩の最後の台詞は聞き捨てなりませんねー。

「先輩先輩ー。ちょっと激しい運動したからって、そんな簡単に命放り投げて下さいよ。真面目な人に怒られますよー？ 学校の先生とかお偉い政治家さんとかPTAとか何か臭い話書いてる作家とかにー」

「けっ」

先輩は不機嫌そうに言い捨てました。敢えて先輩が嫌いな人たちを並べてみましたからね。特に、先輩は臭い話書いてる作家とか臭い話が大嫌いです。恋人が不治の病にかかって死んじゃうとかいう小説が書店に並んでいると、必ず威嚇するほどです。唾を吐き捨てんばかりです。さすがに売り物にそんなことはしません。天下無敵唯我独尊な先輩だって法律に触れるようなことはできないのです。

「ところで、お前、手を離せ」

先輩はそう言うといきなり右手をぶんぶん振り始めました。一緒に私の左でもぶんぶん振られます。まるで子供がるん と仲良

く手を繋いで歩くように。

嘘です。手が千切れそうです。

「せ、先輩ー。肩が痛いですー。もうちょっと弱めにー」

「じゃかあしやあ。さっさと手を離せ。ボケ茄子」

何だつて先輩はすぐそーやってお行儀のよくないことを言うんでしょーね。

さて、先輩に手を離せと言われた私ですが、この私が素直に「はいはい」と言つて手を離すわけがありません。私にとっては、崖から落ちそうな人の手を掴んであげているときに「俺はもういい。このままじゃあお前まで落ちちまう。手を離してくれ」ってこういうような場合よりも、手を離し難いことです。

「こら、おら、ほら、離せ離せ。は、な、せつ！」

「もー。先輩つてば、どーしてそんな手を離したがるんですかー？」

「こんな衆目の中で平気で仲良く手を繋いでられるかつ！？ そのような恥知らずなことできようはずもないっ！」

先輩は腕を高速でぶんぶん振り回しながら怒鳴ります。あまりにも大きな怒声なので、周りの道行く人々が視線を向けます。そんなふう怒鳴っていることの方が恥ずかしいと思えますけどねえ。そもそも、怒鳴らないで平然としていれば、そんなに見られたりもしないと思えますけど。

「そんなこと言つたら、世の中のカップルとか夫婦とか親子とかは皆恥知らずつてことになつちやいますよー」

「カップルの殆どは恥知らずだ。自分らのことしか見えてねーからな」

それは偏見つてやつですよ。まあ、恋とは熱病のようなものとかどっかのお偉いさんが言つたように、恋に浮かれて周りが見えていないつていう人たちもいるでしょう。それでも、殆どつていうのは言い過ぎですよ。せいぜい8割くらいですつて。残りの2割くらいは自分のこと以外も見えてるはずですよ。例えば、正規の彼氏彼女の他に彼氏彼女がいるカップルとかね？

「まあまあ、そーいうのもいいじゃないですか。恥を外に晒していると分かっていても、それが気にならないし、周りも何だかんだ言いながら見逃してくれる。それが恋つてもんですよー」

「いいや。俺が許さん。そんな恥知らずな恋人たちは、神が許そうとも、最高裁が無罪の判決を下そうとも、俺が許さん」

「まったくもー。どーして先輩はそー愛とか恋とかに厳しいんですかねー？」

自分だつてそーいうことしているそーい身分だつていうのにー。「やかましい。そーいう幸せそうな連中を見ると、腹が立つのだから、仕方あるまい。逆に別れ話をしているカップルとか修羅場になっている場面を見ると、愉快で愉快で堪らん」

先輩はそんなことを言いながら口の端を吊り上げ、にやにやと笑いました。

先輩の視線の先を見ると、ちょうど近くのカフェのオープンテラスで一組のカップルが別れ話をしているところでした。彼女が別れようと言い、男は嫌だどごねている場面です。双方とも、結構な声で言い合っているので、丸聞こえです。

そんな様子を見て、先輩は本当に愉快そうに笑うのです。

「あれは、絶対に別れるぞ。見る。あの女の話をするのも面倒臭いといった顔を。それに、さっきから、ちらちらと時計とか携帯電話を気にしている。あれは、別の男と約束をしているに違いあるまい。まったく、何という悪い女だ。けしからん。しかし、男の方も相手にもう脈がないと分かかっておるうに、いつまでもぐだぐだぐだと文句を言い募るとは、男らしくない奴だ」

「……先輩って本当に嫌な性格してますよねえー」  
私はしみじみとそう思って言いました。

「嫌な性格をしていることは否定せんが、それじゃあ、その嫌な性格の俺のことを好きだと言っているお前は何なんだ？」

「うーん」

ちよつと考え込んでみます。本当に何でこんな性格最悪な人のこ

と好きになつたんだらうなあ。

外見も、勿論、あると思います。先輩はとても格好いいです。女顔で、女装しているときの方が見た目いいですけどね。でも、見た目よければ全部よしとは私は思いません。だって、きつと、先輩と同じ顔、或いはもつと格好いい容姿で、違う性格の、例えば、もつと優しく、行動的で、男らしくて、爽やかな人がいても、きつと、私はその人のことを好きにならないと思います。そんな人と一緒にいてもきつと楽しくないでしょうし、一緒にいたいとも思わないでしょう。

「うーん、先輩と一緒にいると面白いからですかねー？」

「それじゃ、お前、お笑い芸人と付き合えばよいではないか。言つとくが、俺は笑いを取ることなんかできんし、したくもないぞ」

「いや、そーいう意味の面白いじゃないんですよー」

あ、いい喩えが思い浮かびました。

「ほら、ゲームつてあんまり簡単すぎると面白くないじゃないですかー。道順どおりにただばけーつと進んでいけば、ラスボスで、しかもあっさり倒せるRPGなんて駄作じゃないですかー。それよりは、迷子になりそうなダンジョンをいくつもクリアしていつて、色々な条件をクリアして、やっとこさラスボスで、しかも、そいつが滅茶苦茶強いつてんなら、よーし、やってやるぜーつてな感じに燃えるでしょー？」

「じゃあ、俺はお前にとつちやあゲーム代わりなのか？」

先輩は不機嫌そうな顔で私を睨みます。あ。機嫌損ねた。やばいです。喩え失敗。

「一緒にいて、振り向かせるのが楽しいつて意味ですよー。一筋縄じゃないかいつてところが難しいゲームに似てるつてことですよー」

「結局、ゲーム代わりか？ そんなゲームしたかつたら1人でやつてる」

「もー。そーいうことじゃないですよー。うーん。あ、そうだ。先輩つてツンデレですからねー。きつと、私はツンデレスキーなんで

すよー」

「はあ？」

何だこいつ。気持ち悪いこと言い出しやがった。みたいな目で先輩が私を睨みます。

「てか、俺がいつデレた」

まあ、確かに、先輩がデレることなんてほぼないですねー。あつたとしても、ちょっと優しくしてくれるくらいですか。

じゃあ、私はツンツンが好きなんですかねー？

「まあ、とにかく、私は物好きなんですよ。きつと」

「貴様。人を変なものの扱いか？」

「まあまあ、そんな怒らないで下さいー。どんな理由であろうと、私が先輩のことを愛していることには変わりないのですからー」

私がそう言うのと、先輩は変な顔をして黙り込みました。あ、ちょっとツボだったんでしようか？ 先輩は真っ直ぐな愛情表現に弱いところがありますからねー。根は曲がってるのにな。

「なーに、にやにやと気持ち悪く笑っておるか」

「いーえー。べつつにー。あ、そーだ。せっかく、素敵なかフェのオープンテラスがあるんですからお茶でもしていきませんー？ 歩くのも疲れたでしょうし、喉も渴いているんじゃないですかー？」

「む。貴様もたまにはよいことを言うな」

私の意見に先輩は珍しく素直に賛同してくれました。先輩はやっぱり体力ない人なので、疲れているときや暑いときの、休憩とかお茶って言葉にはとっても弱いのです。

そんなわけで、私と先輩は、自然と空いていた、修羅場を演じている破局寸前のカップルの席の近くの席に座り、破局寸前のカップルの悲惨な言い合いを聞きながら、楽しくお茶をすることでした。

「他にも席は空いているのに、こんな席に座るなんてどーかしてるって顔してましたねー」

「さっきのウエイトレスか？ 見る。周りの客も似たような顔をし

「ておるぞ」

「そーですねー。あ、今度は彼女を寝取った間男の参上ですよー」  
「面白くなってきたな」

私と先輩は隣で熾烈な言い合いを繰り広げる男女に聞こえないような小声で言葉を交わしながら、にやにや笑い合っていました。

結局、似た者同士だから好き合っているのかもしれない。

**偏屈先輩が好きな訳（後書き）**

久しぶりの更新です。

すいませんすいませんです。

たぶん、明日も更新できると思っています。

## 偏屈先輩を誘い込め！

私と先輩は、暫くの間、アイスコーヒーのお供に、カップルの悲惨な別れ話 + 間男参上という真つ赤な修羅場を楽しんでいました。

「人の不幸は蜜の味だな。アイスコーヒーがとても美味い」

「そーですねー。さて、この絶望的な状況は、どう収まるのでしょうかー？」

私と先輩は、にやにやと笑い合います。

暫く3人の言い合いを聞いていると、なんと3人目の男が参上しました。

「新たな男ですよ。何役なんでしょうね？」

「んー。女の別の浮気相手とかじゃないか？ 三股だったのか」

私と先輩は小声で言い合い、アイスコーヒーをじゆるじゆると啜ります。

新たな男が現れて女とその振られる寸前の彼氏は困惑気味です。

そりゃ別れ話の最中にいきなり知らない男がやってくれば迷惑にも思うでしょう。

会話を聞いていくうちに、衝撃の事実が明らかになりました。彼はなんと間男の彼氏でした。間男はなんと両刀だったのです！

「ぶふーっ！！ げほっごほっ！！」

その事実を聞いた途端、私と先輩は仲良くアイスコーヒーを噴出し合いました。

「何じゃそりゃっ！ 男と女の別れ話の最中に現れた間男っていう修羅場に、間男の彼氏参上ってっ！！」

「そんなにお笑いではないですよっ！ もしかすると、あなたたちって4人のお笑いカルテットで、ゲリラコントしてるんじゃないですかあっ！？」

「なるほど、それならば、納得だ。絹坂。賢いな」

「いえいえ、それほどでもー」

私と先輩は「はっはっはー」と仲良く笑い合います。

「じゃあ、賢い絹坂に、この状況から、どーすればいいか聞いてみてもいいか？」

ううーん。これは難問です。あらゆる方向から飛んでくる冷たい視線が痛いです。

「とりあえず、ここは、逃げましょう」

「賛成だ。店主！金はここに置いていくぞ！」

ダッシュで逃げ出す私たち。

「あ、ま、待つて下さい！」

「何だ！？釣りはいらんぞ！？」

ダッシュで逃げる私たちにウエイトレスさんが叫び、先輩が怒鳴り返します。おお、先輩つてば太っ腹！

「1000円足りません！」

「くっ！」

ウエイトレスさんにそう返されて先輩はとても悔しそうな顔をしながら、1000円を放り投げました。

「あははー。先輩、格好悪ーい！」

「やかましい！」

走りながら頭をぶたれました。先輩つてば無駄に器用ですねー。

「先輩先輩こっちですー」

私は先輩の手を取りながら走ります。

「げふ、ぜー、ぜー、き、絹。もう、走らんでも、いいだろ？てか、走つてまで、逃げる、必要も、なかった、ような気が……」

私に手を引かれた先輩はぜーぜーと荒い息をしながら、よろよろと走っています。

「それは間違いですよー。先輩ー。私たちに爆笑されたあのカップルの怒りに満ちた恐ろしい顔を見ましたかー？あれは、私たちが八つ裂きにしても飽き足らないといった顔でしたよー」

「そーかー？いきなり、爆笑されて啞然としている顔にしか見え

んかったがー」

「いえいえ。そんなことはありません。先輩はちょっと平和ボケしているんですよ。大学が平穩すぎるからじゃないですかー？」  
「うぐ」

何か心当たりがあるらしい先輩は、苦い顔で唸ります。

高校時代の先輩は、学校当局の摘発から逃げ隠れつつも、組織の中での激しい権力闘争を繰り広げた後に、執行委員会を身内で独占し、生徒会や部活等の有力者の弱みを握って、傀儡と化し、生徒会や各種委員会、あらゆる部活に構成員を忍ばせ、学校において生徒ができる権限をほぼ全て1人で握っていたのです。

当然、そこまで大きな権力を握っていれば、それを妬む反対勢力が出るのは必定です。先輩の高校生活は、権力を握るまでの闘争と権力を奪おうとする反対勢力の炙り出し及び鎮圧で占められていたといっても過言ではないのです。

しかし、高校を卒業した今となっては、ただの平凡なる一大学生です。策略を巡らすことも追いかけることもなく、平和的に過ごしているので、ちよつと頭と体が鈍っているのです。まあ、普通は、平和で何よりってことなんですけどね！。

ちなみに、今も組織は健在です。先輩が君臨していたときほどの力はないのですけれども、それでも十分学校政治に大きな力を振るうことができていますし、組織の幹部もほぼ旧先輩派で占められています。

勿論、私は旧先輩派の急先鋒ですよ。今、私が力を入れているのは、先輩を神格化し、伝説として学校の裏歴史として未代まで綿々と先輩の栄光が語られるようにすることです。よって、先輩はもう卒業した身にも関わらず生徒たちの殆どがその存在と偉業を知っているのです。

そんなことを考えている間に、目的地へと到着しました。

先輩は私の後ろでゼーゼーいっています。

「ささ、先輩ー。到着しましたよー。冷たい麦茶が待っていますよー？」

「ぜー…ぜー…げふ。つ、冷たい、麦茶？」

疲労困憊なせいか思考能力が低下している先輩は冷たい麦茶という私の甘い言葉にぴくりと反応します。

「ええ、冷たい冷たい麦茶ですー。こっちに来れば氷のように冷たい麦茶が、先輩の口の渴きを癒し、喉を通り抜け、体を涼やかにさせること請け合いですよー」

先輩は私の甘い言葉に誘われ、手を引かれ、大人しくよろよろと付いてきます。疲れ果てた先輩は御しやすくて楽でいいですねー。手練手管を弄せずに済みます。

そうやって、私は先輩を誘い込みました。

連れ込んだのは、一軒の新しめなアパートの一室。先輩の住んでいるアパートにも似ていますが、そちらよりもいくらか新しく大きいです。最近できた若い女性用アパートですからね。住んでいるのは独身女性ばかりという女の園です。勿論、オートロックやインターホン完備で、ボタン一つで警備会社の屈強なお兄さんが駆けつけてくれるサービス付。ついでに、何件か隣に交番まであります。やっぱ、女の子の一人暮らしですから、こーいう防犯のしつかりしたところに住みたいものなのです。

「ささー、先輩ー。どーぞどーぞー。狭くて汚い部屋ですけども、遠慮せず上がって下さいー」

私の案内に先輩は感謝も文句も言わず、黙って従い、玄関に座り込み、視線の定まらない目で自分の足元を見つめながら何かぶつぶつ呟きだしました。

「あ、頭が、くらくらする……」

日射病ですかねー？

しかし、先輩は相変わらず体が弱いですね。酒とか煙草とかやつたり、不規則な生活してるからですよ。きっと。

「はい。冷たい麦茶ですよー」

氷をたっぷり入れた麦茶を差し出すと先輩はそれを一気に飲み干しました。

「げほつごほつ！」

「あー。ほらほら、そんな一気に飲み干すからですよー」

溢れた麦茶をタオルで拭いてあげます。こーやって甲斐甲斐しく世話してあげるのも楽しいんですけど、先輩は凄い嫌がるんですねー。

「ええい！ やめろ！ 自分で拭けるわ！」

先輩はそう怒鳴ると、私の手からタオルを奪い取って、濡れた服を拭きます。

先輩は一息吐いて落ち着いたのか、私を睨みます。何で、落ちて着いて、最初にすることが彼女睨むことなんですかねー？

「で、ここは何処だ？」

「私の部屋ですよー」

「邪魔したな」

「何ですぐ帰ろうとするんですかあつ！」

いきなり、立ち上がって走り出そうとする先輩を後ろから抱き付いて羽交い絞めにします。まず、第一目標は首です。首を絞め、呼吸数を制限し、力が入らないようにします。

「ぐ、離せ！ 首絞まってるぞ！ 殺す気か！？」

「いいえ。離しません。逃がしませんとも。何処に巢に入り込んだ餌を逃がす奴がいますか」

「餌って、俺を食らう気か！？」

先輩の悲鳴にも似た怒声に、私はにっこり笑って答えます。

「ええ、勿論です。比喩的な意味で」

「比喩的ってか性的な意味じゃ、ぐえつ！ 服を引っ張るな！ 首が絞まる！ てか、何で、お前、こんなときだけ怪力なんだ！？」

愛の為せる業です。

**偏屈先輩を誘い込め！（後書き）**

次話はエロい話にしたいと思います。  
頑張つて、エロくします！  
エロ万歳！

## 偏屈先輩の性なる弱点

まんまと先輩を罾、もとい部屋の中に誘い込むことに成功した私は、先輩に後ろから右手で先輩の首を絞め、左手は胸元を押さえ、両足で先輩の腰に巻きつく形で先輩のうなじをぺるぺると舐めていました。

何故、私がうなじを舐めていたのかといいますと、背後から抱きついてると、露出している先輩の肌の部分つてのはうなじくらいしかないのです。

この人、夏でも、どんなに暑くても長袖の上下を着ていますからね。肌を露出させていると日差して焼けて真っ赤になってしまったりしいのです。本当は手袋と麦藁帽子をかぶってマスクもしたいらしいですけど、さすがに街中でそんな格好をするのはどうかと思いませんし、そんな先輩と一緒に町を歩くのは、いくら私でもちよっと躊躇してしまいます。

「こら！ 止める！ 首筋を舐めるな！」

抱き付いて首筋をぺるぺると舐めていた私に先輩が怒鳴りました。先輩は顔を真っ赤にして怒鳴りながら、私を振り払おうとしますが、そうそう簡単に解放して堪るもんですか。せつかく、誰にも邪魔されない所で2人つきりになれたのですから。

「先輩ー。そんなに怒鳴らなくてもいいじゃないですかー。喉を痛めますよー？」

「今更、そんな心配をする必要はない！ 俺は中坊のときから殆ど毎日何かしら怒鳴っているからな！ てか、人の喉の心配をするんなら、俺を解放せーや！ そつたら、少しは怒鳴らんで済むだろ！」

「先輩。それは私に死ぬか生きるのを止めるかどっちか選べつて言ってるようなもんですよー」

「んな大袈裟なうひゃうっ！」

いきなり先輩が悲鳴を上げ、私は一瞬きよんとしてしまいました。そして、自然と口の端が吊り上がります。

先輩が悲鳴を上げた理由が私にはよく分かります。

何故かって、ある一箇所を舐めたところ、先輩が悲鳴を上げたからです。つまり、その一箇所を舐めると先輩が悲鳴を上げる仕組みになっている模様です。弱点発見！

「んふーふーふー」

「な、何だ。お前、気持ち悪い笑い声を出すな！」

「先輩つては耳が弱点なんですな〜」

そう言つと、先ほど、ペロりと舐めた耳が真っ赤に染まりました。弱点だと!? 否! んにゃことはぬわいい〜」

激昂する先輩の耳を唇ではむはむするとみるみる声から力が抜けていきます。これは面白い。

「こ、こら! そんな、耳なんか舐めつ! るなあつ! うひゃあつ!」

耳をはむはむと唇でくわえつつ舌で耳の外側をなぞっていきます。すると、先輩の抵抗は一挙に力を失い、ふにやりと体から力が抜けていきます。

「くあ、こちよばしいではないか!」

耳の中に舌を潜り込ませると、先輩は悲鳴を上げます。

それから、耳たぶをくわえて舐めたり吸ったり口の中で転がしたりしてみます。その間、先輩はずつとびくびくそくそくふるふるしていました。先輩は本当に耳が弱いらしいですね!。

「ねえ、先輩!」

「耳元で喋るな! 吐息がこちよばしいわ!」

「むー。じゃあ、ちよつと位置変えます〜」

私はずりずりと移動して先輩の肩に顎を置く格好になりました。

「はあはあ」

先輩はぐったりして荒い息をします。

「てか、俺はいつまで貴様の部屋の玄関に座っていいやあいいんだ

？ いい加減、離れる。動けん」

「先輩が私のベッドまで来てくれるっていうんなら大歓迎なんですけどー」

「馬鹿を言うな」

「馬鹿なんて言った覚えはないんですけどねー」

「馬鹿は無自覚なものだ。自覚的な馬鹿は馬鹿じゃない。大馬鹿だ」  
先輩と軽く意味不明なことを話し合った後、私は頑張って首を伸ばして先輩の頬に軽くちゅっとキスをしつつ、目を見つめます。先輩は肩から乗り出す私の顔を横目で一瞥しました。

「ねえ、先輩ー？」

「なんだ。部屋になら上がらんぞ。さつさと家に帰ってクーラーガンの下でアイスクリームを食らっってくれる。クールビズ？ 知るか。んなもん」

「日本の国策をそんな無碍に扱ってははいけませんよー。環境対策だつて工夫すれば金になるんですからー」

エコバッグを売ったり、クールビズ用のワイシャツを売ったり、環境に優しい車とか家電を売ったり、二酸化炭素排出量を買ったり。人間つてのは、自分が生きる地域を守ることすら金が絡まないといけないようです。

おっと、こんな環境と経済の問題を考えている場合ではありませんでした。滑稽なほど大真面目に環境問題に取り組んでらっしゃる人々や表向き環境重視を装っている大企業とかに怒られてしまいませんし、私も先輩も環境問題にはさして興味ありませんからね。先輩の興味は人類学や人間科学、歴史などの分野にあり、私の興味は先輩に対してのみなのです。

「ねえねえ、先輩先輩ー。聞きたいことがあるんですー」

「何だ？ 手短かに言え」

さつきから会話がループしていることにいい加減うんざりしてきたのか先輩はやっとこさ素直に応じてくれました。

「先輩つて私のどこが好きですかー？」

偏屈先輩帰省中

「げっほっほっほげふんげふんっ  
「！」

偏屈先輩の性なる弱点（後書き）

前話後書きにて「エロくする」と言いましたが、あれ嘘です。いやいや、嘘じゃないです。間違えただけです。エロくできなかっただけです。期待してた人ごめんなさいです。いない？  
そして、だいぶ短いです。申し訳ありません。

## 偏屈先輩は嫌々愛を囁く

「は？ 貴様、今、なんつった？」

首を絞めたわけでもないのに先輩は激しく咳をした後、言いました。持病の癩しかですか？

「えっと、先輩、耳、大丈夫ですかー？」

「じゃあかあしいわっ！ 俺の耳の調子を疑う暇があったらテメーのお頭つむの調子を心配してる！」

酷い言いようです。泣いちゃいそうです。嘘です。私の心は鋼並みに強くできています。そんなことで一々心を傷つけていては、先輩と付き合うことなどできません。友達すら無理です。知人でも駄目でしょう。ならば、恋人ともなるう者は余程の心の強さを持っていなければいけないことは自明の理と言えましょう。

てなわけで、私は先輩の鋭いツッコミ（なんでしょうか？）を無視して問いを繰り返します。

「で、先輩は私のどこが好きなんですかー？」

「ぐ」

私がかもう一度尋ねると先輩は眉根を寄せ、嫌そうな顔をして変な声を出します。何ですか。その顔と声。失礼しちゃいますね。

「何でそんなこと言わにやならんのだ」

「何でそんなことも言えないんですか」

「……………」

先輩沈黙。勝ちました。

「普通、付き合っている彼女の好きなどころくらい簡単にぼんぼん何個でも言えるもんでしょー。恥ずかしくたって、照れてたって1個か2個くらいは言ってくれてもいいんじゃないですかー？ かー？ かー？」

「かーかー言うな！ 貴様はカラスか！？」

「カラスは嫌いじゃないですよー。生ゴミさえ漁らなければいいと

思いますー。てか、あの鳥たち、人間が生ゴミ排出する前は何食ってたんでしょーねー？」

「虫とか木の实とかだろ。たまに啄ばんでるぞ」

「へー。いや、そんなことはどーでもいいんですけどね」

「なら言うな」

重要なのは先輩にとつての私の好きポイントです。そんなことが何故重要なのかと問うような人は愛を知らないという烙印を押ししても構わないでしょう。

以前、先輩が私の好きなところを言い合うという勝負をしていたとき（何故、そんな勝負をすることになったのかは忘れてしまったのですが）に、いくらか私の良い所を列挙してくれたのですが、そのとき挙げられた良い所つてのはあくまで後輩としての私の良い所であり、それは決して恋人としての私の良い所ではないのです。

というか、今、冷静に思い直してみると、それ、褒め言葉？つてなものくらいが含まれているのです。コンパクトとか軽量とかなんて人に対する褒め言葉じゃありませんよ。家電とかに対する評価ですよ。ほぼ無臭なんてのも褒めているのか馬鹿にしているのか判別が難しいです。

「まあ、そんなわけで私は先輩に好きって言われたことは殆どないし、先輩が私の好きなところを言ってくれたことも殆どないわけですよー」

「当たり前だ。何で、俺がそんな恥ずかしいことを言わにやならんのだ」

「恋人なら言つて当たり前ですー。そも、恋人とは恥ずかしいことをしあう仲の人間のことだと言つても過言ではありません」

「む、まあ、確かに……」

先輩もそのことには異論はないようです。

「そして、私たちは恋人同士です。好きあつていて、その仲を引き裂くものは何もなく、2人は存分に愛し合うことができるのですから、恋人同士でなければなんだというのでしょうか」

なんかこの喋り方、先輩っぽいような気がします。影響されているのかもしれない。学生時代はいつつも側にいたとはいえ、何だかんだいって学校にいる間で、その上、授業中は別々でしたからね。しかし、最近、最近、特についてこの前の夏休み期間中は殆ど24時間一緒であり、これほどまでに一緒の時間を過ごしたことは始めてであり、その結果、先輩による影響がより一層強くなったというのも納得できることです。先輩色に染められちゃったってことですね。何だか嬉しいですねー。

おっと、本筋からずれるのも先輩の影響でしょうか。話を戻します。

「また、恋人同士ってのは暇さえあれば相手が自分のことを好いているか確認しあうものなのですー。愛の確認ってことですねー。ところが、先輩は、その愛の確認を怠っています。それでは私が先輩に本当に愛されているかどうか不安に思ってしまうのも無理はないでしょう?」

「むむむむ……。それはそうだが……」

先輩は難しい顔で唸ります。

元より先輩は屁理屈な人です。しかし、屁理屈も理屈のうちで、一応、理屈には適っていることを仰るのが常なのです。そのような人ですから、こっちも理詰めで言っていくと、結構、反論も反抗もできないのだということに最近気がきました。

「で、確認なんですけどー、先輩って、私のこと好きなんですよねー? そうですよねー? 間違いありませんよねー?」

「む。むむう……。まあ、確かに相違ない」

「では、私のどこが好きで私と男女交際してくれるのかはつきりつきりーから十まで子供からお年寄りまで果ては外人さんから宇宙人にまで分かるようにしつかりじっくり説明して下さいー」

「おいおい、無理を言うな。なしてそこまで詳細に貴様の長所を」

「長所じゃありませんー」

即座にツッコミを入れます。

「先輩にとつての私の好きのところですよ。何故、先輩が私と男女交際してくれるのかきちんと言ってください。さあさあさあさあさあー！」

「あー！ じゃっかしいーなあーっ！ 分かったっ！ わかったっつっのっ！」

先輩はそう怒鳴つてから気難しい顔で黙り込みました。先輩にとつての私の好きなところを考えてくれていているようです。そんな難しい顔で何分もかけて考え込まれると何か微妙な心持になります。

まず、第一に、そんなに難しく考えないと、私の好きなところが思いつかないんですか？ 自分の彼女の魅力的なところを彼女相手に言うことがそんなに難しいことですか？ なんてことが不満です。次に、先輩が考えている間、私はやることがなくて暇だっつてことです。

だから、先輩に背後からこなきじじいよろしく抱きついていて私がちよこつとムラムラしてきて、先輩の背中に体を摺り寄せたり、首筋に舌を這わせたり、耳に息を吹きかけたりするのはしょうがないことです。

「だえあーっ！ やめんかつ！ 人が考えてんのに！」

「先輩が考えるの長すぎなんですよー。そもそも、そんなに長いこと考え込まないと思いつかないことなんですかー？」

「貴様が言えっつーから考えてやってるのに、なんだその言い草は！？」

先輩はぷりぷり怒り出しました。本当に短気な人ですねー。

そーいう人にはこーです。

「ふぎやあつ！？」

耳たぶをぺろつと舐めると先輩は変な悲鳴と共にふにやふにやになります。

そして、真っ赤な顔で首を無理矢理後ろに向けて私を睨みつけます。

「だから、耳はやめろっちゅーのっー！」

「ほらほら、早く答えて下さいよー。先輩は何故、私と付き合ってくれるんですかー？ 私のどこが気に入ったんですかー？」

「むー」

先輩は更に暫く渋い顔で唸ってから私を見ました。

それからすぐに視線を違う方向へ向けてしまいます。

「お前のそーいう行動的だったことをすぐ言動に表せて、やろうと思っただら何でもやるところが、まあ、その、き、気に入っているといえば、そうかもしれん。たまにウザイが」

先輩はそんなことをぼそぼそと言いました。耳が赤いです。

私はうずうずしてきました。

「あとはー、まあ、その、柔らかいほっぺもいいのだが、まっすぐ見てくるその瞳も、まあ、魅力的で、あると、まあ、いえる。そんなところが俺は、まあ、好きなのだと思う。あー！ もう！ これでもいいか？」

「最後に愛してるくらい言ってくれないと、恋人っぽくないですよー」

私は先輩からの愛の言葉に背筋をぞくぞくさせながら更に要求します。

「な！ なんて、こんなに恥ずかしい思いをしてるのに、それに更に恥ずかしさを上乘せせんとならんのだっ！？」

「いいじゃないですか。私と先輩しかいないんですからー」

「いや、なんか俺たちの私生活がどこかで公開されて、何人もの人々に見られている気がする！」

「被害妄想ですよー」

そんな次元を超えた話をしてはいけません。私たちは文字の上の二次元存在であり、三次元存在のことなんか気にしてはいけません。まあ、私、二次元とか三次元とか物理的なことなんか分かりませんけどね。物理の点数悪いですし。物理学者のリチャード・P・

「さあ、愛の告白を！」

「それは貴様がしたたる！」

「先輩からも愛を！ そーしてこそ、相思相愛です！ そーしてこそ、本物の恋人同士です！」

「ぬーぬぬぬー……」

先輩は赤い顔で唸ってから、微かに、ちよつとだけ、

「あ、あ、あー……好き、ではある、ぞ」

愛してる。は言えないらしいです。ラブは無理らしいです。ライクは大丈夫みたいです。

まあ、今のところはこれでいいでしょう。私はひとまずまあまあ満足しました。

「んー！ 私も先輩のことが大好きですよーっ！」

「うぎゃあっ！ 重いつ！ 潰れる！ 骨が折れる！ こらっ！ どこ触ってんだっ！？ どこ舐めてんだっ！？」

はてさて、愛を確かめ合った私と先輩がこの後、どーなったかなんていうのは言わずもがなであり、詳細に描写するには場所を変えて、18歳未満の子供さんに目隠しをしなければいけないので、止む無く割愛です。

**偏屈先輩は嫌々愛を囁く（後書き）**

ものすごくく久しぶりの更新です。  
すみませんねー。だらだらしてしまっ  
てー。

## 偏屈先輩は行方知らずなので

「それですすねー。先輩ったら本当に耳が敏感みたいなんですよー。耳を舐めてあげるとぴくぴくして可愛いんですー。なんか背筋がぞくぞくするらしくてー。それからですすねー。先輩のアレをあーしてこーして」

「ねえ、コロ」

「んー？ 何ですかー？」

「私らはあんたのノロケ話を何時間聞けばいいのさ？」

私の目の前に座る髪が長く、背が高く髪が長い、眼鏡をかけた女の子が頬杖を付き、つまんなさそうな顔で言いました。

彼女は私の友人で、私はススと呼んでいます。名字が須々木だからススです。キ取っただけですけどねー。ちなみにコロっていうのは私のあだ名です。下の名前が衣だからコロだそうです。

しかし、何ですか。その顔は。そんなに私のノロケ話がつまんないのですか。失礼な。

「えー！ 私は興味あるけどなー！ コロとあの先輩の恋の話ー！ 恋ー！ 恋っていいよねー！ L・O・V・E！ 恋最高ーっ！」

私の横で大騒ぎしているのは、ちよつと赤つばい巻き毛に最近流行っばい顔でやたら無駄に父がでかい、じゃない。乳がでかい娘です。しかし、いつ見ても糞暑い忌々しい乳です。踏み潰してやりた

い。

と、この煩いのは、私のもう一人の友人であるミッチです。

彼女はいつも煩くハイテンションなので、注意していないといつ鼓膜をやられるかと冷や冷やものです。先輩の声が聞こえなくなつたらどーするんですか。

「ミッチは本当に恋の話題だと煩いよなー ちとウザイ」

「いや、ミッチはいつでも煩いと思いますよー？ 結構ウザイ」

「やだなー！ 2人とも冗談きついよー！ あっははははーっ！」

誰も冗談を言っていないんですけど、この子は一体、どーいう思考回路をしているんでしょうか？

私とススは顔を見合わせて溜息を吐きます。

「まあ、とりあえず、ミツチは置いて、私のノロケ話を聞いて下さいよー」

「何でわざわざ花の休日にあんたのノロケ話を聞かないといけなのよ？」

ススは不満そうな顔でなんかちよつと高いコーヒーみたいなのを飲み干しました。

今日は休日で、私はススとミツチという友人3人組でぶらぶらと街に繰り出しているのです。

とはいっても、どこへ行く当ても特に無いので、目に付いた小洒落たオープンカフェでなんかちよつとイタリアンだかフレンチだか分からない名前のカフェオレの親戚みたいな連中を飲んで雑談なんかをしております。

まあ、女の子なんてのは飲み物だけで歓談を何時間でもやってられる生き物ですから、これでいいっちゃあいんですけどね。

「しかし、このえすぷれつとまきあーとつてのは美味しいですねー」

「それエスプレッソマキアーだから」

「細かいことを気にしないで下さいー」

こーいう変てこな名前は覚えられないのです。ふらぺちーののこのんばなの。

「ススは何飲んでるんですかー？」

「コーヒーよ」

私の問いかけにススはコーヒーカップをゆらゆら揺らしながら答えました。なんかちよつと優雅っぽい仕草が様になつてて腹立たしいです。

「コーヒーって、そりゃ見れば分かりますよー。黒いですからー」

「あんた、黒ければ何でもコーヒーだと思ってるの？ 醤油とソー

スとコーラとコーヒーの区別つけれる？ 重油だつて黒いし。黒々してるし、あんなの飲んだら死ぬぞ？」

ススがいきなりこんなことを言い出しました。昔から、この子はこんなことをいきなり言い出しては人を煙に撒くことを趣味としているのです。先輩に少し似ていなくてもありません。

「馬鹿にしないで下さい！。そんなくらい分かります！」  
「本当かな！」

「何ですかそお疑わしそうな顔は！。私はこれでもしっっかり者なんですよー？」

「まあ、それは認める。しっかりっよりちやっかりだけどね。ちやっかりっより腹黒だけどね！」

ススは大儀そうな顔で頷きながら言いました。どんどんマイナス表現になつていくのは何故？

「で、そのコーヒーは！？ なんかこの店のコーヒー、色々種類あるじゃーんっ！！ ススが飲んでるそれはなんてやつなのさっ！？」

ミッチが身を乗り出して尋ねます。そうです。私もそれが聞きたかったんです。何もコーヒー＝黒い液体＝醤油とかみたいな会話をしたかったわけじゃないんです。

「ブラジル アマレロ・ブルボン」

「……は？」

ススが謎の呪文を唱え、私とミッチは仲良く惚とほけた声を出してしましました。

「ブラジル アマレロ・ブルボン」

「ぶらじる 甘ゲロ・ぶるぼん？」

「ミッチ、何言ってるんですか？ 甘ゲロってそんな気持ち悪いゲロですよ」

「確かに甘ゲロは嫌だね。う。想像すると余計に……」

「え！？ え！？ だつて、そー言つたじゃん！」  
言つてない言つてない。

私とススと一緒に手と首を横に振り振り。

私たちはそんなふうにダラダラとよく晴れた晩夏の休日の昼を過ごしていたのです。

夏休み終結後、宿題を無事先生方に提出し、ほっと一息吐いたのも束の間、もうはや早々に定期テストだの学力テストだのが控えていて、受験はまだ遠くだけど、中々、視界には入ってきていて、うかうかぼんやりと高校三年生の二学期を過ごすことはできない。けどまあ、夏休み後、最初の休日くらい、外でのんびり友達とだべってもいいじゃないってな感じの日和です。

本当ならば、せつかく帰省している先輩と何処かへでかけたいなあ。と思っていたのです。何処へってというのは、何処でもよくて、映画でも博物館でも美術館でも図書館でも、何だったら昼間っからベッドへGOでも私は構わないわけなんですけど、それはちと情緒がないです。きっと先輩も嫌がるでしょう。照れ屋さんだから。

何はともあれ、先輩に接触せねばと先輩の家へと行ってみたのですが、先輩の妹の三津花さん曰く「さつき出かけたよ。何処行ったのかは分かんないなあ」とのことだったので、私は渋々と引き下がったのでした。しかし、三津花さんが着ていたエメラルドグリーンのジャージはとってもセンスがないので、来客時に対応するには宜しくない格好だと思えます。

その後、私はやることもなく、仕方がないので一人映画で暇でも潰そうかと思っていたところでススから電話で呼び出されたのです。こんなことやっている暇があつたら、受験に向けて勉強しろつてところなんですけどねー。もしも、こんなふうに勉強を怠ったことが原因で先輩のいる大学に入れなくなってしまうてはもう悔やまずにはいられませんよ。きっと私は浪人することになるでしょうけど、そしたらば、私が入ったとき、先輩は四年生で、もう次の年には大学からいなくなってしまうのです。そんな短いキャンパスライフなんか嫌ですよ！ ストレートでも二年しかないのに！

「こーしてはいられません。勉強をせねばー」

「あ！ 何、コロ！ 帰るのーっ！？ やだやだーっ！ もちつと一緒にいよーよーっ！」

席を立つ私にミツチがくっついてきて私が勉学の道へ進むのを妨害します。ええい。離れい。この乳女め！

「そだっ！ 今日、ケーキバイキングの日だよー！ それいこーよーっ！」

う。ケーキ。ケーキかー。

女の子はケーキが大好きです。多分に漏れず私もケーキは好きです。イチゴの乗ったショートケーキ、チーズケーキ、チョコレートケーキ、モンブラン、タルト、パイ……。じゆる。

「コロ。涎よだれ。涎出てる」

「うおっと」

私は慌てて服の袖で口周りを拭きます。あれ？ 何ですか？ ススが差し出している白い布切れは？

「あんだ……。普通、女子が袖で涎拭く？ まあ、いいけど」

「んな細かいこと気にしてたら、これからのグローバリズムに満ちた自由資本主義的市場経済社会は生きていけませんよー？」

「意味分かって言ってる？」

「七割くらいはー」

伊達に先輩のグローバリズム・新自由主義経済・市場経済批判を聞いていないのです。先輩はバリバリのケインズ主義です。政府による市場への一定の介入・規制、有効需要の創出、雇用の維持、国民生活の保護が経済には不可欠であり、現状、進められている規制緩和、市場開放は行き過ぎであるというのが先輩の考えのようです。まあ、よくは分かりませんが。先輩だって、専門は経済じゃありませんしね。

「まつ！ とにかく、今日はケーキバイキングに行こーっ！ 時間まではまだだいぶあるから、それまで、あちこち見てよーよっ！

あっ！ 私、冬物のコートが欲しーなーっ！ あと、ブーツもっ！」

「冬はまだまだ先ですよー」

「今から色々見て回って、バーゲンとか安くなったときに買うのっ

！ そのとき、探してたんじゃいいもの見つからないじゃーんっ！」  
ミッチはハイテンションに叫びました。

私とススはやれやれ面倒くさいなあ。といった感じで彼女に続いて席を立ちます。

まあ、たまには友人と仲良く友情を深めることもよいでしょう。

勿論、先輩が行方知らずだから、そーいう行動に至るわけですけども。

## 偏屈先輩を見つけたが

「あー！ これカワイイーっ！ あうっ！ こっちもいいなーっ！  
あれっ！？ これ、いい形してるーっ！ でも、ちよつと色が駄  
目ー！ それなら、そっちの方がいいかも！？ いやいや、やつぱ  
こっちは外せないでしょっ！ あん！ でもでも、お値段的に女子  
高生の財布には辛いーっ！ それなら、お手頃価格だけどキュート  
なこっちのやつの方がー！」

新作冬物売場にて自由奔放縦横無尽に駆けずり回りながらきやわ  
きやわ騒いでいるミツチを私とススは冷やかな目で見ていました。  
いや、別にファッションに興味がないわけではないんですよ？ 人  
並みにあるとは言い難いですけど。しかし、例え、女の子はファッ  
ションに興味津々つてな生き物だとしても、そんなに大騒ぎするほ  
どのもんじゃーないと思うんですよ。

「ところでスス。組織のことなんだけど、そろそろ後継を決めない  
とね」

「そーですねー。私たちももう受験ですからねー。ま。書記長は書  
記次長に継がせていいでしょうねー」

「石田？ あの子、一年だけ大丈夫なん？ 執行委員経由させて  
二年から書記長。その後、委員長つてな感じじゃないの？」

「いや、そんな遠回りさせなくてもいいですよー。書記長やって、  
二年の半ばくらいから委員長でいいんじゃないですかー？」

私とススは片手間に服を見つつ、組織の人事の話をしめます。組織  
つてのはうちの高校に伝統的に存在する学内秘密結社で、その目的  
は教師連中とその手先たる生徒会組織を監視、場合によってはその  
施策に介入し、生徒諸君の利益を追求するという名目だけのご立派  
なもので、実際には教師連中と生徒会のやることなすことに茶々を  
入れてみたり、組織内で宴会やらゲーム大会やらを開いてみたり、  
空気読めない駄目生徒わがま教師に身の程を弁わがまえるように教育的指導

をしたり（かなり緩和した表現です）、恐い先生と鬼ごっこをしたりするのが主たる活動内容です。

うちの組織は数十年もの昔から長らくそんなことを行ってききましたが、昨今の若者の面倒臭いやる気ないかつたるい精神のせいで一時期には構成員の数が執行部の定員と同じくらいの数に減退したこともありました。

そんなふうな黄昏感漂う組織を復活させたのが先代執行委員長であるところの我が愛すべき先輩（どこのなんていう先輩か？なんていう質問は今更受け付けませんよ？）なのです。

この組織という格好の遊び道具、もとい、生徒にとって有益なるものを見つけた先輩は人数が少ないことをいいことにさっくり執行委員長の椅子に居座り、御学友方を執行委員の席に据え、独裁体制を確立、その後は色んなところで色んなことをして目立ち目立たせ、生徒を片っ端から勧誘、或いは半強制的に構成員として組み込み、最終的には全校生徒の3人に1人くらいを組織の構成員にして、生徒会に組織の人間を潜り込ませ、生徒会長を傀儡をし、教職員の弱みを握り、高校政治を思うがままに操っていたという伝説が生徒の間では噂か都市伝説のように語られています。

その組織の今のトップ（即ち執行委員会委員長）がススで、私は実質ナンバー3たる書記長職にあるのです。

そして、私たちはもう3年生であり、もうそろそろ引退の頃合です。この先輩が滅茶苦茶巨大に育て上げたこの組織を若き次の世代に譲り渡さなければなりません。

後継人事とは大事な話なのです。そんなわけで私とススと他の執行部役員たちはこれから毎日のように次の執行部の体制を話し合うことになります。

ちなみに、ミッチも一応、組織には入っていますが、ただの平構成員です。平では、普段はただの生徒と何ら変わりなく、たまーに執行部からの下達される命令に基づき行動するのみです。よって、組織人事とは全く関係がありません。

そして、今の物語の進行とも組織も人事も関係ありません。ここまで長らく述べておきながらです。

物語の根幹たる重大なる出来事は、私とススは次期執行副委員長には誰が相応しいかということをお洒落服片手に語り合っていたときにおきたのです。

このとき、私はふと店の外を見て、重大なるものを発見しました。

「ぬづえぐげにやーっ!?!」

「おう。コロ、何さ。いきなり意味不明な奇声を発さないでよ。びつくらすんじゃん」

「こー! こっ、これっ! これっが、叫ばずんについらっれますかあっ!?!」

混乱する私にススはムカつくくらい冷静な顔で言いました。

「もちつけ」

「やですよ! 正月でもないのに餅なんかついてられますか!?!  
そもそも、臼と杵がありません! 更に言うならば、蒸した餅米もないじゃないですかっ!」

「いや、あんた、本当に落ち着けや」

私とススが話し合っていると、店の奥からバビュンとミッチがやって来ました。

「何々っ!?! どーしたのっ!?! 何があつたのっ!?! コロは何でいきなり叫んだのっ!?! はっ!?! まさか、一目惚れでもしたっ!?! きゃっ! 恋だねっ! 恋っ! L・O・V・Eッ! ラブッ!」

「ミッチ煩いっ! 黙れいっ!」

「ススーっ! コロが酷いこと言う!」

「お前、本当に煩いわ」

「ススも酷いっ!」

「お客様」

その言葉に私たち3人は一方向に目を向けます。そこには店員の

女性がにこにこ笑って立っていました。でも、額に見えるあの青い筋はなんでしょうかねえ？

「大変申し訳ありませんが、少し静かにして頂けませんか？」

そして、言外に含む思いをその表情に見ることができません。つまり、その思いというのは「買い物しねーんなら出てけ」というもので、私たちはその通りにすることにしました。

「で？ あんた、さっきの奇声は何だったのさ？」

「あ、あれあれ！ あれ！ あれ！」

スズに尋ねられた私は道路の向こう側のオープンテラスを指差しました。そのオープンテラスはこの前、先輩と一緒に修羅場ついでるカップルの横でお茶をしたお店です。

そこに、そこに、なんと！ 先輩がいるじゃあないですか！？

当然のことながら、それだけで私はあるなにも奇声を発したり混乱したり騒いだりしません。ただ、スズとミツチに「用事ができたからちょっと」とか言つて、先輩の所へ駆けて行くだけです。

私がそうしなかったのは、先輩と同じテーブルに他の人物がいたからです。これが、先輩のお姉さんとか妹さんとかご学友方ならば、私も気にすることはありません。

ですが、今回は違ったのです。先輩と同じテーブルに着いているのは、私が全く想像していない人物で、全く何故一緒にいるのかさえも理解できない人です。

その人は、檜さん。檜さんです。先輩の元彼女の檜さんではありません。その人は死んでますから。その元彼女の檜さんの妹さんです。その檜さん妹と先輩は一緒にテーブルに2人つきりなのです。

「あら？ 浮気？」

「ガツデム！」

私の怒りが一気に沸点突破したことは言うまでもありません。



「いや、ちよつと武器を……。鉄パイプくらい転がっているんじゃないかなーと……」

「転がってないから」

「使えない町ですなぁっ！」

「そんなことに使える町には住みたくないよ」

ススは呆れ顔です。しかし、私は気にしません。人目なんか気にするのは小学生のときに止めました。一々気にしていたら面倒くさいですからね。

結局、武器になりそうなものは近くのお店の中にある椅子とかマネキンとか蛍光灯とかしかなく、それらを持って突撃するのも何なので、渋々と私は手ぶらで先輩たちの方へと向かうことにしました。先輩が密会をなさるということを事前に知っていれば、包丁でも鎌でも斧でも鋸でも釘バットでも持ってきて、似たような事件が起きちゃって打ち切りになっちゃったアニメ番組みたいなことができますのに。ちなみに冗談ですよ？ 本当に。マジで。

「いざ！ 突撃ー！ やあやあー我こそは武蔵国の住人、絹坂の衣なりー！」

「コロ！ ちよつと落ち着いたらっ！？ 言ってることと目ん玉がなんかおかしいことになってるよっ！？ 台詞が古文みたいだし、目がくるくる回ってるよっ！ あっ！ ちよつと、待って！ 待って待って待って待って待って待って待って待って待って待って待ってっ！」

名乗りを上げながら突撃を行う私の襟をミッチが思いつき引き張り、私は後ろにかつくーんとなってしまうました。勢い、私の首は絞まり、おえってなってしまうます。

「おえっ！ 何するんですかーっ！？」

「怒るんじゃないわよ。あんた、ミッチが止めてなかったらゴミ収集車に轢かれてミンチになってたところよ？」

「そうだよーっ！ 私ってばさっきのはナイス行動だったよっ！

コロがコロミンチになるの防いだんだからねっ！ 私偉いっ！ 褒めてっ！ 褒めて褒めて褒めて褒めて褒めてっ！」

「ミツチ煩い！」

「コロ……ひじょい……ぐず」

仕方なく私は近くの横断歩道を渡り、道路の向こう側に渡りました。そこから、今度は道沿いに先輩へ向け突き進みます。

「せつんつぱついむぐうっ!？」

いっつつっ!?!と怒鳴る前に口を押さえられ言葉は途中で失われてしまいました。誘拐!? ではありませんでした。

「こらっ! 絹ちゃん! 二人の邪魔したら駄目だぜいっ!」

私の口を押さえて発言を封じたのは、先輩のご学友でした。セミロングの茶色い髪で大きな瞳の女性です。えーっと名前は何だったでしょうかねー?

「あら? 名前忘れた? 蓮延鈴子はつゆのすずこっていうんだよ? 知ってる?」

「勿論ですよー」

嘘です。私は人の名前を覚えるのが下手糞なのです。なんか記憶障害とかなのかもしれません。今度、気が向いたらお脳の医者に診てもらいましょう。

「ちよっちこっちおいで。そこだとバレっかもしれないから」

蓮延さんが言い、私とススとミツチは揃って彼女に続いて移動します。

誘導されたのは雑居ビルの二階席にあるファミレスの窓際席でした。そこには先輩のご学友が勢揃いしていました。

男性が3名に蓮延さんの他に女性が1名。彼女は分かります。薄紫さんです。確か薄が苗字で紫が名前です。変わったお名前ですねえ。

「お。お絹ちゃんも来てたのか」

平々凡々でノリが軽そうな男性がへらへら笑いながら言いました。この人の苗字は思い出せません。草田さんです。先輩の最も古くから続いている友人です。ただ、それほど仲がいいとか信頼しあっているとかそーいう雰囲気は欠片ありません。なんか情性だけで友達付き合いしてるだけって感じの仲の人です。

あと2人は小柄で病弱そうな人と小太りで人がよさそうな人で、何処かで会ったことがあるはずなんです。どーにも名前が思い出せません。

「皆さんは一体何をしてらっしゃるんですかー？　というか、私はこれからあの女をぶつ殺、じゃない。先輩とあの人が何故にどーして2人つきりで会っているのかを確認しなければいけないのですー」

「あれ？　さっき、なんか物騒な言葉が聞こえたような気が……」

「気のせいですよー」

小太りの人が首を傾げますが、私は笑顔で打ち消します。殺意は見せびらかすものではありませんからね。いざ、実行しようとする前に殺意が前に出ていては敵に悟られてしまいますから。

「あたしらはここから委員長とあの檜の妹さんの動向を調査しているのさ！」

蓮延さんが胸を張って言いました。あんまりないけど。仲間です。見れば、彼らが占拠する窓際席には双眼鏡やカメラが用意よく準備され、すぐ近くの窓からは先輩たちの姿を見下ろすことができます。よくもこんな絶妙な監視スポットを見つけたものです。「しかし、ここからでは2人の会話なんかが分からないじゃないですかー」

そのことだけが不満でしたが、私の言葉に薄紫さんが鼻を鳴らし、自分の横に置かれている鞆を指差しました。そこにはなんだか大層な機械が。まさか、それは……。

「盗聴の受信機ですよ」

薄紫さんはにこりと微笑みます。そんなものを、しかも、結構本格的な大きさと重さのものを持っているなんて、あなたは一体、何者なんですか？

「音量あんまり大きくするとお店の他の人に聞かれるから、小さい音でやってるから皆、耳澄ませなよー」

蓮延さんが言い、私は無駄なことを考えるのを止めました。

「ここは、先輩と檜妹の密会の様子をじっくりしっかり聞くことにしようじゃないですか。」

「ちょっとでも気に食わないことがあったらタダで済ませませんか。」

「コロ。なんか目悪いよ?。」

偏屈先輩帰省中

偏屈先輩の似合わぬ思考（前書き）

ごめんなさい！

全然、笑えません！

## 偏屈先輩の似合わぬ思考

大変長らくぶりだ。という作品上の都合は脇に置くとして。

さて、諸君。もう長いこと俺と絹坂のどーしようもない上に突飛なこともなく、シリアスな展開も特にないのんべんたりとした物語をだらだらと見続けてきた者ならば、改めて言わずとも理解していることであるが、俺には良心というものがそれほど多く備わっていない。

勿論、犯罪を好んでするようなキチガイではないし、加虐趣味にそれほど悦楽を覚えるわけでもない。俺は最低限のルールはきちんとして守っているのだから、良心が欠片もないわけではない。

しかし、まあ、それを守っているのは、良心の発露や周囲からの評価を気にしているわけではないし、ルールを破った際にそれほど大層な罪悪感を覚える性質でもない。最低限のルールを守っているのは、あくまで、破ったとき、面倒臭いことになるからだ。破ったことによつて得る利益に比べ、破ったことによつて生じるリスクの方が大きいと予想される場合、そのルールを破ろうとは思わない。悪ぶつて喜ぶほどガキでもないしな。

つまり、俺が最低限のルールを守るのは、利己的な思考に基づいているのだ。決して良心からではないことは自分が最も分かっているところだ。

俺に人としての良心が平均的な人間よりいくらか欠けていることの証左は、今までの話を見てきた者であれば、改めて説明する必要もないかと思うが、付け足しておく、絹坂に対する俺の態度は、かなり甘かったということをし添えておく。やはり、何だかんだ言つて、実際のところ、真実を包み隠さず、恥を忍んで言えば、俺もいくらか絹坂に惹かれていたのだらう。やはり、人間、どんなに良心の欠けた人間でも、好きな相手にはいくらかは甘くなるものだ。

本来の俺は、雨の日に道端でずぶ濡れになった子猫を見殺しにすることや赤点を取った友人が泣きついてきた前で存分に満足な点数を獲得した己のテスト用紙をひらひらさせること、うっかりと漏らした他人のマイナスイクサな情報を利用して己の利益を引き出すことなどに、何の良心の呵責も覚え、姉が飲もうとしている牛乳が賞味期限が切れて明らかにダメっぽいことを知りながら敢えてそれを知らせず後に腹を壊してのた打ち回る様なんかを見て喜びを感じたりするような奴なのだ。加虐趣味はそれほど持つてはいないが、全然持つていないとは言い難い。

そんなふうに関心を持っていない人ではない俺ではあるが、さすがに、例の件に関しては、かなりの罪悪感を覚えざるを得ない。

例の件とは何かというと、今までの経緯を知っている者ならば、すぐに思いつくことであろうが、ここで改めて例の件に関して説明しておくのが親切設計といえよう。誰に対する何の親切なのかは全く意味不明であるが、ここは見えざる神（作者）の手というかキーボードを叩く中指の赴くままに説明したいと思う。全くの蛇足であるが、作者は何故だか中指だけでキーボードを叩く変な癖がある。作者って何だ？

さて、こーいう淀破りなギャグはスルーするとする。駄洒落ではない。

例の件とは、つまるところ、檜の件に他ならない。

檜とは、勿論、木の種類ではない。どこまで説明すればいいのか分からんが、とりあえず、全部説明することにする。

檜は、かつて、俺が高校生だったときに、同じ組織に属した仲間であり、友人であり、一時期はクラスメイトであり、そして、まあ、もったいぶるのは、恥ずかしいからであるが、まあ、ずるずる引張ってもしようがないので、さっさと言うが、檜は俺の恋人であったわけだ。

檜という少女は、これがまたよくできた奴だった。

凜々しい切れ長の瞳を持ち、長い黒髪を、平素はポニーテールにしていた。恋人であった俺が言うのは惚気にしか聞こえんかもしれないが、間違いなく、美人の部類であったと断言できる。

その上、性格は利発で行動的で、愛想も面倒見もよく、運動が得意なのは剣道で結構な成績を収めたことから明らかで、その上学力も高いという才色兼備の、まさに才女だった。

人並み以上には勉強ができて、運動がからつきで、しかも、いつも無愛想で不機嫌で気難しく偏屈で独尊的な俺よりも数段優れた奴であったことは自明の理であり、俺に相応しからぬ過ぎたるものであったことは言うまでもない。

と、このように檜のことを考えていると、自分自身、驚くほどに劣等感というか自虐的な感情に囚われる。鬱々と檜のことを考えていると、自分と世界とその他、色々なものの価値など全くないように思えてしょうがない。まったく、俺らしくもないことだ。俺がたまたまこんな糞下らない感情に囚われているなどと誰が思うだろうか。過去の俺ですら、俺自身がこんな考えをするようになるとは予想だにできなかった。それほど、檜という存在は俺にとって大きなものであった。願わくば、彼女にとっても俺がそうであったならば、いささか傲慢ではあるが、嬉しい。

さて、俺が彼女のことを考える度に、こんなネガティブな思考に囚われる理由は他にもない。彼女はもう俺の側におらず、二度と言葉を交わすことも、肌に触れることも、その姿を見ることがすらも、彼女が今何をしているかと想像を巡らすことさえもできないからだ。死んでしまった人間とはそういうものだ。生きている人間とは全く隔絶された存在へと遙か彼方へ遠ざかってしまう。

檜が死んだのは、まあ、病気だった。色々と手を尽くしたが助かる見込みは臓器を一個取り替えるしかなく、それだつて時間の猶予なんて殆どなく、いつ死んでもおかしくはないような状態だった。当然、24時間365日病院から出ることでできず、いつでも医者診察できる状況になれば生き長らえる見込みはなく、そして、

将来、生き延びられる可能性もなかったわけだが、しかし、厳密には絶対に生き延びることができないというわけでもなかった。もしも、檜がまだ生きていて、手術を受けて耐えられるくらいの体力が残っていて、檜の身体に合う臓器が見つければ、生き延びることはできただろう。

しかし、彼女は、それはもはや不可能だと、そんなものは夢物語だと断じた。

「たぶん、もうダメだ」

と、彼女は言い切った。たぶん、というのも、おまけで付けたようなものだろう。

しかし、一方で、奴は俺に、

「この世はどーなってるか分からないし、未来はどーなるか分からないよ」

などと矛盾したことも言うのだから、このときばかりはこやつのが性格も完璧ではないなと忌々しく思ったものだ。

だいぶ長くなっている。檜のことを考えると、いつもこうだ。鬱々とネガティブなことを延々と考え続け、終わりまで考えが止むことはない。途中で考えを遮るものが外部から来ない限り。

ともあれ、ようやく、俺の俺らしくない思考も最後に至る。俺が、冒頭で、良心の話をした理由もようやく説明できるというものだ。

俺が俺の良心というか罪悪感を最も感じるのは檜に関連したことから。

己は死ぬと断じた檜が選択した最期は、自分と俺以外の他者を全て排除した二人だけの最期だった。

ある日、俺の眼前で血を吐いた彼女は、医者と呼ぶことを許さず、俺と二人だけでこの世を終えることを望んだ。自分の最期を、俺だけが見ることを望んだ。このあたり檜もいい性格をしている。最も愛する人が死んでいく様をキスをしながら間近ですつと死ぬまで見ていてくれというのだから。それ故に、俺はキスという行為を思い浮かべることに奴の死んでいく様を、死に顔を脳裏に浮かべる羽目

になつてしまつたのだからな。これもまた、俺が抱える恋愛トラウマの一因だ。

この選択は、俺と檜のエゴであつた。檜はそれで満足だつたようだし、俺も檜がそう望むならばそれでよかつた。

しかしだ。人間は誰しもそうであるとおりに。自分は自分だけのものではない。彼女は彼女だけのものではない。彼女は俺のものでもあり、親のものでも、家族のものでも、友人のものでもある。自分の命など自分の意思でどうこうしても勝手だというのはあまりにも馬鹿馬鹿しい思考に他ならない。そう俺は思う。俺は今まで檜を追うこともなく、ぐだぐだと生きているのもそれが一因だ。他には、彼女に「生きて」と遺言されたせいでもある。まったく、ひどい女だ。

さて、檜には妹がいた。大変、姉想いな、姉のことが何よりも大好きな、姉が大の自慢であり、また、姉にかわいがられ、守られてきた妹が。二人の姉妹の愛の深さに、俺と檜の恋人としての愛の深さは負けないと思うが、その歴史ははるかに姉妹の方が長い。

俺が檜を、檜が俺を愛したように、妹も姉を、姉も妹を愛した。

だが、最後の最後になつて、姉は妹よりも恋人を選び、その最期から妹を排除した。

そして、恋人と一緒に最期を迎え、妹には何の言葉も遺さず逝つてしまつた。

その妹の報われぬ愛と、裏切られたという想い、悲しみ、憤りを理解できないわけではない。俺はそれを理解する良心を持ち合わせている。性別も立場も違えど同じ女を愛した者同士なのだ。その気持ちを理解できないわけがない。同じ喪失感と悲しみを抱える同胞なのだ。その愛する者から、最後の最後選ばれなかつた怒りと悲しみが分らないわけがない。

それゆえに、俺はその妹から責められ、憎まれ、恨まれることを望んだものだ。そうすることで、彼女の悲しみが少しでもなくなればよいと俺の陳腐な良心は考えたわけだ。

しかし、俺の良心はあまり大きくない。その小さな良心ゆえに、ここ暫くというかずと彼女から恨まれることを彼女任せにしていた。俺の方は何のアクションも起こさずただ憎まれるがままにしているというのは如何なものか。それでは、彼女は別のことを、そう姉を失った悲しみと喪失感の方に気が向いてしまうではないか。責められるならば、とことん、悪役を演じるべきではないか。と、俺の良心はいくらか前に思った。彼女から姉を奪ったのは誰あるう俺なのだから。もっと怒りと憎しみをぶつけられて然るべきなのだ。だから、俺は檜の妹と会うのだ。彼女にもっと責められる為に、憎まれ、恨まれ、怨嗟の声をぶつけてもらおう為に。そうすれば、彼女の悲しみと喪失感はいくらか紛れるに違いない。まったくもって、俺に似合わぬ思考だ。

偏屈先輩の似合わぬ思考（後書き）

物凄く久しぶりに更新しやがったと思ったら、なんかコメディのくせに全然笑えない話が出来てしまいました。こんなコメディ失格ですよ。

しかし、ストーリー上仕方のないことなのです。すいません。大変申し訳ないです。

できるだけ早期に、すちゃらかおちゃらかならたらコメディ戻します。

## 偏屈先輩の隠密行動

さて、前話にてこれまでの経緯の説明のために長々と糞下らない我が思考を垂れ流したわけであるが、それらの理由によって、俺は檜の妹と会い、いくらか話をしようと思ったのだ。彼女に嫌悪され憎悪され責められるために。それが彼女のためになると信じて。また、それは、ある意味、自分のためでもあることを俺は自覚している。

そのあたりの思惑は一時脇に置いておくとして、そういったわけで、先日、俺は数年ぶりくらいに檜妹と接触し、さつそく、彼女を激怒させ、俺を嫌悪・軽蔑させることに成功した。ついでに、翌日、人目を避け、二人で色々と話すことも約束することにも成功した。

彼女にしてみれば、俺の顔など見たくもないといった気分なのはなかるうかとも思っていたのだが、憎悪に満ちた顔ながら、二人で会うことにはあっさりと同意したことに、俺自身、正直、かなり驚いた。会うことを提案しておいて何だが、どういう心情というか思考の結果、会うことを承知したのか俺には理解しかねる。どうやら彼女にも何か俺と話したいことがあるらしいというのはなんとなく察することができた。

まあ、そんなわけで、檜妹と会うことを約した俺であるが、正々堂々と真正面から包み隠さず胸張って会いに行くわけにはいかん。理由が理由であるし、原因が原因であるし、そして、また、俺が女に、例え、どんな関係のどんな相手であろうとも、会いに行くことに良からぬ顔をする奴もいる。誰とは言わんでも分かるだろうし、言いたくもない。

そのようなわけで、俺は、早朝も早朝、まだ我が家の家族連中が目も覚ましていないような時間に、身嗜みを整え、部屋を抜け出し、こそこそと廊下を移動中だ。

自慢じゃあないが、俺はあまり早起きが得意な人間ではないゆえ、この時間に目覚めることは不可能に近い。義務教育＋高等教育時代も毎日のように母上に起こされてやっとやっとで遅刻せず登校していたし、一人暮らしを始めてからは、何とか何とか己一人で起きられるように進化したのだが、未だに苦手なことには変わりない。毎朝、不機嫌な面でもつつり朝の支度をして、登校して、大学生活を送っているわけだ。まあ、俺は1年のうち300日は不機嫌なんだが。

そんな早起ができない俺が太陽も昇らぬ朝早くから行動を始めようと思ったら、どうするかといえば、簡単なことだ。その前の日、寝なければいいのだ。それはそれで寝不足のせいで不機嫌になるが、まあ、寝不足だろうが寝起きだろう俺が不機嫌なことに変わりはないからう。

寝不足による心身への悪影響をひしひしと感じながらも、それを無視しても朝早くに行動を開始しなければならぬ理由はいくらもある。

まず、第一に、絹坂だ。奴はついに俺の実家の場所を突き止め、更には俺の家族とも和気藹々と交流しやがり、俺の彼女という立場を家族公認のものにしゃがった。最近の奴ときたら、俺の友人・知人に続き家族にまで己の立場を知らしめるといって作戦行動を積極的に展開しているのだ。じわじわと外堀を埋められている気がする。いや、既に埋められるような気がする。大阪夏の陣ばりに外堀は埋め立てられた後のような気分だ。

その絹坂だが、奴は、俺が檜妹に会いに行くことにいい顔をしないでだろう。事情が事情だけに、会うことは了承してくれるやもしれん。しかし、かなりの高確率で奴は付いてくる。表立ってか密かにか、どちらにせよ、そんなことは願ひ下げだ。

この件は、俺にとってはあまり他人の目に晒したくないナイーブな部分なのだからな。

そして、第二に、我が家に頻繁に出入りする我が友人どもだ。奴らは中々個性的で面白い連中だが、奴らときたらナイーブだの何だのいった繊細なことをとんと理解しない上に、人の不幸を嘲笑ったりおちよくったりするような輩だ。まあ、勿論、俺もそうであり、俺たちは今までずうっと相手の不幸を指差して笑い合い、足引つ張り合いといった関係をやってきたのだから、今更、確認することでもないのだが。たまに、ふと思うのだが、俺たちの仲は友人なのか？ と、他の奴らも思っていることだろう。ともかく、奴らに俺と檜妹が会う場面を見られるわけにはいくまい。蓮延と草田には少々檜妹を呼び出すときに、協力してもらったが、あの時も、本来の目的を教えたわけではなく、ただ、校内をうるちよろしうと言っただけだ。使える者は親でも友でも何でも使っべきだ。

また、家族すらもこの問題からは排除せねばならない。特にあの糞野郎は論外であり、きやつつ如きに我が弱点ともいうべき問題を晒すわけにはいかんから、奴からは何がどうあつてもこの問題を知られるわけにはいくまいと、固く心に決めていたのだが、この間、あの間抜けがうっかりぼろつとその話題を出しやがったから、家族内にも周知の事実と相成ってしまった。そのときは、奴らの弱点も晒してやったから、やられっ放しでは終わらないで済んだ。しかし、これ以上、連中をこの問題に足を踏み込ませるわけにはいかん。絶対隠匿事項だ。この問題が知られた上、檜妹との会合を奴に知られたときには、その日を俺の命日としよう。

母上は秘密保持の観点から見て、大変、お口が軽くいらつしやる方で、誰かに、そう、絹坂なんか「先輩、何処に行ったか知ってますかー？」などと聞かれればほいほいと「檜さんの妹さんと会いに行ったみたいねえ」などと言うに決まっているのだ。

姉上の本質は俺や俺の悪友どもと同じであり、相手の弱みだの何だのを見つけると、盛んに面白半分になそこを突つつく奴であるから、そいつにも今回の件を知られるわけにはいかない。

我が愛妹、三津花は多少の悪趣味と悪ふざけ癖を除けば、我が家

では珍しく問題ない真つ当な人格を持ち、人の心の傷を配慮する優しさも兼ね備え、秘密保持能力も有する人物ではあるが、俺の恥部ともいうべき弱みを妹に知られることは兄の矜持として許し難いものがある。

そのような理由で、俺は誰にも見咎められず、早々に家を脱出して、約定の時間までどこかここかで時間を潰し、会合の場に行かねばならない。

そんなわけで、俺は徹夜（夜通し本でも読んでいれば、寝ないでいるのはそれほど苦ではない）をして、朝も早くからこそこそと部屋を忍び出て、廊下を忍び歩きしていた。

現時刻は午前の6時よりもいくらか前であり、さすがにこの時間に起きているような奴はおるまい。

「あら、お兄様。おはようございます」

と、思っていると、廊下の先のドアが開き、顔を出した三津花が丁寧な朝の挨拶をしてきた。さすがは礼儀正しい我が妹。と感心している場合ではない。

「今朝はお早いんですね。お兄様がこんな時間に起きてらっしゃるなんて珍しいこともありますわ」

「そっちこそ、何故に、こんな朝早くに起きとるんだ。そして、その格好は何だっ!？」

何故、こんな時間に起きているのかという問いを遮るべく、先にこつちから質問してやった直後、思わず、俺は怒鳴っていた。そりゃ怒鳴るといふもんだ。怒鳴らずにおられるか。

「何だその格好はあつ!？ その毒蛙みたいなまっピンクに紫の混ざり合った色な上にテラテララメが入ってるなんていう毒々しいジャージはっ!？ 趣味が悪いにも程があるっ!」

「ああ、これですか？ 兄様が私の作業着をどこかにやってしまったものですから、友人から古いジャージを譲って頂いたのですわ。ちよっと派手ですけど、それほど悪い感じでもな」

「いわけあるかつ！ 悪過ぎだ！ 超絶いかんわっ！ やめるやめるやめるやめるっ！ そんなジャージは脱げっ！ 今すぐ脱げえいっ！」

「わあっ！ いきなり、何するんですかあっ！ ジャージを引つ張らないで下さいっ！」

こんな悪趣味極まりない南米熱帯雨林の毒蛙か毒蛇みたいな色彩のジャージを我が愛妹が着用していることには、幾秒たりとも我慢ならん事態であり、俺は速やかにそのジャージを没収すべく殆ど無理矢理にでも脱衣を強制しようとした。婦女子が着用中の衣服を篡奪するなど野蛮にして恥ずべき悪行ではあるが、今回ばかりはいたし方のない緊急事態と言えよう。

俺と三津花がジャージを引つ張り合っていると、別のドアが開いた。

「脱げとか脱がすとか何言ってるのよー？ あんたらいつから近親相姦に目覚めたのよ？」

顔を出して全く破廉恥極まりないことを言い出したのは我が姉上である。我が家の三子は並列に部屋を並べているのだ。階段に遠い方から俺、三津花、姉上の順である。

姉上は少し茶色い長い髪をぼさぼさにして、化粧気のない顔をしている。てか、あんた、眉毛をどこにやった？ 部屋に落としてきたか？

「なーにが近親相姦かつ！ 俺にはそんな趣味はないわっ！ 無礼なことをほざくなっ！」

「あー。煩い煩い。頭がガンガンするから叫ばないでよ。昨日、飲みすぎて、二日酔いなんだからさー」

姉上は頭をボリボリ掻きながらイライラとした様子で呟く。その格好たるや、よれよれのTシャツにパンツ一丁というラフ極まりない軽装備だ。まあ、こんな奴のことはどーでもいい。

「貴様が二日酔いだろっが三日酔いだろっがそんなことは関係ないわ。勝手に具合を悪くしておれ！」

「何さ。酷い弟ねー。てか、朝っぱら何やってんのよー？ あたしはまだ眠いんだから、廊下で騒がないでよねー」

「姉様、聞いて下さい。兄様が私のジャージを脱がそうとするんです」

なんかその台詞だけ聞くと、俺が酷い倒錯した性癖の変態みたいに思えるから凄い嫌だ。

「ジャージ？ ってか、三津花！ その格好は何よ！？ デイ  
ニーの悪役みたいな色じゃないのよっ！」

今までぐだぐだとだるそうだった姉上は三津花の言葉を聞き、その悪趣味なジャージを見るなり、顔色を変え、目を見開き、啞然とした。そして、その直後には、

「脱ぎなさいっ！ 今すぐ脱ぎなさいっ！ そんなものはみっちゃんには似合わないからっ！ ほらー！ 脱ぎ脱ぎしましよっねー！」  
「わあーっ！ 二人がかりで何するんですかーっ！」

即座にジャージ脱衣に取り掛かった。うむ。これが我が家族として当然の反応だ。

暫く抵抗する三津花から何とかかんとかしてこの気分悪いジャージを何とか脱がせようと二人がかりで四苦八苦していると、

「あらあらあら、3人で何をやってるの？ 三津花ちゃんを苛めるわけじゃあないわよね？」

朝からやたら煩い階上が気になったのか、母上がおっとり階段を上ってきた。三津花は今度は母上に助けを求める。

「あー！ 母様！ 助けて下さい！ 姉様と兄様が私のジャージを  
ー」

「三津花ちゃん！ 何なのそのジャージは！ 脱ぎなさい！ 今すぐ脱ぎなさい！」

「ええー……」

母上の返答を聞いて、三津花はがっくりと呻く。そうして、力を失ったところを俺と姉上が見逃すはずもなく、悪しきジャージは速やかに俺の手の内に落ちた。こやつは暫く、我が部屋に隠匿した後、

三津花が家を空けている間に焼却処分してくれるわ。

「何なのですか。この家族は……」

廊下に下着姿で転がっている三津花が呟く。

それを見下ろしながら俺と母上と姉上は同じことを呟くのだった。

「愛ゆえに」

## 偏屈先輩によるジエノサイドと平穏な朝食

納豆は引き割りが好きである。この細かく粒粒に粉碎されているのが非常に好きだ。何で、この細かい粒粒のが好きなのかって聞かれると明確には答え辛いけど、まあ、ともかく好きなのだ。引き割りじゃない納豆は納豆ではないというほど、引き割りにこだわりがあるわけではないが、何種類か納豆が並んでいれば必ず引き割り納豆を選択するほどに好きではある。まあ、どうでもいいことだが。

そんなわけで、今朝の朝食に俺は引き割り納豆を食うのであった。昨夜、寝ていないため、さすがにいくらか眠気を感じ、欠伸を噛み殺しながら、引き割り納豆をぐるぐるぐるぐる掻き混ぜる。

「双葉ちゃん、葱切ったから入れなさいね」

「その名を呼ぶな」

不快極まりない我が名を呼ぶ母上にきつちりと断りを入れつつ、葱の入った小鉢を受け取り、葱を納豆パックの中に入れる。そして、再びぐるぐるぐるぐる掻き混ぜる。既にカラシとタレは投入済みだ。醤油は入れない主義である。ダシだけで十分だからな。あんまり塩を取るのもよくないからな。俺はよく頭に血が上るゆえ、高血圧では今に血管がぶち切れかねん。

「母さん、もう食べ始めていー？」

「ちよつと待ってなさい。もう少しでお魚焼けるから」

俺の隣に座る姉上が白飯、豆腐の味噌汁、ホウレン草の胡麻和え、カボチャのそぼろ煮といった朝食を見つめながら空腹を訴える。今日も我が家の飯は純和食。このメニューに今焼いている鯖が加わる。俺はあまり鯖が好きではないのだが、母上の作った飯を残すことはできないゆえ、我慢して食うこととしよう。

「ちよつと双葉ちゃん」

「その名を口にするな」

「もうお魚焼けるから、三津花ちゃんを呼んできてくれる？」

母上にそう言われればやらねばなるまい。それに我が愛妹のためでもあるしな。

俺は納豆を一旦テーブルに置き、席を立つ。

三津花は朝早くから何してるのか。愚問である。庭仕事だ。

彼女は何故だか高校に入ってから園芸部に入部し、やたらと植物を育成することに興味を抱いているようで、我が家の裏庭を小規模なジャングルにしているのだ。題「魔女の小森」といった感じた。

そのジャングルのような庭か或いは庭のようなジャングルに侵入する。草を掻き分け、枝を潜り、花を踏み潰しながら入っていく。外から見た限りでは三津花が何処にいるか全く分からんからな。いのかいないのかすら分からぬ。

「まったく、これでは、どれが育成中の草花でどれがどこぞから紛れ込んだ雑草か判別がつかん。三津花はどーやって見分けてるんだ？ てか、足の踏み場がないぞ。さつきから花をいくら踏み潰しているんだが、大丈夫だろうか？」

「大丈夫なわけじゃないじゃないですか」

庭を歩きながらぶつぶつ呟いていると、いきなり、目の前に立つた三津花がしかめ面で言った。

「いきなり現れるな。驚くではないか。てか、何処にいた？」

「さつきから、ここにいましたよ。ここにしゃがんでましたわ」

三津花曰く、ずっと俺の真正面にいたらしかつたのだが、俺には全く見えなかったぞ。それもそのはず、彼女は迷彩柄のジャージを着ていて、周囲の色合いと同化していたのだ。

趣味悪いジャージを家族総出で没収された三津花には姉上よりこの迷彩ジャージが下賜されたのだが、これもあんまり趣味がいいとは思えんな。まあ、まだ許容範囲内ではあるがね。許容できなけりやとつくの前に脱衣させている。

「ところで、兄様、さつき言っていたことですけれども」

「む？ ああ、花のことか。いや。足の踏み場がないゆえ、仕方な

く、花をいくらか踏み潰した」

三津花にいくらか恐い顔で睨まれつつ問い詰められ、正直に答えると、彼女は見る間に顔を真っ赤に染め、怒鳴りだした。

「な、なんとということをするのですか！ この人殺し！ じゃない！ 花殺し！ 殺花罪ですわ！」

怒られた。まあ、そりゃそうか。しかし、数メートル四方に渡って花が群生しとりゃあそれを踏むかジャンプして飛び越えるかしかないではないか。

とまあ、そのようなことを説明したところ、

「そこはジャンプする所なんですわっ！」

とのことであった。というと、何か？ 三津花は毎度そこを通る度にぴよんぴよんジャンプして花の群生地を飛び越えているのか？ 成長する草の背丈を飛び越えるってな忍者の修行じゃあるまいし。

「しかしなあ、こんな土剥き出しな上に、石やら木の根やらがごろごろある場所でジャンプでもしようもんならば、かなりの高確率で足を引っ掛けるか滑らせて転倒するに違いあるまい。俺はこんな所で泥んこ遊びをしたくはないぞ？」

「そんなことはありません！ 転ぶのは5回に1回くらいですわ！」

20パーセントは世の中じゃ高確率つつんだ。

そんな言い争いをしつつ、俺と三津花は件の花の群生地まで戻ってきた。来た時と同じように黄色い何処の何の花だかも分からんやつが何十どころか何百と群生している。ここまで集合すると花も何処か気持ち悪いような気がする。俺はお花畑とは相性が宜しくないようだ。まあ、そんなこと今更なんだが。

「いいですか？ 兄様。少し助走を付けて、一気に飛べば、花を一株も傷つけることなく、飛び越えることができるのです」

「んー。無理そうな気がするんだが……」

渋い顔を見ると、三津花は、じゃあ、私がやるから、見ている。

とばかりに俺を睨み、少し、下がって、軽く助走してから飛んだ。

ぼーんという擬音をつけるほど高くも遠くも飛ばなかったが、彼女

の言う通り辛うじて花は一株も傷つけることなく、花の群生地を飛び越えて行った。

しかしながら、最後の着地に失敗して顔から地面に激突し、慌てた俺は花を蹴散らしながら三津花の元へ駆け寄ったのだった。

「なんとということ。なんとということ。一体、いくつの花の命を奪ったと思っっているのですか？ この虐殺者。殺花鬼。あれはジエノサイドですね。ジエノサイド条約違反に違いありません」

「知ってるか？ 通常、ジエノサイドつつのは虐殺されたのが人間の場合だけを言うんだ。草やら獣やらにジエノサイド条約を適用してたら、俺たち人類は皆で仲良く絞首刑にならんといかんぞ」

俺と三津花は仲良く兄妹の会話を楽しみながら朝食の席に着く。

幸いにも三津花は前歯やら鼻やらをへし折ったり流血することもなく、ただ、顔が土まみれになったのと膝と手の平を軽く擦り剥いただけの軽症で、俺は心底安堵したのだが、三津花は俺が花を大量に蹴り潰したことに腹を立て、助け起こそうとする俺をばかばか殴ってきたのだから、一体、この子の思考回路はどうなっているのか？

とりあえず、三津花には顔と手の洗浄と着替えを命じ、それから、朝食に向かうこととなった。

やれやれ、朝から無意味に労力を使ったものだ。

「おかえりー。遅かったわね」

「もつご飯できてるわよ」

先に飯を食い始めている我が家の年上二人に迎えられ、俺と三津花は席に着く。

「やれやれ」

「まったく」

俺と三津花はそれぞれぶつぶつと呟きながら引き割り納豆を5分くらい掻き混ぜてから、白飯の上にのせ、それには箸をつけず、箸を味噌汁の中に入れて納豆のねばねばを落としてから鯖を突付き、顔をしかめる。

「何であんたらご飯食べるときいつつも同じ動きなのよ？」

「双葉ちゃんと三津花ちゃんは昔からよく似てたものねえ」

「その名で呼ぶな」

母上と姉上が申すとおり、俺と三津花は仕草とか食べ物の好みと似たものがちよいちよい似ているらしい。まあ、兄妹なのだから当然似ているところもあるのは当然なんだがね。

「あら？ 三津花ちゃん、手、怪我してない？」

「あ、本当だ。服も着替えてるし。あんたら、庭にナニやってたの？」

姉上の言葉に何か嫌な意味を感じたが、それは無視して、庭での一件を説明してやる。

「兄様ときたら酷い人ですわ。私の大事な花を何本も踏み潰しておいて、反省も謝罪もないのですから。この人でなし！」

三津花は未だに花の一件が気に食わないらしく、ぷりぷりと怒った。

「母様も姉様も酷いとは思いませんか？」

「んー。それはー」

「そうねえー」

母上と姉上は仲良く右斜め上を向いて少し考える。この2人もちよいちよい仕草が似ていることがあるのだ。ただ、母上のおっとりさは姉上に遺伝せずどっかに吹っ飛んでいってしまったようだ。

「それは三津花が悪い」

「双葉ちゃんは悪くないわねえ」

「その名を口にするな」

母上と姉上は俺と同じ見解であつたらしく、それから3人で三津花に懇々と危ない真似をするな。体を傷つけるな。汚すな。もっと身を労われ。もっと女の子らしい装いをしろ。とくどくど説教をした。三津花はなんだか納得いかないような顔でぶすつとしていた。

「そーいえばさ」

朝食も粗方食べ終わりがけた頃、俺よりも先に食い終え、爪楊枝を銜えていた姉上が口を開いた。

「双葉さ」

「その名で呼ぶなっつとるだろが」

「朝苦手なくせにこんな朝早くに起きてたのは何でなん？」

姉上の言葉で、俺は今まですっかり忘れ果てていたことを思い出し、愕然として思わず箸を落とすのだった。

## 偏屈先輩家を出る

「こんなことをしている場合ではなかったっ！」

俺は叫びながら、席を立った。

三津花の趣味悪いジャージや花畑ジェノサイドの件などですつかり頭から吹っ飛んでいた檜の妹の一件を思い出したのだ。母上や三津花は早起きで、たまたま姉上も早くに起床したため、今朝の朝食は大変早い時間になされていたゆえ、時間はまだまだ余裕があるものの、いつまでもぼんやり家で過ごしてはいかんだ。あの絹坂がいつ来るか分からないからな。あいつは全く俺の予想の範囲外な言動をやりおるからな。朝起きたら、同じ布団に入り込んでいるとか平気でありそうだから嫌だ。

「うかうか朝飯なんぞ食っている暇ではないぞ！」

俺の叫びに隣に座っていた三津花はびくうつと震えて、箸を取り落とし、斜向かいで寝かかっていた姉上が目覚めた。

それよりも問題は母上だ。

「こんなことって……？ 朝飯なんぞって……？」

しょんぼりした母上はすると椅子から滑り落ちていき、テーブルの下に蹲って、フローリングの床に指での書き始めた。

「双葉ちゃんにとっては私の作った朝ご飯なんて、食べるのも面倒くさいようなものなのね。やっぱり、朝は簡単にとーすと珈琲とかで済ませたいのよね。和食なんか今の若い子の口には合わないのよね。ごめんね。古臭い和食しか作れないお母さんで……。運動会とかでもお稲荷さんとか太巻きばかりのお弁当よりももっと洋風で亜米利加がびくにくに持っていくようなお弁当がよかったのよね……。和食しか作れない母親なんてもう母親失格なのよね……。」「テーブルの下でしょんぼりの字を書きながら母上はそんなことをぼそぼそと呟くのだ。

こつされると、良心が非常に少なく、矮小な上に捻じ曲がった心

の持ち主である俺もいくらか申し訳ないような気がするものだ。生みの親にそんなことをされて嫌な気分にならない人間はもはや人間の屑といって差し支えあるまい。少なくとも、俺はまだそこまで屑ではない。

その上、姉上と三津花が非難がましい目で俺を睨むのだ。

「だ、誰もそんなことまで言っておるまいよ。てか、運動会の弁当は別にアメリカ人がピクニックに持って行くような化学調味料合成剤でんこ盛りな飯が食いたいと思ったことはないぞ？ それと、その名を呼ぶな……」

そんなわけで、俺は言い訳がましく弁明しつつ、なんとか母上をなだめすかし、機嫌を直してもらい、朝飯を胃の中に片付ける作業に一時間を費やした。

飯を食い終わった俺はあたふたと準備を整え、とはいっても、女の外出のように色々化粧だの身嗜みだの何だのにそれほど準備に時間がかかるものではない。服を着て飯食って寝癖直して髭剃ればもう外出できるのが男というものである。

全ての準備を整え、玄関に向かう途中で欠伸をしながら廊下をパツとシャツだけでぶらついている姉上に遭遇した。しかし、だらしのない奴だな。

「あん？ 双葉、」

「その名を口にするな」

「でかけるの？」

「うむ。ちと出かける」

ここで変に誤魔化したり慌てたりすると、人の嫌がるのが大好きなこの心根の悪い奴のことだ。しきりと面白がって突付いてくるに決まっている。うちの家族はそーいう奴ばつかなのだ。そーいえば、俺の友人もそーいう奴ばかりだ。俺もそーいう奴だ。ん？ ちと人のことをいじくる奴ばかりではないか？ 供給過多だろ。そのくせ、いじられる奴は少ない。こっちは品不足だ。そんなわけだか

ら、それぞれ互いが互いの弱みを突付きあっているわけだな。なんと不毛な。

「ふーん」

「なんだその変な目は。なんか文句あんのか？」

「いや、別に。何もねーけど」

不良のガンの付け合いみたいな会話の後、姉上はふらふらと二階へ上っていった。二度寝するつもりだろう。だらしない奴だ。まあ、しかし、今の俺には姉上の自堕落な生活がありがたい。

俺は他には誰にも見咎められることなく家を脱出することに成功した。

檜の妹と会う約束を取り付けた時間は午前の昼の少し前にして、場所は以前、絹坂とぶらりと立ち寄った覚えがあるオープンテラスのある喫茶店だ。

俺は幼い時分より大学に通う為、この町を離れるまで、前述したようにほぼ毎日母上の手料理を食べていた為、この近辺によく知った飲食店がない上に、さほど飲食店に精通しているわけでもないゆえ、直近に訪れたこの店を指定することとした。檜妹もその場所を知っているというのも宜しかった。

その店は俺の自宅からそれほど遠くはない場所にあるのだが、さつさと早朝に家を出た結果、会場場所である喫茶店に約束の時間より1時間以上も早くに到着してしまった。

1時間以上も喫茶店で何することもなくひたすら水とお洒落ジュースだのお洒落コーヒーだのを飲んでいるのも考えものだ。そんなにも回転率の低い客は迷惑以外の何者でもないからな。それにやたらとそんなに飲料物を取っけては便所が近くなってしまいうに違いない。

まあ、そんなふうに店とか便所とかの心配よりか何もせず椅子に座ってじっとしているのは暇そうだから、俺自身そんなふうにじっと待ち呆けするのは嫌なのだ。

そのようなわけで、俺は時間までしばしばそこら辺を散策することとした。こーいう目的のない行動というのは苦手なのだが、仕方あるまい。

とはいえ、人間慣れていないことを突然やるというのは中々難しいことだ。人から見て簡単に思えることも当人にとっては難解なることというのはままあるものだ。俺にとってはその一つが街中で当て所もなくふらふらすることだった。俺の行動といえば、基本的に家を出る前に目的を定め、何時に何処行って何してどうしてと計画を作り、一旦家を出たらまっすぐ寄り道せず目的地まで一直線に向かい、目的のことを為したならば、さっさと帰るといふものだ。味気ないし、面白みがないと家族友人知人からは不評であるが、そんなもん知ったことか。俺は外出が嫌いなんだ。

とまあ、そういうわけで、俺は暇を潰すことに大変難儀した。本屋やCD屋に寄るにもまだ開店していなかったし、映画を見るには時間が短すぎるし、何処かに行こうにも俺はこの辺りの店は知らないから何処にも行きようがない。

どーしたものとその辺りをうろろろろろしていると、  
「先輩」

不意に声をかけられ、俺はいささか驚いた。

俺のことを気安く「先輩」と呼ばれる人間は多くはない。高校時代、俺はちよつとばかり名が通っていた為、一般生徒からは忌避されていたゆえ、中々、そんなふうには呼ばれることはない。というか一般生徒、特に先輩から声をかけられた覚えがない。同じ組織に属していた先輩からは組織での役職で呼ばれることが多かったしな。大学の先輩はまあ確かに「先輩」と呼んでいる奴もいるが、こつちに大学の先輩がいるとは思えない。ともなれば、今、俺を「先輩」と呼んだ奴の第一候補は絹坂であった。あいつときたらいつ何時何処から現れていきなり声をかけてくるか分からんからな。

俺は絹坂に見つかったのかと思ひ、その声の主を見た。そして、また驚いた。

「檜……」

「はい」

俺の咳きに几帳面に返事した相手は、会う目的の相手、つまり、  
檜の妹であった。

## 偏屈先輩の困惑

檜の妹は、まあ、当然のことなのだが、いくらか檜に似ていた。

檜は髪を長く伸ばし、それを後ろで結んで、所謂ポニーテールという髪型にしていたのだが、妹の方も同じように長い黒髪であった。髪型が同じであると中々似たような印象を受けるものだ。その上、切れ長で凛々しい目が髪型以上にそっくりなのだ。俺が、かなり好きだったあの目が、またこの目の前にあるわけだ。まったくもって参る。勘弁してくれ。

その檜妹と俺は例の待ち合わせ場所である喫茶店のオープンテラスの一席に向かい合わせに座っていた。

檜妹はその凛々しい切れ長の目で俺を睨んでくる。負けじにとうか反射的に俺も相手を睨む。睨まれたら睨み返すという悪い癖が俺には付いているらしい。目には目を。ってことだな。意味違う。

目つきが悪い。睨むと恐い。と世間で評判な上に、現にそこら辺を歩くと犬に吼えられる、猫に逃げられる、ガキに泣かれる、不良にガン付けられるという実績(?)を誇る俺の睨みにも彼女は全く怯むことなく、なお一層睨み返してくる。と、すると、こっちは余計に睨み返し。と、不毛極まりない悪循環が続けられる。

「お、お客様あ。ご注文はお決まりでしょうか？」

妙に語尾がだらつとするアニメ声の店員がやって来た。その0円笑顔が少し固いのは、無言で睨み合う俺と檜妹の間に漂う気まずい雰囲気を感じたのかもしれんな。

ざつとメニューを見たところ、なんだかお洒落ちつくなカタカナなお飲み物ばかり並んでいて、どれがどんなものなのか分からん為俺はてきとーに無難にアイスコーヒーを選択した。

「で、あー。ひの」

とまで言いかけて俺は口を止めた。一瞬、素で檜と呼びそうになった。いや、まあ、彼女の苗字は檜であり、そう呼ぶことは全く問

題ないはずなのだが、しかし、そう呼ぶことに俺はかなりの抵抗を覚えた。というのも、今まで、俺にとって檜といえば、目の前にいる彼女の姉である檜であったからだ。目の前の彼女を檜と呼ぶことに俺は違和感を覚えるのだ。いや、覚えて然るべきなのだ。

「……君は、何にする？」

改めて聞き直すと、檜妹は俺をちらと睨んでから、店員になにやら舌が絡まりそうな名前の洒落たお飲み物を注文しなすった。

そして、また、俺と彼女は睨み合いを再開するのだ。

周囲の客や店員かしばしばちらちらと視線を向けられるのは、痴話喧嘩か何かだと思われるのだろうか。実際、そんなものではないのだが。実際に行われるのは、そんな愛だ恋だと浮かれたものではない。一人の人間の死に関する断罪であり、贖罪である。

そーいえば、この間、痴話喧嘩をしていたカップルをおもっくそ馬鹿にしてやったのはこの店だったな。我ながら趣味の悪いことをしたものだ。まあ、中々愉快だったからいいのだがね。まあ、そんなことはどーでも宜しい。

睨み合いを続けながら、俺はいささか困惑を覚えていた。

その原因とはおおよそ二点に限られる。一つは前述したとおり、何故、彼女が俺に会ってくれるのかという点である。彼女は俺のことを唾棄するほどに憎悪しているはずなのだ。にも関わらず、嫌悪の意思是伝えてくるものの面会を拒もうとはしなかった。会おうと望んでいる俺が言うのも何だが、これはいくらか謎だ。本当ならば顔も見たくないはずではないのか？

また、もう一点、些細ではあるが、不可解な点がある。というのも、俺は会合場所であるここにだいぶ早くに到着してしまった。1時間も前にだ。しかし、彼女は既にいたか、或いは俺とほぼ同じ時刻にはここにいた。そして、俺に声をかけてきたのだ。それ以前に俺が早く来るようにと連絡したわけでもないのに、既に来ていたというのが俺にとって大いに驚きであった。理解できん。

「先輩。先輩。ねえ。おい」

「ん？ む。何だ？」

「何だじゃないでしょ」

檜妹の呼びかけに応じると、彼女はむっつりと不満げに呟きつつ、眼光鋭く俺を睨み、

「そもそも、私が何でここにいるか、先輩知ってます？」

猛烈な皮肉を言うてくださった。

「誰かさんがここに呼び出したから、私はここにいますよ。知ってました？」

「……すまん」

「はっ！ あなたの口先だけの謝罪は聞き飽きましたよ。病院から式場から火葬場から今まで何回あなたが私にその言葉を繰り返したとか。もういいですよ。そんな意味のない言葉なんか聞きたくありません。耳が腐る」

檜妹は口の端を吊り上げ、俺を蔑視しながら言い捨てた。

平素、大変プライドの高いことでは三国に並ぶ者なしと称されるほどの俺ではあるが、彼女に対してだけは何とも言い返しがたく、ぐうの音も出ず、黙り込んでいるしかなかった。

「ほら、黙ってないで何か言ったらどうですか？ 私をここに呼び出したのは誰か覚えてますよね？ さつき教えてあげたばかりなんですから。それくらいのこと鳥でも覚えてられますよ」

彼女は極めて冷徹ながら嫌悪感に満ちた鋭い視線で俺を突き刺しながら、更に言葉でもボカスカと暴行に及ぶ。

「で。何で、先輩は私を呼び出したんですか？ まあ、いくらか予想はつきますけど。あなたが殺した人のことでしょうか？」

「む。まあ、そうだ……」

「ふーん。殺したってことは認めるんですか？」

「まあ、そう捉えられても致し方あるまい」

実際、あれは警察でも問題になっただけ。あれは殺人とは言わずとも自殺幫助に当たるのではないかと。しかし、結局、警察は手出しをしなかった。俺の一族がいくらか手を回したという噂もあっ

た。しかし、俺は檜と自身との交際を家族には周到に隠していたし、実際、家族にはつい最近露見したばかりであるからして、そのような工作はなかったと思いたい。結局、秘密にしているゆえに、こっちも「そーいうことしてないな」と一族の連中に確認するわけにもいかず、有耶無耶になっている。

警察が逮捕するほどではないと判断したのか圧力に屈して見ぬ振りを決め込んだのかは知らんが、とにかく、俺の心の中ではあれは殺人であると言われても仕方がないと認識していた。

いくら檜が余命幾許もなかったとしても、生き残る可能性は皆無ではなかったのだ。もしかすれば、まだ生きていて、俺の隣で一緒にアイスコーヒーでもすすっていたかもしれん。俺だって、できればその方がよかった。あんな甘い悲恋小説みたいなのが最期なんか糞だ。そんなんよりライトなラブプロメの方がずっと幸せに決まっている。

それでも、俺が苦しむ彼女を抱き締めたまま然るべき助けを呼びにいかなかったのは、檜がそれを望んでいたからだ。手術室で体を切り刻まれた末に麻酔で眠ったまま天国に召されるよりも、彼女は俺と二人きりで、俺だけを見つめたまま死ぬことを望んだから。

「そーやって、あなたはお姉ちゃんを殺した原因をお姉ちゃんのせいにしてるんじゃないやありませんか？ お姉ちゃんが望むから、お姉ちゃんが言ったから、殺してやったってことにして自分の罪の意識を減らしたいだけじゃないの？」

突然、頭の中で考えていたことに対してそう言われ、俺は大層驚いた。驚いて声も出なかった。

「あなたが考えてることくらい分かりますよ。どーせ。そんなことでしょうか？ あなたはそーやって、殺人を正当化しているのよ。あれは身勝手な殺人じゃなかった。愛ゆえの行為だったってね。そうして悲劇の主人公を気取っているの」

檜妹の言葉に俺は声も出なかった。心では「違う！」と叫びたくとも、声が出なかった。それは怒りゆえか。悲しみゆえか。それとも……。

「私を今日呼び出したのだって、全ては自分の罪悪感を軽減したかったからなんじゃあないの？」

彼女はまっすぐ俺を睨みながら、薄っすらと笑みを浮かべながら言葉を続ける。

俺がむっつり黙っていると、店員がぎくしゃくとした態度で注文した飲み物を持ってきた。

店員がまだ伝票も置かないうちに俺と檜妹は一気に各々の飲み物を飲み干した。

「場所を変えましょう。ここでは私の言いたいことの半分も言えませんが。先輩も、こんな人がいる所は嫌でしょう？」

檜妹が言い、俺もそれには同意であったので、置かれて十秒も経っていない伝票を持って会計を済ませ、俺たちは店を出たのであった。

## 偏屈先輩の困惑（後書き）

だいぶ久しぶりの更新です。

なんか最近になってようやく終わりが見えてきましたので、50話くらいを目処に完結させようかと思っています。

まあ、たぶん、帰省編が終わっても、次があると思うんですけども。

## 偏屈先輩驚愕す

俺が檜の妹と初めて会ったのは、もう4年も前の話だ。

当時、俺は今いるこの街に住んでいて、まだ16歳の高一で、まだ組織も拡大を始めたばかりで、そして、当然、檜もまだ生きていた。発病してから判明したことなのだが、この時、既に彼女の肺は病魔に取り付かれていたらしい。健康診断でも分からなかったことゆえ、俺たちが知る由もない。

俺と檜は付き合う以前から中々仲が宜しく、同じ友人グループに属していた。俺たちは時折というか週に2、3回は勉強会なんて名目を立てて複数の友人と一緒に誰かの家に押しかけ、実際には勉強なんてつまらんことはうつちゃっておいて、くっだらなことをくつちゃべつたり、お茶と菓子をおやつたり、悪巧みを企んだりしていたものだ。

当然、檜の家に俺や友人たちが行くこともあった。初めて行ったのは夏休みの少し前だったかと思う。その時だ。檜妹に初めて会ったのは。

俺と彼女の関係というか接し方は、俺と檜（姉）が友人付き合いしていた間も、付き合い始めてからも、さして変わりはなかったように記憶している。そもそも、会話したことも少なかった。顔を合わせれば挨拶はしたものの、俺は、まあ、気軽に声をかけたり、話しかけたりする人間ではなかったし、殆ど常に渋い顔をしているような奴ゆえ、彼女も話しかけ辛かったのだろう。

ともかく、俺と檜妹の関係は、あくまで姉の彼氏と、彼女の妹とといった関係であった。

当時の印象としては、真面目そうで、口数は少なく、礼儀正しく、檜をミニマムにして大人しくしたような中学生女子であったが、しかして、その面影は今の彼女を見るところ、殆どない。いや、見た目はさほど劇的に変化しているわけではない。当時の檜妹を幾歳か

成長させたとおりの姿形で、嫌になるくらい檜に似ていた。

血の繋がりがあれば、特に兄弟姉妹ともなればどこかこっか容姿に似ているところはあるものだ。現に、我が家の子供三人にもあちらこちらと似ているところはあるのだが、その中でも特に似ているのが目だ。揃いも揃って子供と動物に恐がられるような悪い目つきをしている。これはあの糞親父からの遺伝なのだが、まったく余計なものの子々孫々に伝えやがったものだ。この目のせいで我が家の三子は普通に行っているのに「怒ってる？」とか「不機嫌？」とか「お腹痛いのか？」などと余計な気遣いをされたり、道行く子供に泣かれたり、犬に吼えられたり、猫に威嚇されたり、不良に絡まれたり、警官に職務質問されたり、と、散々な目に遭っているのだ。これは絶対にこの悪い目のせいに違いない。間違はなく。内面から滲み出る人柄の悪さとかそんなもんじゃあないはずだ。

俺はそんなことを考えながら犬に吼えられていた。なんでこのチワワは狂ったように血走った目で俺を見ながら吼えるんだ。しかも、漏らしやがった。こいつは狂犬病の検査を受けるべきだ。

「きゃんきゃん煩い犬ですね」

「まあ、慣れたものだ」

「よく吼えられるんですか？」

「うむ」

「動物には人殺しの匂いが分かるのかもしれないね」

「……………」

俺と檜妹はそんな会話をしながら先ほどの店から少しばかり離れた場所にある公園に移動していた。公園とはいっても滑り台だけのブランコだのがあるような都市公園ではなく、公園の中に神社があり、貸しポートが浮かべられる池があつて、大きな広場もあり、祭りやらイベントやらが執り行われたりするような中々広い公園だ。元々、神社があり、その周囲を公園にしたらしい。

まだまだ太陽の日差しは強く、気温は高く、風は弱く、天気は宜しく、まあ、要するに絶好の外出日和であつて、公園には結構な数

の人がいた。休日に行く所もないらしい家族連れとかデート場所の思いつかないカップルとか犬の散歩がてらにジョギングするおばさんとか日々時間を持って余して散歩するくらいしかやることのなさそうな老人とかがちよろちよろといるが、広いこともあってあまり人に聞かれたくないことを話すには差し支えなさそうだ。

「ところで、先輩」

暫く公園の中を池沿いに歩いていると、ふと檜妹が口を開いた。

顔を向けると、彼女は俺のことなどいないものと思っっているかのように真っ直ぐ前を見据えている。それでいて言葉だけを一方的に投げつけてきた。

「私、剣道しているんですよ」

「む、そうか」

その言葉に何の意味があるのかは全く分からないがとりあえず頷いておく。

剣道といえば、檜も剣道を嗜んでいた。全国大会に出るほどの腕前で、常に竹刀を携帯するほどの剣道スキーであった。まあ、姉妹で同じ趣味や習い事を行うことは珍しいことではない。

「私は小学校に入った年から始めたんですけど。お姉ちゃんは小学の高学年から始めて、中学では県大会の常連でした。知ってます？ 高校では全国大会にも行ったんですよ？」

「ああ、知ってる。応援にも行ったからな」

「そうですか。で、私はどうかといいますとね。中学で一回県大会に出たことがあります。中学で剣道はやめました」

彼女は皮肉っぽく唇の端を吊り上げながら言った。この言葉に俺は何と返せばいいんだ？

「お姉ちゃんは勉強もできたんですよ。小中高までの過去10年くらいの通知表を見るとですね。殆ど全てお姉ちゃんは私よりも成績がいいんですよ」

聞いていると、お姉ちゃん大好きな妹の姉自慢にも聞こえるが、檜のことを話す彼女の顔は、相変わらず唇の端は皮肉そうに吊り上

がり、目は真っ直ぐと前を見据え、どことなく暗く黒い雰囲気満ちていた。

「あの人は凄いですよ？ 綺麗で格好よくて運動も勉強もできて性格も良くて、誰からも慕われて誰からも期待されて……。私が頑張って頑張って努力して努力してやったことも軽々と簡単に飛び越えてその更の上にどんどん行っちゃう」

「そんなに完璧なわけでもなかったとは思っし、あいつはあいつで結構色々頑張ったり悩んだりしていたが……」

あまりにも過剰に檜を高評価していると思って口を挟むと、彼女は俺をじろりと見上げた。

「まあ、確かに。完璧なわけでも、才能だけでやっていたわけでもありませんね。しかし、ただ一つ、確実に言えることは、私よりも格段に優秀で、私よりもずっと期待されていて、私よりも多くの人に好かれていたってことです」

彼女は立ち止まり俺を真っ直ぐ見つめて言い切る。

「別に、私がネガティブなわけではありません。私は事実を言っているだけです。剣道の試合の結果にしても然り。成績にしても然り。性格にしても然りです。私は姉ほど真っ直ぐで心優しい人間ではなくてですね。だいぶ好き嫌いが激しい上に表裏のある人間でしてね」

確かに、彼女と檜は見た目こそかなり似ているが、雰囲気とか喋り方なんかは見た目ほど似つかわしくなかった。

「姉が死んだとき皆はきつとこう思ったでしょうよ。なんで姉なのかってね。この姉に比べれば不出来な妹じゃなくてなんで優秀な姉がって」

「そんなこと」

「思うはずがない？ そんなわけないでしょう。思っただけです。思うのが普通ですよ。優秀な子供とそれに劣る子供。親にとってはどちらがかわいいと思います？ 優秀な子供とそれに劣る子供。どちらか片方しか生き残れないとしたら、誰もが優秀でかわいい子供を選択するでしょう？」

「馬鹿な子ほどかわいいという言葉もあると思うが……」

彼女の言葉に俺はそんなことを言うしかなかった。

そもそも、親にとって子供は等しくかわいいものであり、そのうちのどれを捨てるなどと選択できるものではない。という考えもある。まあ、そう考えるのが良識ある大人というよりは、良識ある人間というべきか。しかしながら、世の中には己の子供を能力や容姿、性格などで差別や区別をするという親が少なからず存在する。

「うちの親にとって馬鹿な子は馬鹿な奴でしかなく、かわいいが価値もかまってる価値もないのですよ」

そう言って彼女は呆れと軽蔑を含んだ笑みを浮かべた。

「私はそんな両親が、まあ、当然、大嫌いなわけです。あの人たちは姉しか見ていませんでしたからね。何でもかんでも姉が優先で、私は二の次で、まあ、殆ど放っておかれていましたね。だからね。先輩」

彼女は視線を俺に向けた。薄い唇の端を更に吊り上げて、にいつと笑った。

「実は、私は、それほど怒っていないんですよ？　あなたがお姉ちゃんを殺してくれたことをね」

こいつは、何を言っているんだ？　俺の頭は様々な感情に入り混じり、混乱し、彼女が先ほどから言う言葉の半分もすっかりと理解できていなかった。待て。待て待て。何？　怒っていない？　檜が俺が殺したことに？

「お姉ちゃんを失くした両親の落胆ぶりったら見ものですよ。まあ、そりゃあそうですよね。十数年ずっと金と力を注ぎ込んできた人形を失くしたんですからね。落ち込みますでしょうね。ざまーみる」  
一通り両親を嘲ってから彼女はくっくくくと堪え切れない笑いを漏らす。その笑顔は本当に愉快そうで、暗く黒い雰囲気満ちている。

「そうそう。あなたは勘違いしているかもしれませんが、私はそれほどお姉ちゃんのこと好きではなかったんですよ？　慕っても

いませんでしたしね。ただ、そんなふうに見えるような態度は取っていたかもしれないね。そうした方が色々得でしたから。出来る姉に懐く妹っていう立場の方が、出来る姉に嫉妬する愚妹という立場よりかは見栄えがいいですからね。まあ、当人は気付いていたかもしれないけど」

彼女の言葉は全て俺の予想外だった。

まったく、今日は、散々な日だと言える。

そもそも、俺が彼女に会おうとしたのは何故だったか？ なんだかんだと俺は理由を付けてきたと思うが、実際のところ、何故なのか具体的に述べることは難しい。彼女が言ったように檜が俺のせいで死んでしまったことの罪悪感を彼女に叱責されることによって軽くしようと思っていたのかもしれない。まあ、今となってはどうでもいいことだ。それよりも今は重要なことがある。今まで俺が思っていた檜妹に関する前提という常識がどんどん崩れている。俺は檜妹は姉である檜を好いているもの、懐いているものと思っていたし、檜の両親もまあ普通の良識的な親だと思っていた。中のことは外からは分からないということか。

「待て。待て。待ってくれ。じゃあ、何で、お前は、あんな、怒って？」

「あれは演技ですよ」

混乱する俺の言葉に彼女はしれっと答えてみせた。

「はあ？ 演技？ な、何の」

「あなたを呼び寄せる演技ですよ」

演技をしたのは俺の方じゃなかっただろうか？ 校内で騒ぎを起こしたり、人のいるところで絹とイチヤツいてみたりして、檜妹を怒らせて呼び出すというのが俺のやった演技だ。

「私はあなたと会いたかったんですよ？ お姉ちゃんの仏壇とか墓にでも来てくれれば会うことができたのに。なのに、あなたときたら、2年も放つたらかしにするんですから。まったく残念極まりありませんでしたよ。そこへ、ようやく来たと思ったら、別の女がで

きているっていうんだから、あなたは本当に女誑おんなたらししですね」

檜妹はそう言いながら笑った。今度は、今までのように、皮肉そうな笑みでも、嘲笑でも、暗くも黒くもない、真っ直ぐに俺を強い瞳で見つめ、艶美に笑む。

彼女の突然の言葉に、何も考えられず何もできないでいると、突如、彼女は俺の服の襟を掴んで強引に顔を寄せた。唇の触れ合う数cm手前で、彼女の酷薄そうな薄い唇が動く。

「冴上双葉先輩。私は、初めて会ったときから、あなたのことが好きだったんですよ？」

そして、唇が触れ合った。

偏屈先輩驚愕す（後書き）

かなり久しぶりの更新になってしまい大変申しわけありません。何か書けないなーってダラダラしていたら、なんとまあ一月以上経過しているではありませんか。すいませんすいません。

話の方は、これはもうコメディではない。といった状況に陥っています。

これは、まあ、たぶん、私の趣味なんです。こーいう歪んだ愛（？）とか修羅場的なものが大好きなんです。だから、まあ、恋愛ものを書くときこーいう方向に走りがちなんです。だから、まあ、恋愛ものならしたラブコメが読みたい人には申し訳ないです。

## 偏屈先輩混乱中

俺は暫くぼーぜんとしてから、慌てて檜妹を突き放した。彼女はあっさりと突き放されるままに離れた。いきなり大それたことをした割にはやけに素直に離れたな。

体温が一気に急上昇したように俺の顔はかつかと熱くなり、心臓は狂ったようにばくばくと強く速く鼓動する。

「い、い、い、いきなり、何をするのだっ!？」

「何ってキスですけど」

アホみたいに混乱する俺に対して彼女は全く冷静で、平然としていて、冷ややかで、見下してすらいた。

「そんな慌てることですか？ 何度もしてるでしょ？ お姉ちゃんとかあの女ととか。それよりもっといやらしいこともしてるくせに」

そう言われてしまうと俺は何とも反論し難く情けないことに黙るしかない。

しかし、すぐに口を開く羽目になる。

「見たことあるから知ってるんですよ」

「うえっ!？ 何!？ 何で!？」

「先輩の喘ぎ声って女の子みたいですよね」

「ぬあうっ!？」

こんなことを言われたとき、俺は一体どんな反応をすればいいかっていうのか？ どんな言葉を吐けばいいのか？ 混乱しながら悲鳴を上げるしかない。

「い、いや、ちょっと待て。そーいうことをするときには、いつも人がいない時と場所を見計らっていたはず」

「まあ、そーいうことしている間の人間ってのは結構無防備で注意力散漫ですからね。私が帰ってきて覗いていてもちっとも気付いてませんでしたよ」

「ぐ、ぐぐぐうー」

冷ややかに答える檜妹に対して、俺は羞恥に顔を真っ赤に染めながら呻くしかない。

「しかし、私たち姉妹は揃いも揃ってあなたに惚れるなんて、趣味が悪いですよね」

それを俺に言うのはどうだろうか？ いや、まあ、言っていることは間違いじゃないと思う。自分で言うのも何だが。

「む、むう、まあ、そうだな」

堂々と肯定するのもアレなので、渋々といった感じで頷くと、檜妹は嫌そうな顔をした。

「そこは否定しないんですか？ つまらない」

「つまらないって……。お前は何がしたいんだというか俺に何を期待しているんだ？」

「先輩が嫌がる様とか打ちひしがれる様を見たいんですよ。もっと傷つけばいい」

尋ねると彼女は平然と答えおった。傷つけばいいって何だ。こいつSか。サド侯爵の仲間か。そこまでサディズムではないことを祈るばかりだ。

「先輩のことが好きだから苛めたくなるんですよ。ほら、よく言うじゃありませんか？ 男の子が好きな女の子に意地悪しちゃうってやつ」

反動形成ってやつな。と、そんなことはいいんだ。いや、苛められてもOKってわけじゃないが、今はとりあえず捨て置く。それよりも何よりも聞きたいことがある。中々、口にし難いことではあるが、確認しておかねば気が済まないし、話が進まない。最早、何のために彼女と話をしに来たのか全く分からなくなっているが、それよりも更に重要なことだ。

「そ、そのだな。あー、君が、俺のことを好きだっていうのは、それは本気か？」

「……何ですか。その疑いの目は。私があなただけを好きじゃダ

メなんですか？」

俺の問いかけに彼女は不満げな目で俺を睨みながら言った。

「いや、ダメとかダメじゃないとかじゃなくてだな。そもそも、何故、君が俺のことを好くのかが分からん」

「人のことを好きになる理由とか好きになった原因とかってものは明確に言葉で表現できるものじゃあないと思いますけど？」

彼女は刺々しい言葉を吐きながら、俺を睨み上げ、再びぐいと俺の上着の襟を掴んで、顔を寄せた。またか。これでは襟が伸びてしまふ。しかし、彼女の手を払うことが俺にはできない。彼女の、檜によく似た強い瞳から目を離すことができない。

「あなた、私の愛を疑ってるの？」

「いや、疑ってるも何も、今までずっと嫌悪されていると思ってた相手からいきなり好きだとか言われても……」

「じゃあ、愛を確かめてみます？」

彼女は悪戯っぽく微笑みながら、体を寄せ、唇を近付けた。

と、思ったら、素早く体を離れた。その一瞬後に目の前を何かが飛んでいって俺たちの近くにあった木製ベンチに衝突し、背もたれにヒビを入れた。公共物破壊だ。

その公共物破壊物体の正体は普通にそこら辺に転がっていきそうな拳大の石だった。

つまりは、その拳大の石が飛んできて、危うく檜妹にぶち当たりそうなところで間一髪、彼女が身を引いたせいでベンチを破壊する結果となったわけだ。これは運ゆえか？ それとも、剣道を習っているお陰で動体視力とか殺気を感じる能力に長けているのか？ ならば、世の命狙われし御仁方は剣道を習得するが良からう。ケネディもリンカーンもガンジーも剣道さえ習っていれば歴史は変わっていたに違いないとかいう戯言はこれくらいにしておく。

ところで、拳大の石が自然に勝手に飛んできてベンチを破損せしめることなどあったならば超常現象の名を付けて超常現象ナンチャラとかいうようなテレビ番組で放送されてしかるべきであるが、実

際、そのようなことが起きて堪るものか。俺は超常現象とかいう原因不明にして理解不能な現象よりかは人類が数百年の月日をかけて学び知り極めてきた物理法則を信望している。要するに、超常現象などないと信じている。ならば、石は何故、飛んできたのか？ 簡単なことだ。誰かが投げたに違いない。それを確かめる手段は？ これも簡単。飛んできた方角を見ればいい。然らば、石は何者かによつて投擲され、ベンチを破損せしめたという超常でもなんでもない一個の行動が確認できる。

しかしながら、俺はあまりそれを確認する作業に気乗りしなかった。石が飛んできた理由を見極めず「原因不明」などと処理することは許し難い。何故ならば、俺は石が飛んできた理由は誰かが投擲したからだと確信しているからである。ならば、その投擲しやがった奴に「あといくら横だったら俺のド頭にぶち当たってたところではないかっ!？」と嚴重抗議したいところである。だが、俺はそれをやる気になれなかった。というのも、投擲した人間の正体に見当が付いていたし、そいつが犯人だとすれば、またぞろ面倒くさいことになることが目に見えていたからだ。その面倒くさいことになりそうな原因をこの目で確認する作業はなんとも気乗りし難い。

しかししかし、確認しないことには話が進まない。我が身を掠めるように中々の速度と勢いで飛んできた石を無視できるほど俺の脳味噌は能天気になっていないのだ。

さて、その犯人は誰か？ おそらくは、俺以外の読者諸君にも目星は付いていよう。だからといって教育番組のお兄さんお姉さん方のようにそやつの名を元気に声を合わせて呼んでやる気にはならん。俺は無言で、そいつを見て、そいつの面を確認して、何かを言うとは思ったが、結局、色んな言葉を飲み込み、無言のままだけいるしかなく。結局のところ、俺はただ黙ってそいつを見ただけだった。この時の俺はなんとも言い難い変てこな表情をしていたと思う。というのも、具体的にどんな感情かは自身でも理解できていないが、ともかく、複数の感情が頭の中でぐるぐる回っているという精神状

態であつたからだ。分かりやすく言えば、俺は混乱していた。

俺の混乱など何のその、石を投擲しベンチを破損せしめた下手人こと絹坂衣はいつもの温厚のんびりとしたアホ面をかなぐり捨て、怒髪天を突かんばかりの怒り百パーセントの顔をしていた。そして、おそらく、顔だけではなく、彼女の頭の中は今怒り一色なのである。

そして、絹坂は叫ぶのだ。お決まりの台詞だ。

「この泥棒猫っ！」

ここはどここの昼ドラだ？ 平日一時半のＴＳか？ それともサ  
イコロトークの次の番組か？

## 偏屈先輩は修羅場の中心で傍観す

ところで、何で絹坂がここに？

などとアホなことを口走ったり考え込んだりするほど俺の脳味噌はお間抜けではない。まあ、檜妹の出会ってから数年に渡る自分への好意には気付かない程度には間抜けであつたようだが。自分はそんじよそこらのラブコメの主人公どもとは違って鈍感ではないと自負してきたのだが、その思いが一気に崩れかけている。というか、俺が鈍感なのではなく、檜妹の方が感情隠匿術に優れていたのだと思う。思いたい。まあ、ともかく、絹坂がここにいる理由くらいは分かる。奴の後ろにいるのが我が悪友どもだということは俺の20の視力をもつてすれば容易に判別できるのだ。

連中は今まで絹坂の暴走を防ぐために拘束していたらしかつたが、今までの一部始終を見て大激怒した絹坂を押さえ続けるのは無理であつたらしい。俺が見ている間に我が悪友チームの男どもが情けなく絹坂に突き飛ばされ足蹴にされ踏み潰され無様に地面に転がる。弱い。お前ら弱いぞ。いや、絹が強いのか？

情けない男どもの後ろで蓮延と薄紫はなんだかにやいやと笑いながらこつちを観察している。俺たちの演じる修羅場を見て楽しもうという魂胆であるようだ。本当に趣味の悪い奴らだな。

絹坂は俺と檜妹を睨みつけながらつかつかと歩み寄ってきた。顔は憤怒に真っ赤に染まり、目は怒りに燃え滾り、怒髪天を突き、と大激怒の様子だ。何かに似ている。

「ああ、東大寺南大門の」

「誰が金剛力士像ですかっ！」

俺が呟くと、ちょうど近くまで歩いてきた絹坂が怒鳴った。さすが受験生。きちんと東大寺南大門と金剛力士像が繋がっている。これに更に作者である運慶・快慶を付け足せば完璧だ。

絹坂はとりあえず俺と金剛力士像ネタをやってから、キツと視線

を檜妹へ向けた。檜妹の方がいくらか背が高いためというか絹坂がチビなため見上げるような形になっていた。

2人は暫しの間、無言で睨み合い、その側で俺はかなり気まずい気分を味わいながら、アホみたいに突っ立っていた。

暫く3人揃って不動明王ごっこ(?)をしてしていると、絹坂はいきなり腕を振りかぶり、檜妹へ向けて拳を突き出した。平手じゃなくて拳つてところが絹坂らしいというか何というか。

しかし、相手が悪かった。投擲された石の気配を察知して身を避けるほどの奴だ。己に向かってきた拳を片手で受け止め、もう片手で何の容赦もなく絹坂を頬をビンタした。

「ぎゃぶうっ!?!」

絹坂は悲鳴を上げながら横様に吹っ飛んで公園の芝生に顔面から突っ込んだ。小柄で軽いため、ちっとした衝撃で簡単に吹っ飛ぶのだろう。昔、俺が戯れに蹴っ飛ばしたり殴ったりしたときも面白いように飛んでいったものだ。てか、絹坂よ。その悲鳴は女子としてどうかと思う。

暫く地球とキスしていた絹坂は腕立て伏せの要領でがばっと起き上がると、檜妹をきつと睨みつけて叫んだ。

「ぶったね! 先輩にしかぶたれたことないのにつ!」

まあ、この台詞は絶対不可欠だな。2発ぶたれていなかったのが惜しまれる。

絹坂の言葉、特に「先輩にしか」という部分に何か言いたかったが、特に反論すべき言葉が思い付かず遺憾ながら沈黙を守ることにした。今まで散々殴ってるし蹴ってるし叩いてるし張り倒しているし、まあ、ともかく、散々ぶっているので反論のしようがない。

「あなたから攻撃してきたんでしょう。私はそれに応戦しただけよ。オタクならば誰でも反応しそうな絹坂の台詞を華麗に無視した檜妹は傲然と絹坂を見下しながら言い捨てた。

「おのれーっ!」

絹坂は三下悪役みたいな怒声を発しながら檜妹に飛び掛った。そ

の動きは中々に俊敏で、ネズミに襲いかかる猫、或いは虫に跳びかかる力エル、若しくはなんとなく跳んだだけのバツタを髣髴ほうふつとさせた。

しかしながら、その攻撃はあっさり回避され、背中まで蹴られ、公園の遊歩道を転がっていく始末であった。たまたま、そこを通りかかった数人のガキンチョにびっくりされていた。やはり、武道を習っていた奴と運動音痴の戦いはかくも虚しくなるものか。

「おい、絹坂。武器のないお前に勝ち目は無い。諦めろ」

「先輩はどっちの味方なんですか！？ てか、彼女がここまで痛めつけられてたら普通助けるか何かするでしょ！ なんて悠然と見物してるんですか！？」

見かねて声をかけると結構本気で怒られてしまった。いや、まあ、当然といえば当然か。

「しかし、攻撃しているのはお前だからなあ。お前が危険に陥れば助けるかもしれんが、逆だし」

「されてるでしょ！ 攻撃！ ほら！ ほらっ！」

俺が傍観姿勢を取っていた弁解をすると、絹坂は自分の赤くなつたほっぺとくつきりと足の跡がついている背中を見せて主張した。

「それは攻撃した結果の正当防衛による反撃を受けた結果の被害であつて、所謂、自業自得だろ」

「彼女が殴られて自業自得なんていう彼氏が何処にいますかあ！？」

絹坂は顔を真っ赤にして怒りながらキーキーと騒ぎながら俺に詰め寄ってきた。絹坂が怒る理由も理解できなくはないが、ここまで怒られ責められるのは何だか不当な気がするが、それを言うともた面倒くさいことになりそうだったので黙っておくことにした。俺にしてはいつになく大人しい行動選択だが、今日は色々あつてもう疲れて喋る気がせんだよ。俺の心労を察いたしてくれ。そして、労わってくれ。

「まあ、今回はいいです。そもそも、先輩に優しさを求める方が間違いです」

絹坂はひとしきりぎゃーぎゃー騒いだ後、ようやっと俺に対する攻撃を止めた。色々と理不尽な責め方をされたような気がするが、面倒くさいので沈黙しておくことにする。

「先輩には後で償ってもらいます」

絹坂の叱責はこれでお終いというわけではなく、一旦中止ということらしい。後でまーた色々と言われるのだろう。せめて、今日はもう止めて欲しいものだ。明日ならば、タダでは済まさん。

「それよりも先にこの泥棒猫を何とかしなければなりません！」

「泥棒猫って私のことかしら？」

今まで怒り狂う絹坂を華麗にあしらひ、地味に攻撃を加えていた檜妹が冷やかな顔で絹坂を見下ろしながら言った。

「あなた以外に誰がいますかっ！？ 人の彼氏に告白するに飽き足りずチューまでしなさっとは人の獲物を横から掻っ攫う泥棒猫以外の何者でもないでしょうがあっ！ せっかく！ せっかく！ 私が何年も硬軟使い分け、色仕掛けやら嘘やら策略やらを張り巡らし、外堀を埋めつつ、何度も本丸に突撃をかけ、ようやっと陥落させた私の先輩を奪い去ろうなど許されるはずがありません！」

「俺を獲物扱いか」

俺はぼそりと不満を口にしたが、絹坂は無視した。泥棒猫を威嚇するのに忙しいらしい。

「泥棒猫とは心外ね。いい？ 私は、先輩のことをもう4年くらい前から、中学時代から好きだったのよ？ 私が好きで、好きでも、姉の彼だったから手を出すことができなかった彼に、途中から出てきたあなたが媚びて、取り入って、いつの間にか彼女面しているんだから、あんたが怒り狂う前に私の腸が煮え繰り返りそうよ」

檜妹は吐き捨てるように言い放つと、実際にぺっと唾を吐き捨てた。汚い。華の女子高生がやるこっじゃない。親が見たら泣くぞ。

「それはあなたが手を出さず馬鹿みたいに指をくわえて傍観していたからじゃありませんか。私は自ら動いて、先輩の彼女の座を手に入れたんです。先に目を付けてただの何だのなんて関係ありません」

ん！ 先手必勝！ 早い者勝ち！ コロンブスの卵！」

キスは道端で立ち上がると薄い胸を張って宣言し、俺の腕に抱き付き、ふふんと得意げに笑う。

すると、見る間に檜妹の顔が紅潮していき、非常に不機嫌そうな顔になって、何故だか俺を睨んだ。何で俺が睨まれんならんのだ。「とにかく、今更、のこのこあなたが出てきたところで、私と先輩との間の深い深い恋の絆は断ち切れないのです！ 既に私と先輩の関係はチョモランマより高く、チャレンジャー海溝よりも深いのですから！」

「いや、それほどじゃあないだろ」

絹坂の大袈裟な喩えを思わず否定すると絹坂が烈火の如く怒り出した。今日の絹坂は中々感情豊かだな。

「何で先輩が否定するんですか！？ 彼女が主張する愛の深さをそれほどじゃないって、彼氏がどこにいますかっ！？ ここにいるっていうお決まりの文句は禁止です！」

「いや、しかしなあ。俺たちが付き合い出したのはここ最近のことだし、まだそんなチョモランマとかチャレンジャー海溝に喩えるほど凄じい絆かって言われりゃあそりゃ同意し難いだろう。せめて丘よりも高く、大陸棚より深くくらいが程よいのではないか？」

「低い！ 浅い！」

俺の提案に絹坂は不満そうに叫んだ。

「て、そんなこと話してる暇じゃなかった！ 泥棒猫を退治しないと！ いざ、尋常に勝負せよ！」

何で勝負するのか分からんし、何のために勝負するのも分からんが、絹坂は叫んだ。

「いいえ、遠慮するわ」

しかし、速効で断られた。

「ん？ ってことは、私と先輩との仲を」

「認めたわけじゃあないから」

絹坂の期待に満ちた言葉を途中でぶった切り、絹坂を不愉快にさ

せつつ、檜妹は言葉を続ける。

「今日はもういい。これ以上、あなたと言い争っても不毛なだけだしね。それに、私、これから用事があるんですよ。それじゃあ、先輩、また今度」

檜妹はにんまりと微笑んでから悠然と歩き去っていった。まあ、なんと堂々たる退場っぷりか。その背中に絹坂は罵声をぶつけた。

「二度と目の前に現れんなあーっ！」

「絹坂、さつきから思ってたんだが、言動が三下悪役っぽいぞ」

**偏屈先輩は修羅場の中心で傍観す（後書き）**

あんまり激しい修羅場っぷりは發揮させられませんでした。血で血を洗う修羅場をご期待していらっしやった読者様には申し訳なく思っています。

さて、長らくだらだら続きました偏屈先輩帰省中ですが、次回で最終回です。

できるだけ早くに更新する予定です。

## 偏屈先輩帰る

檜妹が悠然と立ち去った後、絹坂は暫しの間、怒り狂い、俺を蹴るわ殴るわ引つ掻くわ噛み付くわで酷いものであった。

何故、攻撃されるのか全く意味不明であったが、彼女曰く、その攻撃の理由とは檜妹との逢引、接吻という不倫にも等しい裏切り行為及び檜妹より絹坂が攻撃された際、適切に彼女を守る然るべき対応を取らなかったことにあるそうだ。俺に言わせればその多くは俺にとつても想定外であり、不可抗力であつて、攻撃されるのは理不尽極まりないと思うのだが、まあ、俺にも負い目があるような気がする。最初のうちは我慢していたが、すぐに頭に來たので、絹坂の頭を思いつき殴つてやると、地面に墜落して静かになつた。

「死んだか？」

「死んでたらあなたついに殺人犯ですよ」

俺の呟きに、いつの間にか側まで來ていた薄紫が言った。

「ついにつて何だ？」

「いつかはなると思つてました」

俺つてそんなに悪そうに見えるのか？ 地味に傷つくな。

「しっかし、檜の妹があんなキャラだったとはねー。驚きだわー」

「そうだねー。もつと大人しい子だと思つてただけどさー」

「しかも、サドっ気がありそうでしたね。委員長を責めているとき活き活きとしていましたから」

我が悪友たちはわらわらとやつてきて口々に勝手なことを言い出した。今までずっと安全圏にいて俺と檜妹と絹坂の間の騒動を観察してほくそえんでいた連中だ。糞忌々しい奴らだな。

「モツテモテだなー。羨ましいぜ。この女つ誑し！」

更に草田がにやつきながら阿呆なことをほざきやがった。

「黙れ！ 死ね！ 失せる！」

「何で俺にだけ言うのさっ!？」

草田が文句を言うが無視。

「しかし、貴様らが何故、ここにいるのだ」

「私にそれを聞きますか？」

かつての諜報担当執行委員はいつものような無表情ながら少し自慢げに言った。まあ、盗撮と盗聴を趣味・特技とするこやつに聞くのが間違いか。

「前々から聞きたかったんだが、貴様のその悪趣味な特技は何なんだ？ 何処で習得したんだ？ あと、その機材は何処で手に入れてんだ？」

だいぶ昔からの疑問をぶつけてみると彼女はふふんと鼻で笑った。「女には秘密がたくさんあるものです」

「そんな秘密がある女は嫌なんだが……」

その後、俺たちはとつと解散し（我が悪友たちは思いの他、素早く帰っていった。もう見るものは見たというわけで満足したのだろう）、まだ夕方にもなっておらんというに連中は飲みに出かけた。俺も誘われたが心労著しい俺は「行かん」と丁重に辞退し、一人帰宅することにした。

「帰るんなら、これ、どーにかしていきなよ！」

溜息吐きつつ、自宅方向に足を向けると、かつての書記長蓮延に声を掛けられた。彼女が指差すのは地面に微かに顔をめり込ませ沈黙している絹坂だ。おっと、忘れていた。

「どーにかとは？ 燃えるゴミに出せばいいのか？ それとも、そのこの池にぶち込むか？」

「あんだ、この子の彼氏のくせによくそんなこと言うわねー」  
いつもにやにや笑っていることが特徴である彼女が呆れ顔で言った。

「じゃあ、どないすりゃいいんじゃない？」

「担いで持って帰ったらいいんじゃないかなー。衣ちゃんの家知ってるんでしょ？」

和菓子屋の跡取り七飯がそんなことをそんなことを言うものだから、何故だか俺は絹坂を担いで帰ることになってしまった。

小柄で軽い女とはいえ、人一人をまだまだ残暑厳しい季節だというに担いで歩くのは大変暑苦しい上に疲れる作業である。しかも、そんなふうになんか人を背負って街中を歩いていりゃあ世人に注目されるものだから、俺は非常に不機嫌になった。

「はっ！ 敵はっ！？」

不機嫌な面で行く人々を威嚇しながら歩いていると背中で絹坂が素っ頓狂な声を上げた。貴様は何と戦っているんだ？

「アレ？ ココは何処？ 私是谁？」

「う、そこは俺の背中の上だ。貴様は絹坂だ」

お決まりな台詞を吐く絹坂に俺は律儀にも答えてやった。一瞬「うるせー」と言いそうになったが我慢した。俺も甘くなったものだ。

「知ってますー」

「貴様、もう一回、地面に落とすぞ」

「止めてくださいよー！ てか、私の顔なんか土まみれなんですけど！？ 髪から砂がぼろぼろ出るんですけど！ 草まで付いてますよ！？」

絹坂は俺の背中の上でぴーぴー騒ぎ始めた。動くな。俺は体力がないし、バランス感覚も宜しくないから、あんまり暴れると今にこけるぞ。

「家に帰ったら顔と頭を洗うがいい」

「せめてなんかハンカチとかで拭いてから背負ってくださいよー！」

「めんどい」

そもそも、土とか草とか付いてる顔を拭いたらハンカチが汚れてしまうではないか。

「もー！ こんな顔で外歩けませんよー！」

絹坂はそんなことを騒ぎながら顔を俺の背中に押し付けてぐしぐしと俺のシャツで拭き始めおった。

「やあめんかあっ！ この糞ボケがあっ！ シャツが汚れるだろう

があっ！」

「シャツと私とどっちが大事なんですかー!？」

「シャツっ！」

「嘘おっ！」

「嘘だ」

「何でそんなこと言うんですかー!？　かなり傷ついたじゃないですかー！」

俺と絹坂はこんなふう to 暫しぎゃーぎゃー騒ぎ合っていたが、少しして疲れたのでお互い静かにすることにした。

「ところで、貴様の家はどっちだったか？」

「送り狼ですかー？」

「ここに置いてくぞ」

舌打ちしながら言うと、絹坂はぶーたれた。

「ちえっ。もう何なんですかー。先輩ったらツンデレのツンが強過ぎますよー。もっとデレて下さいー」

「うるさい奴だな。大人しく道案内せんとマンホールの中に落とすぞ」

「何でマンホールの中なんですかー？」

「いや、この間、マンホールを開けて工事しているのを始めて見てなー」

俺がマンホールの奥深さについて語ろうとしていると後ろで絹坂が間抜けな声を出した。

「あ。先輩先輩」

「何だ。人の話を途中で切るな」

「いや、雨降ってきましたよー。夏だし、夕方近いし、これは典型的な夕立ですねー」

そう言うと、絹坂は俺の背中から飛び降りて、俺の手を取って走り出した。やたらと強い力で引つ張るものだから思わず俺は引つ張られるがままに一緒に走ってしまった。そのうち、絹坂の言つとおり、本格的な夕立が降ってきて、俺も絹坂も結局びしょ濡れになっ

た。

「まったく！ コンチクシヨウだなっ！ 雨なんぞ降らなければいいっ！」

「先輩ー。前々から言ってますけど、太陽を呪ったり、雨を罵倒したりしても意味ないですよー」

玄関先でシャツを絞っていると絹坂がいくらか離れた場所から言った。

絹坂を家に送り届けた後、さっさと帰る予定ではあったのだが、夕立の中、びしょ濡れになりながら帰るほど俺は水気が好きじゃないし、絹坂も部屋に上がっていけと煩いものだから、渋々と俺は絹坂の部屋の玄関先まで侵入する結果となっていた。

絹坂は部屋へタオルやら着替えやらを調達しに行っていた。

「はい。先輩。タオルですよー。服は渡して下さいー。洗濯しますからー」

絹坂は黄色いＴシャツと短パン姿で、タオルを手に現れた。タオルはありがたく頂戴し、顔と頭を拭く。

「着替えはないのか？」

「あるわけないじゃないですか。女の子の一人部屋ですよー？ しかも、私チビですから、先輩みたいに上背のある人が着ても大丈夫な服なんかある方が変ですよー」

尋ねると、そう返され、俺は、そりゃそうかと納得しつつ、困惑することになった。ここで裸になれというのか？

「先輩、どーしたんですかー？ まさか、裸になるのが嫌とか初心なネンネみたいなこと言うわけじゃありませんよねー？ やることやってるくせに今更そんなことで恥ずかしがるなんて阿呆じゃないんですからー？」

「じゃああしいっ！」

ふざけたことを抜かす絹坂を一喝してから、俺は渋々とシャツと靴下を脱ぐことにした。

「下も脱いで下さいよー」

脱いだものを受け取りながら絹坂が要求した。当然、俺は難色を示す。

「下は良からう」

「下脱がないで座られると絨毯が濡れますー」

「じゃあ、俺はここにいる。こっちはフローリングだから構うまい」  
「まあた、そんな頑固爺みたいな我俣言わないで下さいよー」

絹坂はそんなことを言いながら俺のジーンズを引っ張り出した。

「やめんかつ！ 蹴っ飛ばすぞっ！」

暴力をちらつかせて威嚇するが、絹坂は引く様子もない。そもそも、そんなことで引く奴じゃない。ジーンズを引っ張りながら猛然と反論してきた。

「止めて下さいよ！ 私、今日、何回、蹴ったり殴られたりされたと思ってるんですかつ！？ 私、そんなにハードなSMは無理です！」

「SMとか言うなっ！」

結局、妥協案として、俺がジーンズを脱ぎ、代わりにタオルを腰に巻くことで事態は落ち着いた。

渋々と俺はタオルを腰に巻いた風呂上りスタイルで絹坂の部屋に居座ることになってしまった。甚だ遺憾だ。

しかし、絹坂の部屋に来たのは二度目であるが、以前はなんやかんやあって（具体的に言うとは大変恥ずかしいので俺は断じてそのことを言葉にはせんぞ）、部屋をじっくり見ることができなかった。

ゆえに、今回、改めて、部屋を見回すと、あまり華の高校生女子らしくない、地味で実用的で必要最低限なもので揃えられた部屋だというのが分かった。装飾らしきものは殆ど見当たらない。女子の部屋にありそうな小物だのぬいぐるみだのといったものも皆無に近い。色合いも白だのグレーだの灰だの茶だのといった地味な色で統一されている感じがする。

「地味な部屋だな」

「実用的って言って下さいー。ところで、先輩ー。ジーンズのポケットに何か入ってましたよー？」

「絹坂は俺の濡れたジーンズを手にてけてけ歩いてきた。」

「ハンカチかティッシュか何かではないのか？」

「いいえー。なんかメモ切れですけど」

「絹坂が差し出したのは細かく折りたたまれたメモ切れであった。ポケットに入れた記憶はない。」

「一体、何だと、とりあえず開いてみる。絹坂も興味を引かれられしく、俺の後ろからメモ切れを覗き込む。メモ切れには何事か書き込まれていた。」

「私も同じ大学に行きますから。よろしく」  
書かれていた文字はそれだけ。あとは何もなし。筆跡に見覚えもなく、誰が書いたか判別できるようなものは全くない。指紋でも取れば別だろうが。」

「しかし、俺にはピンときた。絹坂にもピンと来たらしく、ふるふる震えている。」

「きつと、これは、あいつからのメッセージに違いない。そもそも、今日、俺と接触していて、かつ、大学受験を控える知り合いなど絹坂とその友人と我が愛妹三津華くらいしかいないのだが、連中がこんな回りくどい方法で大学進学を俺に伝える意味が分からない。だが、あと一人だけ有力な候補がいる。誰あろう彼あろう。檜妹だ。」

「あぁんの、泥棒猫めえーっ！」

俺の真後ろで絹坂は激昂した。

「怒りに身を任せ、俺の手からメモ切れを奪い去り、びりびりに破って踏んづけまくっていた。」

「このっ！ このっ！ このーっ！ 先輩は絶対に誰にも渡さないんだからあーっ！」

「怒り狂う絹坂を見ながら俺は嘆息した。来年も中々面倒くさいことになりそうだ。」

「先輩、本当にもう帰っちゃうんですかー？」

「そりゃいつかは帰る。大学生とはいえ夏休みは無限ではないのだ。それに、貴様、今日はそればっか言ってるぞ」

我が地元の主要な駅の待合室で、絹坂は不満そうなぶーたれ顔で文句を言い、俺はいくらか宥めるような調子で応じる。

檜妹と邂逅し、絹坂の部屋に上がりこんで、余計な事実を知り、来年への不安を抱く羽目になった日の翌日、俺はさっさと大学のある首都まで行く特急に乗るべく駅にやってきた。絹坂は見送りである。

「双葉ちゃん、もっとゆつくりしていけばいいのにー」

「双葉は昔からせっかちだからねー」

「確かに双葉兄様は事を急ぎ過ぎることがありますね」

「だっかつらっ！ 双葉って言うなっ！」

うちの女家族たちが口々に発する忌々しい我が名に俺は毎度のことながら短気に怒鳴る。こいつらは本当に何度言っても聞きやしないな。

「先輩先輩。ご家族の皆さんもそう仰っていることですし、もっとゆつくり長居していきましようよー」

絹坂が目をつるつるさせながら継りつく。そんな今生の別れみたいな大袈裟な反応せんでも良からうに。

「いや、帰る。もう目的は達したからな」

「その目的を達したつてのが意味不明ですよー。そもそも、帰省つていっつのは何か目的があつてすることじゃあないと思いますー」

俺の言葉に絹坂が反論する。む。中々、屁理屈なことを言うようになったな。俺の影響かもしれん。

しかし、どうあつても俺は帰るつもりだった。帰る用事もあるしな。

「大学の教授に呼び出されているのだ。何でも、小間使いの雑用係が必要らしい」

今朝、いきなり電話がかかってきて、

「冴神くん。明日、来てくれないかなー？　ちょーつと手伝って欲しいんだー」

とか言ってきたのだ。無論、大学の成績に係る報酬は期待してよいとのことだ。

俺もそろそろ気ままな一人暮らし生活に戻りたかったというもの理由の一つではある。絹坂が7月末に我が部屋に押し入って以来、もう何ヶ月も俺は実質一人暮らしではないのだ。そろそろ、孤独が恋しくなってきた頃合だ。

「むー。先輩つてば頑固ー」

「まあ、うちの家系は皆そーだからねー」

絹坂が不満そうに呟くと、姉上が応じた。

「まあ、年末には帰るつもりゆえ、それまで我慢しろ」

「むー。我慢はできませんー。丸一年以上会わなかったんですから、しかし、心配なことがー」

「何だ？」

尋ねると絹坂は急に顔を寄せてきた。その顔は驚くほど冷たい無表情で、目つきは強く鋭く、思わず背筋がぞくりとした。

鼻と鼻がくつつくくらい近くで、絹坂は俺を睨みつけて呟く。

「浮気しないで下さいよ。今度、変な女寄せ付けてたら刺しますよ？」

そして、離れてにっこり笑った。

「それじゃあ、先輩、お元気でー。また会う日までー」

終

偏屈先輩帰る（後書き）

ようやくと帰省編最終回です。

今までだらだらと更新間隔をがばがば空けながら連載して参りましたが、お付き合い頂きまして大変ありがとうございます。

帰省編はこれにて終わりでございますが、読んで分かるとおり、彼らのお話はこれで一件落着というのではなく、次なる大学編へと繋がる予定です。

いつ連載するかは不明ですが、連載始めました折には、お付き合いの程、何卒宜しくお願いいたします。

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2488c/>

---

偏屈先輩帰省中

2009年3月24日09時45分発行